茨城県笠間市

橋爪遺跡

― 道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書 ―

2010

笠間市教育委員会
テイケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

茨城県笠間市

橋爪遺跡

―道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書―

2010

笠間市教育委員会
テイケイトレード株式会社
埋蔵文化財事業部

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は道路改良工事に伴う橋爪遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡が検出されました。特に縄文時代中期のフラスコ状土坑が密集して検出され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成22年9月

笠間市教育委員会
教育長　飯　島　　勇

例　言

1　本書は、道路改良工事に伴う橋爪遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は笠間市教育委員会の指導の下、テイケイトレード株式会社が実施した。

3　遺跡の所在地・調査面積・発掘調査期間・整理調査期間は、以下の通りである。

所在地	茨城県笠間市橋爪 795 番 2 ほか
調査面積	2,454 ㎡
発掘調査期間	平成 21（2009）年 11 月 16 日～平成 22（2010）年 2 月 27 日
整理調査期間	平成 21（2009）年 12 月 10 日～平成 22（2010）年 9 月 30 日

4　事務局および調査指導は下記の通りである。

事務局	笠間市教育委員会生涯学習課	
調査指導	茨城県埋蔵文化財指導員	川崎純徳
	笠間市文化財保護審議会委員	能島清光

5　現地調査および整理調査は、森本　崇、石井たま子、望月大輔、清水真澄が担当した。

6　報告書の編集は、岡安光彦の指示のもと石井、望月、清水が行なった。執筆は、以下のように分担した。

序章～ 3 章　：石井
第 1 章第 1 節：笠間市教育委員会
縄文時代遺構：石井　縄文時代遺物：石井・望月
弥生、古墳、奈良・平安時代遺構：石井・望月・清水　　弥生、古墳、奈良・平安時代遺物：清水
なお、奈良・平安時代に属する 048SI については、現地調査は笠間市教育委員会が行い、執筆は笠間市教育委員会　加藤　忠が行なった。

7　現場での遺構写真は、森本、石井、望月、清水が行なった。

8　遺物の写真撮影は、山内和夫が行なった。

9　遺構図は、阿部正男、室伏拓郎、平本　亘が修正・トレースを行なった。

10 遺物実測・トレースは、安藤節子、下田陽子、杉本満奈子、高橋利行、西垣真子、野島万里、平本、宮川たき子が行った。

11 理化学的分析は、株式会社加速器分析研究所に依頼し、第 4 章第 4 節に掲載した。

12 現地調査から整理作業に至るまで、特定非営利活動法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク（赤塚次郎理事長）のご厚意により、遺構・遺物登録システム『Grigfolder』を利用し作業を進めた。

13 縄文土器の観察については、松丸信治氏にご協力をいただき石井が、『縄文土器大観』（小林達夫 1988・89）に基づき行った。

14 石材観察については、鈴木素行氏にご協力をいただき望月が行い、判別が困難であった資料については、柴田　徹氏（有限会社考古石材研究所）に石材鑑定を依頼した。

15 石器に関して本報告では、磨痕のみが認められる石器を「磨石」、敲打痕のみが認められる石器を「敲石」、両者ともに認められる石器を「磨石・敲石」と表記した。また、敲打による器面の剥落に伴って形成された浅い凹みは「敲打痕」として扱い、磨耗などによって生じる逆円錐形の凹みに限り「凹部」と表記した。さらにこれらを一括する場合には「磨石・敲石類」と表記した。

16 図示していない石器に関しても、該当する遺構の本文中に表を掲載した。

17 古墳時代の遺物観察については、内山敏行氏にご協力いただき清水が行った。

18 奈良・平安時代の遺物観察については、土器に関しては佐々木義則氏に、鉄器に関しては津野　仁氏に、ご協力をいただき清水が行なった。

19 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。

20 調査組織は下記の通りである。

調査機関	テイケイトレード株式会社　埋蔵文化財事業部
代表取締役	荒川健司
調査統括	岡安光彦
調査担当者	森本　崇
現場代理人	海野浩幸　前田卓宏
調査員	石井たま子　望月大輔　清水真澄　伊藤千洋
主任技術者	阿部正男　瀬川利男

発掘調査の参加者は、下記の通りである。（敬称略・五十音順）

青木　誠　池口泰弘　石井麻由美　石川　勉　稲見幸子　岩田時彦　海老沢　武　海老沢信雄
大山年明　岡野政雄　小瀬靖夫　小堤静江　小山司農夫　小山義則　川又恵美子　倉田宝郎　栗原芳子
桑幡昌幸　齋藤幸一　坂本　瞬　佐久間順美　佐々木寛一　佐藤武志　佐藤としえ　塩澤　東
篠原一郎　菅谷和子　杉山直正　鈴木とし江　鈴木　浩　関　律子　田村政子　妻野雄介　鶴井みどり
豊島英則　中谷美穂　長谷川とめ子　野村正子　春木珠幸　広水一真　福島枝里子　藤田理子
正木信行　武藤瑞良　横田忠利　米川義広　若月裕志

整理作業の参加者は、下記の通りである。（敬称略・五十音順）

安藤節子　石川一枝　大野節子　小川有子　鹿島照代　鹿志村百合子　加藤嘉枝　加谷　均　古藤百合
小林完士　小松顕学　小松緑也　斉藤陽子　塩澤　東　下田陽子　杉本満奈子　高橋利行　常盤純一
中澤　功　仲島道史　中山　茂　西垣真子　野島万里　濱田優己　平本　亘　三宅依久子　宮川たき子
水山美智子　室伏拓郎　山内和夫　山中敏彦　横田ちづ子　吉田淳子　和田ミエ子

21 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導を賜った。記してここに感謝を申し上げます。
（敬称略・五十音順）

赤塚次郎	（愛知県埋蔵文化財センター、特定非営利活動法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク理事長）
稲田義弘	（財団法人茨城県教育財団）
内山敏行	（財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）
佐々木義則	（ひたちなか市埋蔵文化財調査センター）
鈴木素行	（ひたちなか市埋蔵文化財調査センター）
津野　仁	（財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）
堀木真美子	（愛知県埋蔵文化財センター）
松丸信治	（東京都大田区立郷土博物館）
村山　卓	（立正大学大学院博士課程）

凡　例

1　遺構番号は、遺構確認段階で任意に001番から付し、整理段階において遺構番号の末尾に遺構種別に基づいた略号を付し遺構名とした。

2　個別に取り上げた遺物は、調査地点内で通し番号を001番から付した。また、必要に応じ遺物を層位に基づきブロック単位で採取した。

3　本書、平面図・土層観察・遺物観察表・遺構一覧表に用いた略号は、以下の通りである。
SI―住居跡　　SK―土坑　　P―小穴　　K―攪乱　　BL―ブロックおよび、ブロック上げ遺物

4　調査区のグリッドは、X＝＋37544.2365、Y＝＋41366.5237の交点を起点とした。

5　平面図は完掘状況を表し、必要に応じ上端・中端線などを記入している。

6　本報告書中の図版の縮尺は、それぞれの図版に記したが、原則として遺構は1/60、遺物は1/3である。

7　遺構図版中のトーンの指示は以下の通りである。

火床範囲　　硬化面範囲　　推定線　　補助線

8　遺物図版中のトーンの指示は以下の通りである。

赤彩範囲　　黒色処理範囲

9　遺物の観察表において、残存値は（　）、推定値＜　＞はで示した。

目　次

序
例言
凡例
目次
第１章 調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査経過……1

第２章 位置と環境
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……4

第３章 調査の概要
第１節　遺跡の概要……6
第２節　調査の方法……6
第３節　基本層序……7

第４章 縄文の遺構と遺物
第１節　A1 区
住居跡
006SI……13
袋状土坑
012SK……15
138SK……18
土坑
009SK・134SK……22
010SK……24

第２節　A2 区
住居跡
149SI……25
275SI……27
袋状土坑
054SK……30
058SK……33
064SK……35
065SK……38
078SK……48
095SK……51

102SK……52
105SK……53
156SK……57
159SK……59
190SK……61
203SK……64
230SK……66
249SK……69
256SK……71
267SK……73
274SK……75
291SK……77
302SK……78
304SK……83
306SK……85
323SK……87
土坑
056SK……89
060SK……90
147SK……92
151SK……94
204SK……95
290SK……97
325SK……98
332SK…… 100

第３節　その他の遺構の遺物 …… 102

第４節　理化学的分析 …… 110

第５節　縄文時代まとめ …… 113

第５章 弥生時代の遺構と遺物

第１節　D 区
049SI …… 132
236SI …… 134

第２節　弥生時代まとめ…… 137

第６章 古墳時代の遺構と遺物

第１節　A1 区
015SI …… 138

第２節　A2 区
040SI …… 141

第３節　古墳時代まとめ…… 142

第７章 奈良・平安時代の遺構と遺物
第１節　A1 区
003SI …… 143

第２節　A2 区
031SI …… 145
032SI …… 146
033SI …… 148
034SI …… 153
035SI …… 153
036SI …… 156
037SI …… 159
038SI …… 161
039SI …… 163
114SI …… 164
198SI …… 166
284SI …… 169

第３節　D 区
042SI …… 171
043SI …… 173
045SI …… 177
048SI …… 181

第４節　奈良・平安時代まとめ…… 185

抄録
写真図版

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成 19 年 5 月 2 日、笠間市都市建設部都市建設課は、笠間市教育委員会教育長に笠間市橋爪地内に計画している合併市町村幹線道路緊急整備支援事業に伴う道路改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。開発予定地は、周知の遺跡「橋爪遺跡」が所在することから、平成 19 年 5 月 30 日付けで試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査は、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に依頼し、平成 20 年 6 月 4 日、平成 21 年 2 月 5・12・13・15 日、4 月 15 日に実施し、遺跡の所在を確認した。

笠間市都市建設部都市建設課は茨城県教育委員会教育長に対して、平成 21 年 4 月 20 日付けで文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成 21 年 6 月 23 日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札によりテイケイトレード株式会社と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・笠間市都市建設部都市建設課・テイケイトレード株式会社は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成 21 年 10 月 16 日付けで文化財保護法第 92 条第 1 項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光を指導委員として平成 21 年 11 月 16 日から平成 22 年 2 月 27 日まで、発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

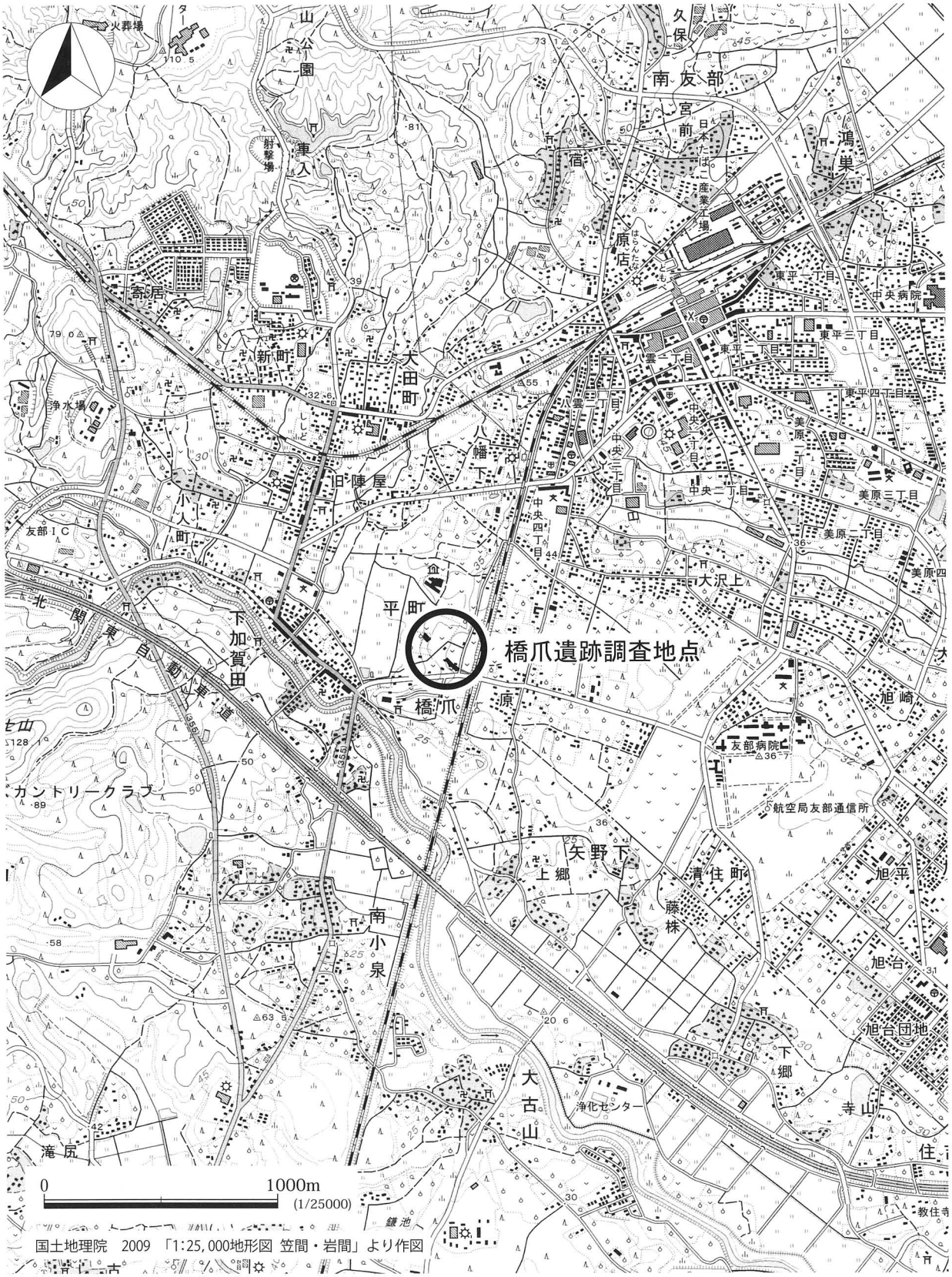
発掘調査は、平成 21（2009）年 11 月 16 日～平成 22（2010）年 2 月 27 日に実施した。調査対象となった地点は遺物包蔵地であり、本調査の目的は、開発事業に伴う埋蔵文化財の記録保存である。

現地調査

・平成 21 年 11 月 16 日―重機による表土掘削作業及び人力によるプラン確認作業を開始。
・11 月 18 日―　表土掘削作業と併行し、A1 区の遺構調査を開始。
・11 月 25 日―　表土掘削及び人力によるプラン確認作業を終了。
・12 月　2 日―　A1 区の全景写真撮影。
・12 月　4 日―　笠間市立佐城小学校の六年生を対象に遺跡体験教室開催。
・12 月　5 日―　A2 区の遺構調査を開始。
・平成 22 年 1 月 20 日― A2 区の遺構調査と併行し、D 区の遺構調査開始。
・　1 月 21 日―　笠間市教育委員会により D 区住居跡 048SI の調査開始。
・　2 月 19 日―　D 区の全景写真撮影。
・　2 月 25 日―　A2 区の全景写真撮影。県による監査。
・　2 月 27 日―　現地調査完了。

整理作業

・平成 21 年 12 月 10 日―遺物洗浄作業開始。
・平成 22 年　3 月　1 日―遺構図面トレース作業開始。
・　3 月 10 日―　遺物実測作業開始。
・　3 月 15 日―　遺物接合作業開始。
・　4 月　6 日―　遺物洗浄作業終了。
・　5 月 14 日―　遺構平面図トレース・遺物接合作業終了。
・　5 月 18 日―　遺物トレース作業開始。
・　6 月　9 日―　遺物実測作業終了。
・　6 月 30 日―　遺物トレース作業終了。
・　9 月 30 日―　報告書刊行。



第１図　橋爪遺跡位置図

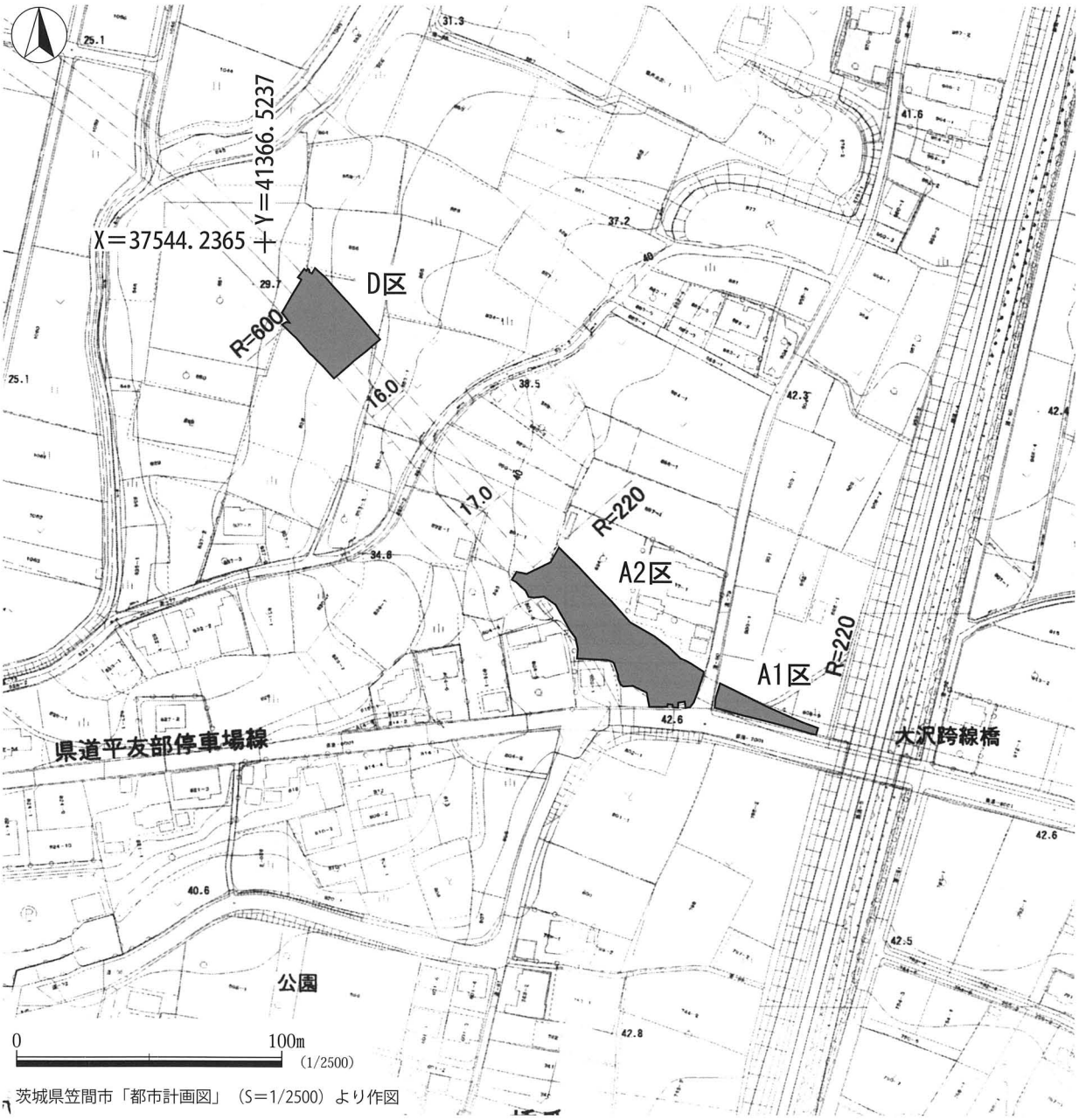
第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

橋爪遺跡は、茨城県笠間市橋爪（旧西茨城郡友部町大字橋爪）に所在している。

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部は栃木県、西部は桜川市、東部が水戸市や茨城町、南部は石岡市や小美玉市に隣接する。笠間市の北東部には八溝山地から張り出す鶏足山塊から標高 100 ～ 200m の丘陵が延び友部丘陵と称せられる。南東部、旧友部町の大部分は標高 30 ～ 40m の東茨城台地と呼ばれる台地が涸沼川に沿って大洗方面へ延びる。涸沼川は、国見山付近に水源を持ち枝折川や涸沼前川を合わせ涸沼に注いでいる。

橋爪遺跡は、涸沼川左岸の標高 32 ～ 42m に立地する。調査区は、涸沼川に平行するように傾斜地から台地上に北西から南東に長く設定され、涸沼川からの比高差は 7 ～ 17m を測る。調査前の現況は畑地である。



茨城県笠間市「都市計画図」（S＝1/2500）より作図

第２図　橋爪遺跡調査区位置図

第２節　歴史的環境

ここでは、笠間市域のうち当遺跡の所在する旧友部町域について記述する。

旧友部町域における人々の営みの痕跡は、旧石器時代までさかのぼる。本調査地点から南西へ８～11kmほど離れた涸沼川右岸に立地する、東平遺跡（15）、古峰Ａ遺跡（18）、古峰Ｂ遺跡（19）や、本調査地点から南東へ30mほど離れた寺山遺跡（30）等で旧石器時代の遺物が確認されている。

縄文時代においては、本調査地点と同様に涸沼川と涸沼前川に挟まれた台地上の縁辺部一帯には、早期から晩期にわたり20箇所以上の遺跡が確認されている。とくに中期に該当するものが多く本調査地点周辺では、新善光寺跡（09）では中期の袋状土坑と陥し穴等が、上郷遺跡（22）からは中期の土器が多く確認されている。本調査地点からも縄文中期に該当する遺構を多く検出していることなどから縄文時代中期には調査地点周囲は人々の活動が活発であったと考えられる。

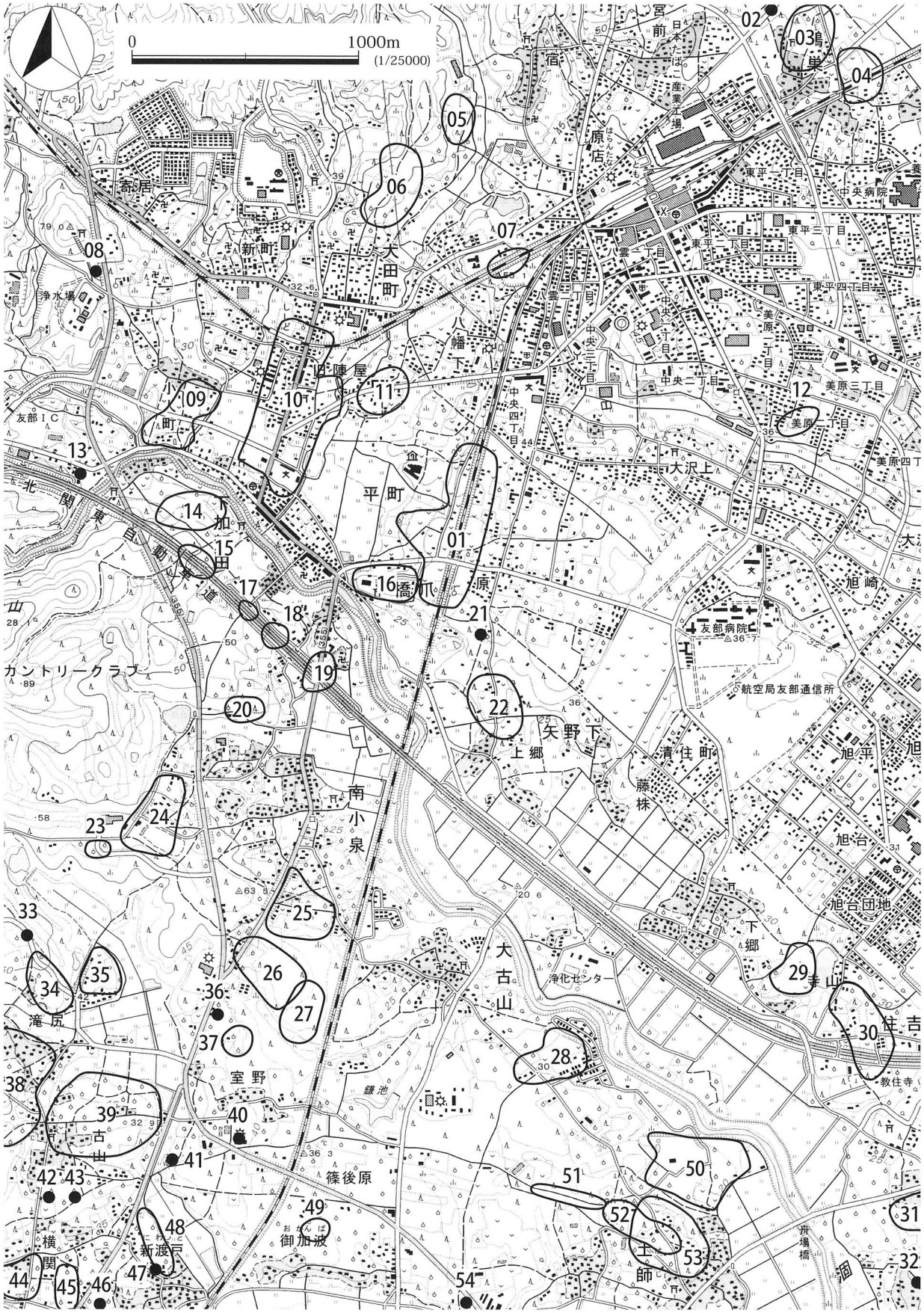
弥生時代においては、2000年に茨城県教育財団に調査された久保塚遺跡にてはじめて住居跡が確認され、その後も弥生時代後期の住居跡等が三本松遺跡、塙谷（はんがい）遺跡などで確認された。旧友部町域では弥生後期域に集中する傾向が見られる。

古墳時代においては、台地の周辺部より住居跡が確認され、古墳は台地のやや奥からも確認されている。小原遺跡や久保塚遺跡、新善光寺跡（09）からは古墳時代前期後半の住居跡が確認されている。

奈良・平安時代において旧友部町域は、那珂郡と茨城郡の両郡にまたがっており、旧町域東部は那珂郡、西部は茨城郡に編入されていたと想定される。本遺跡より3km程北東部に位置する北平遺跡では、７世紀後葉から９世紀後葉に属する住居跡が確認されている。

表１　橋爪遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な遺構と時代
01	橋爪遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
02	掃部塚古墳群	古墳群（古墳）
03	家前遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳）
04	田端内遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳）
05	猿丸塚古墳群	古墳群（古墳）
06	完全寺後遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世）
07	二ツ塚古墳	古墳（古墳）湮滅
08	諏訪山古墳	古墳（古墳）町指定遺跡
09	新善光寺跡（山尾館跡）	寺院跡（中世、近世）
10	宍戸城跡	城館跡（中世、近世）町指定遺跡（土塁のみ）
11	古館	城館跡（中世）
12	大沢遺跡	包蔵地（弥生）
13	高土台塚群	塚群（近世）
14	下加賀田遺跡	包蔵地（縄文、古墳、中世）
15	東平遺跡	集落跡（旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
16	花咲遺跡	包蔵地（縄文）
17	坂の上塚群	塚群（古墳、近世）
18	古峰A遺跡	集落跡（旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世）
19	古峰B遺跡	集落跡（旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世）
20	富士山古墳群	古墳群（古墳）
21	宝蔵古墳	古墳（古墳）
22	上郷遺跡	包蔵地（縄文、古墳、中世、近世）
23	善九郎古墳群	古墳群（古墳）
24	善九郎遺跡	包蔵地（縄文）
25	南小泉遺跡	包蔵地（縄文、奈良平、中世）
26	佐藤林古墳群	古墳群（古墳）
27	佐藤氏館跡	城館跡（中世）
28	大古山遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安、中世）
29	川郷地池遺跡	包蔵地（縄文、奈良・平安）
30	寺山遺跡	包蔵地（旧石器、縄文、古墳）
31	住吉遺跡	包蔵地（縄文、弥生、古墳、奈良・平安）
32	万部塚	経塚（中世）
33	滝尻土塁	
34	滝尻遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
35	下菅谷遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、近世）
36	室野北遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
37	室野東遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世）
38	堂山Ⅰ遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安、中世、近世）
39	五霊原遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
40	室野南遺跡	包蔵地（弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世）
41	室野塚	包蔵地（近世）
42	古山南遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
43	古山塚	塚（中世、近世）
44	横関南遺跡	包蔵地（弥生、古墳、奈良・平安）
45	原遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
46	新渡戸遺跡	寺院跡（中世、近世）
47	裏原塚	塚（古墳、中世、近世）古墳の可能性あり
48	裏原遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
49	室野遺跡	包蔵地（縄文）
50	島屋敷遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世）
51	土師十三塚	塚（中世・近世）
52	高おかみ神社古墳群	古墳群（古墳）
53	前ノ内遺跡	包蔵地（古墳、奈良・平安、中世、近世）
54	新左右衛門谷津遺跡	包蔵地（縄文、古墳、奈良・平安）



第３図　橋爪遺跡周辺の遺跡位置図

第３章　調査の概要

第１節　遺跡の概要

本調査地点からは、縄文時代の住居３軒、土坑 153 基、ピット 79 基、弥生時代の住居２軒、古墳時代の住居１軒、奈良・平安時代の住居 24 軒、時期不明の住居９軒、土坑 16 基、総計 287 基を検出した。本調査地点は、台地上から傾斜地に設定されており、A1 区から D 区の高低差は 10 m程である。

縄文時代の遺構は、A1 区で 41 基、A2 区で 191 基を検出した。傾斜地の下に位置する D 区からは３基を検出した。住居跡は３軒を検出したのみで、ほとんどが土坑である。土坑は、袋状土坑が集中しており 46 基を検出した。袋状土坑は、時期・法量による差異が認められ、なんらかの規制を持ち土坑の作製が行なわれたと推測される。縄文時代の遺物は、阿玉台Ｉｂ式土器、阿玉台Ⅳ式土器、加曾利ＥＩ～Ⅳ式土器、中峠式土器など縄文時代中期前葉から後葉の遺物が出土した。中でも、阿玉台Ⅳ式土器、加曾利ＥＩ式土器の遺物が最も多い。フラスコ状を呈する土坑 065SK からは、加曾利ＥＩ式の土器を主体として、ほぼ完形で器形が復元出来る深鉢 12 個体、浅鉢１個体、口縁部から頸部を意図的に欠いて、胴部から底部がほぼ完形の深鉢が５点出土した。065SK は、遺構底面より硬化面を上下２枚検出しており、遺物の殆どが上部の硬化面直上より出土した。

弥生時代の遺構は、D 区において、住居跡２軒を検出した。住居跡上部は耕作土に大きく切られる。南東方向に 3.50m ほどの距離で隣り合って検出し、主軸方向もほぼ同じである。出土遺物は、ともに十王台式土器で、２軒の住居跡の遺物は遺構間接合がみられ、どちらの住居も弥生時代終末期と考えられる。

古墳時代の遺構は、A1 区において、住居跡を１軒検出した。住居跡上部は耕作土に大きく切られる。床面直上からは、口縁部を意図的に欠いた器台や坩、小型坩などがまとまって出土した。出土遺物から古墳時代中葉の住居跡と考えられる。

奈良・平安時代の遺構は、A1 区で住居跡１軒、A2 区で住居跡 14 軒、D 区で住居跡９軒を検出した。８世紀前葉から 10 世紀前葉にかけてのものが主である。中でも、８世紀中葉～９世紀前葉に該当する住居跡は 12 軒である。出土遺物は、土師器坏、須恵器坏、常陸形甕、小型甕、紡錘車などである。須恵器坏は、木葉下窯のものが主体を占める。

第２節　調査の方法

本調査地点は、試掘調査の成果より３地点、合計 2,454 ㎡の調査区が設定され、調査区は、南東より A1 区、A2 区、D 区とした。グリッドは D 区北西を基点（第２図参照）として、5m 四方のグリッドを設定し、東西を西側から算用数字で１～42、南北を北からアルファベットで A ～ AM と付した。

A1 区より、重機による表土掘削後、人力により精査を行い、遺構プラン確認を行なった。その後、A1 区、A2 区、D 区の順に遺構掘削を行った。確認された遺構の中で、遺構壁面が袋状にオーバーハングする遺構に関しては、安全上断割り調査を行なった。遺構番号は、全区共通で通し番号を付し、整理段階において遺構番号の末尾に遺構種別に基づいた略号を付し遺構名とした。その際、欠番とした遺構もある。

平面図の作成はトータルステーションシステムを使用した三次元測量により行い、住居跡平面図・遺構断面図は手作業で行なった。、住居跡平面図・遺構断面図は S ＝ 1/20 の縮尺を基本に、必要に応じて S ＝ 1/10 で作成した。写真撮影は、35mm のモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラで行なった。

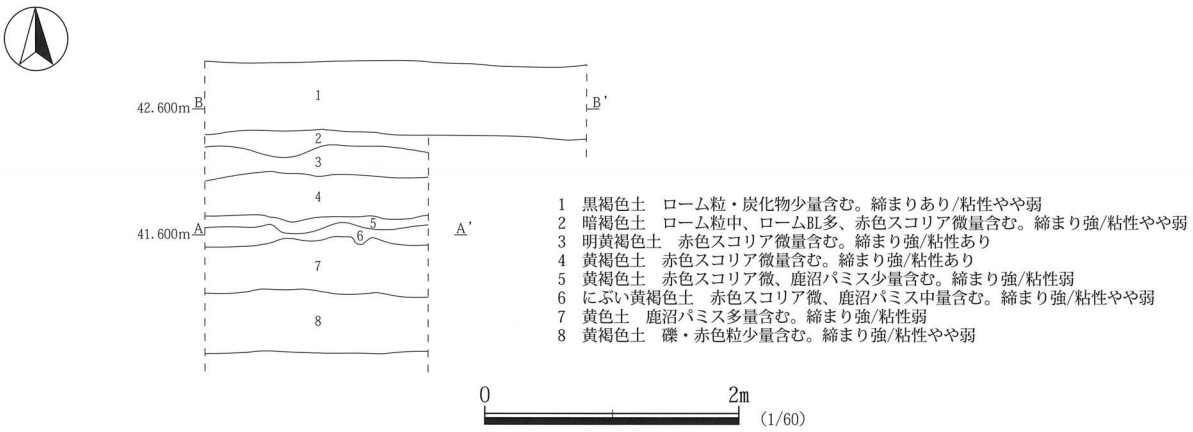
出土遺物の取り上げに関しては、基本的に遺構一括としたが、必要に応じトータルステーションシステムにより出土位置を三次元記録した後、取り上げた。また、層位に基づきブロック単位でも遺物の採取を行なった。

出土遺物は洗浄後、接合・復元作業を行い、実測図の作成を行なった。

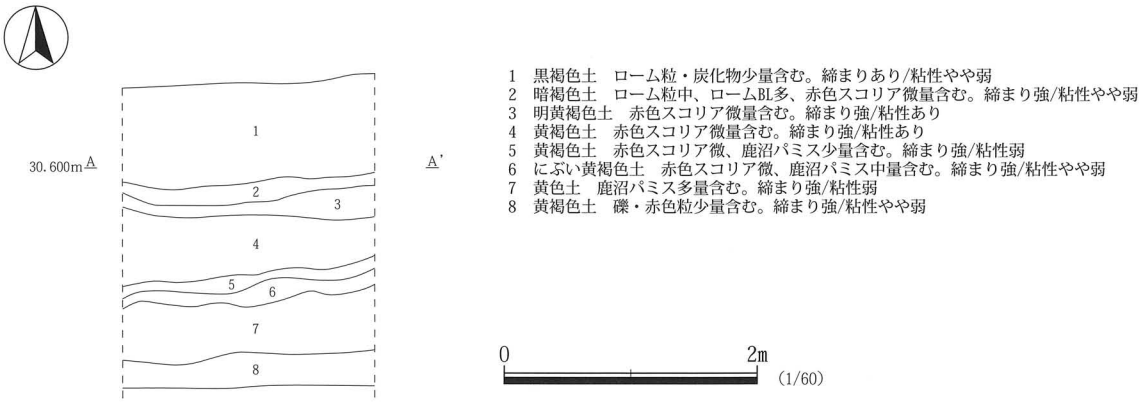
第３節　基本層序

調査地点、A2 区東側の北壁、D 区西端の北壁にトレンチを設定し、基本土層の堆積状況の確認を行なった（第 4・5・9・10 図参照）。A2 区、D 区のトレンチともに、ほぼ同一層の堆積が見られた。A 区から D 区では、現地形で 10m 程の高低差があり、D 区では、東から西へ傾斜する堆積が見られることなどから、傾斜に沿ってこれらの層も堆積したと考えられる。

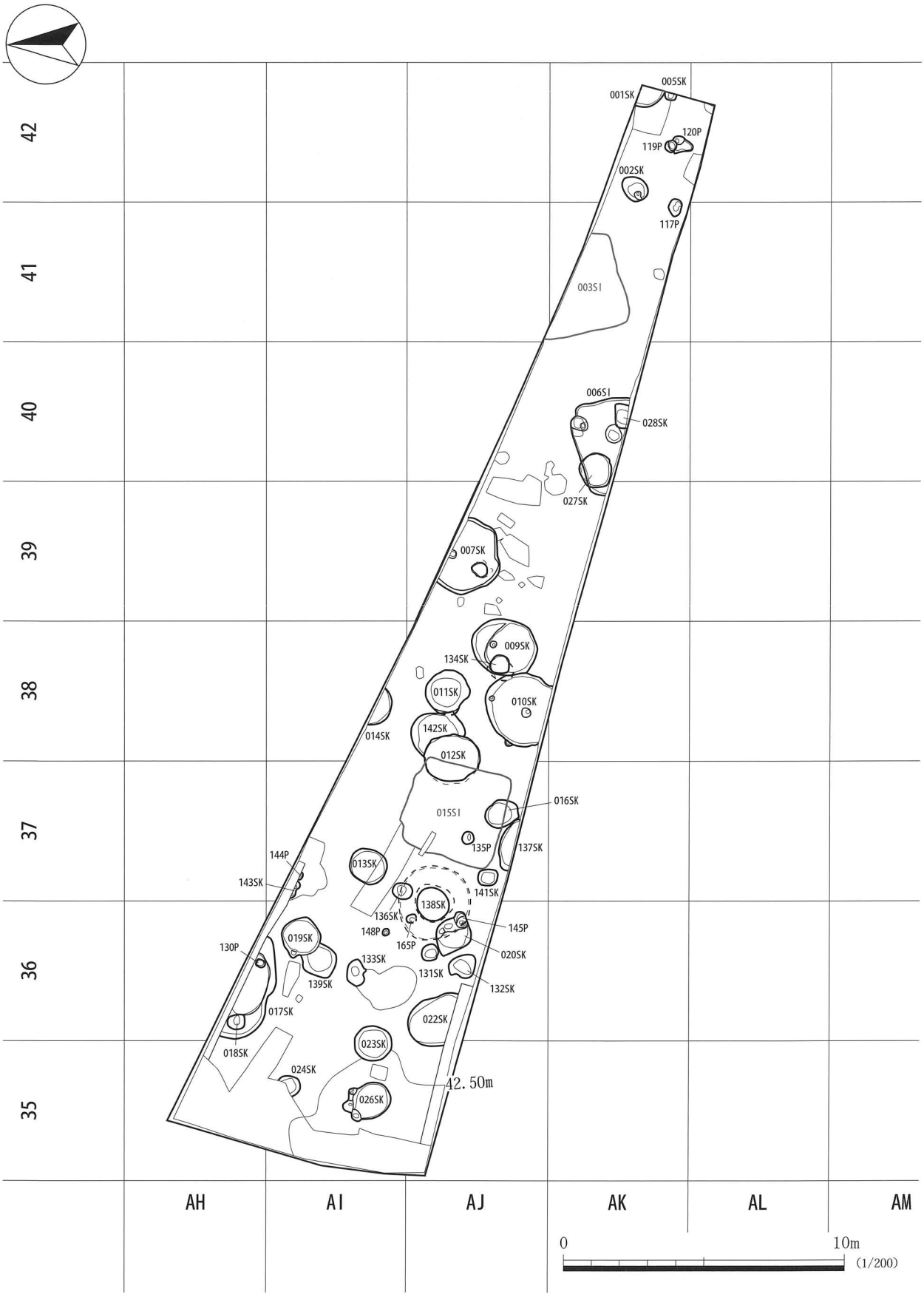
1 層は黒褐色を呈し、ローム粒・炭化物を少量含む近代以降の耕作土である。2 層は暗褐色を呈しローム層への漸位層である。3 層は明黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量含んでいる。ソフトローム層である。4 層は黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量含む。3 層より締まりが強く、ハードローム層である。5 層は黄褐色を呈し、赤色スコリアを微量、径 1 ～ 2mm の鹿沼パミスを少量含む。6 層はにぶい黄褐色を呈し、径 1 ～ 10mm の鹿沼パミスを中量含む。7 層は鮮やかな黄色を呈する。鹿沼パミス層である。粘性は無く水分を他の層よりも多く含む。A 区では、0.40 ～ 0.41m、D 区では 0.46 ～ 0.47m の厚さで堆積する。8 層は褐色を呈し、径 2 ～ 3mm の礫を少量含む。ハードローム層である。



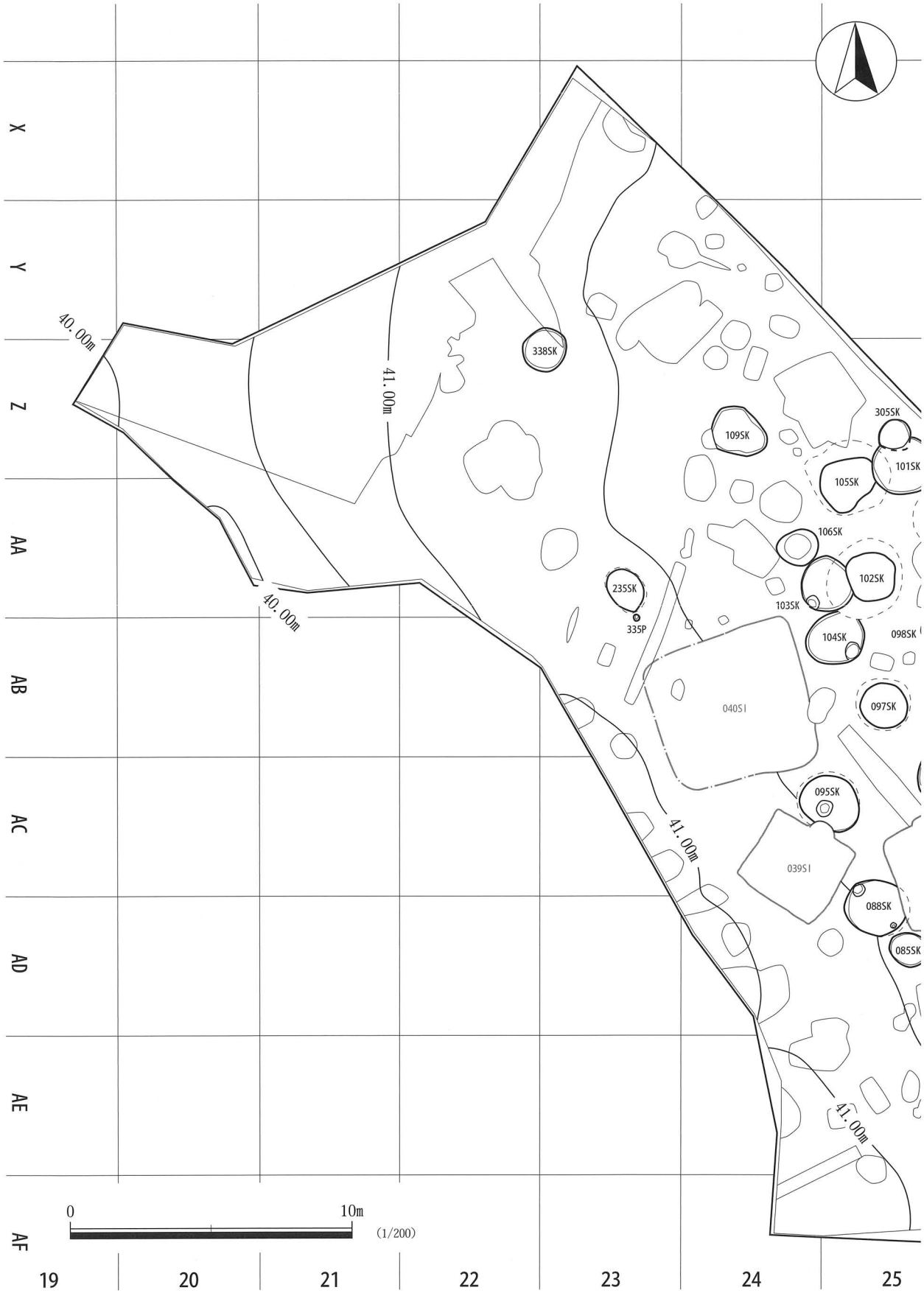
第４図　A2 区基本層序トレンチ



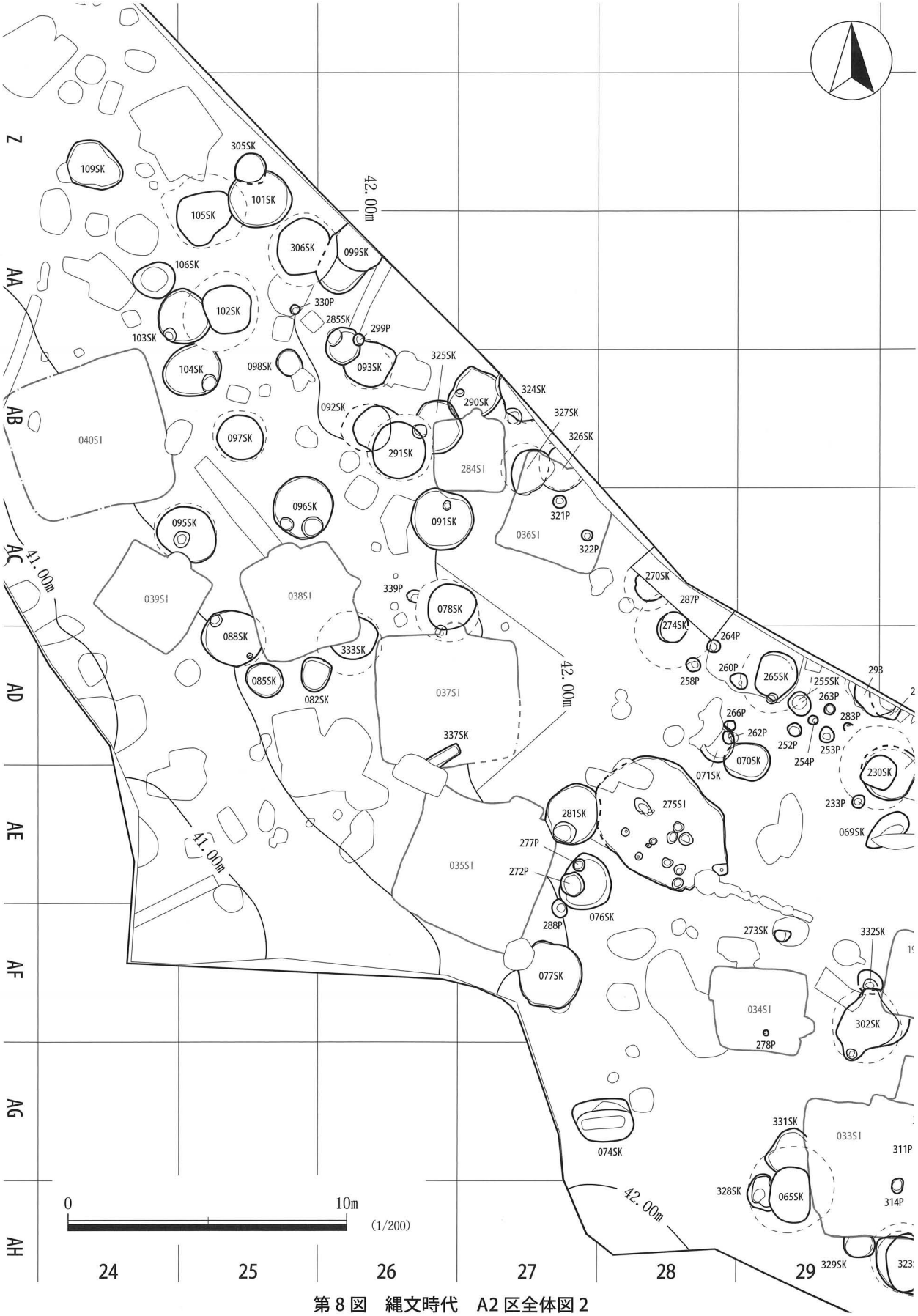
第５図　D 区基本層序トレンチ



第６図　縄文時代　A1 区全体図

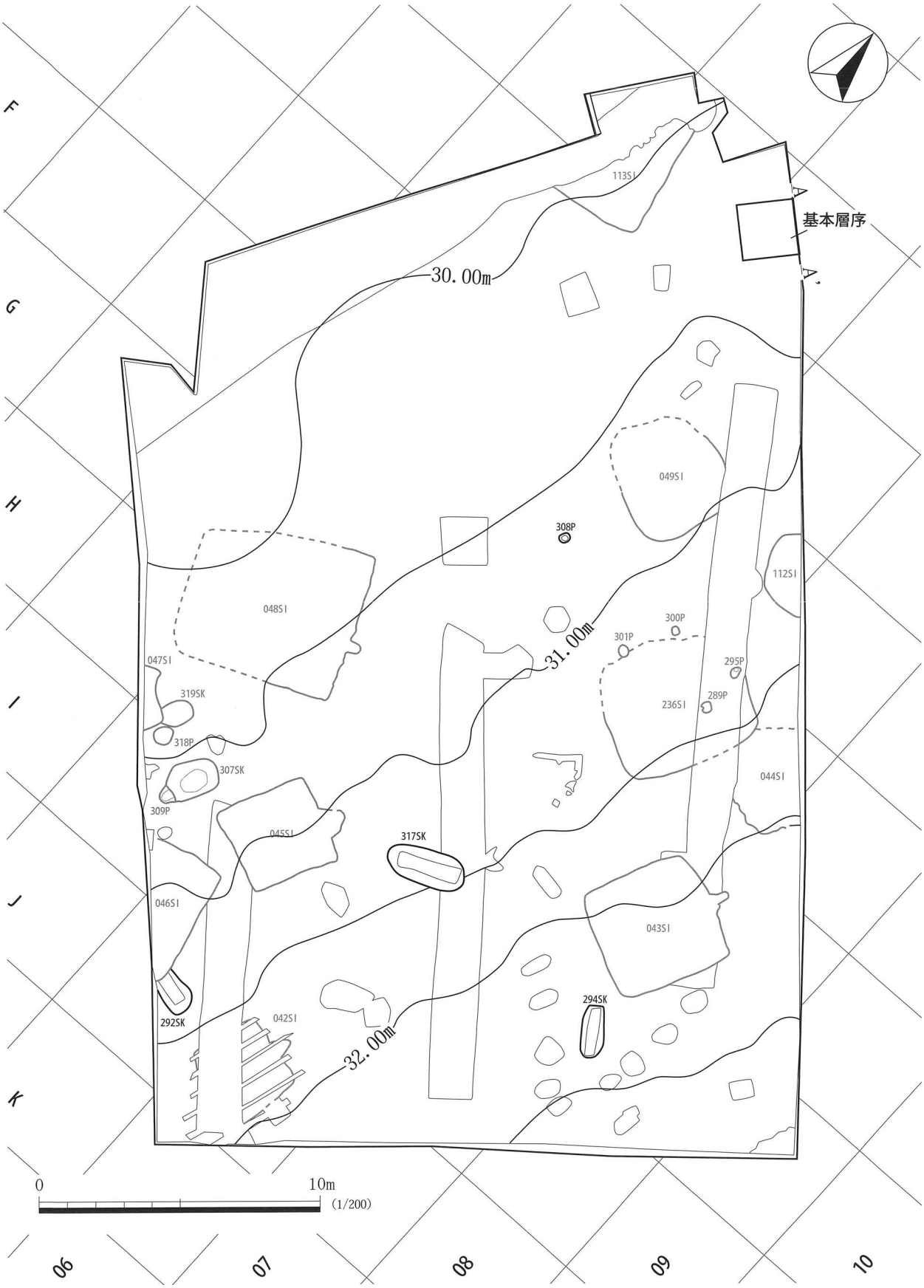


第７図　縄文時代　A2 区全体図１



第 8 図　縄文時代　A2 区全体図 2

第９図　縄文時代　A2 区全体図３



第 10 図　縄文時代　D 区全体図

第４章　縄文の遺構と遺物

第１節　A1 区

住居跡

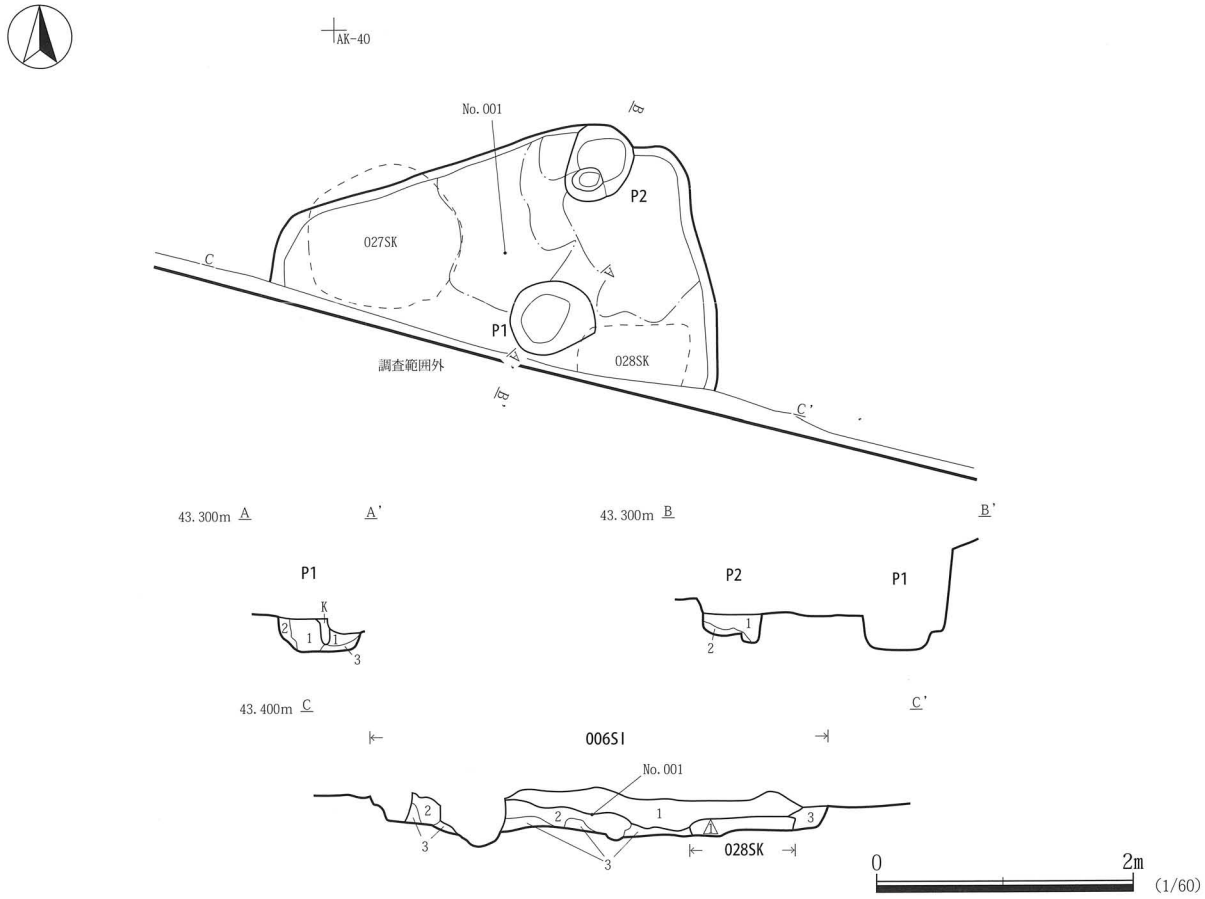
006SI（第 11・12 図、表２・3）

位置　A1 区東、AK-39、AK-40 グリッドに位置する。

重複関係　027SK の上部を切る。住居跡掘り方より 028SK を検出したが、覆土が 006SI の掘り方の覆土と類似する点などから 006SI と同一遺構と捉えた。

規模と平面形　長軸 3.17m、短軸 2.18m を測り、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向　N-73°　-E である。



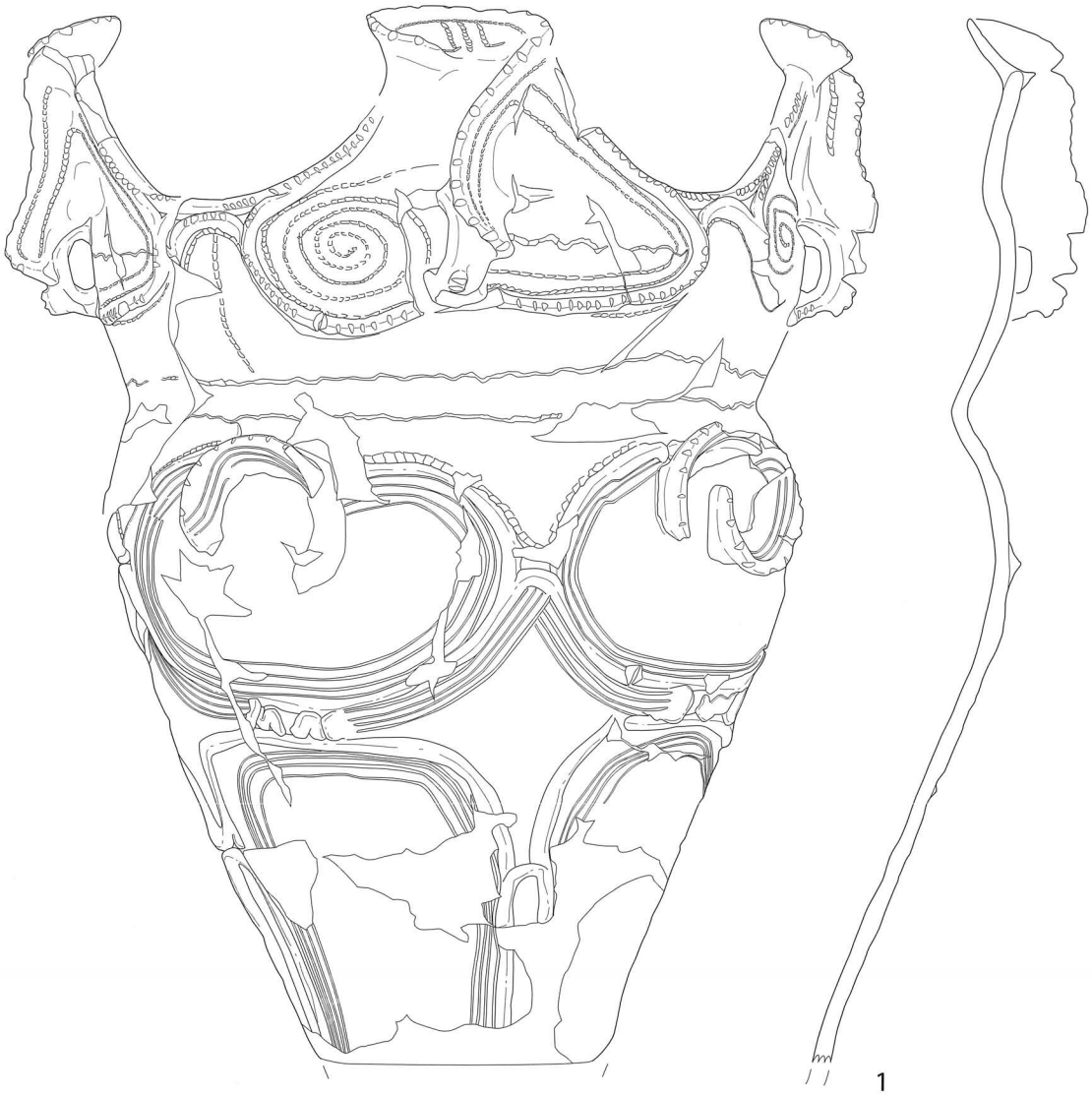
006SI
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まり強/粘性あり

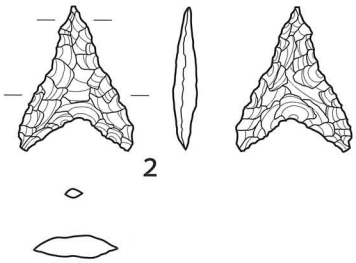
P1
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL多、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

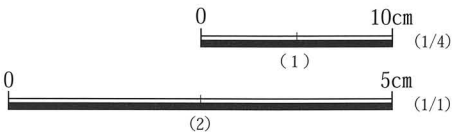
P2
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり

028SK
⚠ 黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性ややあり
※ 006SIの底面より方形のプランが確認されたため別遺構としたが006SIの掘り方の一部と考えられる。

第 11 図　006SI 平面図・断面図







第 12 図　006SI 出土遺物

表 2　006SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	006SI	No.001	深鉢	341	(570)		473	口縁～胴部	波状口縁（4頂）。波頂部より隆帯が逆S字状に延びる。口縁部には断面が三角状の隆帯による区画が、隆帯にはキザミが施される。区画内は角押文が施される。胴部は隆帯による区画が施され、区画内は沈線がめぐる。	阿玉台Ⅰb式	胎土：金雲母多、白色粒多。 実測図の正面・右の把手は復元。

表 3　006SI 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
2	006SI	覆土	石鏃	19	15	3	1	チャート		100%	凹基無茎　側縁が緩く内湾	
	006SI	覆土	打製石斧	76	42	17	71	蛇紋岩		100%	撥形　片刃	

壁　残存する壁高は 0.17 ～ 0.20 mで、緩やかに立ち上がる。

床　平坦である。住居中央部から北東に硬化面が認められる。

ピット　2 基（P 1 ～ 2）を検出した。ピットは、長軸 0.62 ～ 0.66 m、短軸 0.46 ～ 0.66 mの楕円形を呈し、深さは 0.22 ～ 0.26m である。P1 は、覆土の堆積状況から柱穴と推定される。

覆土　3 層に分層され、第 2 層以下が掘り方である。検出した覆土は僅かだが、第 1 層は、ほぼ水平に黒褐色土が堆積し、黒褐色土中には焼土粒、炭化物が均一に混入する点などから人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は 2 点である。

1 は、住居床面の中央部北から口縁部を西へ向けつぶれるように出土した。胎土に金雲母を多く含み、肩部がやや張り波状口縁を呈している。隆帯が波頂部から逆 S 字状に頸部へと延び、肩部には隆帯貼付けによる渦巻が施される。

2 は、チャート製の石鏃である。連続的な細かい調整剥離によって二等辺三角形を呈するように作り出される。基部に抉りを有し、両側縁中央部がやや内湾する。

時期　1 の遺物から、縄文時代中期前葉と考えられる。

袋状土坑

012SK（第 13 ～ 15 図、表 4・5）

位置　A1 区中央部、AJ-37、AJ-38 グリッドに位置する。

重複関係　142SK に北東壁を切られる。

規模と平面形　開口部は、長径 1.91 m、短径 1.64 mの楕円形、底面は長径 1.96 m、短径 1.65 mの楕円形で、深さ 0.84 mを測る。

壁　ややオーバーハングする。断面形は袋状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

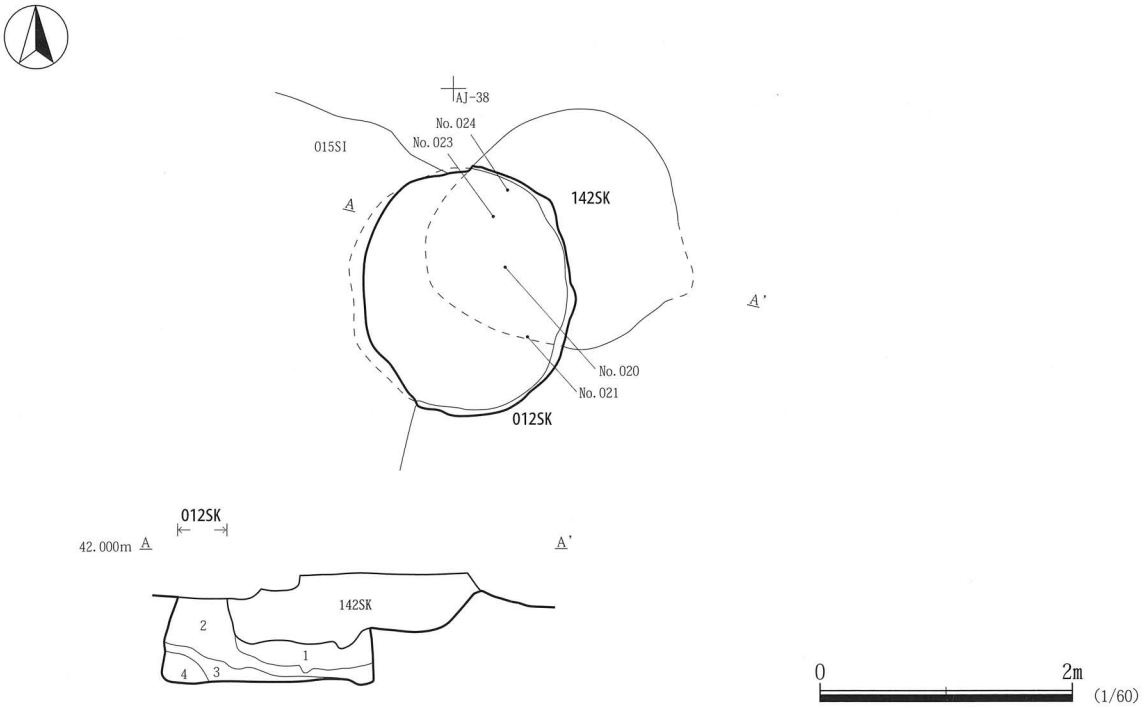
覆土　4 層に分層され、人為堆積と考えられる。第 1 層にはローム粒などが多く混入し、142SK が遺構北壁を切る際に埋め戻しが行なわれた可能性が高い。第 3・4 層からは加曾利 EII ～ III 式の土器が出土した。

遺物　実測遺物は 5 点である。

1 は、沈線を沿わせた隆帯で、渦巻・楕円形区画が施される。2 は、4 単位の把手が施される。胴部の懸垂文間の磨り消しは完全ではない。3 は、沈線による懸垂文間の磨り消しは丁寧である。

5 は安山岩製の磨石・敲石である。054SK 出土遺物との接合資料である。平面形は楕円形を呈する。表裏面の大部分に磨痕が明瞭に残る。敲打痕は表裏面の中央部、両側面および下端部に認められ、特に下端部の器面の剥落が著しい。

時期　出土遺物に、加曾利 EII 式土器で懸垂文間の磨り消しが完全ではないもの、加曾利 EIII 式土器で磨り消しが丁寧なものが見られる。加曾利 E Ⅱ式からⅢ式の土器が見られることから縄文時代中期後葉と考えられる。



012SK
1　にぶい黄褐色土　ローム粒多、ロームBL中、炭化物微量含む。締まりやや弱/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒微、炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

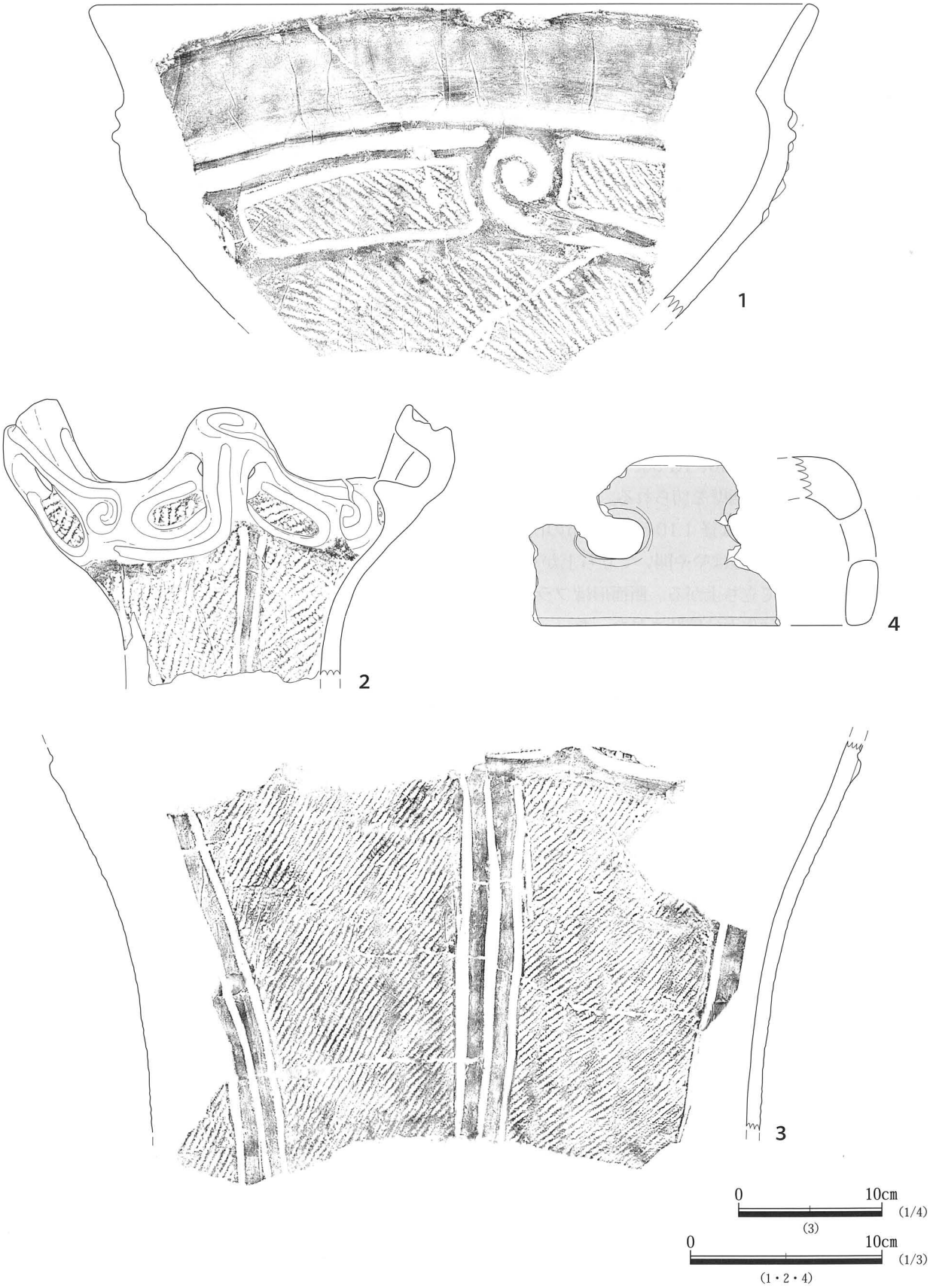
第 13 図　012SK 平面図・断面図

表 4　012SK 出土　土器観察表

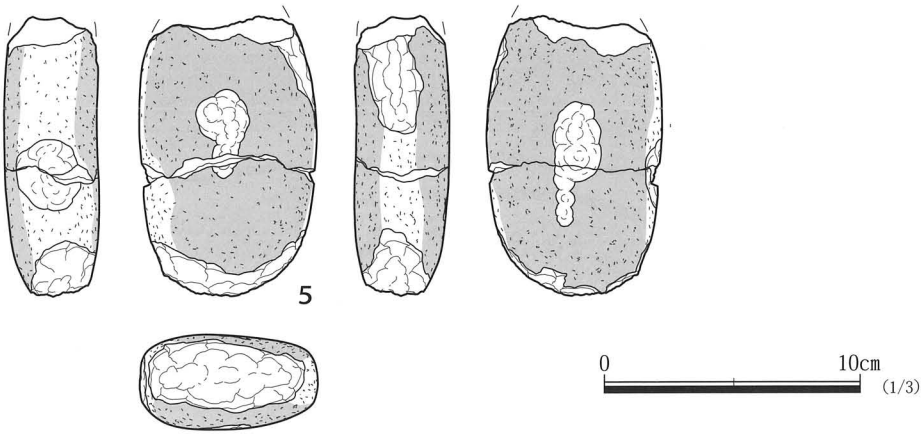
番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様。器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	012SK	No. 020	深鉢	〈380〉	(167)			口縁～胴部	口縁無文帯下は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施される。区画内は縄文（単節LR縦位）が施される。地文縄文（単節LR縦位）。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	
2	012SK	NO. 024	深鉢	160	143			口縁部～胴部	波状口縁（4頂）。波頂部直下眼鏡状把手。波頂部隆帯渦巻文。口縁部に楕円形区画が施される。区画内は縄文（単節RL）が施される。胴部は2本一組の沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消し。地文縄文（単節RL）。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	
3	012SK	NO. 023	深鉢		(272)			胴部	胴部は3本一組の沈線による懸垂文が施される。懸垂文間を磨り消し。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅢ式	142SK一括と接合
4	012SK	No. 021	器台		(89)			胴部～底部	無文。焼成前に胴部に穿孔が施される。胴部の内外面に赤彩が施される。		胎土：白色粒多

表 5　012SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	012SK	No. 020	敲石	66	40	27	81	流紋岩	○	100%	片面中央・上下端部・片側面に敲打痕	
5	012SK	No. 023	磨石・敲石	(111)	69	38	(470)	安山岩		80%	両面磨痕　両面中央・両側面・上下端部に敲打痕	054SK出土と接合
	012SK	覆土	剥片	30	21	5	3	黒曜石		100%		
	012SK	覆土	石核？	95	65	50	227	チャート		100%	原礫面あり　礫石器か	



第 14 図　012SK 出土遺物 1



第 15 図　012SK 出土遺物 2

138SK（第 16 ～ 18 図、表 6・7）

位置　A 1 区中央西 AI-36、AJ-36、AI-37、AJ-37 グリッドに位置する。

重複関係　165P に北西壁を切られる。遺構上部に攪乱を受ける。

規模と平面形　開口部は径 1.10 ～ 1.18 mの円形、底面は径 2.74 ～ 2.59 mの円形で、深さは 1.10 mである。

壁　底面から 0.10 m程はやや開いて立ち上がった後、開口部に向かい 13 ～ 30°の角度で傾斜し、括れ部分からは、やや内湾して立ち上がる。断面形はフラスコ状を呈する。

底　平坦である。硬化面は確認されなった。

覆土　5 層に分層された。第 3 ～ 5 層は、遺構底面から袋状に広がる部分に水平に堆積しており、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第 1 ～ 2 層も水平に堆積することなどから第 1 層以下は人為堆積と考えられる。第 5 層は遺構底面に 0.10 ～ 0.20 m程の厚さで堆積し、土器・石器・礫等の遺物を多く含んでいた。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。

遺物　実測遺物は 7 点である。遺物は、第 1 層下部、第 5 層から多く出土している。

1 は、遺構底面から出土している。把手が 4 箇所口唇部から胴部にかけて施される。底部は欠損している。

2 は、袋状土坑の括れの手前より底部を上にして出土した。口縁部は、水平に欠けており、本遺構から出土しなかった為、人為的に欠いたと考えられる。

3 は、遺構底部から出土しているが 1・2 とは時期が異なることなどから、本遺構から 15 m程南東に阿玉台 Ib 式土器が出土する住居跡 006SI を検出しており、埋土に混入した遺物と推測される。

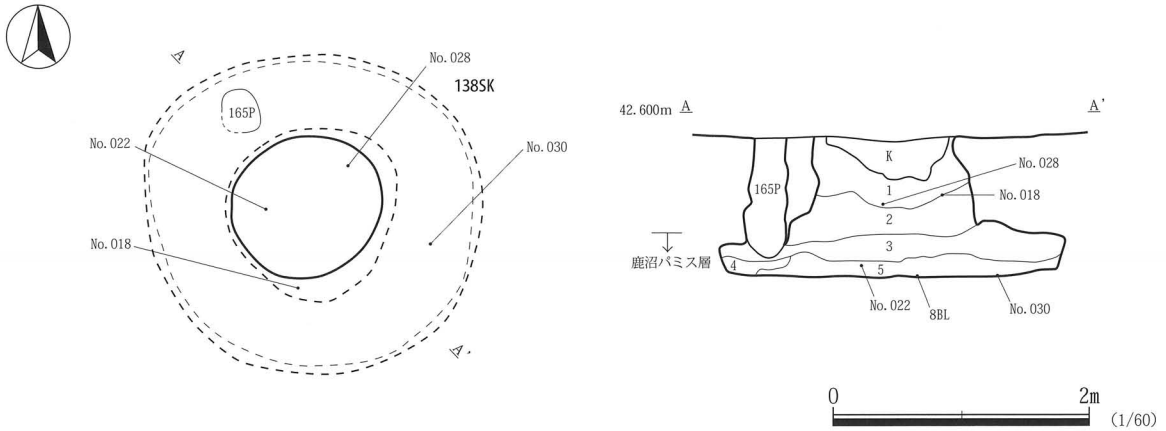
4 は石英斑岩製の磨石・敲石である。表裏両面の全面にわたって磨痕が認められ、両面と側面との間に稜線を形成している。下端部には狭小な 2 面の磨痕が残る。表裏面の中央部に微細なつぶれが認められる。

6 は閃緑岩製の石皿である。中央部が皿状に浅く凹み、その凹部内の器面は荒れている。石器裏面や側面には被熱の痕跡が残る。

6 は花崗岩製の蜂の巣石である。表裏両面に凹み部と磨面を有する。凹み部は計 17 箇所で、表裏面ともに磨面の周囲に散在する。凹み部は磨耗によって断面形が逆円錐形を呈し、上部の径は最大のもので 25 mm、深さは 12 mmを測る。磨面は皿状にわずかに凹む。

7 はデイサイト製の石棒である。先端部以外の大部分を欠損していると考えられる。上部の平坦面に明瞭な磨痕が認められる。側面の幅広な面には凹み部が表裏両面で計 8 箇所確認され、それらの周囲に磨痕が残る。7 は、遺構東側第 1 層下部より頭部を上にし正位で出土した。

時期　1 の遺物などから、縄文時代中期中葉と考えられる。



138SK
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性やや弱
2　黒褐色土　ローム粒多、ロームBL少、焼土粒・炭化物微、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性あり
4　黒褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微、鹿沼パミス多量含む。締まりあり/粘性あり
5　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中、鹿沼パミス多量含む。締まりあり/粘性あり

AK-37

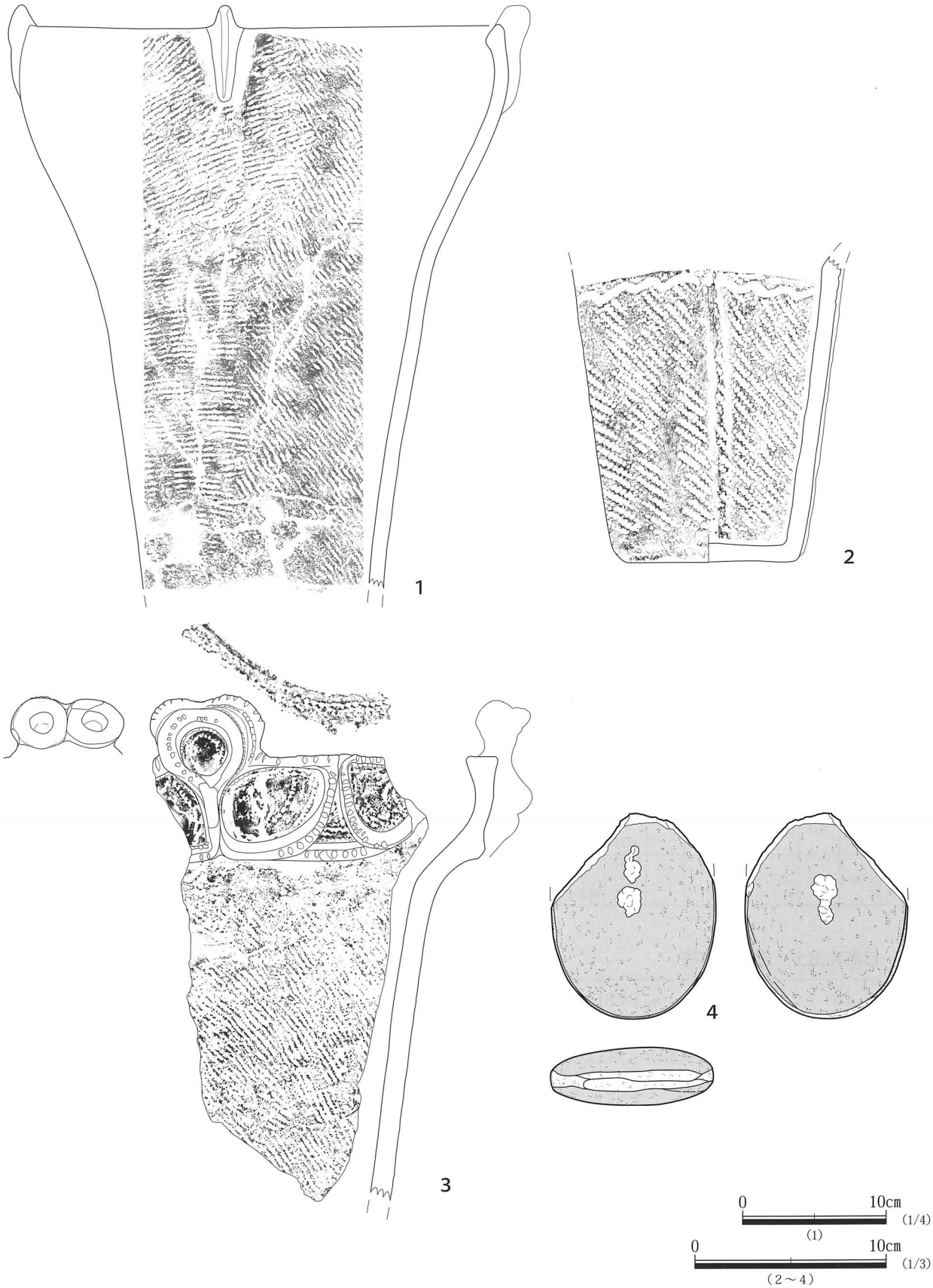
第 16 図　138SK 平面図・断面図

表 6　138SK 出土　土器観察表

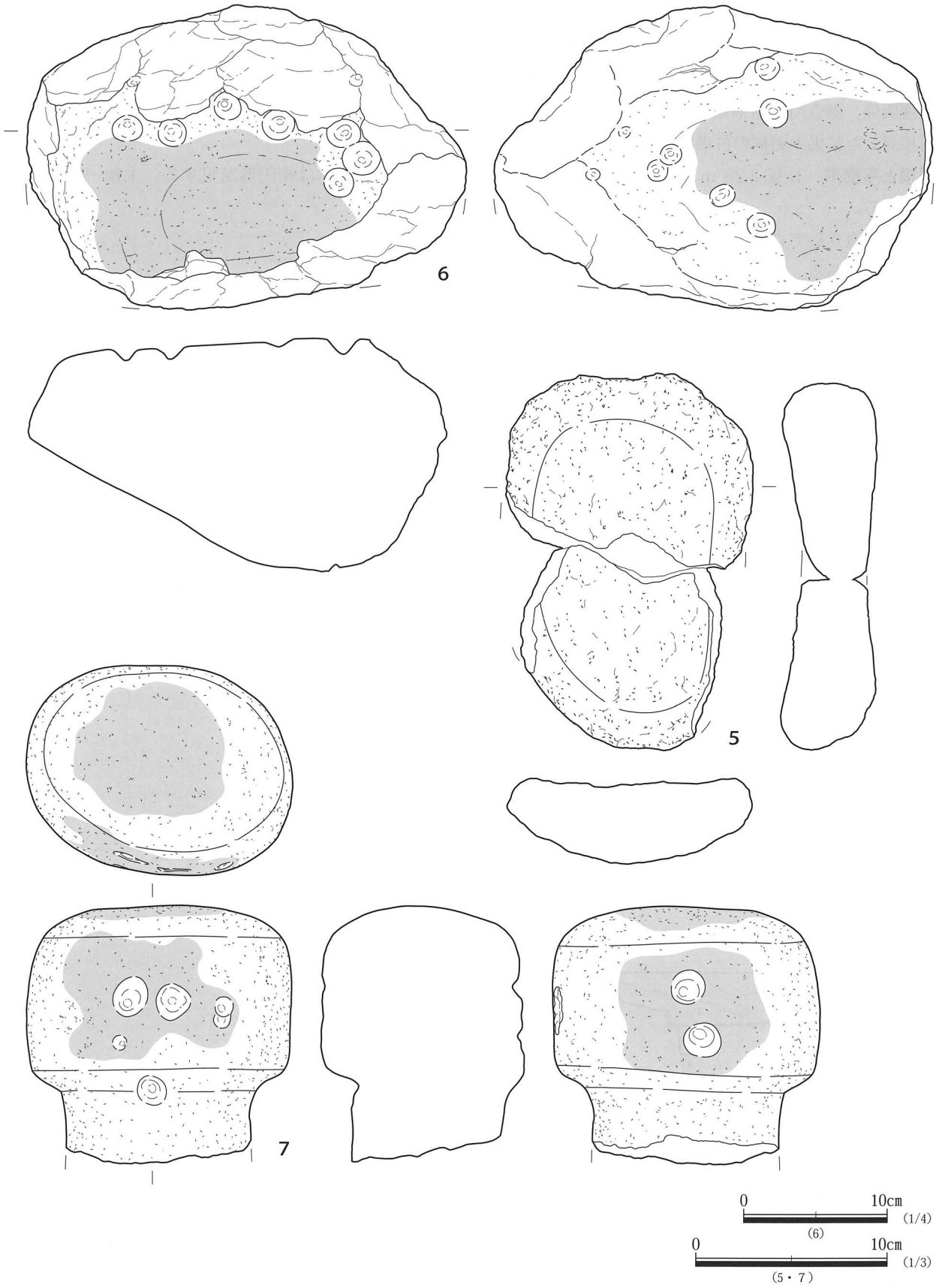
番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	138SK	No. 022	深鉢	326	(395)			口縁～胴部	口縁部に把手が4単位貼付られる。地文縄文（無節LR横位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多
2	138SK	No. 018	深鉢	(140)	(162)	90		胴部～底部	胴部に隆帯による懸垂文。頸部に沈線が施される。底部網代痕あり。地文縄文（単節LR縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多
3	138SK	No. 030-2	深鉢	(115)	〈267〉			口縁～胴部	口縁部には把手が施される。口縁部隆帯による区画。隆帯部にキザミが施され、口縁部及び区画内は押引文が施される。胴部地文縄文（単節LR縦位）。	阿玉台Ⅰb式	胎土：金雲母多

表 7　138SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
5	138SK	8BL	石皿	200	124	50	(1710)	閃緑岩	○	70%		
6	138SK	覆土	蜂の巣石	215	360	164	11850	花崗岩	○	不明	凹み部17　磨面2	
7	138SK	No. 028	石棒	(137)	140	110	(2820)	デイサイト	○	不明	磨痕3　凹み部8　被熱	
4	138SK	覆土	磨石・敲石	(103)	86	31	(411)	石英斑岩		70%	両面磨痕　両面中央に微細なつぶれ	
	138SK	覆土	磨石	(81)	(94)	(69)	(535)	砂岩		40%	両面磨痕　被熱	
	138SK	覆土	台石	(159)	(123)	(57)	(1490)	花崗岩	○	70%	被熱	



第 17 図　138SK 出土遺物 1



第 18 図　138SK 出土遺物 2

土抗

009SK・134SK（第 19 ～ 21 図、表 8・9）

位置　A1 区中央部、AJ-38、AJ-39 グリッドに位置する。

重複関係　調査時に遺構底面より小穴を検出し 134SK と付したが、遺構覆土が類似する点など、整理調査時に再検討した結果本遺構の付帯施設として捉えた。東側に攪乱を受ける。

規模と平面形　長径 2.28 m、短径 2.00 m、深さ 0.58 mを測る。平面形は楕円形を呈する。主軸　N -26°　-Eである。

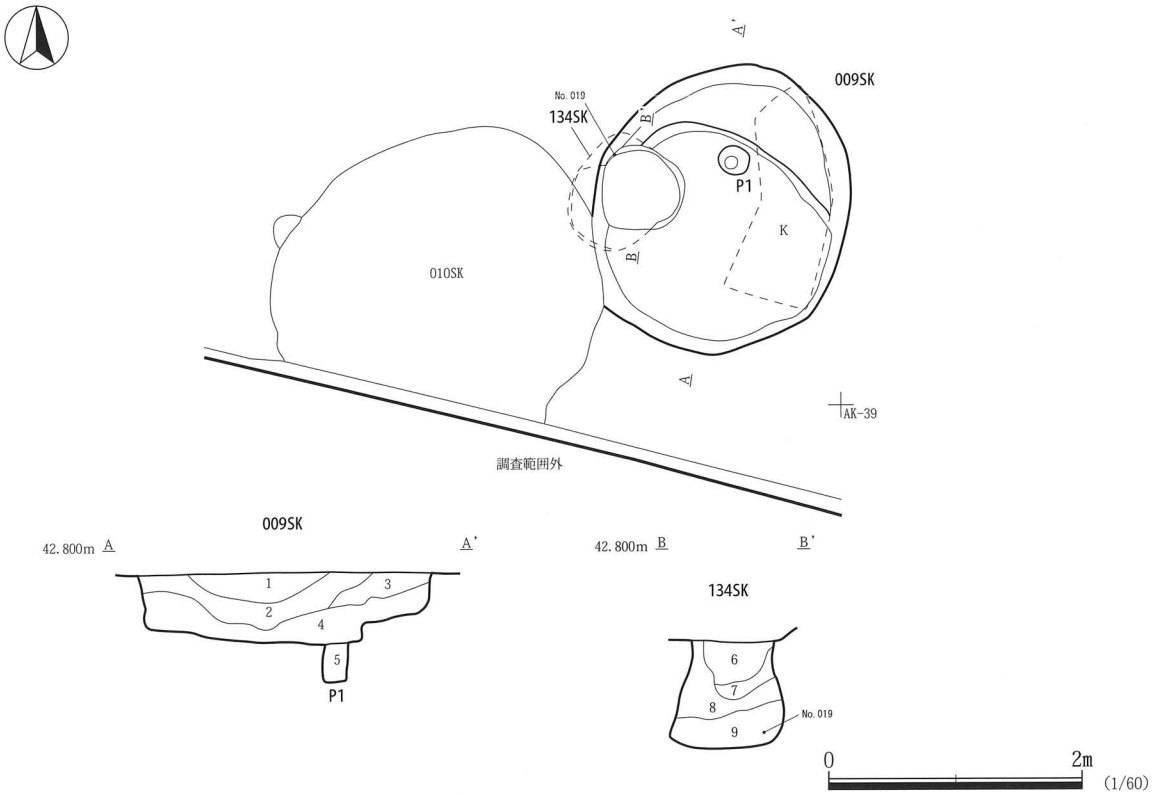
壁　ほぼ直立して立ち上り、北側壁面は、テラス状に一段高くなる。

底　平坦である。

ピット　2 基を検出した。P1 は直径 0.22 m、深さ 0.30 mの円形、134SK は、開口部は径 0.65 mの円形、底面は、長径 0.87 m、短径 0.75 mの楕円形を呈し、深さは 0.84 mで、袋状に拡がる。

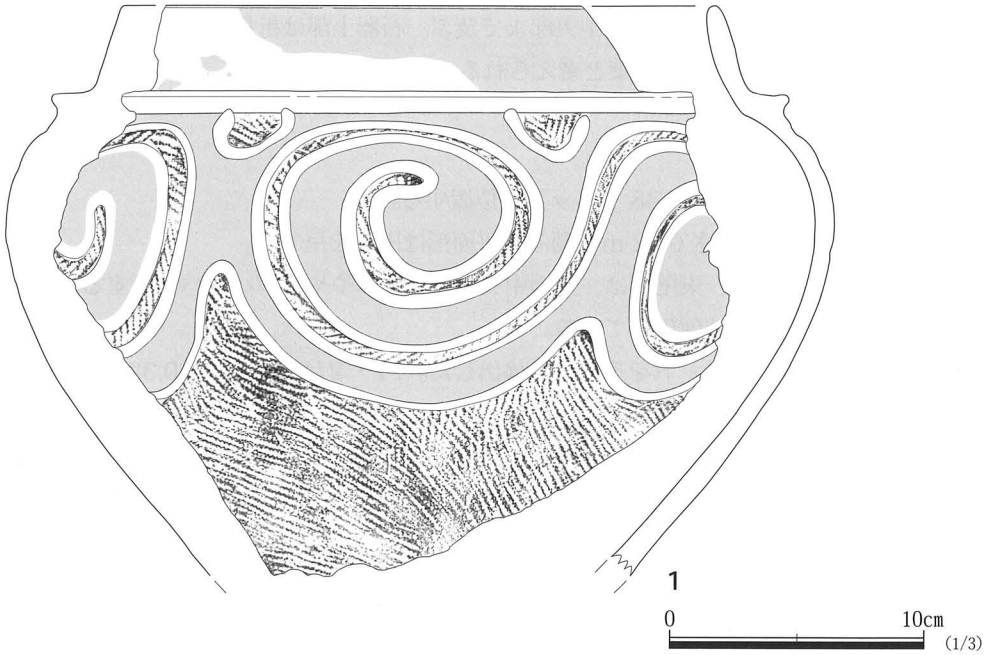
覆土　134SK を含めると、9 層に分層される。第 4・5 層以下は炭化物を含む黒褐色土である。7 層以下は締まりが弱い。ロームブロック・鹿沼パミスの含有状況などから、第 1 ～ 3 層は自然堆積で、第 4 層以下は人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は、2 点である。1 は、134SK としたピットの第 9 層から出土している。肩部が張り出し、肩部～胴部にかけて沈線による渦巻が施され、沈線の間は縄文が丁寧に磨り消される。口縁部と縄文施文部以外に

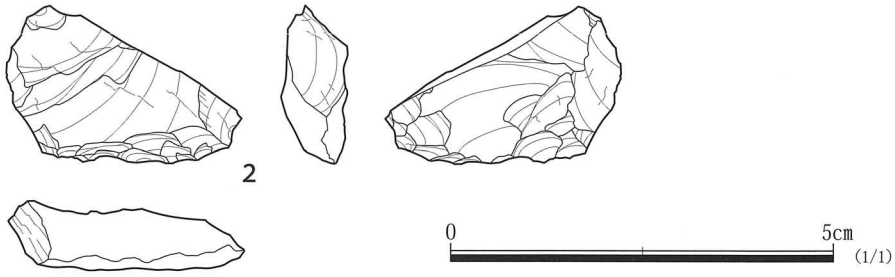


009SK・134SK
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒微、炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒微、炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まり強/粘性あり
4　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物少、鹿沼パミスBL中量含む。締まり強/粘性やや弱
5　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
6　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりやや強/粘性あり
7　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性あり
8　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり
9　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性強

第 19 図　009SK・134SK 平面図・断面図



第 20 図　134SK 出土遺物



第 21 図　009SK 出土遺物

表 8　134SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	134SK	No. 019	鉢	〈230〉			324	口縁～胴部	口縁部無文帯。胴部は沈線による渦巻が描かれ、沈線の間は磨り消しされている。地文縄文（単節LR縦位）。内面肩部から外面胴部にかけて赤彩が施されている。	加曽利E Ⅲ式	

表 9　009SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
2	009SK	1層	掻器	(21)	31	9	(6)	チャート		50%	上部欠損	
	009SK	1層	剥片	23	(16)	4	1	メノウ		80%	被熱	
	009SK	3層	不明	166	62	25	311	ホルンフェルス	○	100%	側面に磨痕	
	009SK	4層	砕片	13	9	3	〈1〉	チャート		100%		

は赤彩が施される。2はチャート製の掻器である。厚手の剥片を素材とし、縁辺の一部に調整剥離を施して刃部を作出している。裏面は調整剥離が石器中央部まで及ぶ。石器上部は折損している。

時期　1の遺物から、縄文時代中期後葉と考えられる。

010SK（第22・23図、表10）

位置　A1区中央南端、AJ-38、AK-38グリッドに位置する。

規模と平面形　径2.48 m、深さ0.62 mを測る。平面形は円形を呈する。

壁　ほぼ直立して立ち上るが、東壁面は、壁面中央部が東側へややオーバーハングする。

底　平坦であり、中央部が一部硬化している。

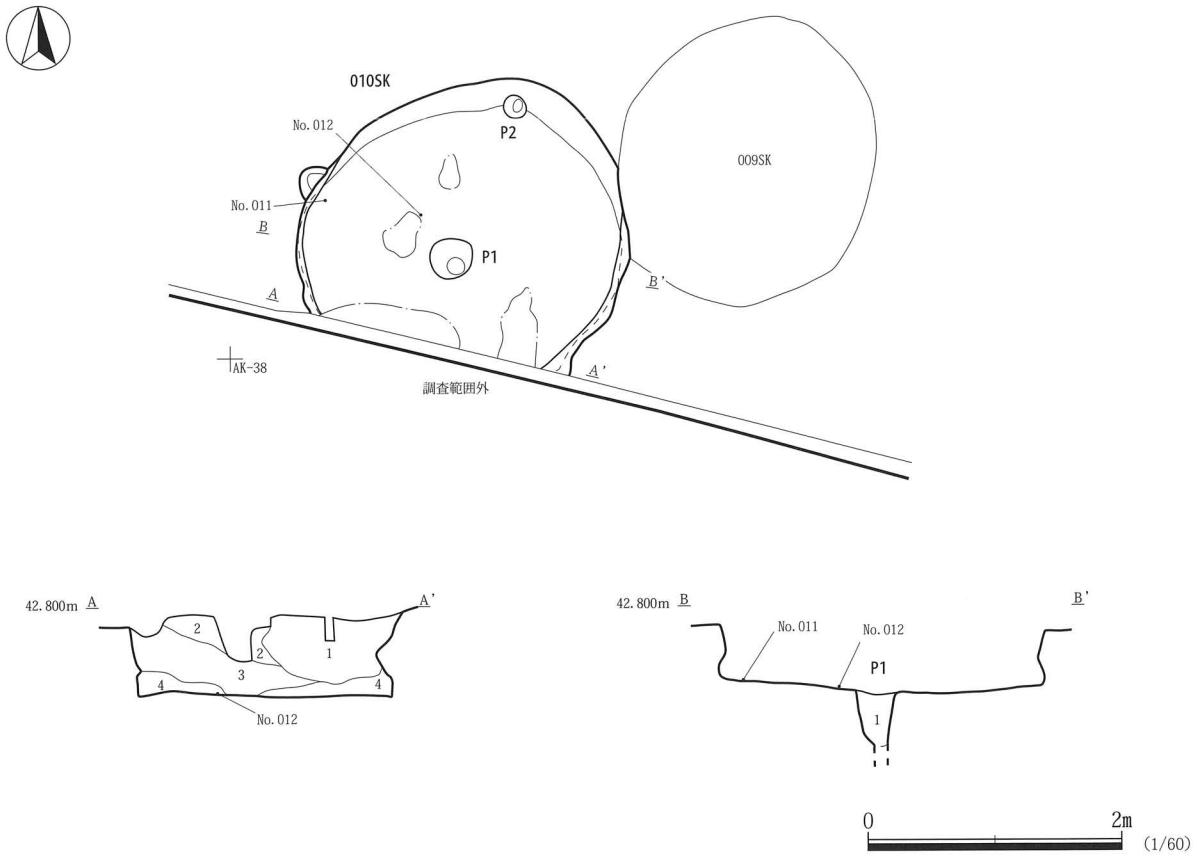
ピット　底部中央と北端からピットをそれぞれ検出した。P1・2は径0.15～0.32 m、深さ1.00 mの円形を呈する。

覆土　4層に分層される。第1層は、掘り返しの可能性が考えられる。第4層は、黒褐色土を呈し遺物を底面近くに多く含むことなどから人為堆積層と考えられる。

遺物　実測遺物は1点である。

1は、遺構底面直上第4層より出土した。沈線による懸垂文間に磨り消しが施される。磨り消しは丁寧である。

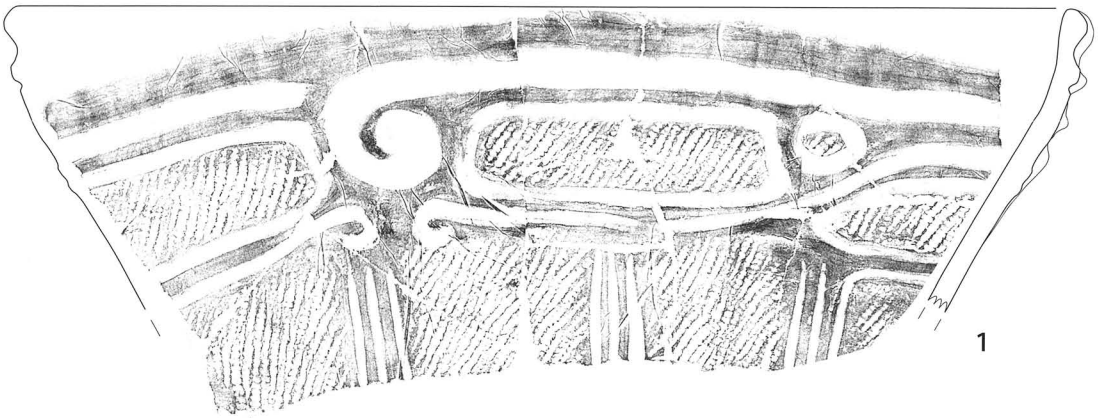
時期　1の遺物から、縄文時代中期後葉と考えられる。



010SK
1　黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
3　褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まり強/粘性強
4　黒褐色土　ローム粒中量含む。締まり弱/粘性強

P1
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり

第22図　010SK平面図・断面図



第 23 図　010SK 出土遺物

表 10　010SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	010SK	No.011 No.012	深鉢	〈550〉				口縁～胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施され、区画内縄文(単節RL縦位)が施される。胴部は3本一組の沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消し。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅢ式	

第 2 節　A2 区

住居跡

149SI（第 24・25 図、表 11）

位置　A2 区北東部、AG-32、AG-33、AH-32、AH-33 グリッドに位置する。

重複関係　156SK の上部を切る。147SK に遺構中央炉を、150SK に北壁を、151SK・153SK に南西部を、228P に炉の西側を切られる。

規模と平面形　長軸 5.37 m、短軸 5.06 mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向　N -67°　- Wである。

壁　残存する壁高は 0.14 ～ 0.28 mで、壁は床面から緩やかに立ち上がる。

床　不明瞭であるがほぼ平坦と思われ、硬化面は住居床面全体に確認された。周溝は住居北西部で一部検出したが、切合が著しいため全周しているかは不明である。

ピット　検出されなかった。

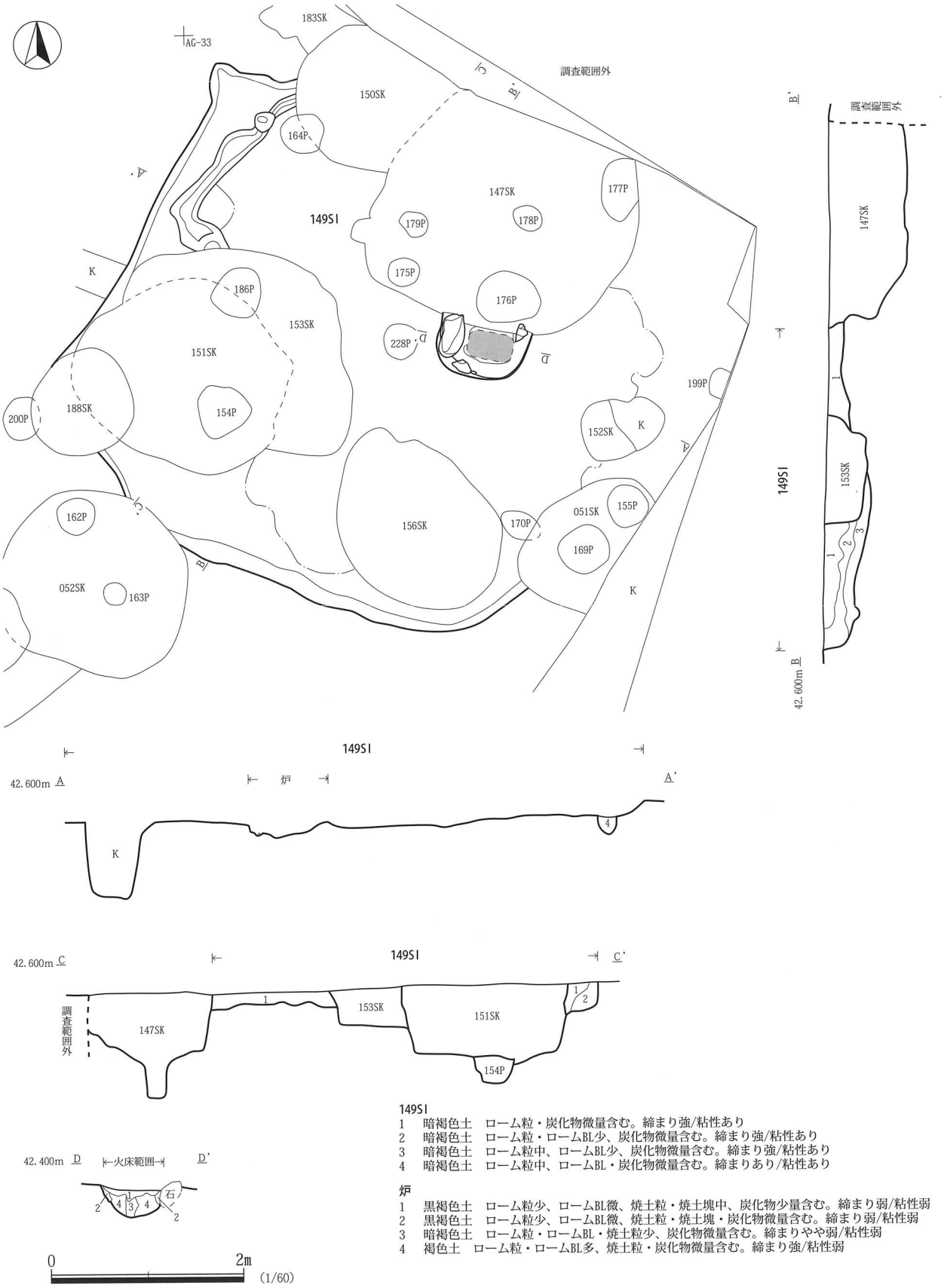
炉　住居中央部に付設されており、石囲い炉である。礫は 4 点を検出した。火床面は炉全体に拡がる。検出した規模は長径 0.92m、短軸 0.52m である。炉は、4 層に分層され、第 4 層上部が火床面である。遺物は砕片のみが出土した。

覆土　4 層に分層されたが、覆土が薄く自然堆積層か人為堆積層かは不明である。掘り方は確認されなかった。住居床面等からはまとまった遺物などは出土していない。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は、無文の鉢である。口縁部から頸部にかけて内外面共に赤彩が施される。

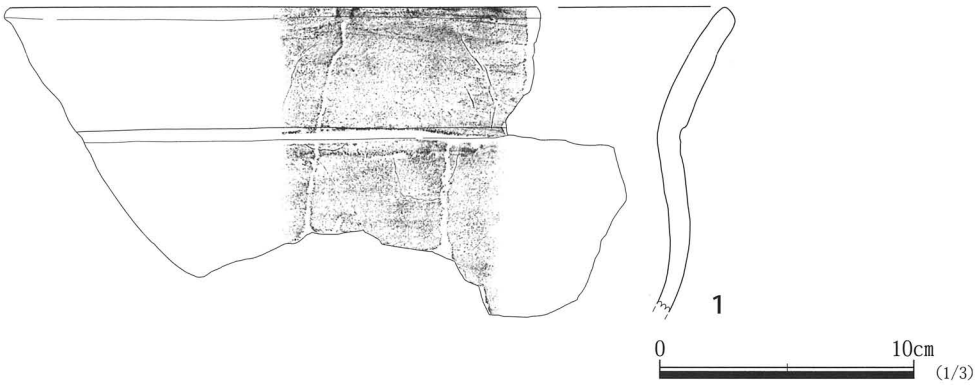
時期　出土遺物には、図示していないが加曾利ＥⅡ式もしくはⅢ式土器の破片が見られること、遺構の切合などから縄文時代中期後葉と考えられる。



149SI
1　暗褐色土　ローム粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

炉
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊中、炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊・炭化物微量含む。締まり弱/粘性弱
3　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒少、炭化物微量含む。締まりやや弱/粘性弱
4　褐色土　ローム粒・ロームBL多、焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性弱

第 24 図　149SI 平面図・断面図



第 25 図　149SI 出土遺物

表 11　149SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	149SI	覆土	鉢		(122)			口縁部～胴部	無文。口縁部から頸部にかけて内外面共に赤彩が施される。		147SK一括と接合。

275SI（第 26・27 図、表 12）

位置　A2 区中央、AD-28、AE-28 グリッドに位置する。

重複関係　281SK に西壁上部を切られる。北西部は攪乱を受ける。

規模と平面形　規模は長軸 5.40 m、短軸 3.51 mを測り、平面形は楕円形を呈する。主軸方向はN-43°-W である。

壁　残存する壁高は 0.17 ～ 0.24 mで、緩やかに立ち上がる。

床　平坦で、遺構中央部分に硬化面が認められる。

ピット　11 基を検出した。P1 ～ 9・11 は、径 0.32 ～ 0.44 mで概ね円形を呈す。深さは P1 ～ 2・6 は 0.90 ～ 1.20 m、P3 ～ 5・7 ～ 9・11 は 0.18 ～ 0.38 である。P10 は、径 0.90 mの円形を呈し、深さは 1.26 mである。

炉　住居北西部より検出した。炉石は南側から 4 点検出した。

覆土　3 層に分層され、第 3 層は掘り方である。初期流入土が認められ、自然堆積層と考えられる。

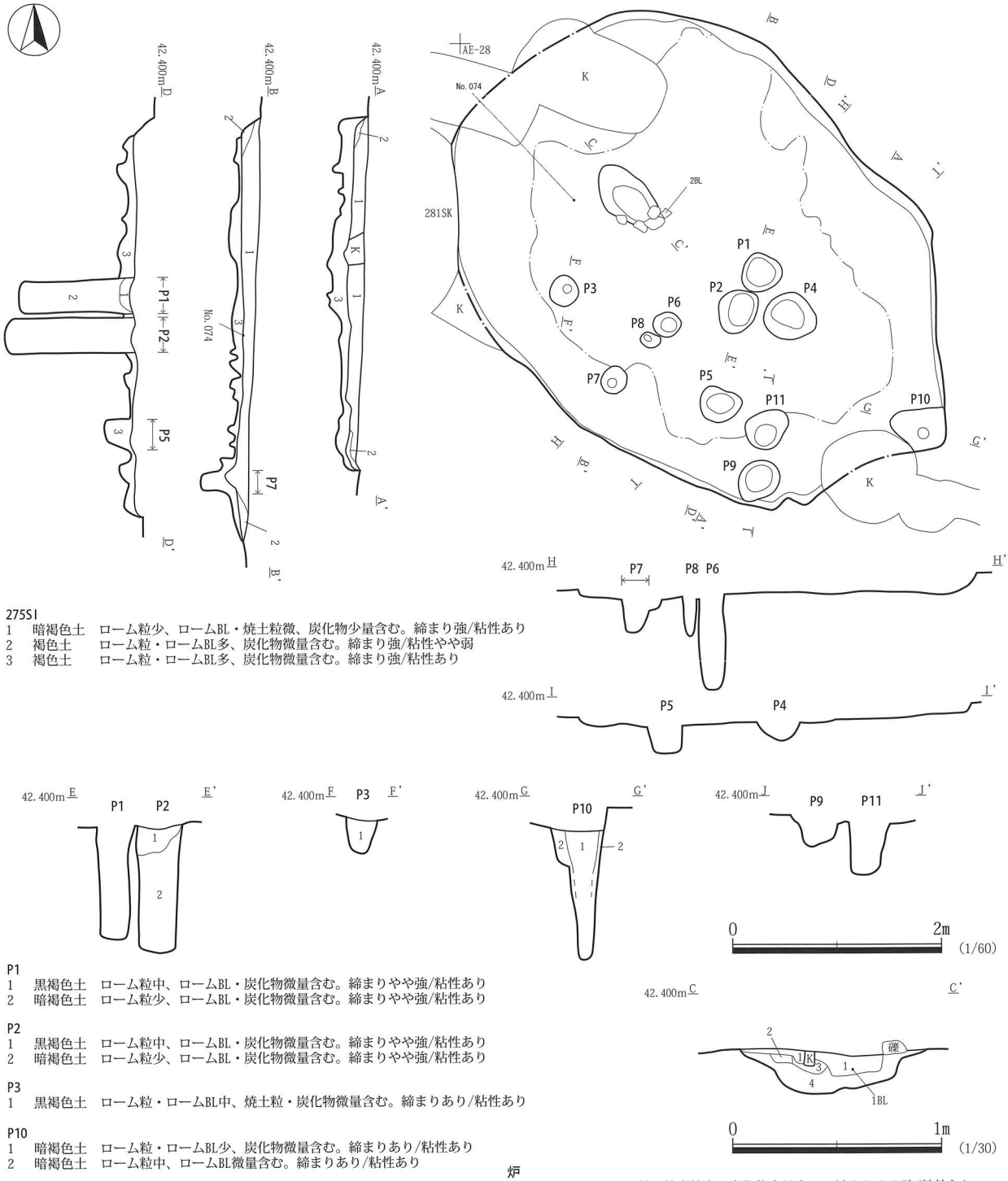
遺物　実測遺物は 5 点である。

1 は、無文の鉢である。2・3・5 は、住居床面の炉から北西へ 0.30 m程の位置からまとまって出土した。

2 は、口縁上端部に隆帯が貼付けられ、隆帯と胴部に縄文が施文されている。

4 は、炉の東脇から出土した。沈線は、半截竹管状の施文具によって施文されたと推定される。

時期　2 や 4 の遺物などから縄文時代中期中葉と考えられる。



275SI
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒微、炭化物少量含む。締まり強/粘性あり
2　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まり強/粘性やや弱
3　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

P1
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり

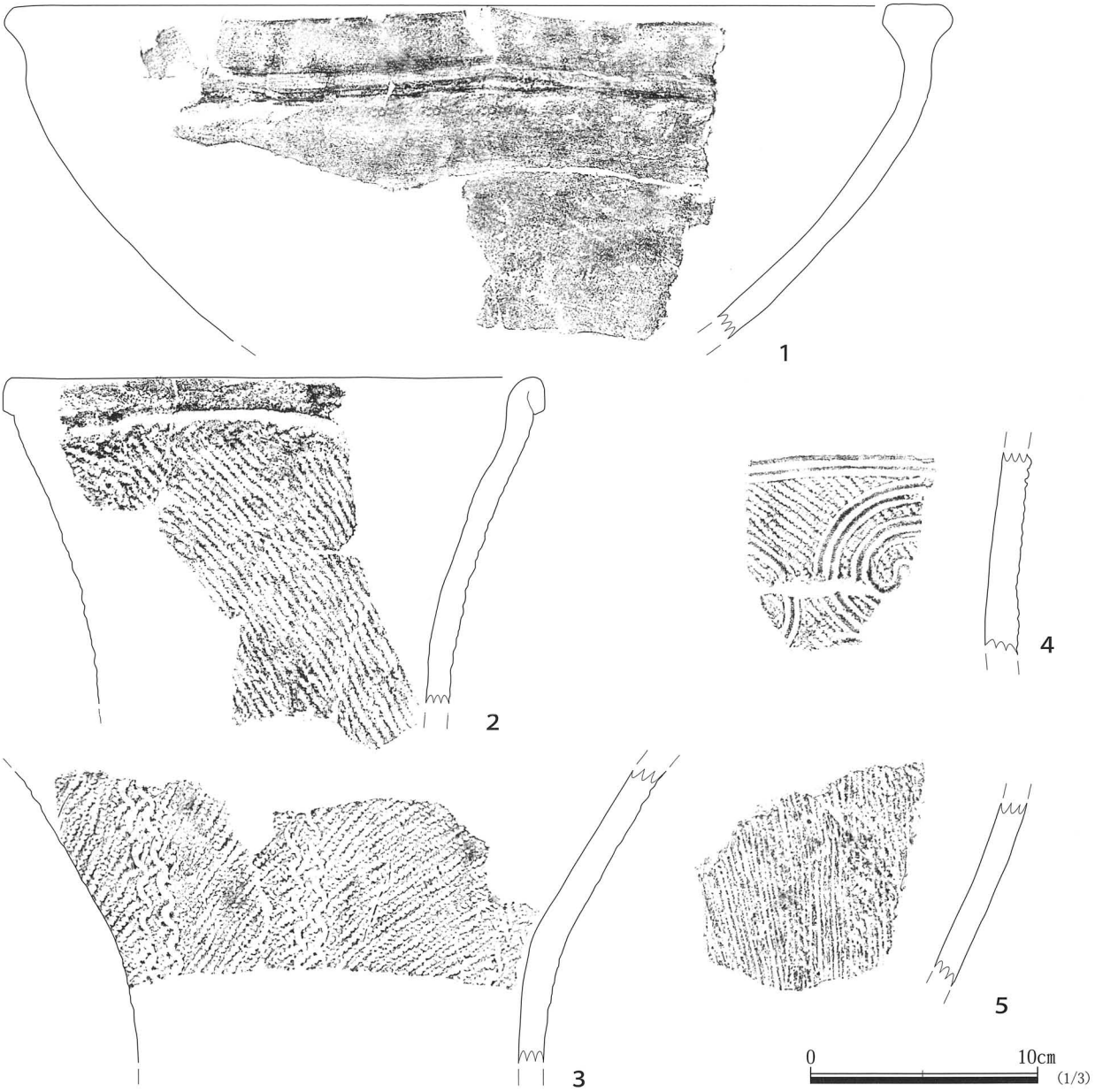
P2
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり

P3
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

P10
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性あり

炉
1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒少、炭化物少量含む。締まりやや強/粘性あり
2　赤褐色土　焼土主体。締まり弱/粘性弱
3　暗褐色土　ローム粒中、焼土粒・焼土塊少、炭化物微量含む。締まり弱/粘性弱
4　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

第 26 図　275SI 平面図・断面図



第 27 図　275SI 出土遺物

表 12　275SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	275SI	1BL	深鉢	〈420〉	(145)			口縁～胴部	無文。		
2	275SI	No.074-1	深鉢	〈240〉	(147)			口縁～胴部	口縁部は隆帯を貼付け、折り返している。口唇部隆帯上・胴部に縄文（単節RL縦位）が施文される。	阿玉台Ⅳ式	
3	275SI	NO.074	深鉢		(131)			頸部～胴部	地文結束縄文（単節LR縦位）。		
4	275SI	1BL 2BL	深鉢		(90)			胴部	沈線による横位文、渦巻が施される。地文縄文（単節LR縦位）。	加曾利EⅠ式	
5	275SI	No.074-2	深鉢		(81)			胴部	条線が施される。		

袋状土坑

054SK（第 28 ～ 31 図、表 13）

位置　A2 区南東部、AF-32、AG-32 グリッドに位置する。

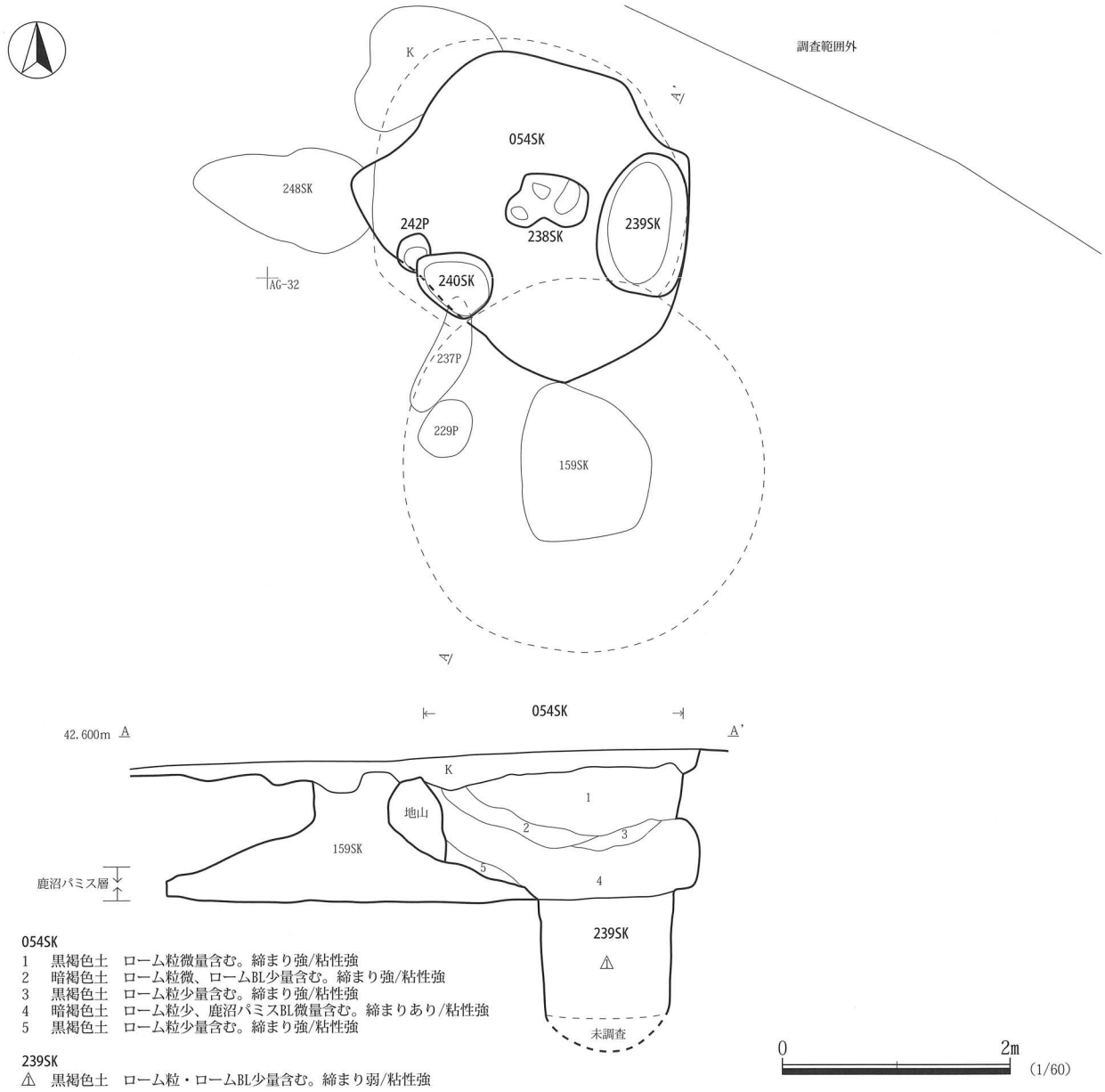
重複関係　159SK の南壁を、248SK の東壁を切る。調査時に遺構底面より小穴を検出し 238SK、239SK、240SK、242P と付したが、遺構覆土が類似する点など、整理調査時に再検討した結果本遺構の付帯施設として捉えた。

規模と平面形　開口部は長径 3.77 m、短径 3.34 mの円形、底面は長径 3.44 m、短径 3.04 mの円形で、深さは 1.30 mである。

壁　壁面は南壁から東壁にかけて開口部に向い弧を描きながら傾斜する。括れ部分は見られないが袋状を呈する。

床　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット　4 基検出した。238SK、240SK、242P は、長軸 0.28 ～ 1.25 m、短軸 0.15 ～ 0.75 mの楕円形で、深



第 28 図　054SK・239SK 平面図・断面図

さ 0.27 ～ 0.74 mである。239SK は、長軸 1.22 m、短軸 0.75 mの楕円形で、深さ 1.06 mである。

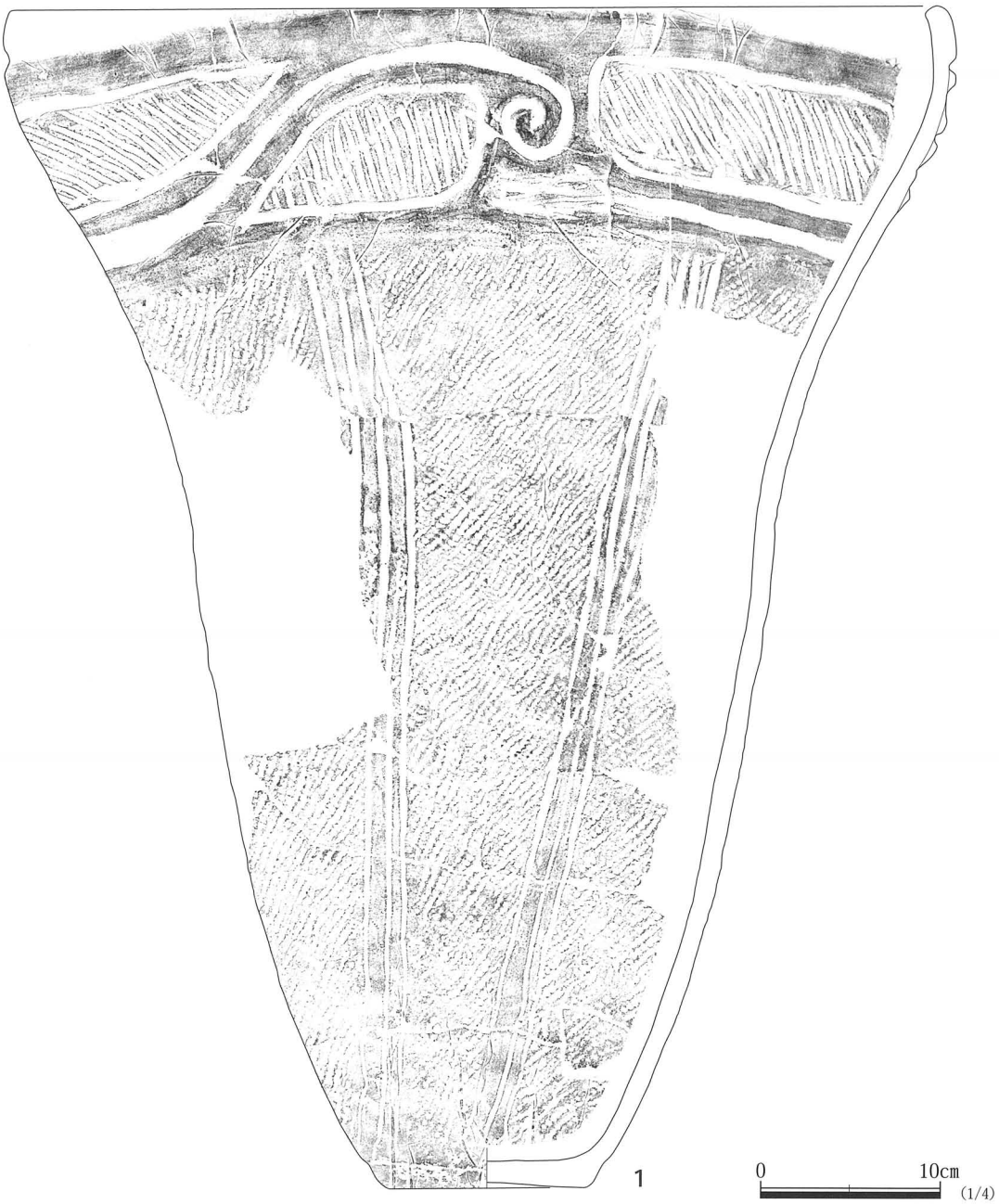
覆土　5 層に分層される。第 1 ～ 3 層は類似する。第 2・3 層は遺物を多く含み、第 2 層はロームブロックを少量含む。第 4・5 層の下層も遺物を多く含む。遺物の含有状況などから人為堆積と考えられる。239SK は単層である。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は 4 点である。

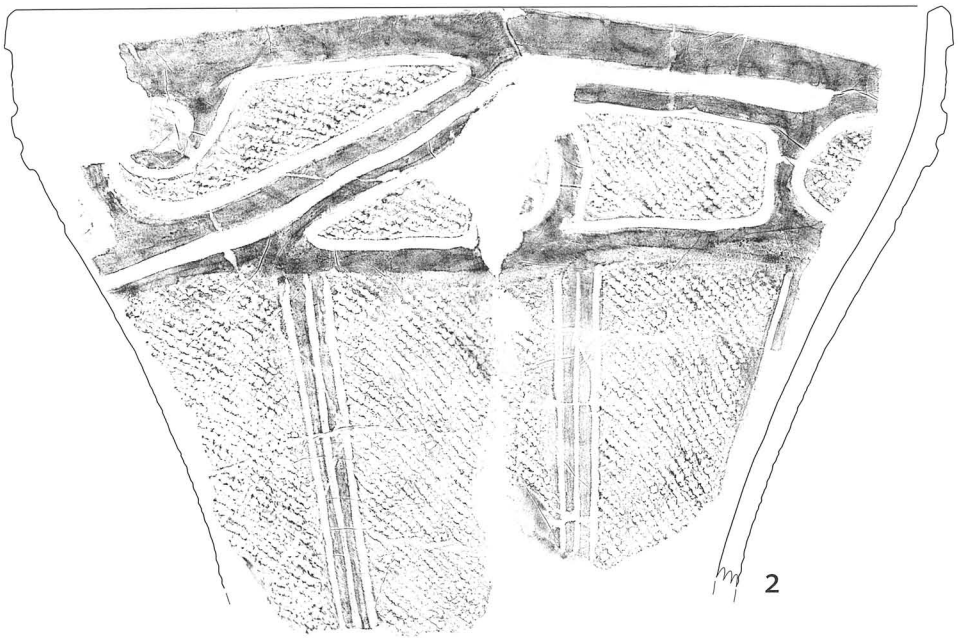
1 は、胴部は懸垂文間に磨り消しが施されるが、磨り消しは明確ではない。口縁部の区画内に縦位・斜位の沈線が描かれる。2 は、口縁部の区画内に縄文が施される。

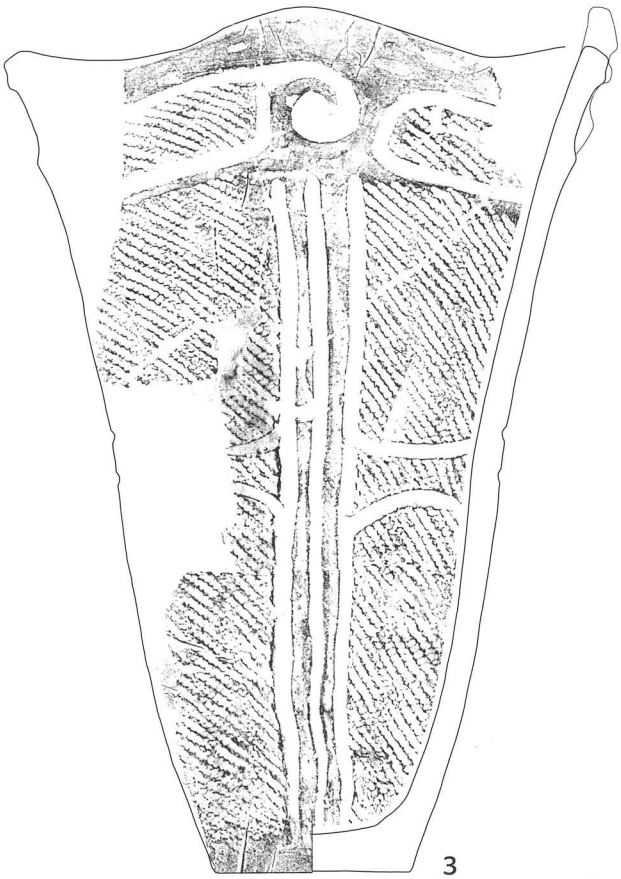
3 は、胴部は懸垂文の間に沈線が弧を描いて横位方向に施される。4 は、胎土に金雲母を多く含む。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 29 図　054SK 出土遺物 1

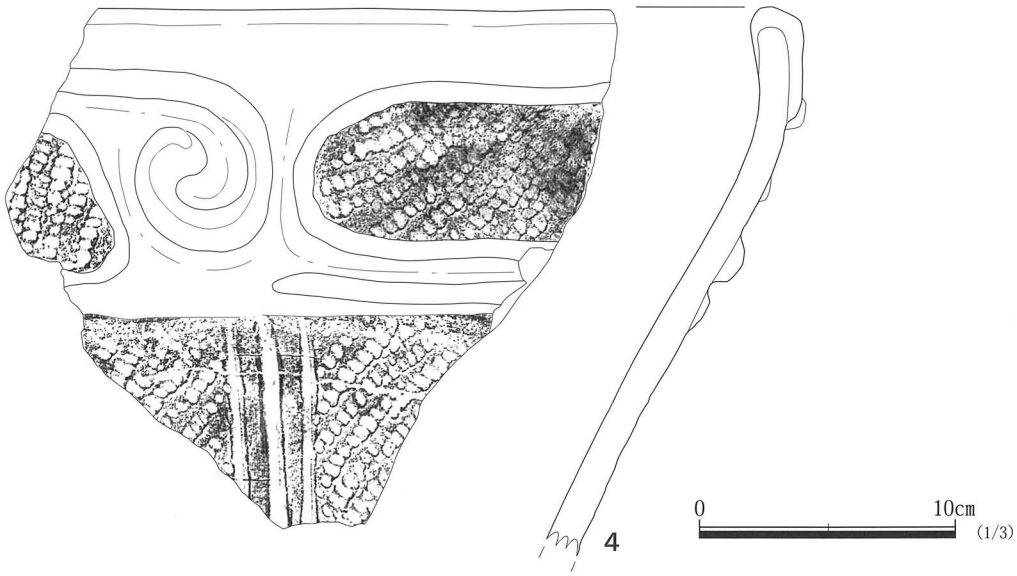




0 10cm (1/4)
(2)

0 10cm (1/3)
(3)

第 30 図　054SK 出土遺物 2



第 31 図　054SK 出土遺物 3

表 13　054SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	054SK	覆土	深鉢	〈523〉	676	112		口縁～底部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施される。区画内は沈線が施される。胴部は3本一組の沈線による懸垂文が施される。懸垂文間を磨り消し。地文縄文(RL追加条か)。	加曾利EⅡ式	
2	054SK	覆土	深鉢	〈484〉	(307)			口縁～胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施される。区画内縄文(単節RL縦位・横位)が施される。胴部3本一組懸垂文、懸垂文間磨り消し。地文縄文(単節LR縦位)。	加曾利EⅢ式	
3	054SK	覆土	深鉢	〈244〉	343	78		口縁部～底部	波状口縁。口縁部楕円形区画が施される。 区画内縄文(単節LR縦位)が施される。波頂部下に隆帯による渦巻文(右回り)。胴部沈線による3本一組の懸垂文を施し懸垂文間磨り消し。胴部に沈線による横位の弧状文を施す。地文縄文(単節LR縦位)。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	
4	054SK	覆土	深鉢		(204)			口縁～胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画。区画内は縄文(単節RL縦位)が施される。胴部は3本一組の沈線による懸垂文を施し懸垂文間磨り消し。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅡ式	胎土:金雲母多

058SK(第 32・33 図、表 14・15)

位置　A2 区南東部、AH-30、AH-31、AI-30、AI-31 グリッドに位置する。

重複関係　173SK の東壁を切る。

規模と平面形　開口部は径 1.52 mの円形、底面は径 1.56 mの円形で、深さは 0.86 mである。

壁　開口部に向い内側に弧を描いて傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

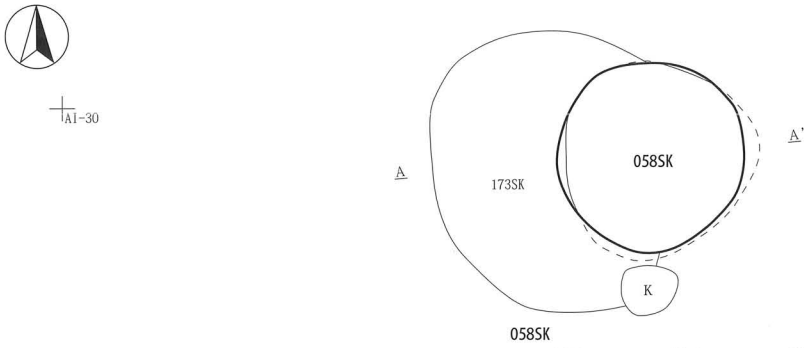
覆土　7 層に分層され、第 2 層は焼土を、第 4 層は炭化物を多量に含む。第 2 層からは焼土を多量に検出しており、焼土層が全体に拡がる点、被熱した土器片を検出する点から遺構内で火が燃やされたと推定される。また、第 6 層から第 7 層にかけて掘り込みが見られる点から、第 6 層が堆積した時点で掘り込みを行ない火が燃やされたと考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

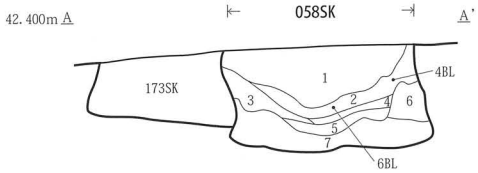
遺物　実測遺物は 4 点である。1 は、口縁部に楕円形の区画が施され、胴部の懸垂文間は縄文が磨り消される点などから加曾利ＥⅢ式の土器である。

3 は、012SK 出土遺物第 14 図 -2 と類似することなどから加曾利ＥⅡ式もしくはＥⅢ式と考えられる。

4 は多孔質安山岩製の磨石・敲石である。両面の大部分に磨痕を残し、中央部につぶれが認められる。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



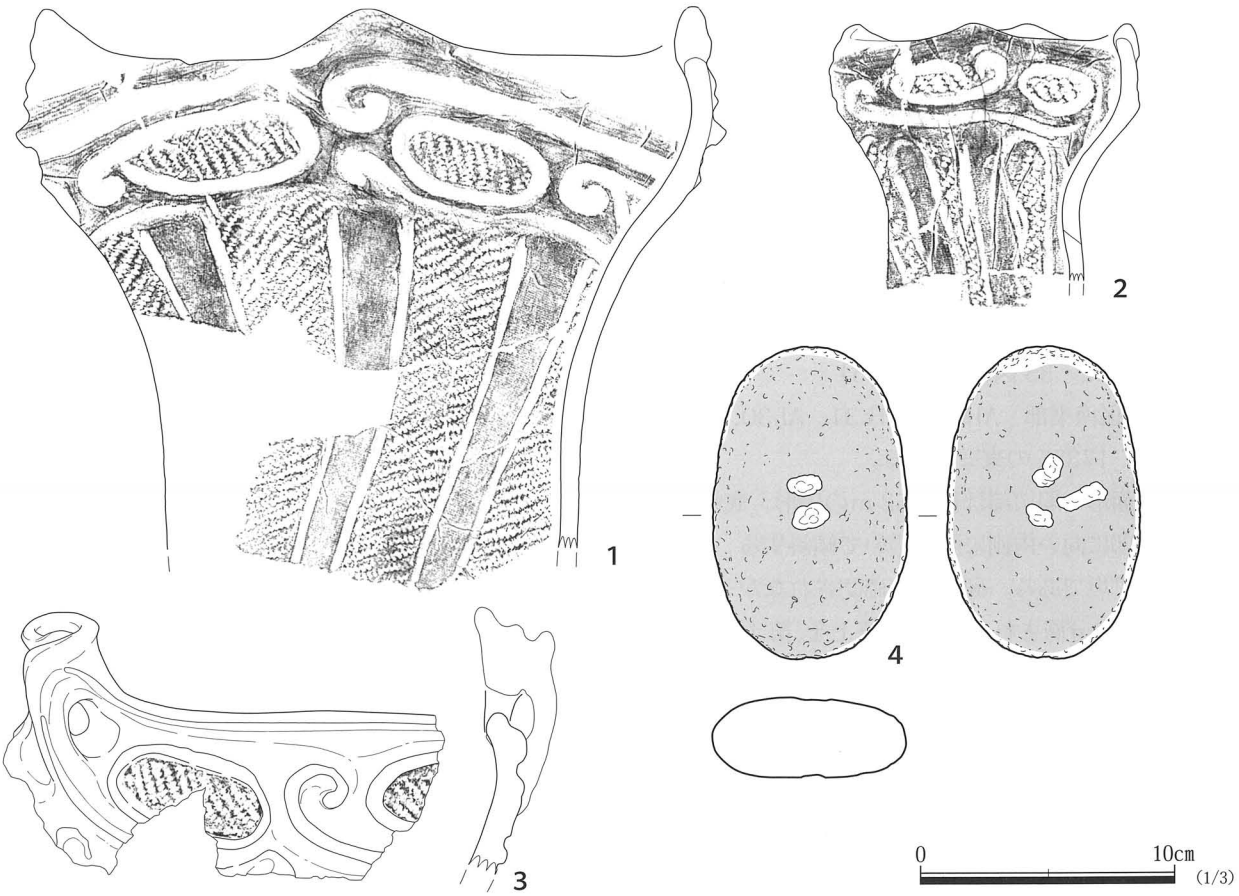


058SK

1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒中、炭化物微、白色粘土微量含む。締まりやや強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊多、炭化物多量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒少、焼土粒中、締まりあり/粘性弱
4　暗褐色土　ローム粒少、炭化物多、締まり弱/粘性弱
5　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、焼土粒・炭化物少、締まりあり/粘性弱
6　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物少量含む。締まりあり/粘性やや弱
7　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物微、鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり

0　2m　(1/60)

第 32 図　058SK 平面図・断面図



第 33 図　058SK 出土遺物

表 14　058SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	058SK	4BL	深鉢	〈260〉	(215)		〈280〉	口縁～胴部	波状口縁(4頂)。頂部隆帯による渦巻文。口縁部楕円形区画が施される。区画内縄文(単節RL横位)。胴部は2本一組の沈線による懸垂文を施し懸垂文間磨り消し。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅢ式	
2	058SK	6BL	深鉢	122	(102)			口縁部～胴部	波状口縁(4頂)。口縁部楕円形区画が施される。区画内縄文(単節RL横位)。胴部は2本一組の沈線による懸垂文を施し懸垂文間磨り消し。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅢ式	
3	058SK	4BL	深鉢		106			口縁部	波状口縁(頂4か)。波頂部直下眼鏡状把手。頂部隆帯渦巻文。口縁部楕円形区画が施される。区画内縄文(単節RL横位)が施される。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	

表 15　058SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
4	058SK	2層	磨石・敲石	124	76	32	413	多孔質安山岩	○	100%	両面磨痕　両面中央に微細なつぶれ	
	058SK	4BL	石皿?	105	84	41	522	ガラス質黒色安山岩	○	100%	表面風化	
	058SK	覆土	剥片	45	32	8	7	チャート		100%		
	058SK	覆土	剥片	30	20	2	1	粘板岩		100%		
	058SK	覆土	磨石・敲石	(71)	(83)	(46)	(381)	安山岩		50%	両面に磨痕　両面中央に敲打痕	

064SK(第 34 ～ 36 図、表 16・17)

位置　A2 区南東部、AH-30 グリッドに位置する。

重複関係　遺構上部中央は攪乱を受ける。323SK の上部を切る。323SK と当初同一遺構と捉えたが、覆土の混入物の違いや 064SK の覆土第 4 ・ 3 層がほぼ水平に堆積することなどから別遺構とした。

規模と平面形　開口部は径 2.02 ～ 2.60 mの円形、底面は 2.20 m～ 2.50 mの円形で、深さは 0.67 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

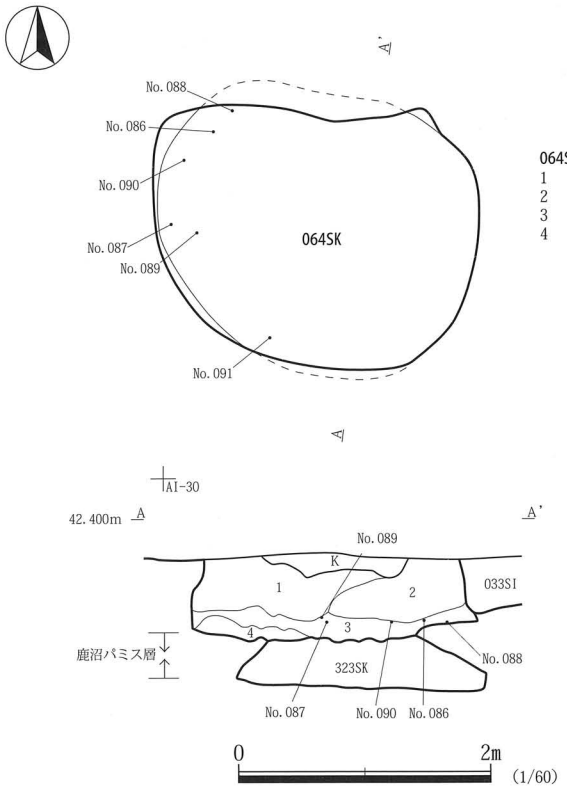
覆土　4 層に分層された。第 1・2 層は交互に堆積している。第 3・4 層は黒褐色土を呈し、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第 3・4 層からは逆位に設置された遺物が多く出土し、意図的に埋設したと考えられる。第 1 ～ 4 層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は 7 点である。遺構北西壁際の底面直上からは遺物が多く出土した。1 ～ 6 は第 3・4 層から逆位で出土した。

1 は、口縁部に波文が施される。波文は沈線により∧形に連続的に描かれる。

5 は、口縁部に隆帯によるクランク文が施され、胴部は沈線による文様が描かれる。沈線は、半截竹管状の施文具によって施文されたと推定される。口縁部クランク文は 065SK 出土遺物 3 や 9・10 と類似し、体部は文様や施文具が 065SK 出土遺物 1・2 と類似する。

6 はチャート製の掻器である。分厚な横長剥片の上部を素材とする。右側縁に折断加工を施し、左側縁は背腹両面に調整剥離が認められる。刃部は下端の折断面を打面とした腹面側からの調整剥離によって作出され、刃縁



064SK
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物中量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり
4　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

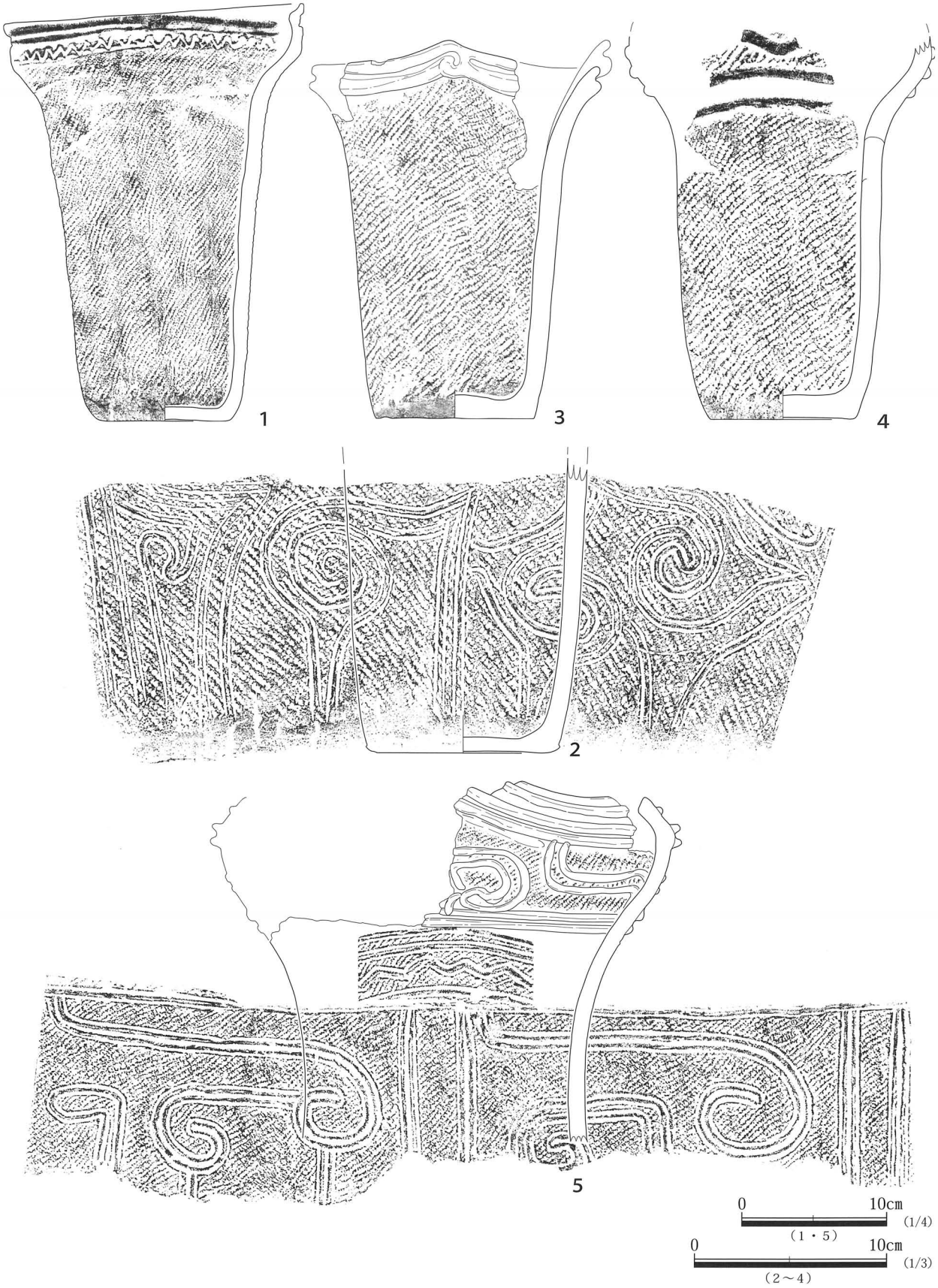
第 34 図　064SK 平面図・断面図

表 16　064SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様。器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	064SK	No. 088	深鉢	209	294	86		口縁～底部	口縁部は、沈線による波文が施される。口唇部無文帯は外へ開く。地文縄文（単節RL縦位）。		
2	064SK	No. 087	深鉢	〔156〕	90	(127)		胴部～底部	胴部は沈線による懸垂文、渦巻等が描かれる。	加曾利EⅠ式	欠損部は丁寧に打ち欠かれている。
3	064SK	No. 090-1	深鉢	〈147〉	200	83		口縁～底部	波状口縁（頂数不明）。口縁部隆帯が貼付られる。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
4	064SK	No. 089	深鉢		(203)	76	〈163〉	口縁下半～底部	口縁下半は隆帯貼付による横位文、波文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
5	064SK	No. 086	深鉢				〈315〉	口縁～胴部	口縁部把手。口縁部は隆帯によるクランク文、渦巻が施される。頸部は沈線による横位文、波文が描かれる。胴部は沈線による懸垂文、渦巻等が描かれる。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	

表 17　064SK 出土　石器観察表

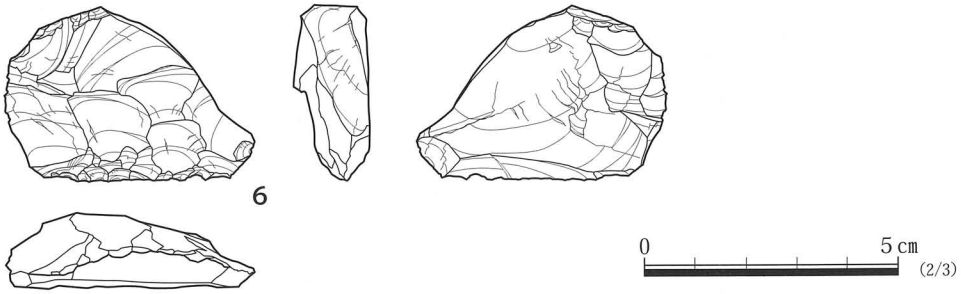
番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
6	064SK	覆土	掻器	35	49	15	27	チャート		100%		
	064SK	覆土	二次加工を有する剥片	58	48	16	42	チャート		100%	上端部に腹面から調整剥離	
	064SK	覆土	二次加工を有する剥片	51	42	15	29	チャート		100%	左側縁に腹面から調整剥離	



第 35 図　064SK 出土遺物 1

はわずかに屈曲する。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 36 図　064SK 出土遺物 2

065SK（第 37 ～ 44 図、表 18・19）

位置　A2 区南東部、AG-29、AH-29 グリッドに位置する。

重複関係　328SK 東側を、331SK 南側を切る。033SI に遺構東壁上部を切られる。

規模と平面形　開口部は長径 1.98 m、短径 1.72 mの楕円形、底面は径 3.06 ～ 3.21 mの円形で、深さは 1.52 mである。

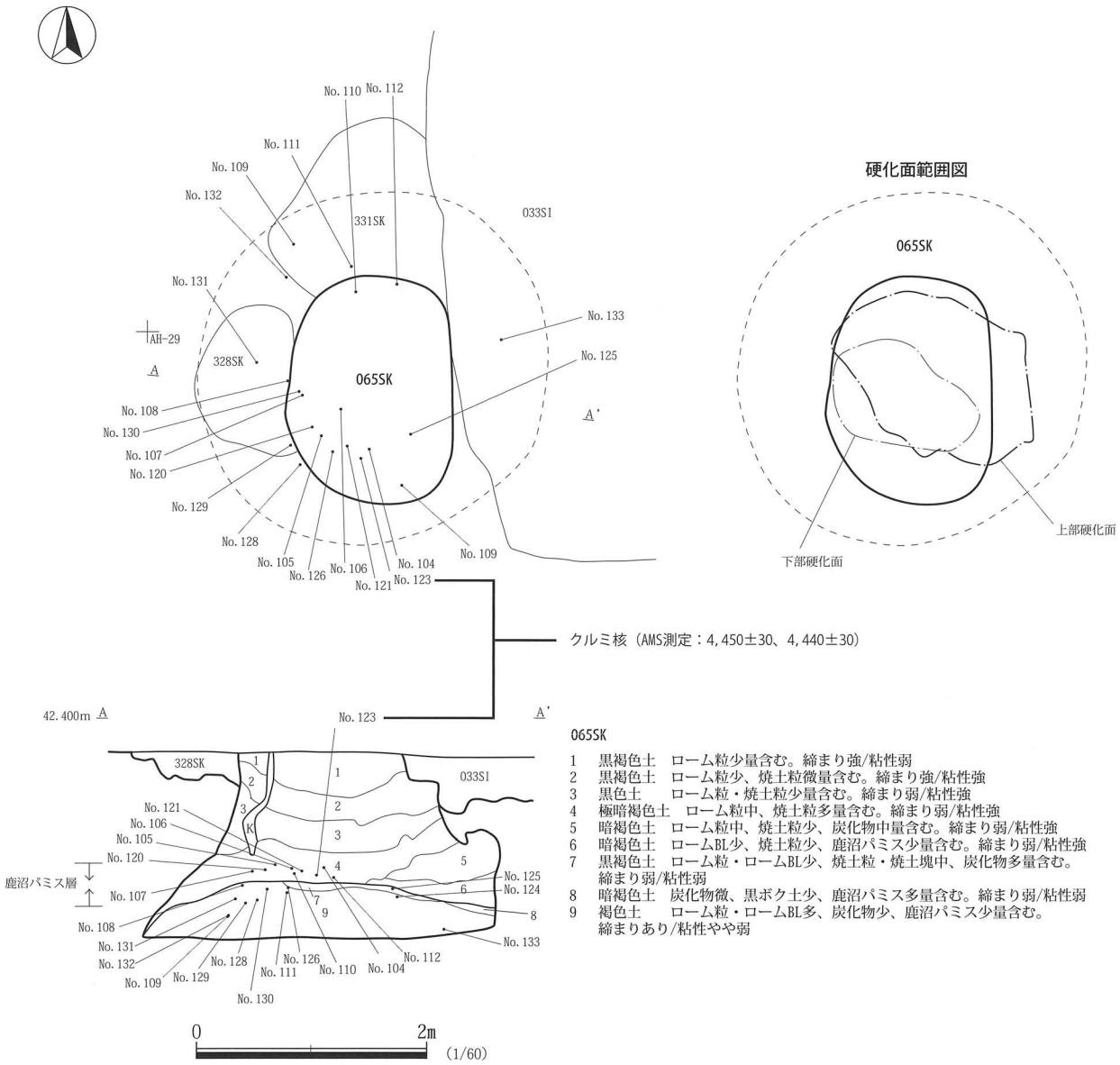
壁　開口部に向い傾斜し、断面形はフラスコ状を呈する。東側壁面は、上部を奈良・平安時代の住居跡に切られ、その影響で不定形を呈すと推定される。

底　底部からは硬化面を 2 面検出した。2 面の硬化面は平面的にはほぼ同じ箇所に存在し、開口部の直下に位置する。規模は長径 1.76 m、短径 1.64 mである。上部の硬化面は遺構中央部にかけ盛り上がり、ローム土を主体とする。硬化面上部からは土器が遺構西壁へ押し流されるように個体がまとまって出土した。上部の硬化面より 0.20 ～ 0.50 m下位の地山直上からは 2 枚目の硬化面を検出した。下部の硬化面はほぼ平坦であり、遺物は 1 個体を検出した。

覆土　9 層に分層される。第 1 ～ 3 層は、遺構壁面の括れ部分の上に水平に堆積する。第 4 層は、極暗褐色土を呈し焼土を多く含む。遺構底面が袋状に広がる部分に入り込んで堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。遺物を特に多く含む遺構西壁際では覆土の締まりが弱かった。第 5・6 層は、東壁の袋状に広がる分部に堆積する。第 7・8・9 層は、遺構中心部に向かい盛り上がり上面が硬化する。第 8 層は、第 7 層に比べ鹿沼パミスを多量に含む。壁面からの崩落土の可能性が高い。第 9 層は褐色土を呈しローム粒・ロームブロックを主体とし混入物は少ない。第 9 層下部からも硬化面を検出した。第 1 ～ 9 層は堆積状況、混入物を均一に含む点などから人為堆積と考えられる。上部硬化面は鹿沼パミス層層中に位置し、下部の硬化面は鹿沼パミス層下層のローム層に位置する。

遺物　実測遺物は 22 点である。1 ～ 7、9 ～ 12、15 ～ 18　、21 は、硬化面の中央が高いため断面図上のドットの位置は異なるが第 7・8・9 層上部の硬化面直上から出土した。

1 は、口縁部に隆帯による把手、突帯、渦巻が施される。一部欠損するが、口縁部の把手・隆帯等は 6 単位施されると推定される。胴部には、半截竹管状工具による沈線が描かれる。



065SK

1　黒褐色土　ローム粒少量含む。締まり強/粘性弱
2　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒微量含む。締まり強/粘性強
3　黒色土　ローム粒・焼土粒少量含む。締まり弱/粘性強
4　極暗褐色土　ローム粒中、焼土粒多量含む。締まり弱/粘性強
5　暗褐色土　ローム粒中、焼土粒少、炭化物中量含む。締まり弱/粘性強
6　暗褐色土　ロームBL少、焼土粒少、鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性強
7　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊中、炭化物多量含む。締まり弱/粘性弱
8　暗褐色土　炭化物微、黒ボク土少、鹿沼パミス多量含む。締まり弱/粘性弱
9　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物少、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性やや弱

第 37 図　065SK 平面図・断面図

2 は、頸部を水平に欠いており意図的に欠いたと考えられる。沈線は、半截竹管状工具による。

5 は、口縁部は沈線が施され、体部の地文は撚糸である。頸部には、沈線が 6 条施される。

6 は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中峠式土器である。器形・文様構成などは 064SK 出土遺物 1 と類似する。しかし、口縁部の施文方法、縄目など細部は異なる。

7 は、口縁上端部に隆帯による渦巻が施され、4 単位の波状口縁である。胴部は、沈線による幾何学的な文様が施される。胎土は赤みを帯び明褐色～赤褐色を呈する。

11、12 は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中峠式土器である。12 の口縁部の刺突は縄文を施文後に施されている。

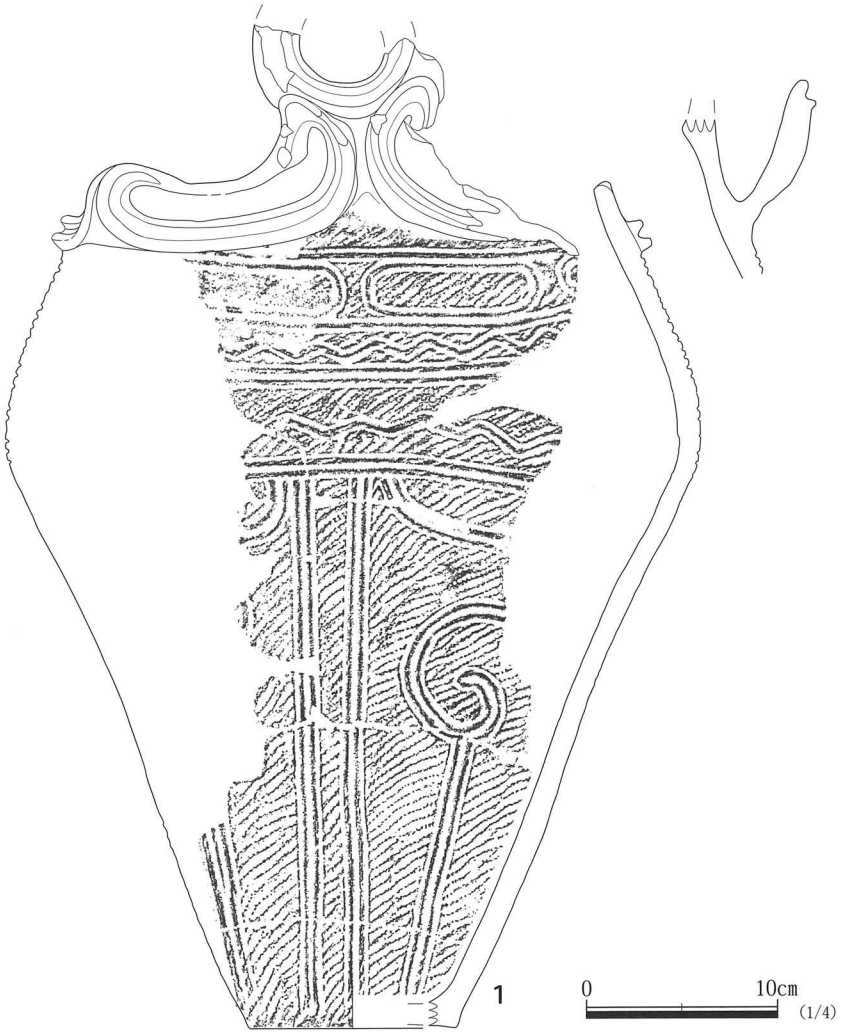
14 は、頸部より上端を欠いている。ほぼ水平に欠いており意図的に欠いたと考えられえる。

15 は、上部硬化面に横たわるように出土した。器内の土壌を水洗選別したところ炭化したオニクルミ核片を検出した。オニクルミ核片は AMS 測定を行なったところ、測定結果が 4,450 ± 30、4,440 ± 30 と出た。

16は、口縁部の1箇所把手が付く。把手には隆帯により波文などが描かれる。口縁部は2組の隆帯によるクランク文が施される。

17は、遺構東端硬化面直上より逆位で出土した。器内は、土壌等は入り込んでおらず中空であった。意図的に逆位に埋設したものと推定される。口縁部は、ほぼ水平に丁寧に欠いており、意図的に欠いている。胴部上端には横位の沈線が、横位の沈線下部からは縦位の波文が施される。

20は蛇紋岩製の磨製石斧である。平面形は短冊形を呈する。刃部は片刃である。側面には裏面側からの調整



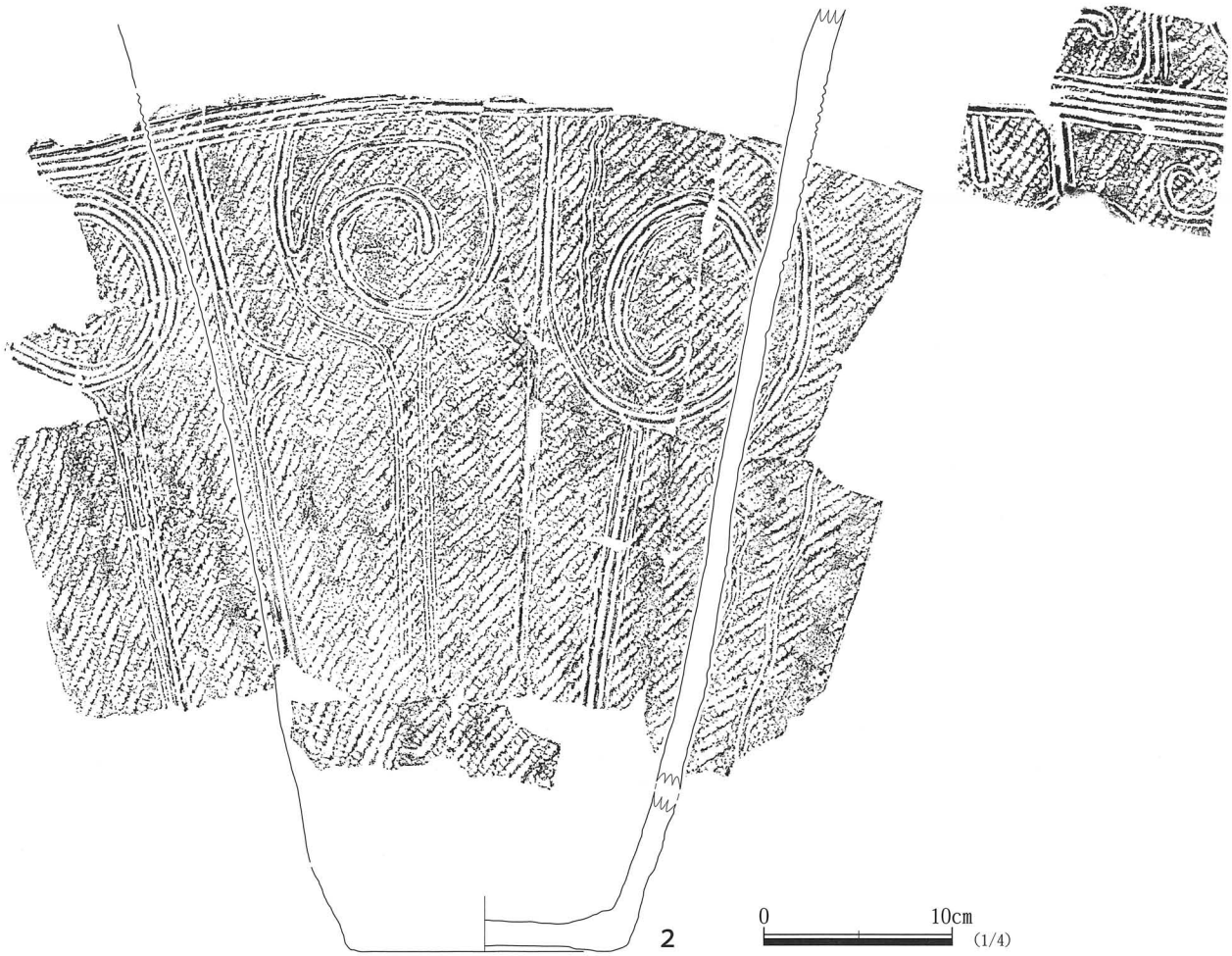
第38図　065SK出土遺物1

剥離痕が残る。刃縁には石器長軸に平行する擦痕と微細な刃こぼれが認められる。

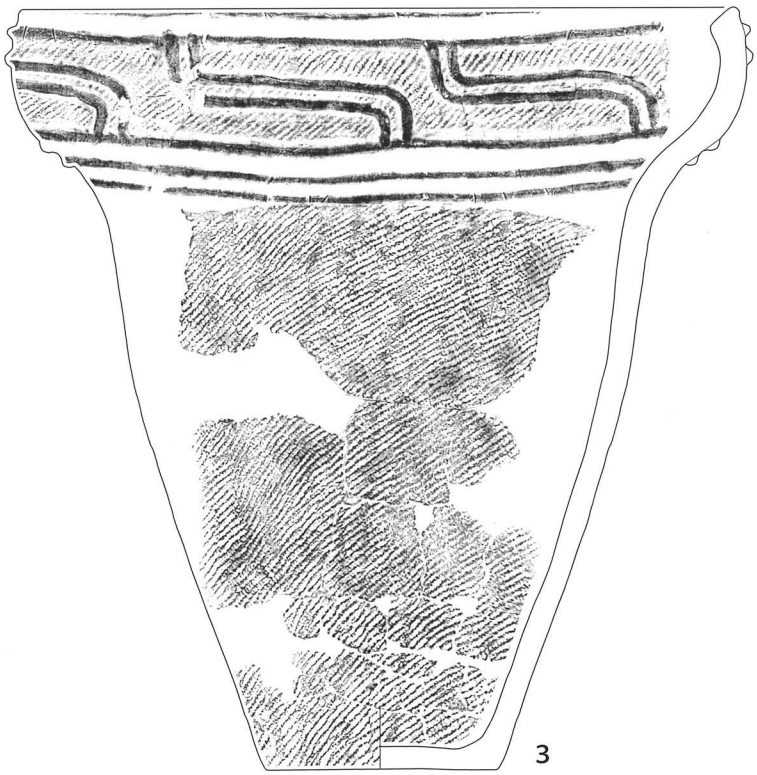
21 は砂岩製の磨石・敲石である。裏面中央部の平坦面に磨痕が残る。下端部には敲打痕が認められる。石器全体に被熱によると思われる器面の荒れが確認できる。

22 は安山岩製の磨石・敲石である。平面形は概ね円形を呈する。表裏面に磨痕が認められる。表面、下端部および右側面に敲打痕を残し、その器面は剥落している。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

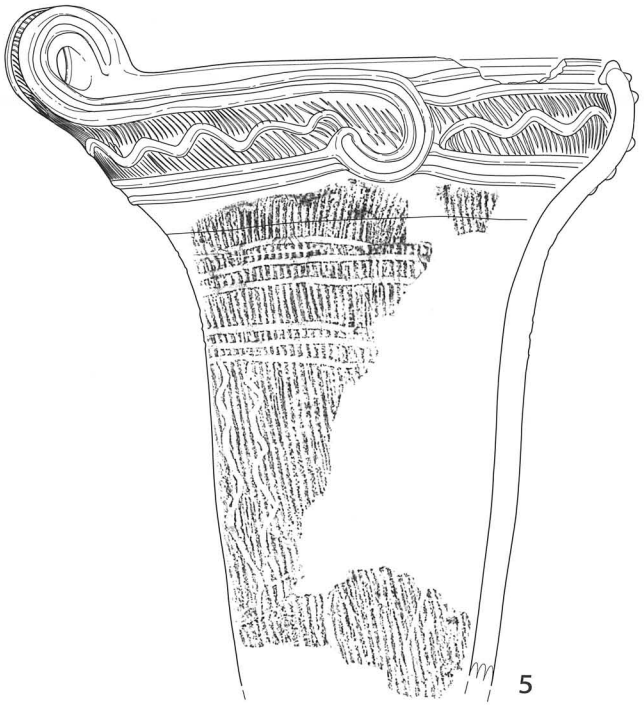


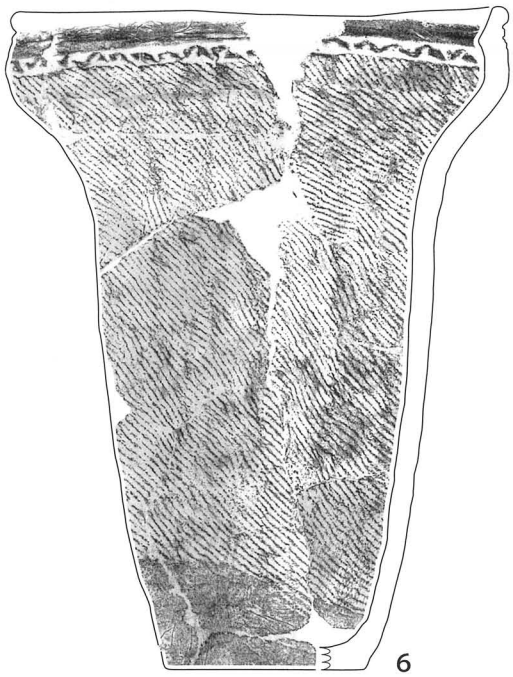
第 39 図　065SK 出土遺物 2

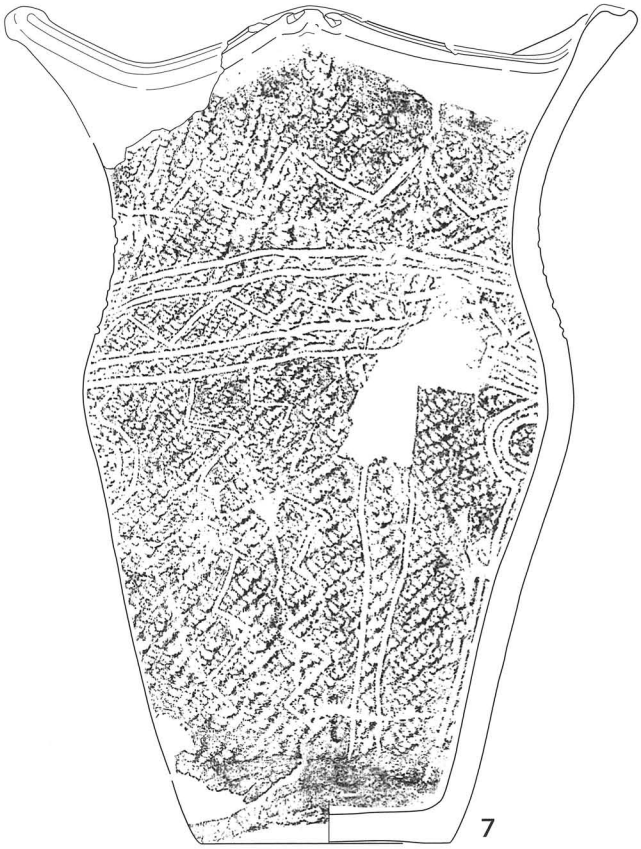


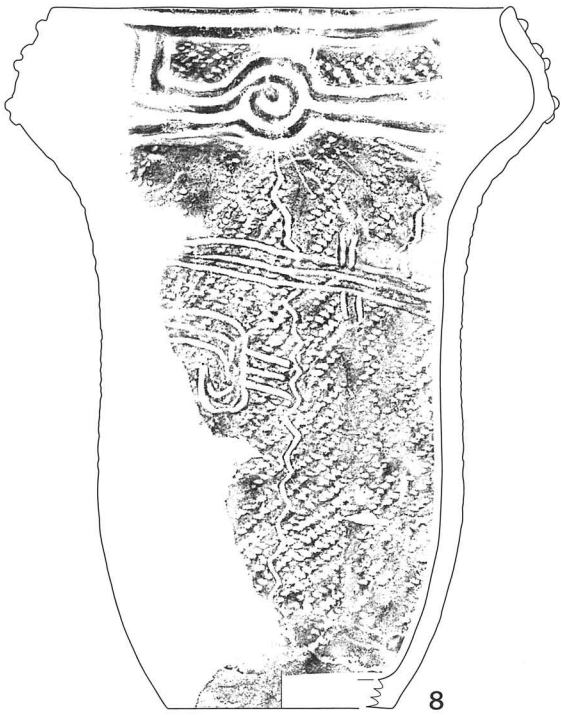
0　10cm
(1/4)

第 40 図　065SK 出土遺物 3



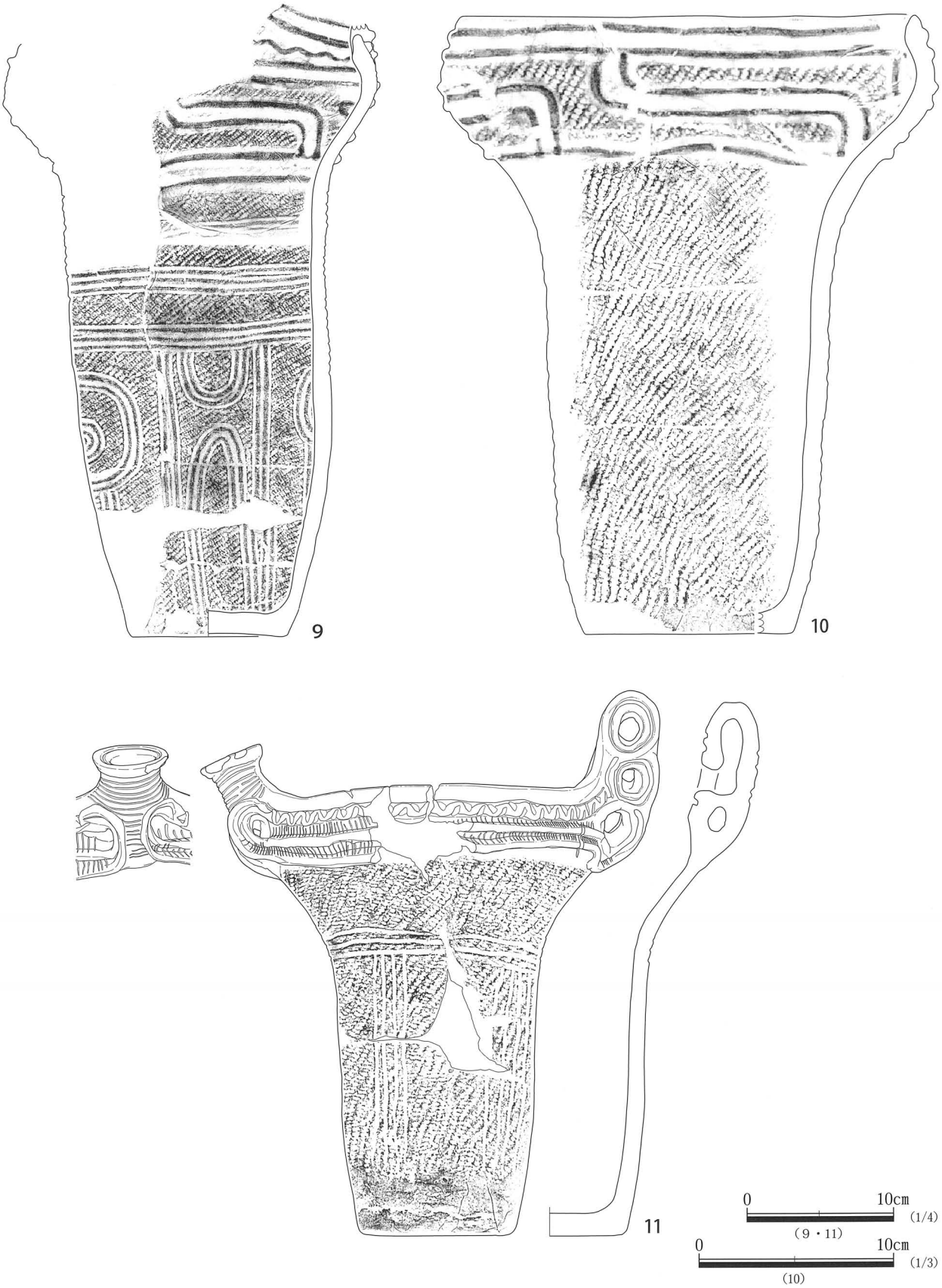




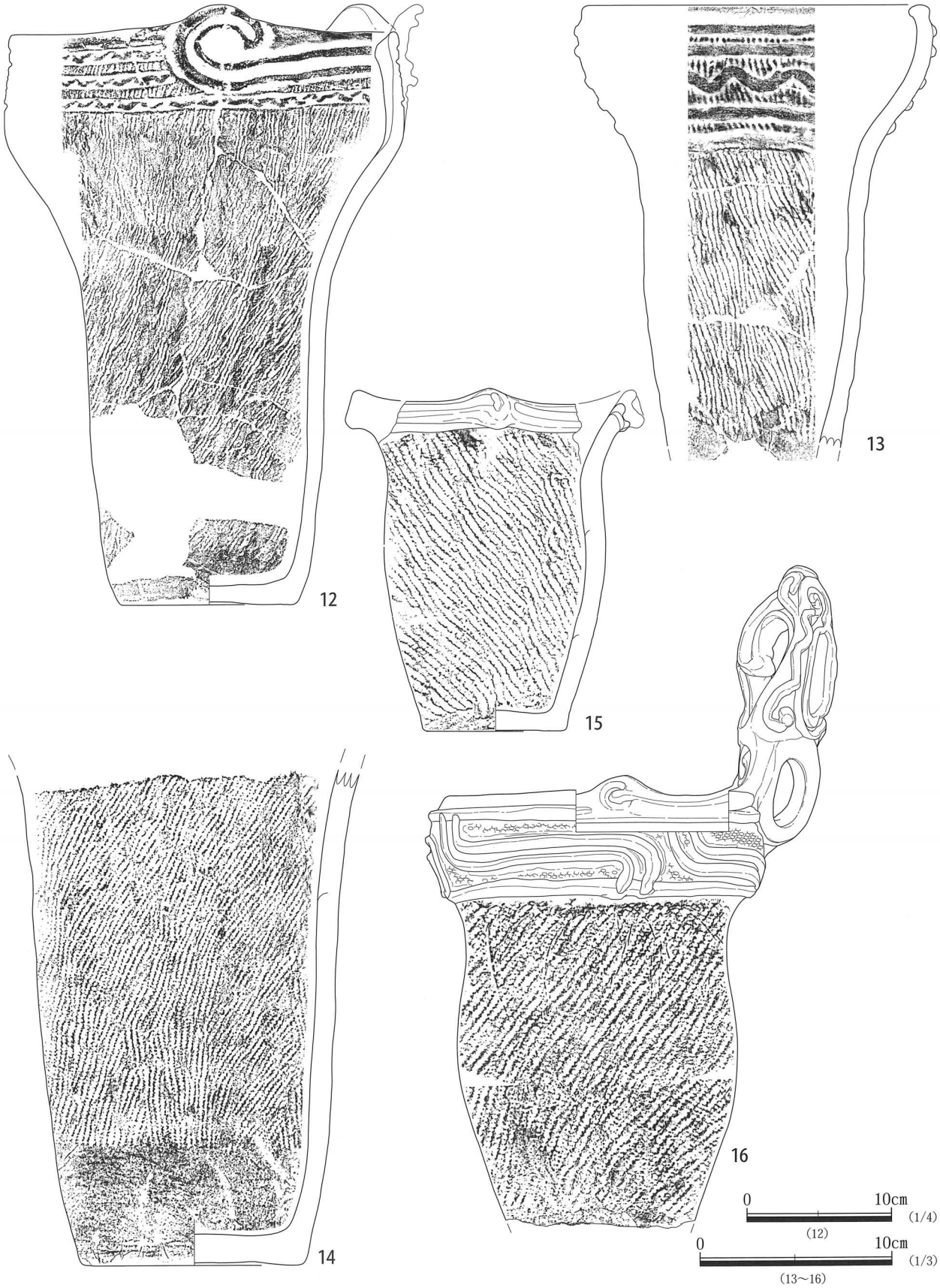


0 10cm (1/4)
(5・6・8)
0 10cm (1/3)
(7)

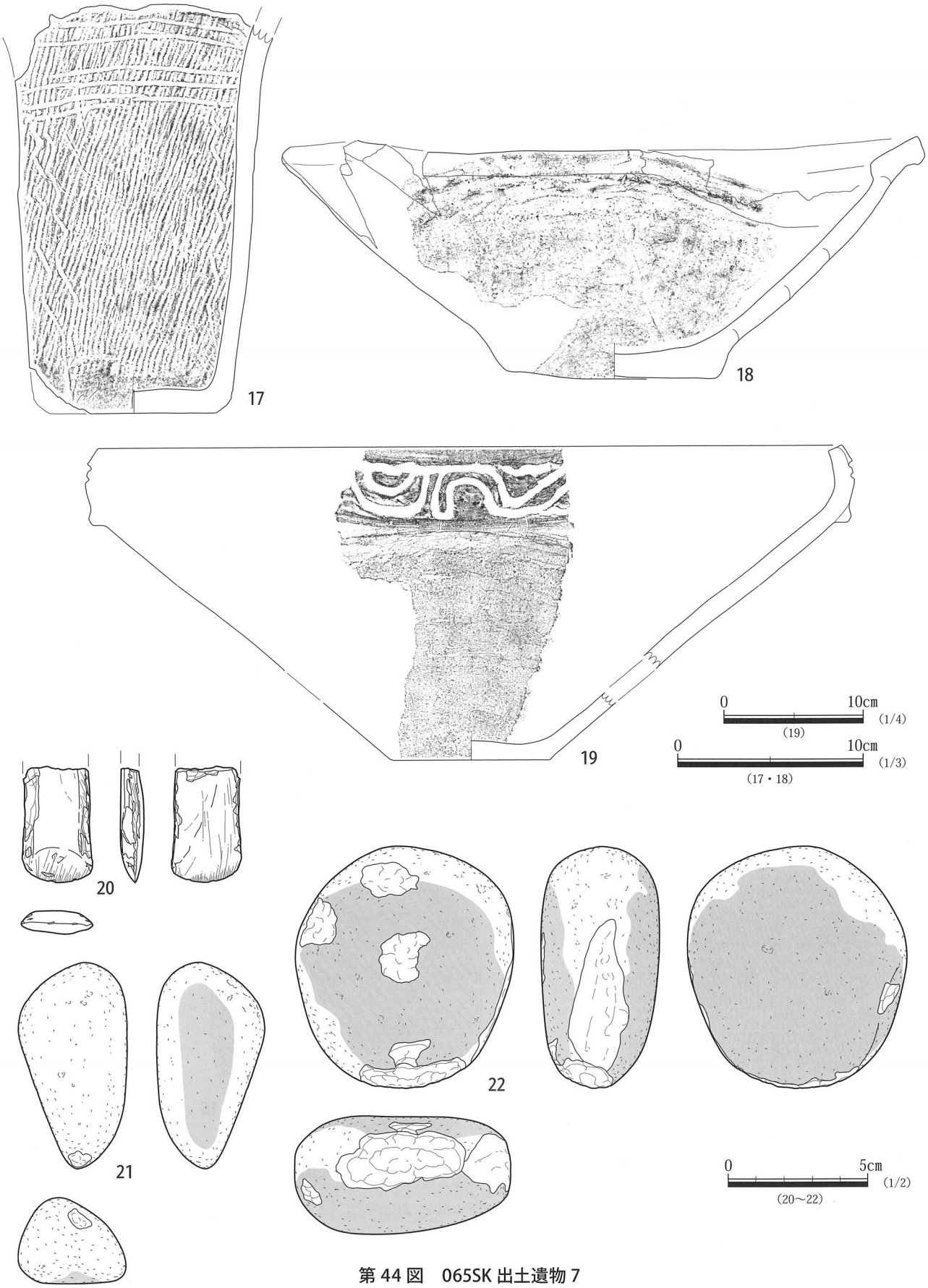
第 41 図　065SK 出土遺物 4



第 42 図　065SK 出土遺物 5



第 43 図　065SK 出土遺物 6



第 44 図　065SK 出土遺物 7

表 18　065SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	065SK	No. 109	深鉢	(533)	(110)	〈362〉		口縁～底部	口唇部無文。口縁部隆帯による把手、突帯、渦巻。口縁部眼鏡状把手。頸部から胴部にかけて沈線による区画、波文、横位文、懸垂文、渦巻等が施される。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅠ式	
2	065SK	No. 111	深鉢		(510)	150		胴部～底部	胴部に沈線による懸垂文、渦巻等が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
3	065SK	NO. 108-1	深鉢	〈370〉	(405)	120		口縁～底部	口縁部は隆帯によるクランク文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
4	065SK	No. 121	深鉢	—	〈430〉	126		頸部～底部	頸部は隆帯が貼り付けられ、隆帯中央には凹みが施される。頸部上に一部キザミが施される。胴部はやや膨み条線が施される。	不明	
5	065SK	No. 129	深鉢	330	(361)			口縁～胴部	口唇部無文帯。口縁部把手1箇所。口縁部は沈線が施され、隆帯による、横位文、波文、渦巻が施される。頸部から胴部上半に沈線による横位文が6本施される。胴部上半の横位文下より2本一組の沈線による縦位波文が施される。地文（撚糸文）。	加曾利EⅠ式	
6	065SK	No. 120	深鉢	257	352	〈105〉	264	口縁～底部	口縁部隆帯貼付、交互刺突文。地文縄文（単節LR縦位）。	中峠式	
7	065SK	No. 104	深鉢	〈250〉	(331)	〈98〉	98	口縁～底部	波状口縁（4頂）。口唇部は沈線による渦巻が施される。頸部～胴部にかけて沈線による波文、懸垂文、渦巻が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	大木8b式	
8	065SK	1BL	深鉢	〈240〉	372	〈118〉	〈290〉	口縁～底部	口縁部は隆帯貼付による渦巻等が施される。口縁部隆帯下から胴部に沈線による懸垂文等が施される。頸部に4本一組の沈線による横位文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
9	065SK	No. 126 No. 127 No. 128	深鉢	237	429	105	261	口縁～底部	口縁部は隆帯貼付によるクランク文、渦巻等が施される。胴部に沈線による懸垂文、弧文、渦巻が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
10	065SK	No. 112	深鉢	〈234〉	325	〈108〉	〈260〉	口縁～底部	口唇部無文帯（縄文磨り消しか）。口縁部は隆帯によるクランク文、横位文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
11	065SK	No. 107	深鉢					口縁～底部	口縁部把手2箇所。口縁部交互刺突文。口縁部隆帯脇に連続した沈線が施される。頸部に沈線が施される。胴部に4本一組の沈線にによる懸垂文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	中峠式	
12	065SK	No. 105	深鉢	〈207〉	425	120	279	口縁～底部	波状口縁（2頂・非対称）。波頂部は隆帯による渦巻が施される。口縁部は交互刺突文が1段～3段施される。地文縄文（無節LR横位もしくは斜位）。	中峠式	
13	065SK	一括	深鉢	180	(235)			口縁～胴部	口縁部から頸部にかけて、隆帯による横位文、波文が施される。地文縄文（無節LR縦位）。	加曾利EⅠ式	
14	065SK	No. 133	深鉢	(174)	(259)	117		胴部～底部	口縁から頸部を欠損する。地文縄文（RL縦位）。	加曾利EⅠ式	欠損部はきれいに欠いており、人為的に欠いたと考えられる。内面のミガキが丁寧に行なわれている。遺構底面から逆位で出土した。
15	065SK	No. 123	深鉢	〈157〉	(181)	74		口縁～底部	波状口縁（頂は3～4か）。口縁部に隆帯貼付。地文縄文（単節LR縦位）。底部網代痕有り。	加曾利EⅠ式	器内の土を水洗選別したところ炭化したクルミを検出した。
16	065SK	No. 128	深鉢	156	(351)			口縁～底部	口縁部把手1箇所。口縁部隆帯によるクランク文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
17	065SK	No. 106	深鉢	〔152〕	(225)	(95)		胴部～底部	胴部上半部に横位の沈線が施される。胴部横位の沈線下から、2本一組の沈線による縦位の波文が施される。地文（撚糸文）。	加曾利EⅠ式	
18	065SK	No. 110	浅鉢	〈348〉	133	110		口縁～底部	無文。	加曾利EⅠ式	
19	065SK	一括	浅鉢	〈560〉	〈230〉	116		口縁～底部	口縁部、隆帯貼付。口縁部沈線によるモチーフが施される。胴部無文。		

表 19　065SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	065SK	3層	微小剥離を有する剥片	(23)	(12)	(5)	(1)	チャート		10%	縁辺に微小剥離	
	065SK	3層	剥片	(28)	(25)	(10)	(7)	石英	○	30%	上部欠損	
	065SK	3層	剥片	(31)	(22)	(11)	(6)	石英		20%		
	065SK	1BL	磨石	(111)	(94)	47	(660)	安山岩	○	70%	両面・片側面に磨痕　被熱	
22	065SK	No. 104	磨石・敲石	89	79	43	441	安山岩	○	100%	両面磨痕　片面・下端部・片側面に敲打痕	
20	065SK	覆土	磨製石斧	(43)	26	9	(18)	蛇紋岩		70%	短冊形　片刃　刃縁に微小剥離　基部欠損	
21	065SK	覆土	磨石・敲石	76	40	32	129	砂岩		100%	片面磨痕　下端部に敲打痕　被熱	
	065SK	覆土	磨石	65	48	46	204	頁岩		100%	全面に磨痕	
	065SK	覆土	敲石	(88)	(52)	(44)	(302)	安山岩	○	40%	端部に微細なつぶれ	
	065SK	覆土	剥片	(90)	(75)	(14)	(77)	粘板岩	○	40%	上部欠損	
	065SK	覆土	剥片	68	26	7	(12)	粘板岩		80%	上部欠損	
	065SK	覆土	微小剥離を有する剥片	48	31	7	12	粘板岩	○	100%	右側縁に微小剥離	
	065SK	覆土	不明	80	61	25	111	砂岩		不明	器面の一部に磨痕	

078SK（第 45・46 図、表 20）

位置　A 2 区中央部、AC-26、AC-27、AD-26、AD-27 グリッドに位置する。

規模と平面形　開口部は長径 1.80 m、短径 1.66 mの楕円形、底面は径 2.20 mの円形で、深さは 0.74 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底　平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット　遺構南側底面からはピット 1 基を検出した。P1 は、径 0.38 mの円形で、深さ 0.51 mである。

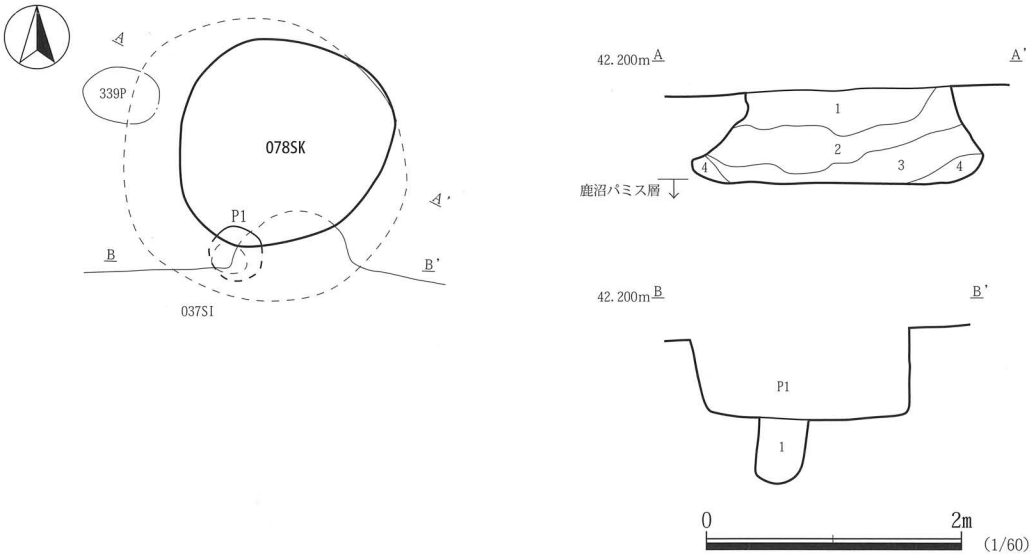
覆土　4 層に分層された。第 3・4 層は遺構底面袋状に広がる部分に南東から北西へ傾斜して堆積する。第 1・2 層も同様に傾斜して堆積する。第 1 ～ 4 層は、ローム粒、ロームブロックを均一に含むことなどから、人為堆積と考えられる。焼土･炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は 4 点である。

1 は、口縁部に交互刺突文が施されることなどからいわゆる中峠式土器と推定される。

2 は、口縁部に隆帯によるクランク文が施される。4 は、口縁部から底部まで、櫛状工具による沈線で、縦位の波文が施される。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



078SK
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物少量含む。
　締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。
　締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・炭化物・鹿沼パミス
　微量含む。締まり強/粘性強
4　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、鹿沼パミス少量含む。
　締まり強/粘性やや弱

P1
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊・炭化物
　微量含む。締まりあり/粘性あり

AE-27

第 45 図　078SK 平面図・断面図

表 20　078SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様。器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	078SK	覆土	浅鉢	〈372〉	226	〈100〉		口縁～底部	口縁部無文帯。口縁部は交互刺突文が施される。口縁部下は沈線による楕円形、渦巻が描かれる。胴部無文。	中峠式	
2	078SK	覆土	深鉢	〈266〉				口縁～胴部	波状口縁(頂は1つのみ残る)。口唇部無文。波頂部は渦巻、口縁部は隆帯によるクランク文が施される。頸部隆帯貼付。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅠ式	
3	078SK	覆土	深鉢	〈240〉	(189)			口縁	波状口縁(3頂)。頂部に孔を有する。地文縄文(単節LR)。	阿玉台Ⅳ式	
4	078SK	覆土	深鉢	208	301	124	233	口縁～底部	口縁部から底部にかけ沈線による縦位の波文が描かれる。		

第 46 図　078SK 出土遺物

095SK（第 47・48 図、表 21）

位置　A2 区中央南部、AC-24、AC-25 グリッドに位置する。

重複関係　039SI に南壁を切られる。

規模と平面形　開口部は長径 2.22 m、短径 1.85 mの楕円形、底面は長径 2.32 m、短径 2.09 mの楕円形で、深さは 0.32 ～ 0.40 mである。

壁　開口部に向い内側に傾斜し、断面形は袋状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

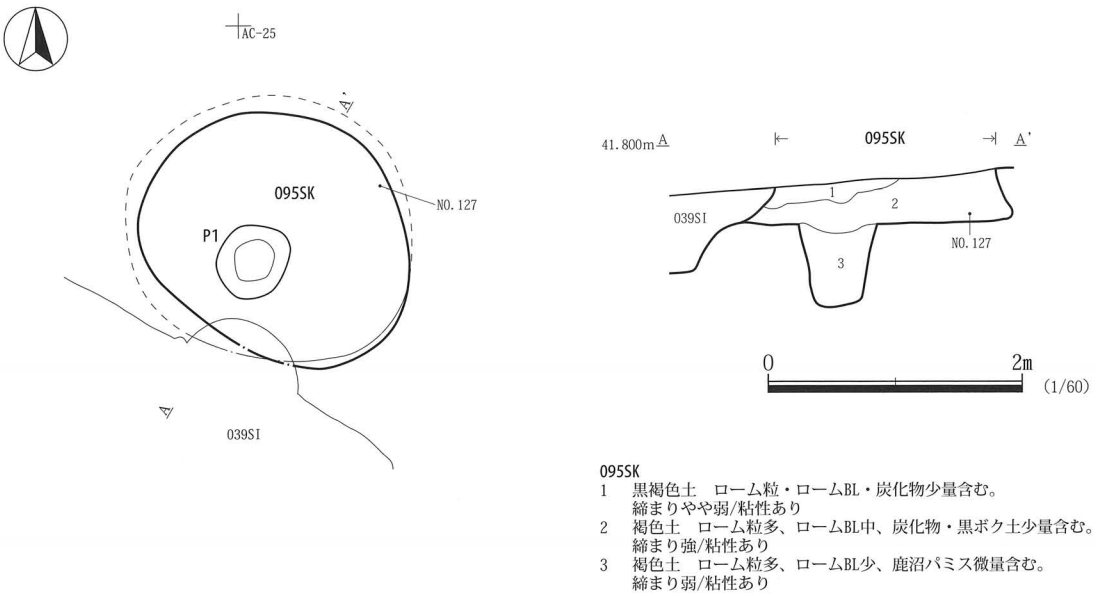
ピット　底面中央部からはピット 1 基を検出した。P1 は、径 0.52 ～ 0.64 mの円形で、深さ 0.57 mである。

覆土　3 層に分層された。第 3 層は P1 の覆土である。ローム・炭化物を均一に含み、039SI に南東部は切られるが、初期流入土は見られず、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面北側からは深鉢（No.127）が出土した。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は 2 点である。

1 は、遺構底面北側から出土した。胎土に金雲母を多く含む。2 は、ピット内から出土した。胴部は半截竹管状工具による沈線が施される。口縁は欠いている。

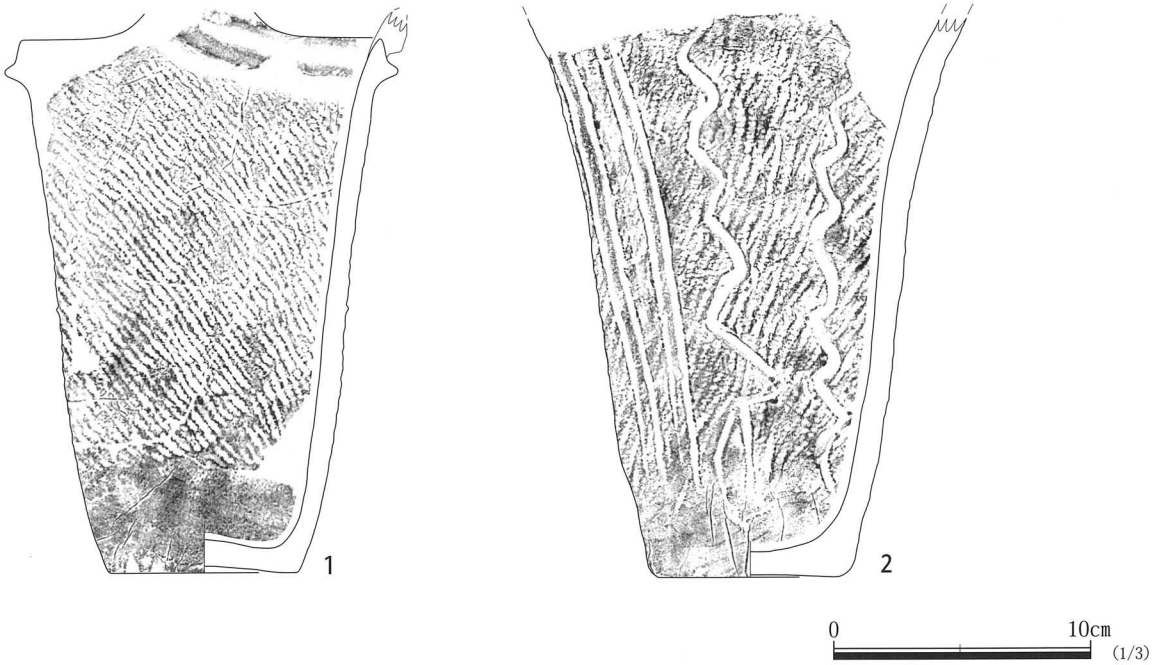
時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 47 図　095SK 平面図・断面図

表 21　095SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	095SK	NO.127	深鉢	〈140〉	(223)	74		胴部～底部	波状口縁か。口縁隆帯貼付。地文縄文（RL横位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。
2	095SK	1BL	深鉢		(223)	72		胴部～底部	胴部は沈線による懸垂文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曽利EⅠ式	



第 48 図　095SK 出土遺物

102SK（第 49・50 図、表 22）

位置　A2 区北西部、AA-25 グリッドに位置する。

重複関係　103SK に西壁を切られる。遺構上面は攪乱を受ける。

規模と平面形　開口部は径 1.77 ～ 1.83 mの円形、底面は長径 2.98 m、短径 2.56 mの楕円形で、深さは 0.70 mである。

壁　壁面は開口部に向かい内側に傾斜し、断面形はフラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　6 層に分層された。第 1 ～ 6 層はほぼ水平に堆積し、堆積状況などから人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層中に位置する。

遺物　実測遺物は 2 点である。

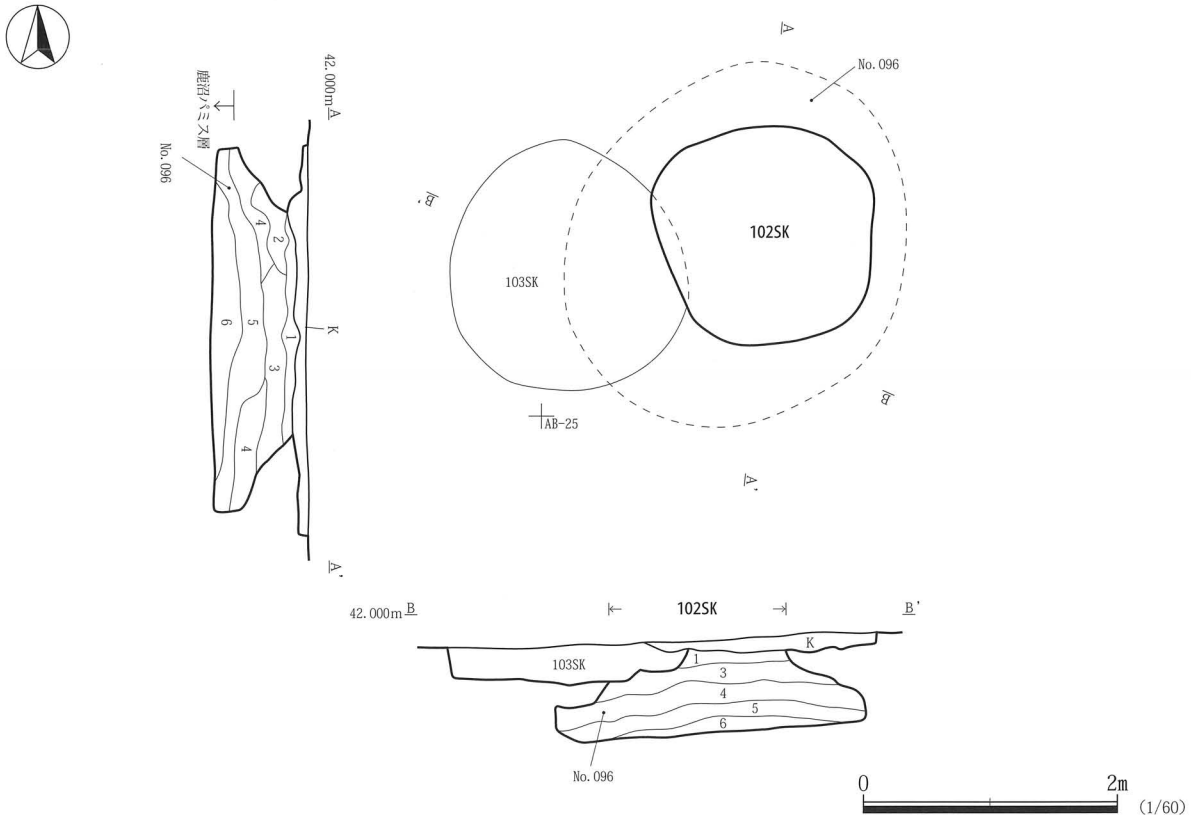
2 は、遺構底部面の北西隅から出土した。口縁部 5 箇所に隆帯による突起が施される。突起の下には、隆帯により横位の波文が施される。体部には、櫛状の工具による縦位の波文が施される。

図示はしていないが、いわゆる中峠式土器の頸部破片も 1 点出土している。

時期　2 や出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

表 22　102SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	102SK	覆土	深鉢	257	355	132		胴部	胴部沈線による渦巻。地文縄文（RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
2	102SK	NO.096	深鉢	225	〈360〉	100		口縁～底部	波状口縁（5頂）。口縁部は断面三角状の隆帯が波状に施される。縦位の条線が施される。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。



102SK
1　黒褐色土　ローム粒・炭化物少、焼土粒・鹿沼パミス微量含む。
　　締まりあり/粘性あり
2　褐色土　ローム粒多、ロームBL中、炭化物微、
　　黒ボク土・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・炭化物少、鹿沼パミス微量含む。
　　締まり強/粘性あり
4　黒褐色土　ローム粒・炭化物少量含む。締まり強/粘性あり
5　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。
　　締まりあり/粘性あり
6　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物・鹿沼パミス少量含む。
　　締まり強/粘性あり

第 49 図　102SK 平面図・断面図

105SK（第 51・52 図、表 23・24）

位置　A2 区北西部、Z-25、AA-25 グリッドに位置する。

重複関係　101SK に東壁を切られる。遺構中央一部に攪乱を受ける。

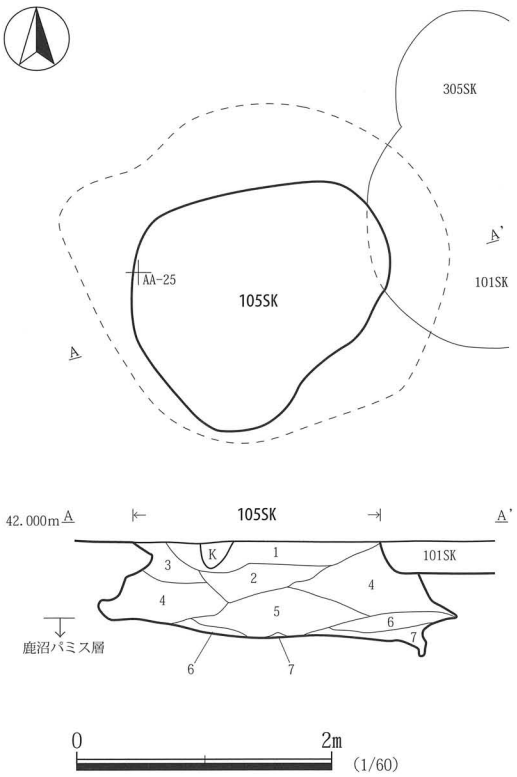
規模と平面形　残存する開口部は長径 1.92 m、短径 1.60 mの楕円形、底面は幅 2.61 ～ 2.77 mの不定形で、深さは 0.60 ～ 0.77 mである。

壁　開口部に向かい内側に傾斜し、断面形はフラスコ状を呈する。

底　やや東側へ傾斜し凹凸が見られる。硬化面は確認されなかった。

覆土　7 層に分層された。第 4 ・ 5 層は底面から括れ部分に大きな単位で堆積する。第 5 層を入れた後に第 4 層

第 50 図　102SK 出土遺物



105SK
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物少、鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり
2　褐色土　ローム粒多、ロームBL中、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まり強/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり
5　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物少、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性あり
6　暗褐色土　ローム粒多、炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性あり
7　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少、焼土粒・焼土塊・炭化物多、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

第51図　105SK平面図・断面図

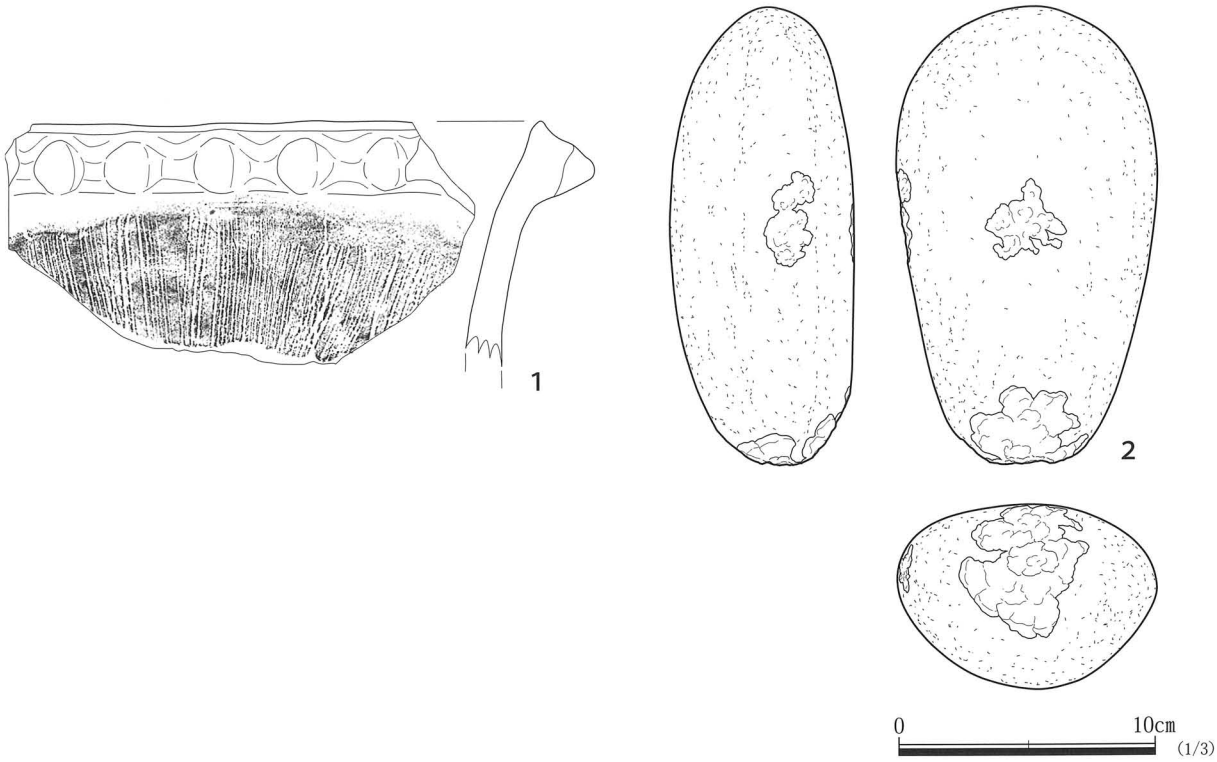
を袋状に広がる部分に入れたと推定される。第7・6層は、東壁の袋状に広がる部分に入り込んで堆積しており、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第1～3層は第4～7層と覆土が類似すること、第1～7層の堆積状況や、ローム・炭化物・焼土粒の含有状況から、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は2点である。

1は、口縁部に隆帯が貼付けられ、隆帯には指頭圧痕が施される。胴部は条線が施される。図示はしていないが、口縁部に交互刺突が施されるいわゆる中峠式土器の破片や、胴部に半截竹管状工具による沈線で横位文・波文が描かれる加曾利ＥⅠ式の土器の破片などが出土している。

2は安山岩製の敲石である。重量が2000ｇ以上の大形の製品である。表面の中央部、左側面の中央部および下端部に敲打痕が認められる。特に下端部の敲打痕は顕著で、器面の大きな剥落を伴っている。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 52 図　105SK 出土遺物

表 23　105SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	105SK	覆土	深鉢		(99)			口縁部	口縁部指頭圧痕。胴部条線。		

表 24　105SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	105SK	覆土	磨石・敲石	(66)	(104)	(39)	(387)	砂岩	○	50%	両面磨痕　両側面・下端部に敲打痕　被熱	
2	105SK	覆土	敲石	182	102	73	2230	安山岩	○	100%	片面中央・片側面・下端部に敲打痕	
	105SK	覆土	磨製石斧	(60)	(22)	(11)	(21)	ホルンフェルス		60%	短冊形　刃部欠損	

156SK（第 53・54 図、表 25）

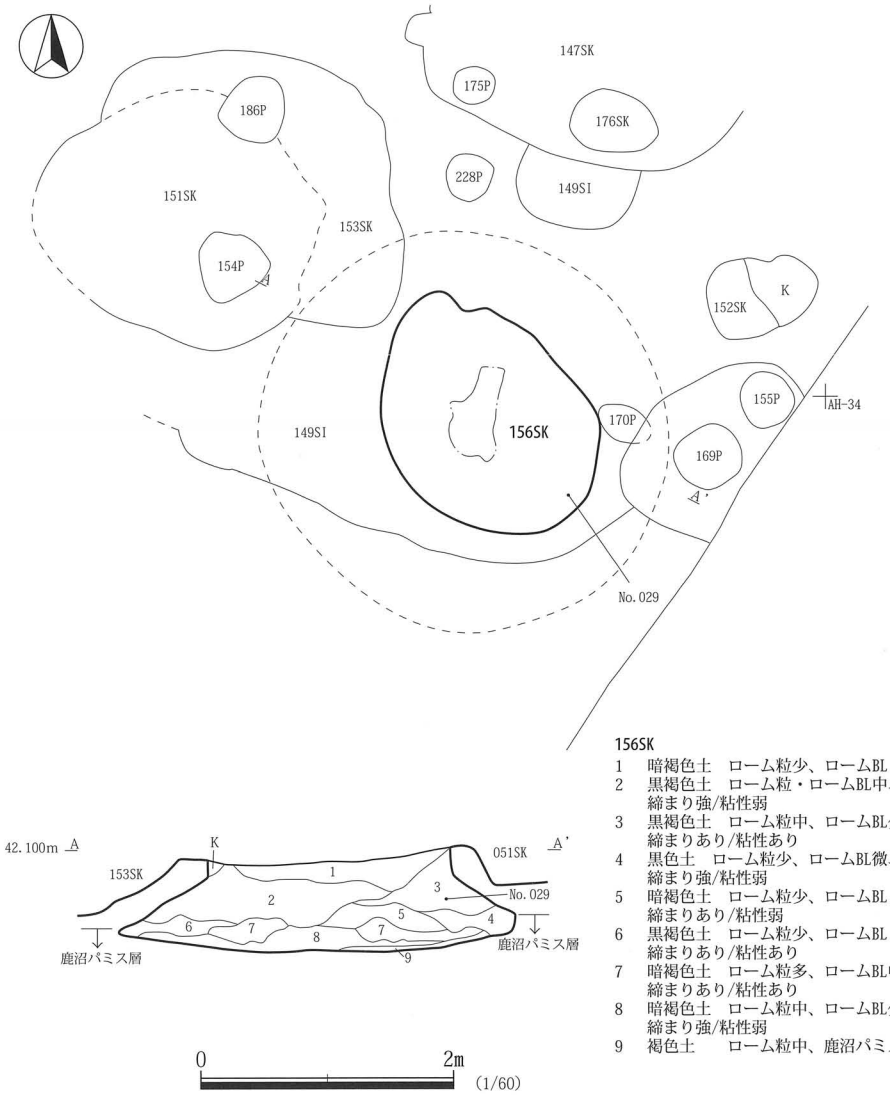
位置　A 2 区北東部隅、AG-33、AH-33 グリッドに位置する。

重複関係　149SI に遺構上部を切られる。

規模と平面形　開口部は長径 2.07 m、短径 1.48 mの楕円形、底面は径 3.04 ～ 3.20 mの円形で、深さは 0.84 mである。

壁　開口部に向かい内側に平坦に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底　ほぼ平坦である。硬化面を検出した。硬化面は開口部の直下に位置し、規模は長径 0.73 m、短径 0.32 mで、楕円形を呈する。また硬化範囲内は地山が赤変しており、雨水による酸化等が原因と考えられる。覆土が堆積する以前に一定期間土坑が開口していた可能性が考えられる。



156SK
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性弱
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒微、炭化物少、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性弱
3　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒微、炭化物少、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
4　黒色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物少、黒ボク土中、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性弱
5　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性弱
6　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり
7　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、焼土粒・炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり
8　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微、鹿沼パミス中量含む。締まり強/粘性弱
9　褐色土　ローム粒中、鹿沼パミス多量含む。締まり強/粘性弱

第 53 図　156SK 平面図・断面図

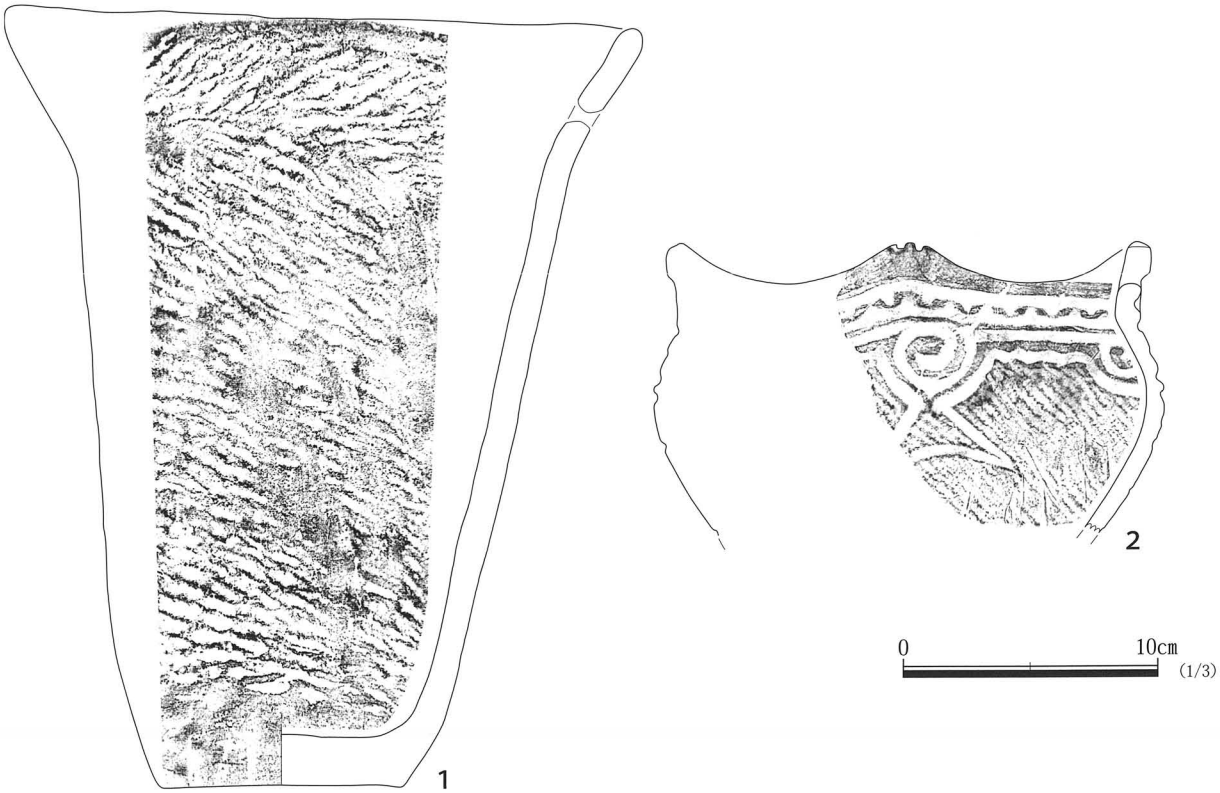
覆土　9層に分層される。第1・2層と第3層は、他の層に比べ大きな単位で相互に堆積する。第3層の遺構の括れ部分から完形に近い遺物（No.029）が出土した。第4・5層は、遺構東側遺構底面の袋状に広がる部分に堆積している。第6～9層は、遺構底面に敷きつめられる様に細かく堆積する。第1～9層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。括れ部分第2・3層、遺構底面第9層から主に遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層中に位置する。

遺物　実測遺物は2点である。

1は、第3層の土坑の括れる箇所から底部を遺構壁面に引き込まれるような状態で出土した。縄文が施文され、胎土には金雲母が多く含まれる。焼成後の穿孔が口縁部に1箇所穿たれる。

2は、口縁部に交互刺突文が施され、いわゆる中峠式土器である。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第54図　156SK出土遺物

表25　156SK出土　土器観察表

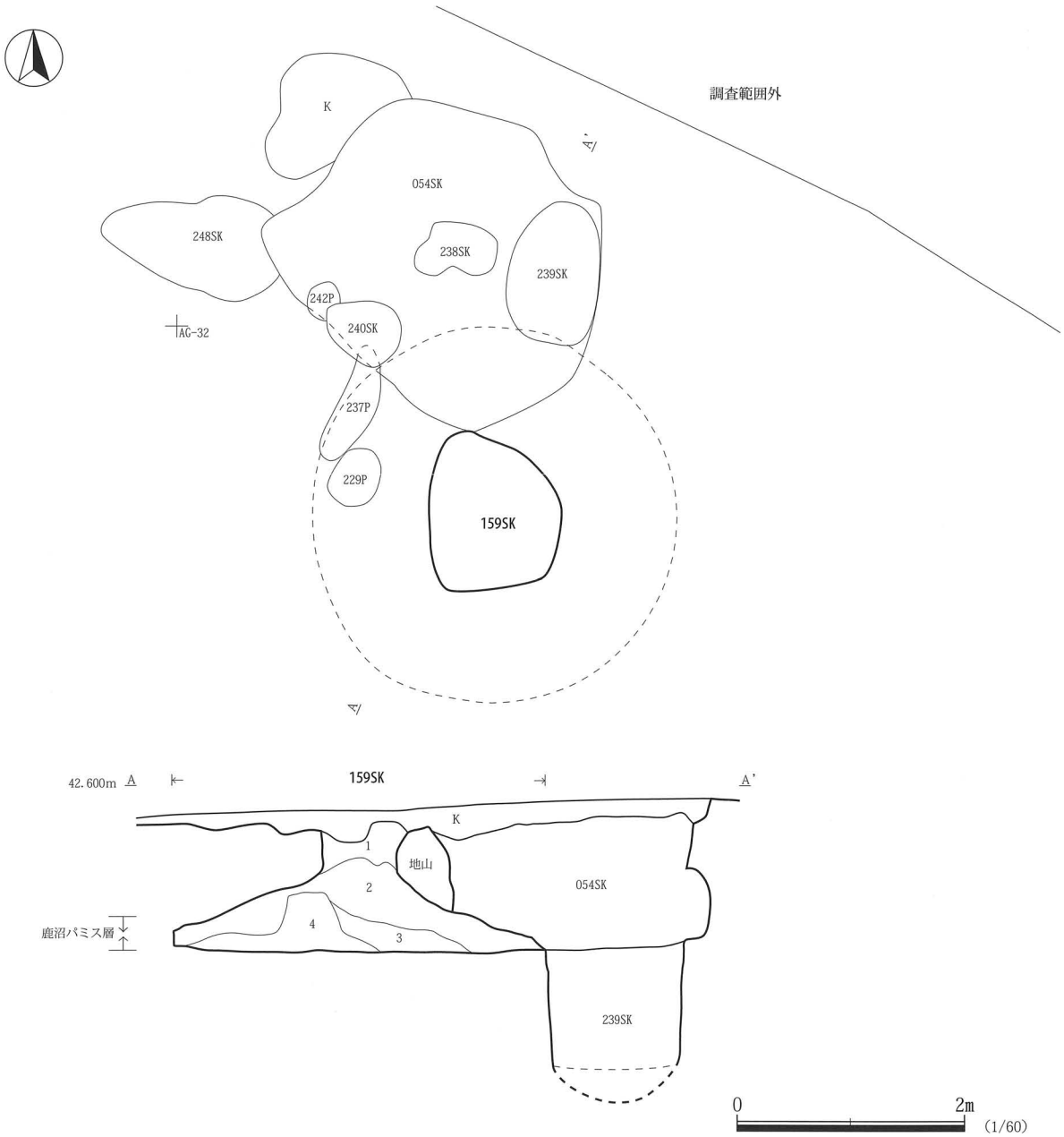
番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	156SK	NO.029	深鉢	246	307	94		口縁～底部	口縁部焼成後穿孔あり。地文縄文（無節R）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。
2	156SK	覆土	深鉢	〈178〉	115			口縁部～胴部	波状口縁（4頂）。口縁交互刺突文。口縁～胴部に沈線で渦巻等が施される。地文縄文（単節LR縦位）。	中峠式	胎土：金雲母多。

159SK（第 55・56 図、表 26・27）

位置　A 2 区南東隅、AG-32 グリッドに位置する。

重複関係　054SK に北東壁を切られる。

規模と平面形　開口部は長径 1.28 m、短径 1.16 mの楕円形、底面は径 3.18 ～ 3.30 mの円形で、深さは 1.25 mである。



159SK
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒中、炭化物少、橙色スコリア中量含む。締まり弱/粘性強
3　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒少量含む。締まりあり/粘性強
4　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL・焼土粒中、炭化物少含む。締まりあり/粘性強

第 55 図　159SK 平面図・断面図

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜し、開口部は筒状に立ち上がる。断面形はフラスコ状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　4層に分層された。第1層は、黒褐色土を呈する。第4層は、他の層よりも焼土・炭化物を多く含み、遺構中央で盛り上がるが、遺構底面袋状に広がる部分に堆積することなどから意図的に入れたと推定される。1～4層の堆積状況、ローム粒・焼土の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

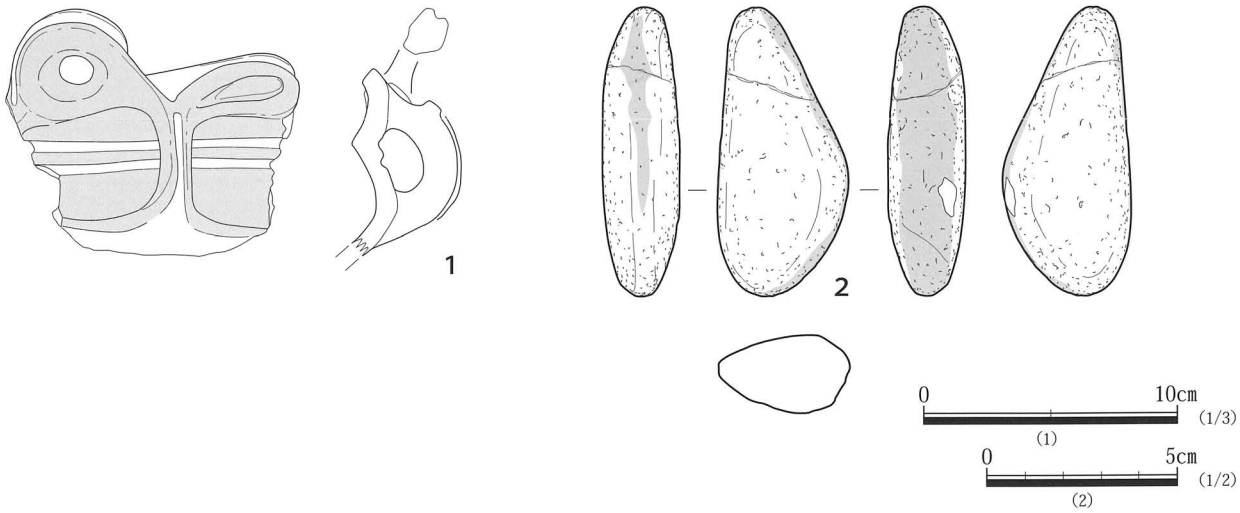
遺物　実測遺物は2点である。

1は、浅鉢と考えられる。外面に赤彩が施される。表面は全体的に平滑に仕上げられており部分的に光沢が認められる。胎土は金雲母を中量含み、色調は赤褐色～明赤褐色を呈しやや赤みを帯びる。

2はホルンフェルス製の磨石である。小形の製品で、右側面の屈曲した全面と左側面の上部に磨痕を残す。右側面の下部は磨面の傾斜角にわずかなずれが認められる。

その他、図示はしていないが、角押し文が施される阿玉台Ⅳ式の土器の口縁部の破片や、口縁部に交互刺突が施されるいわゆる中峠式土器の破片などが出土している。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第56図　159SK出土遺物

表26　159SK出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様。器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	159SK	NO.053	浅鉢		(98)			口縁部	波状口縁。外面赤彩。		

表27　159SK出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
2	159SK	覆土	磨石	77	34	21	76	ホルンフェルス	○	100%	左右側面に磨痕　小形	
	159SK	覆土	石核	22	27	15	10	メノウ		100%	原礫面あり　不規則な打面転移	

190SK（第 57 ～ 59 図、表 28・29）

位置　A 2 区北東隅、AG-31 グリッドに位置する。

重複関係　032SI に遺構上面を切られる。204SK とは切り合わない。

規模と平面形　開口部は径 1.51 ～ 1.31 mの円形、底面は径 3.46 ～ 3.56 mの円形で、深さは 0.90 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。壁面は平坦である。断面形はフラスコ状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　6 層に分層された。第 3 ～ 6 層は、遺構底面袋状に広がる部分に中央部分を高くし堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。その中でも、第 5 層は焼土粒・焼土塊・炭化物を他の層より多く含み、遺物も多く出土している。第 1 ～ 2 層もほぼ水平に堆積することなどから、第 1 ～ 6 層は人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

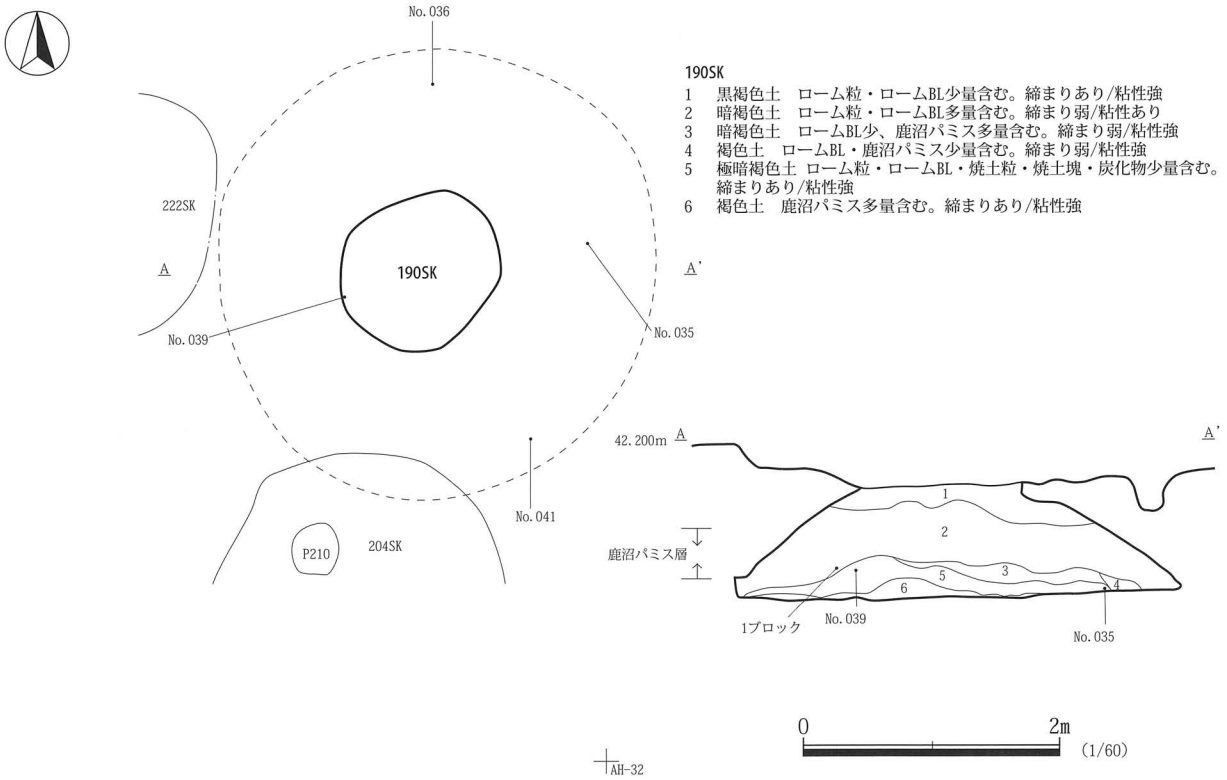
遺物　実測遺物は 9 点である。

1 は、底部を南に向けて、遺構南壁の底面と壁面に挟まれるように出土した。出土位置などから、意図的に底面と壁面の間に配置したと推測される。器内より検出した土壌を水洗選別したところ、白色粘土塊を検出した。胴部の一部が欠損するが検出時、欠損部は底面と接しており、外部からの白色粘土塊の混入の可能性は低い。

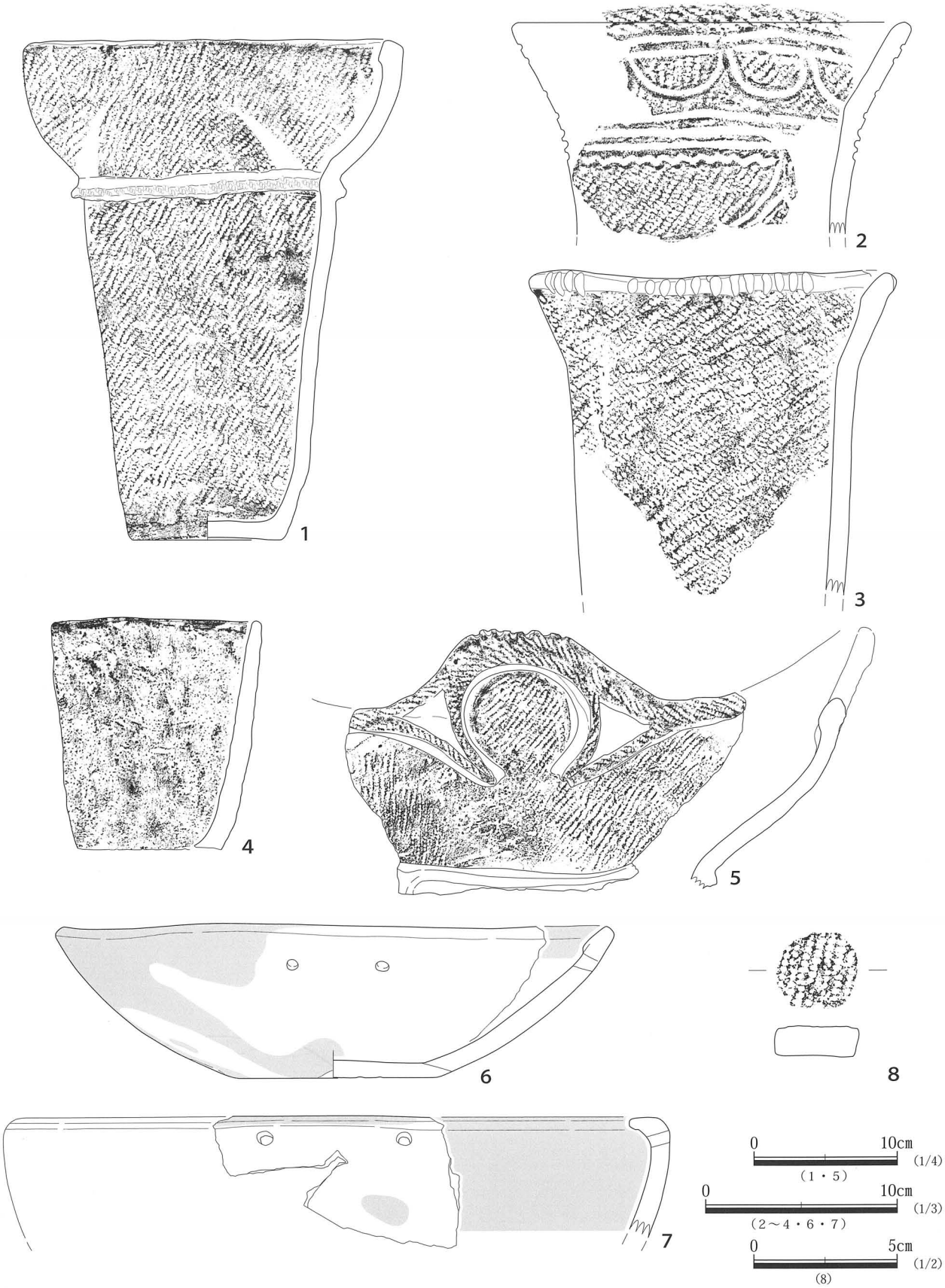
4・5 も遺構底部より出土した。また、遺構底面からは被熱した礫が複数確認された。

9 は砂岩製の敲石である。扁平な楕円礫を素材としている。下端部に敲打による器面の剥落が認められる。被熱により赤色変化している。

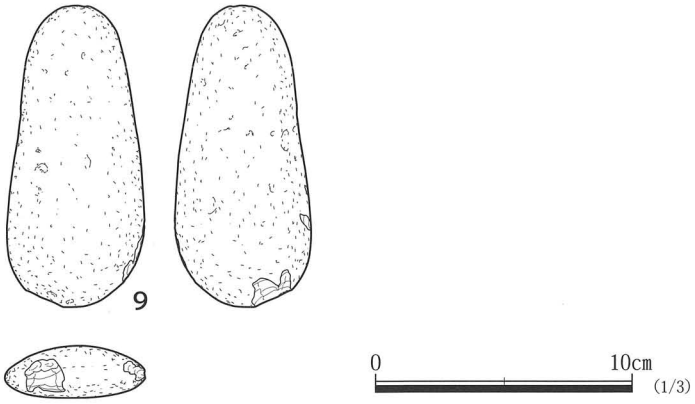
時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 57 図　190SK 平面図・断面図



第 58 図　190SK 出土遺物 1



第 59 図　190SK 出土遺物 2

表 28　190SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	190SK	No.041	深鉢	245	354	102		口縁～底部	頸部に縄文が施された隆帯が貼付けられる。地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。器内の土を水洗選別すると白色粘土を検出した。
2	190SK	覆土	深鉢	〈208〉	(112)			口縁～胴部	口縁部は沈線による弧状の区画。頸部沈線。地文縄文（単節RL縦位）。		
3	190SK	1BL	深鉢	〈192〉	(173)			口縁～胴部	口唇部にキザミを有する隆帯が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。
4	190SK	No.039	深鉢	109	(123)			口縁～胴部	無文。		内面一部に炭化物付着。 胎土：金雲母多。
5	190SK	No.035	深鉢		(180)			口縁～頸部	波状口縁（頂数不明）。口唇部から口縁にかけ隆帯が貼付けられ、隆帯には縄文が施される。頸部には隆帯が貼付けられる。口縁部から頸部の地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。
6	190SK	No.036	浅鉢	〈292〉	82	106		口縁～底部	無文。口縁部内側から外面に赤彩が施されており、外面の一部も赤彩が施される。底部網代痕有り。胴部に焼成後に穿孔が施される。	不明	焼成後に穿孔2箇所。
7	190SK	覆土	浅鉢	〈347〉	(64)			口縁	無文。内面から口縁に赤彩が施されており、外面の一部も赤彩が施される。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。 焼成後に穿孔2箇所。
8	190SK	覆土	土製円盤	30	11				地文縄文（単節RL）。		

表 29　190SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
9	190SK	覆土	敲石	120	54	21	197	砂岩	○	100%	下端部に敲打痕　被熱	

203SK（第 60・61 図、表 30）

位置　A 2 区東部、AH-32 グリッドに位置する。

重複関係　201SK・202P に遺構西壁を切られる。

規模と平面形　開口部は径 1.13 ～ 1.26 mの円形、底面は径 2.05 ～ 2.20 mの円形で、深さは 0.76 mである。

壁　開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底　平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　7 層に分層される。第 5 ～ 7 層は、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。堆積状況や、ローム粒・焼土の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。遺構壁面括れ部分第 4 層下部、遺構底面第 6・7 層から遺物が出土している。

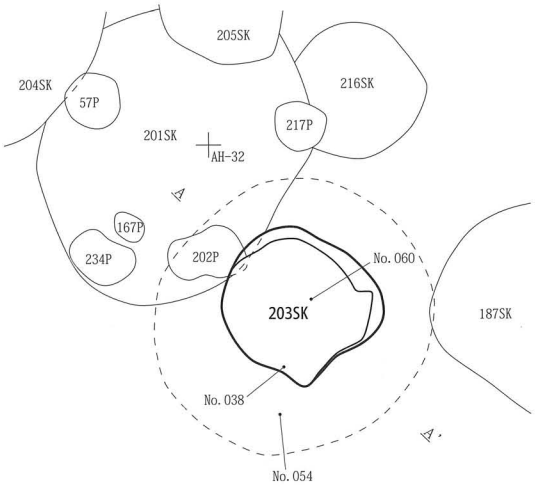
遺物　実測遺物は 4 点である。

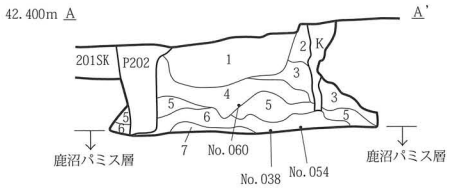
1 は、本遺構の括れの部分のやや下第 4 層下部より口縁部を遺構中心に向け出土した。

2 は、本遺構の括れ下部から底面に向かい、口縁部を底面に向け出土した。

3 は、遺構底面から出土した。1 ～ 3 の遺物の出土状況から本遺構は、大きく 2 度の遺物の廃絶が行なわれたと考えられる。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



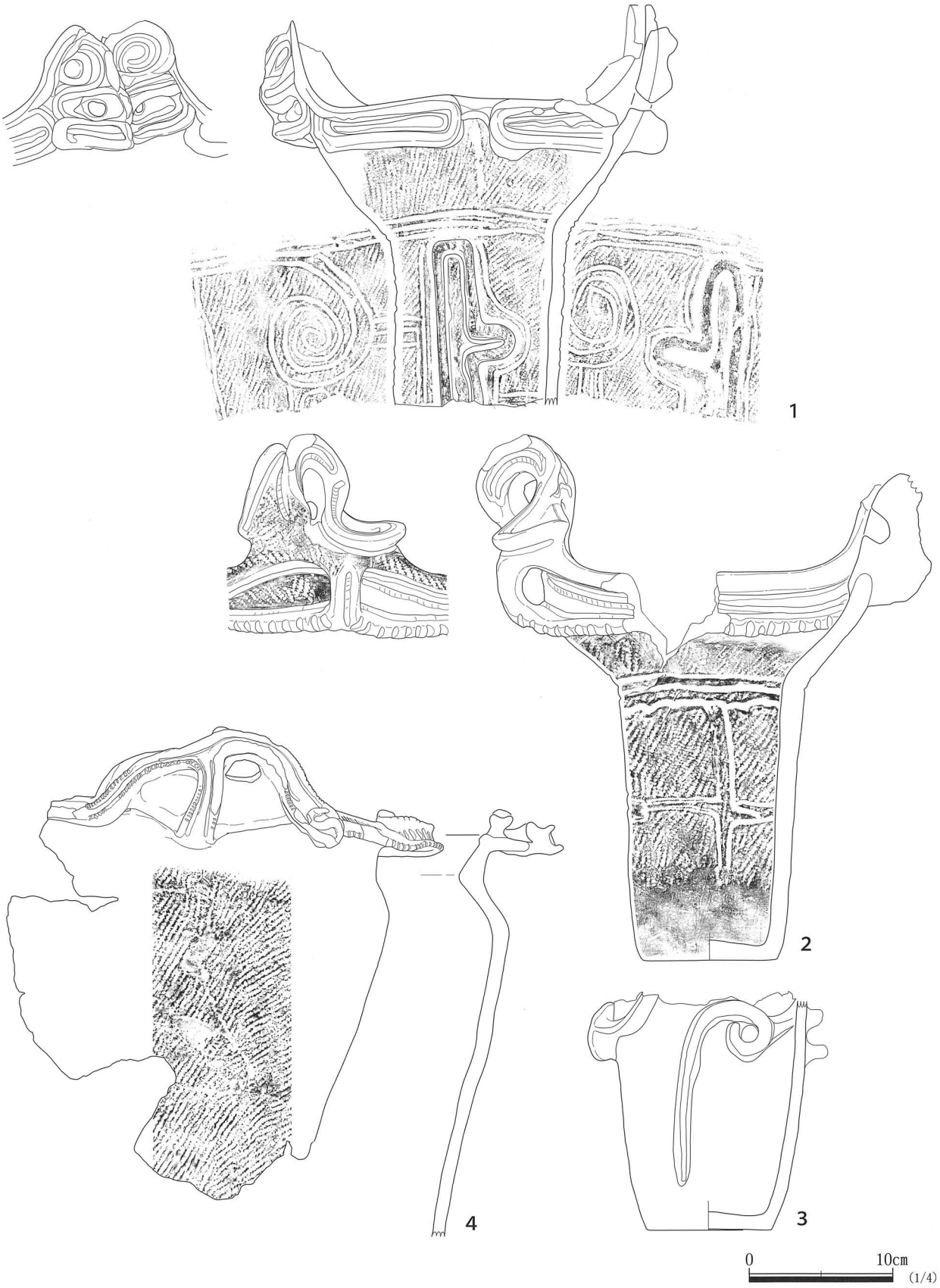


203SK

1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性弱
2　褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱
3　黒褐色土　ローム粒・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物少、鹿沼パミス微量含む。締まり強/粘性あり
5　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性やや弱
6　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒少、炭化物中、鹿沼パミス微、黒ボク土少量含む。締まり強/粘性弱
7　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性弱

0　2m　(1/60)

第 60 図　203SK 平面図・断面図



第 61 図　203SK 出土遺物

表 30　203SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	203SK	No.060	深鉢	(250)	(280)			口縁～胴部	波状口縁（2頂）。頂部の把手には穿孔が2箇所認められ、口縁部は隆帯による区画が施され、区画内は沈線が施される。頸部は横位に沈線が施され、胴部は沈線を沿わせた隆帯が貼付けられ隆帯には縄文が施される。胴部は沈線による懸垂文、横位文、渦巻が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多
2	203SK	No.038	深鉢	210	(368)	95	317	口縁～底部	口縁部は2箇所把手が付き、把手は穿孔が施される。口縁部には隆帯による区画も施され、区画内は押し引き文、縄文（単節RL横位）が施され、隆帯には縄文（単節RL横位）、キザミが施される。頸部は横位の押引文、波文が施される。胴部は2本一組の押引文による十文字が描かれる（4単位）。地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母中
3	203SK	No.054	深鉢		(160)	87		胴部～底部	胴部は隆帯による渦巻が施され胴部無文。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。胴部には縦方向の調整が見られる。
4	203SK	1BL・2BL	深鉢		(335)			口縁部～胴部	口縁部は隆帯を貼付け、隆帯端部・口縁端部にはキザミが施される。一部、口縁から胴部にかけ隆帯が橋状に施される。		

230SK（第 62・63 図、表 31）

位置　A 2 区中央部北寄り、AD-29、AD-30、AE-29、AE-30 グリッドに位置する。

重複関係　231SK に遺構上部を切られる。

規模と平面形　残存している開口部は径 1.14 ～ 1.19 mの円形、底面は長径 3.00 m、短径 2.75 mの楕円形で、深さは 1.36 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　7 層に分層された。第 1 ～ 2 層は、ほぼ水平に堆積する。第 3 ～ 5 層は類似し、遺構底面袋状に広がる部分に堆積する。第 6 層は、ローム粒･ロームブロックを主体とし、遺構底面中心に盛り上がるように堆積する。第 7 層は焼土を多く含む。遺構底面北西からは焼土・礫を集中して検出した。焼土・礫集中部は、2 層に分層され、第 1 層は 2 ～ 5cm 程の礫を多く含む。礫は円礫が 9 割を占める。円礫は、チャートなどの石器の材質とな

表 31　230SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	230SK	No.069-1	深鉢	〈158〉	(282)	(98)	〈180〉	口縁～底部	口縁部から胴部にかけて縄文（単節RL縦位）が施文される。		
2	230SK	覆土	深鉢		(129)			口縁～胴部	口縁部は隆帯による区画が施され、隆帯には縄文（単節RL横位）が施文される。胴部は沈線による懸垂文、横位文、波文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。		
3	230SK	1BL 2BL	深鉢		(86)			口縁	口唇部は縄文（単節RL）が施文される。口縁部は隆帯による楕円形区画が施され、隆帯上には、沈線、縄文（単節RL横位）が施される。胴部は2本一組の沈線、波文が垂下する。地文縄文（単節RL縦位）。		
4	230SK	覆土	深鉢		(219)	〈105〉		胴部	胴部は沈線を沿わせた隆帯により文様などが施される。無文。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。胴部には縦方向の調整が見られる。
5	230SK	覆土	深鉢		(79)			胴部	沈線を沿わせた隆帯による渦巻が施される。沈線による条線が描かれる。	阿玉台Ⅲ式もしくはⅣ式	胎土：金雲母多。
6	230SK	覆土	鉢 深鉢					口縁	無文。内面稜線より口縁上端部まで赤彩が施される。		

るものが多くみられ、被熱するものが多い。著しく磨耗していることから河原にて採取されたものと考えられる。焼土・礫集中部第１・２層からは炭化物は少量しか検出せず、焼土集中部下部の遺構底面も被熱による硬化などが見られないことなどから、焼土・円礫等は遺構内に意図的に持ち込まれた可能性が高い。第１～７層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

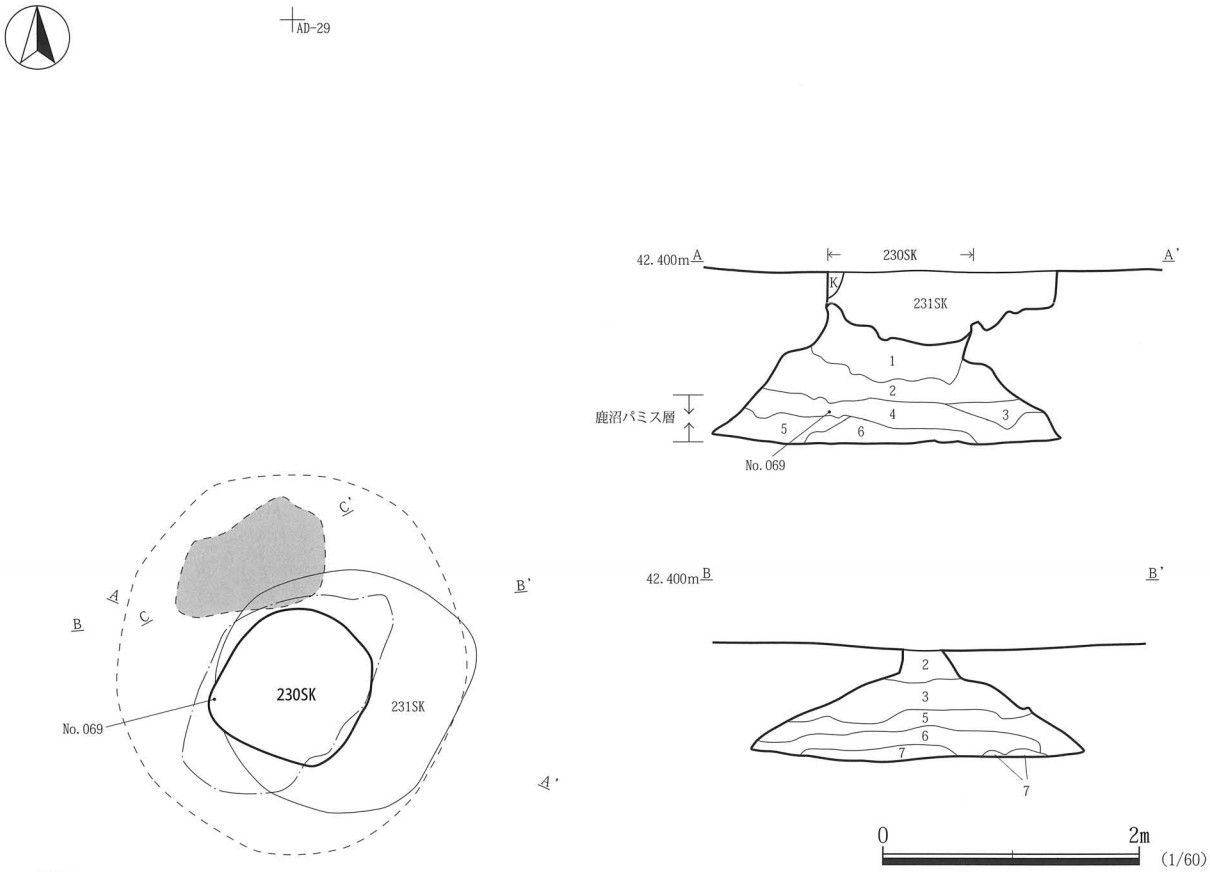
遺物　実測遺物は６点である。

2、3の胎土は黒褐色を呈し径１mm程の白色粒や赤色粒を少量含み類似し、口縁部のモチーフなども類似する。

３は、口縁部に隆帯による楕円形の区画が施され、隆帯上には、口縁端部にキザミ、側面に縄文が施文される。胴部は２本一組の沈線による懸垂文、縦位の波文が描かれる。

４は、沈線を沿わせた隆帯により文様が施される。胴部には縦方向の調整痕が観察される。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



焼土・礫集中部分

1　極暗赤褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊中、炭化物少、円礫中、淡黄色砂少量含む。締まりあり/粘性あり

2　赤褐色土　焼土粒・焼土塊主体、炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性弱

230SK

1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり

2　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

3　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・炭化物少、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性あり

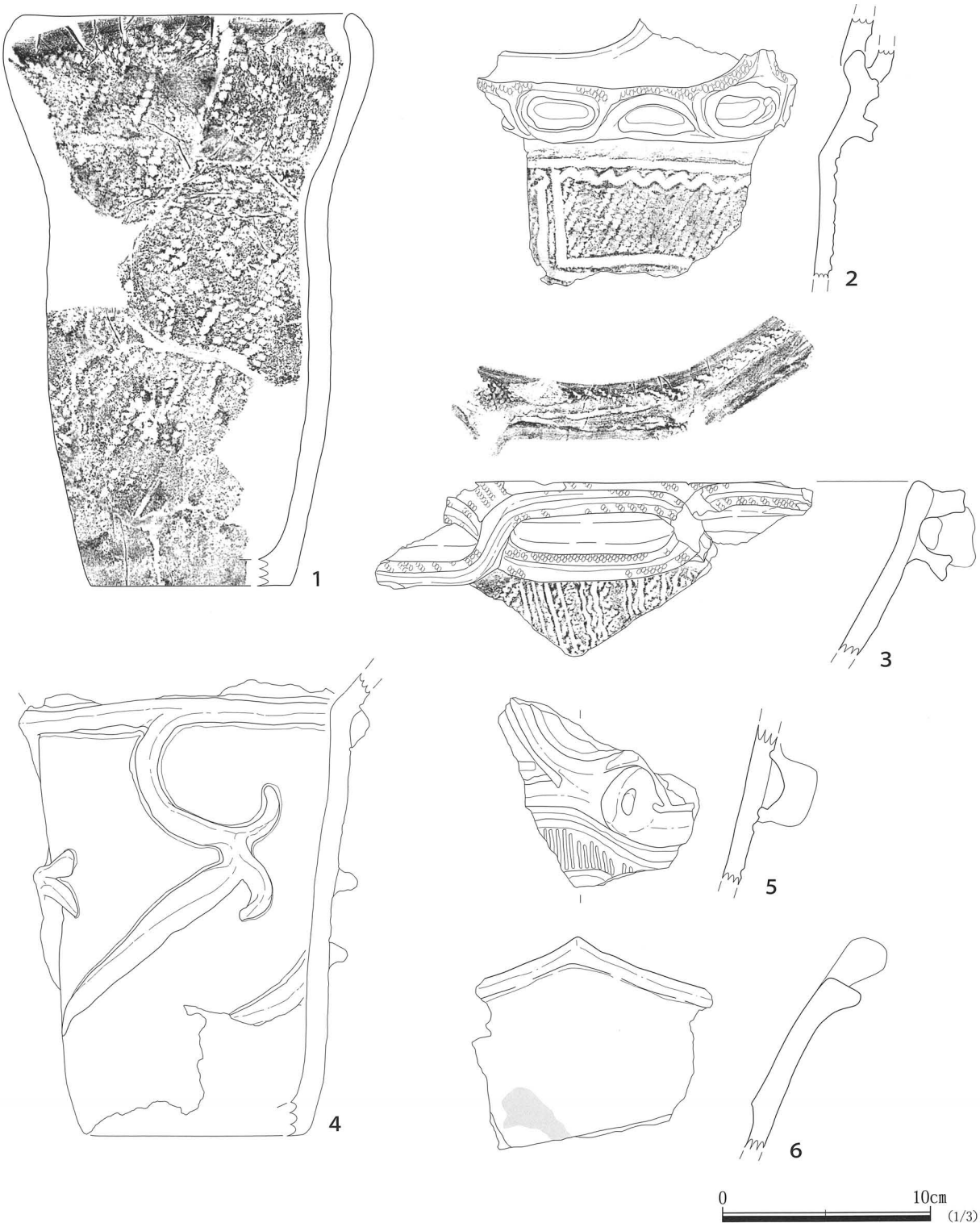
4　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まりやや弱/粘性あり

5　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊微、炭化物中、鹿沼パミス少量含む。締まりやや弱/粘性あり

6　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物少、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性あり

7　暗褐色土　焼土粒・焼土塊多、炭化物少、鹿沼パミス微量含む。締まり弱/粘性弱

第62図　230SK平面図・断面図



第 63 図　230SK 出土遺物

249SK（第 64・65 図、表 32）

位置　A 2 区南東部北側、AF-31 グリッドに位置する。

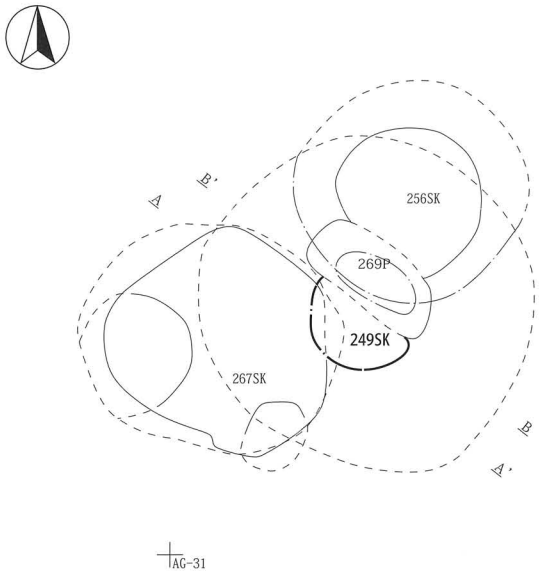
重複関係　袋状土坑 256SK に北東壁を、袋状土坑 267SK に開口部と南西壁を、269SK に開口部北東壁を切られる。

規模と平面形　残存する開口部より径 0.86 mの円形を呈すると推定される。底面は径 2.50 ～ 2.63 mの円形で、深さは 1.32 mである。

壁　開口部に向い内側に傾斜し、開口部は筒状に立ち上がる。断面形はフラスコ状を呈する。

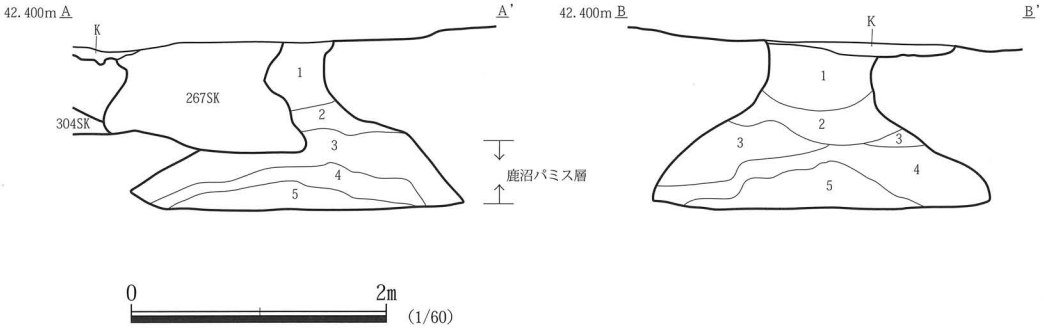
底　平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　5 層に分層された。第 1 ～ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 4・5 層は、遺構底面袋状に広がる部分に堆積しており、遺構中央部分がやや盛り上がるが、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。堆積状況などから第 1 ～ 5 層は人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。



249SK

1	黒褐色土	ローム粒・ロームBL少、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
2	黒褐色土	ローム粒中、ロームBL微、炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
3	黒褐色土	ローム粒・ロームBL少、粘土粒微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
4	黒褐色土	ローム粒多、ロームBL、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
5	褐色土	炭化物極微、鹿沼パミス微量含む。締まり強/粘性あり

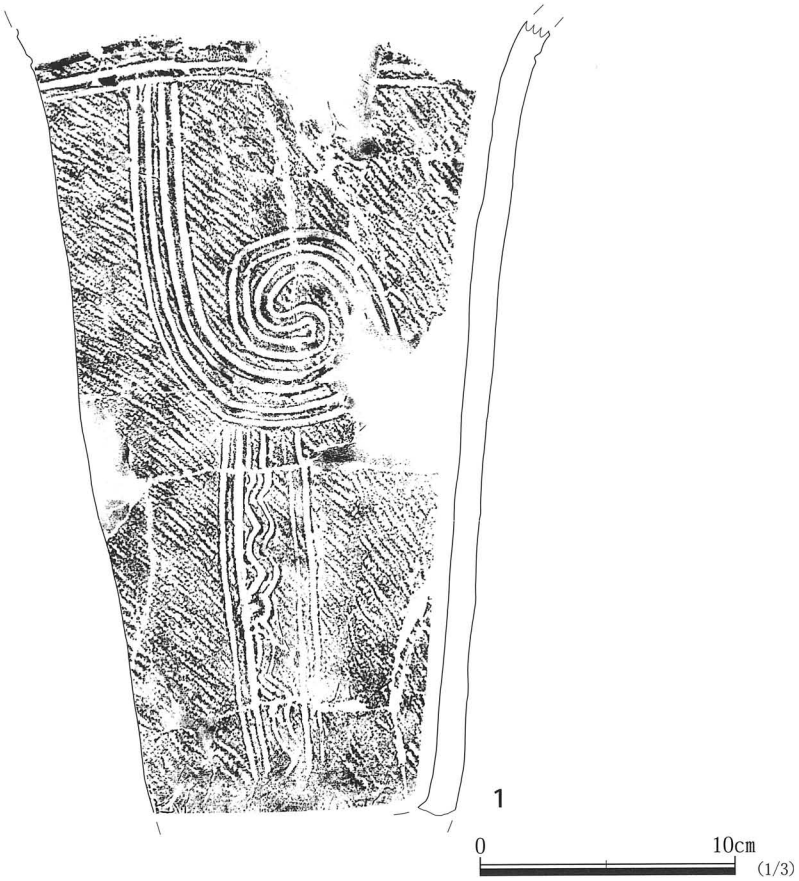


第 64 図　249SK 平面図・断面図

遺物　実測遺物は１点である。

１は、頸部より上を欠損している。ほぼ水平に胴部より上部を欠いており意図的に欠いたと考えられる。胴部には半截竹管状工具による沈線が施される。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 65 図　249SK 出土遺物

表 32　249SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様。器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	249SK	一括	深鉢		(282)			胴部～底部	胴部に沈線による渦巻、懸垂文が施される。地文縄文（単節LR縦位）。	加曾利ＥＩ式	

256SK（第 66・67 図、表 33）

位置　A 2 区南東部北寄り、AF-31 グリッドに位置する。

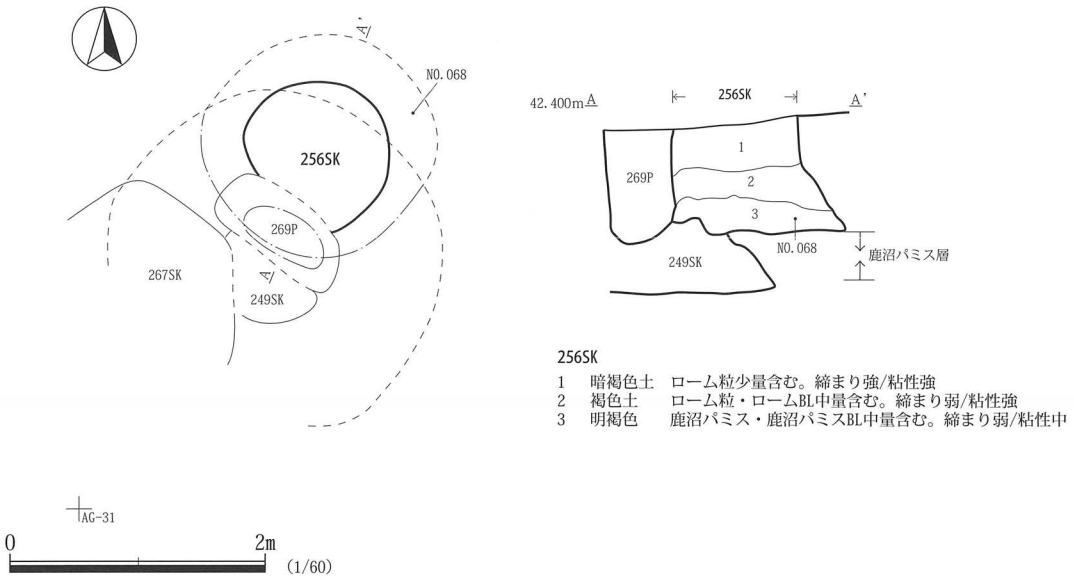
重複関係　249SK の東壁を切る。269P に遺構開口部および南西壁を切られる。

規模と平面形　トレンチ等を設定したため推定値であるが、残存する開口部より径 1.17 mの円形、底面は長径 1.70 ～ 1.75 mの円形と推定される。深さは 0.84 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜し、フラスコ状を呈する。

底　平坦である。硬化面は確認されなかった。

覆土　3 層に分層された。第 1 ～ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 3 層からはほぼ完形の遺物が出土した。遺物出土状況、ローム・鹿沼パミスの含有状況などから 1 ～ 3 層は人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。



第 66 図　256SK 平面図・断面図

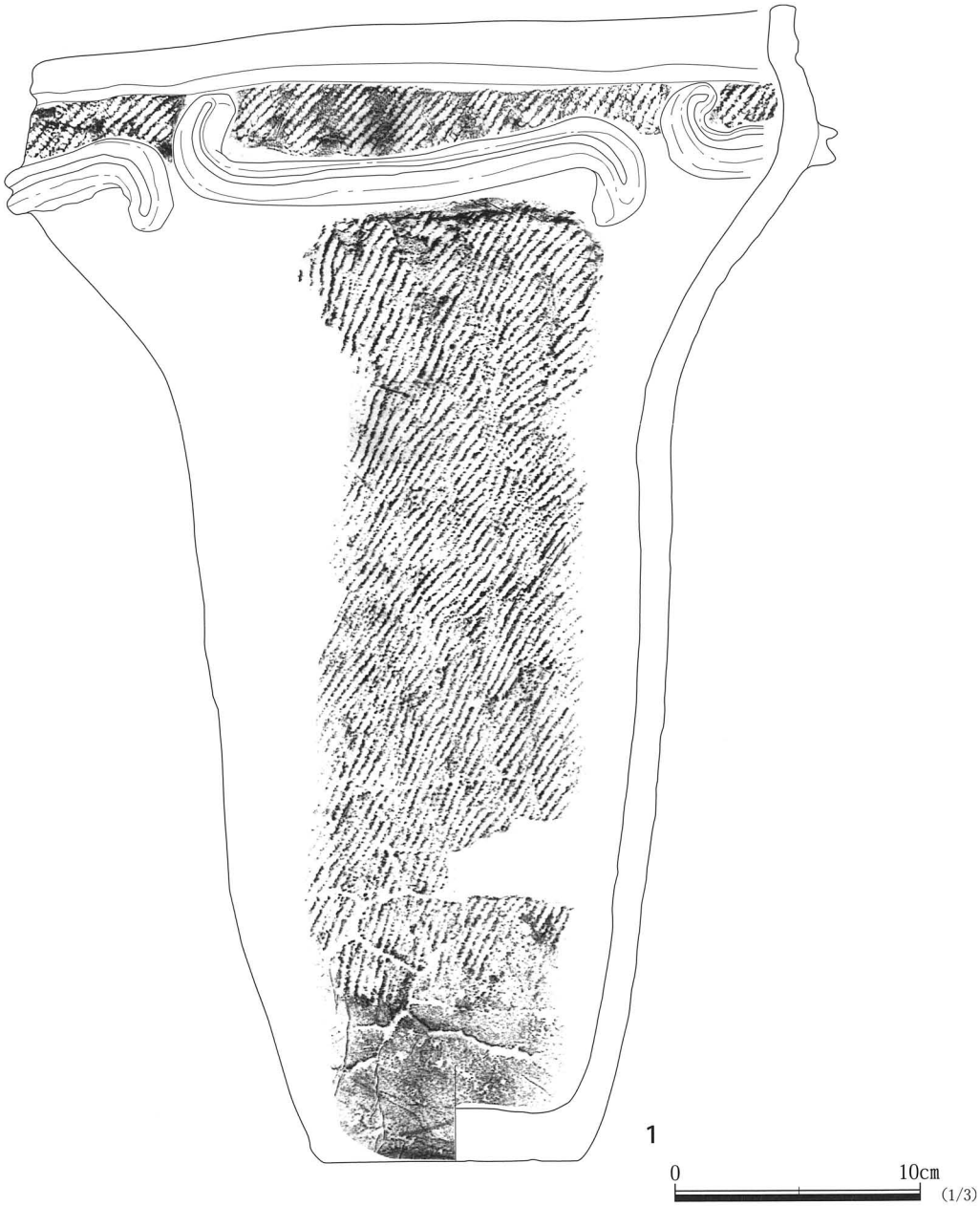
表 33　256SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	256SK	No. 068	深鉢	315	473	106	343	口縁～底部	口縁無文帯下は隆帯によるS字文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	

遺物　実測遺物は１点である。

１は、遺構底面北東壁際から出土した。口縁部から底部までほぼ完形である。口縁無文帯下には沈線が巡り、S字状の隆帯が施される。S字状の隆帯は５単位貼付けられる。S字状の隆帯貼付け後に縄文が施文されている。

時期　縄文時代中期中葉と考えられる。



第67図　256SK出土遺物

267SK（第 68・69 図、表 34）

位置　A 2 区南東部北側、AF-30、AF-31 グリッドに位置する。

重複関係　249SK の開口部から北東壁、280SK の北東壁、304SK の南東壁の一部を切る。

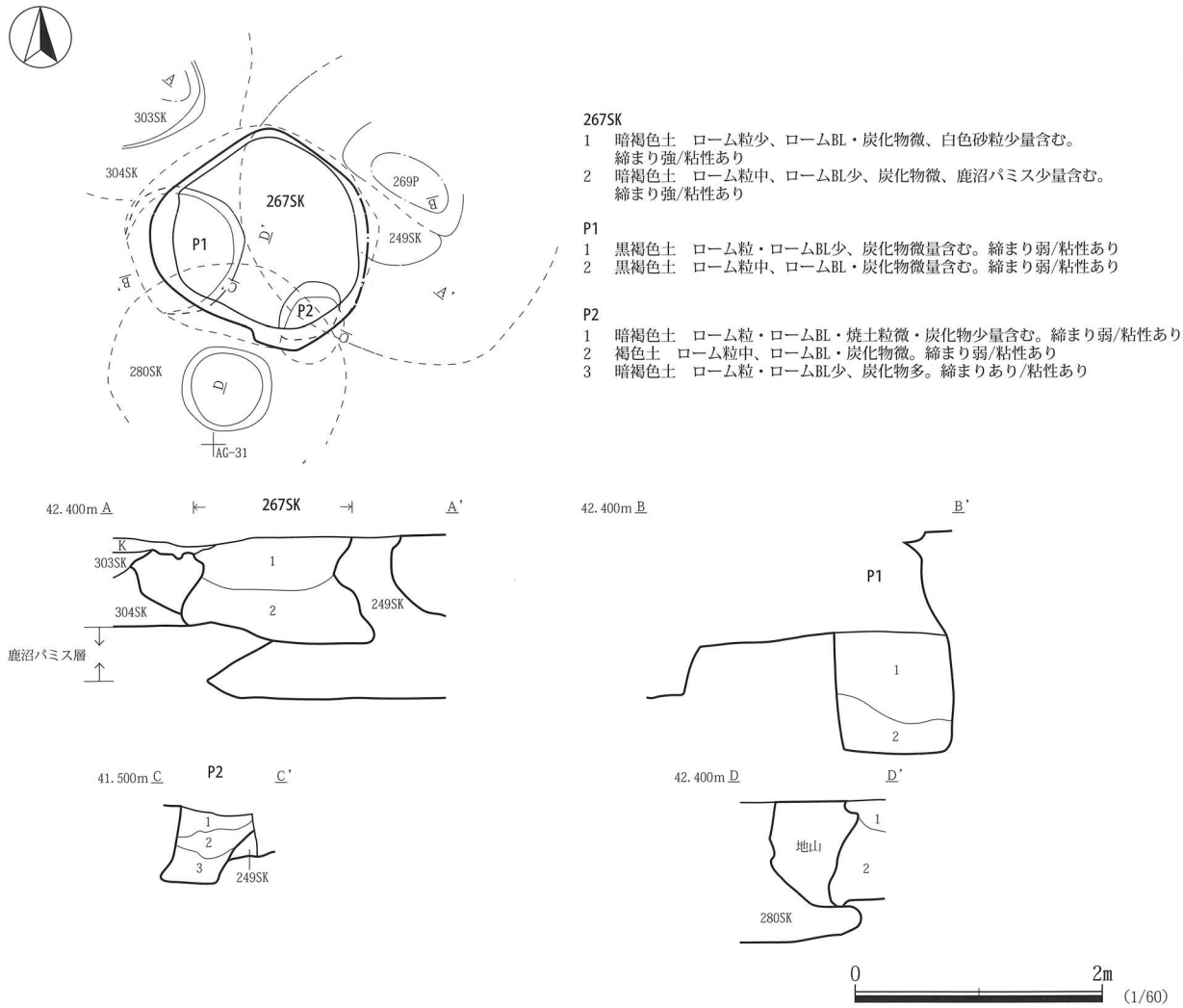
規模と平面形　開口部は径 1.70 ～ 1.80 mの円形、底面は長径 1.90 ～ 2.00 mの円形で、深さは 0.88 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜し、括れ部から開口部へは緩やかに外側へ立ち上がる。断面形は袋状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット　底面からは 2 基のピットを検出した。P1 は径 0.92 ～ 1.04 mの円形で、深さ 0.50 mである。P2 は長径 0.56 m、短径 0.41 mの楕円形で、深さ 0.29 mである。

覆土　2 層に分層された。第 1・2 層はほぼ水平に堆積する。遺構底面から括れ部分にかけて第 2 層が堆積し、ローム・炭化物の含有状況などから、人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

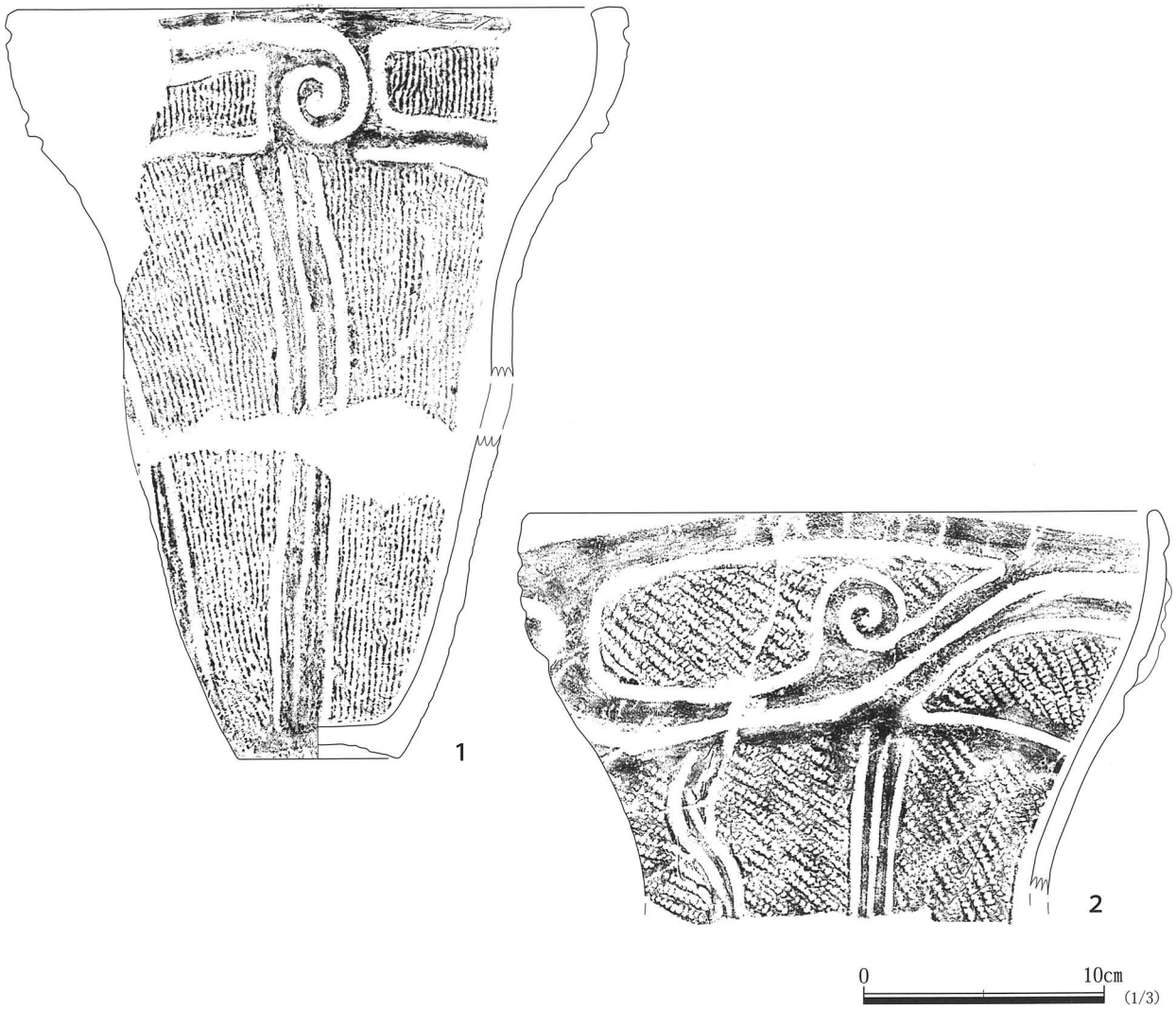


第 68 図　267SK 平面図・断面図

遺物　実測遺物は２点である。

１は、口縁部に沈線を沿わせた隆帯により、渦巻、楕円形の区画が施される。胴部は、２～３組の沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消しが行なわれているが、磨り消しは全体的に不十分で縄文が残る。口縁部～胴部ともに地文は撚糸文である。

２は、口縁部に沈線を沿わせた隆帯により、渦巻、楕円形の区画が施される。渦巻は一箇所欠損するが、口縁



第 69 図　267SK 出土遺物

表 34　267SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	267SK	覆土	深鉢	(252)	(315)	66		口縁～底部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で、渦巻、楕円形の区画が施される。区画内は撚糸文。胴部は2～3本一組みの沈線による懸垂文を施す。地文（撚糸文）。	加曾利EⅡ式	
2	267SK	覆土	深鉢					口縁～胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で、渦巻、楕円形の区画が施される。区画内は縄文（単節LR縦位）。胴部は2～3本一組みの沈線による懸垂文を施し懸垂文間を磨り消し。地文縄文（単節LR縦位）。	加曾利EⅡ式	渦巻は5単位。

部に５単位で描かれると推定される。渦巻は楕円形区画の内に配置されているものが２箇所、区画外に配置されるものが３箇所と推定される。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。

274SK（第 70・71 図、表 35）

位置　Ａ２区中央部北寄り、AC-28、AD-28 グリッドに位置する。

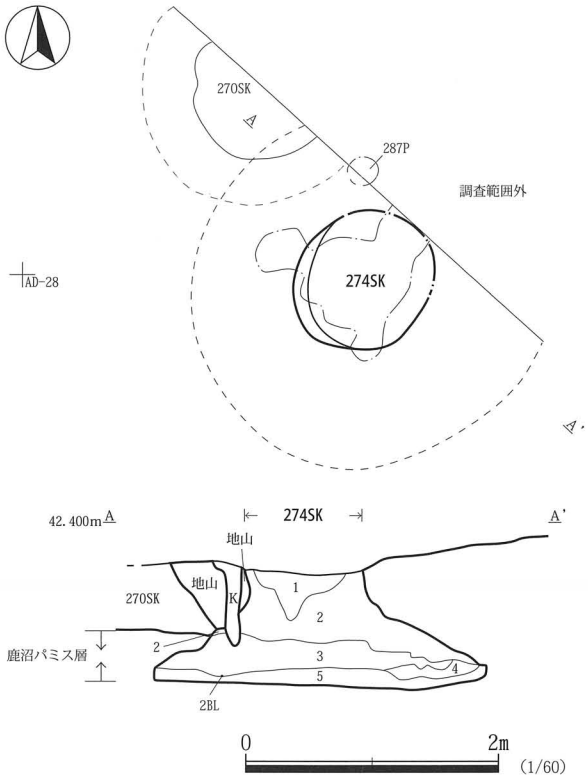
重複関係　北東壁は調査区外へ広がる。270SK の南東壁を僅かに切る。287P に北壁を切られる。

規模と平面形　残存する開口部は径 1.03 mの円形、底面は径 2.74 mの円形で、深さは 0.91 mである。

壁　壁面は開口部に向かって内側に傾斜する。断面形はフラスコ状を呈する。

底　底面は平坦である。開口部の直下には不定形の硬化面が拡がる。硬化面は開口部直下が最も硬化し、壁面へ向かうほど硬化が弱くなる。規模は長さ 0.74 ～ 1.21 m、幅 0.59 ～ 1.01 mである。

覆土　５層に分層された。第３～５層は、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺



274SK
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物少、鹿沼パミス微量含む。締まりやや弱/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物中、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物少、鹿沼パミス微量含む。締まり弱/粘性あり
5　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり

第 70 図　274SK 平面図・断面図

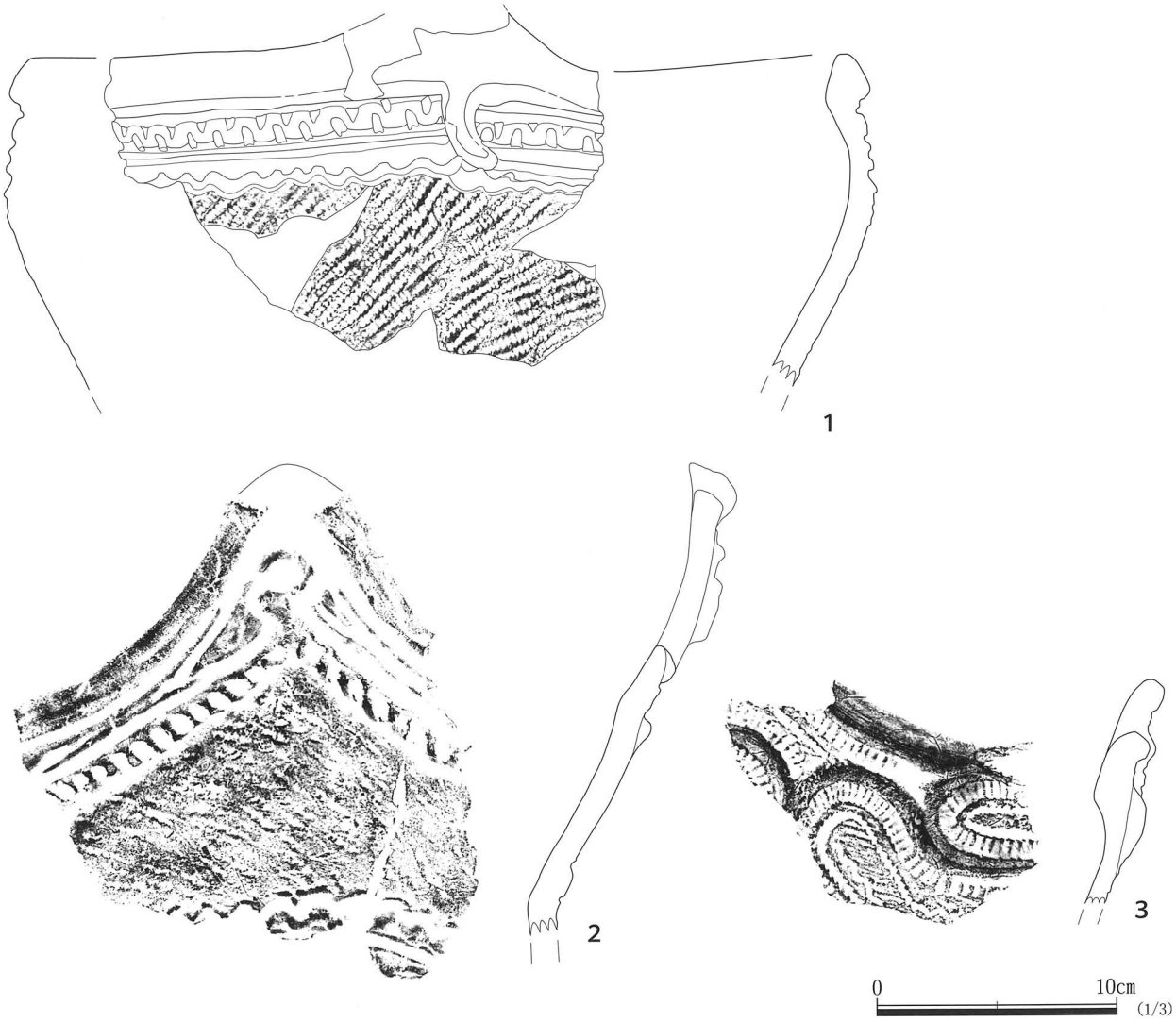
構壁面にまで入れたと推定される。第３層は他の層に比べ焼土・炭化物をやや多く含む。堆積状況から人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

遺物　実測遺物は３点である。

１は、口縁部に交互刺突文が施されいわゆる中峠式土器である。

３は、遺構底面から出土しており、遺構の帰属時期に該当する遺物と考えられる。阿玉台Ⅳ式土器と考えられるが、文様構成の一部は勝坂式土器に類似する。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 71 図　274SK 出土遺物

表 35　274SK 出土　土器観察表

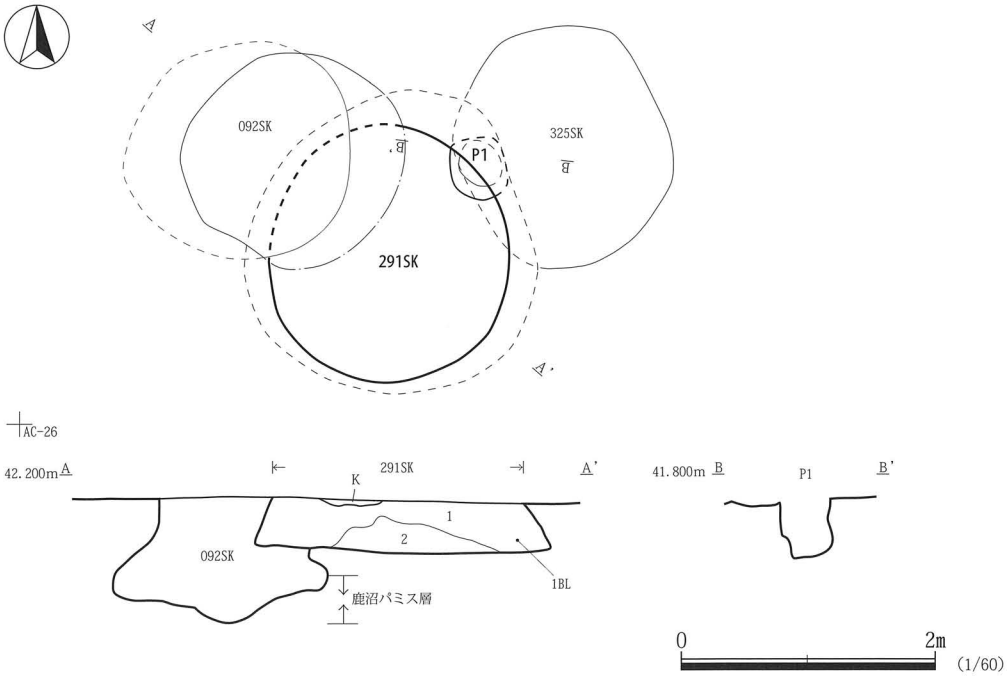
番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	274SK	覆土	深鉢	〈338〉	(155)			口縁	波状口縁（頂数不明）。口縁部隆帯貼り付け。口縁部交互刺突文。地文縄文（単節RL縦位）。	中峠式	
2	274SK	覆土	深鉢	〈258〉	(197)			口縁	波状口縁（頂数不明）。口縁部隆帯、隆帯上には刺突が施される。頸部は沈線が施される。地文縄文（無節R）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母中。
3	274SK	2BL	深鉢		(94)			口縁	波状口縁（頂数不明）。口縁部隆帯、隆帯に沿うように角押文が施される。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。

291SK（第 72・73 図、表 36）

位置　A 2 区北西部北側、AB-26 グリッドに位置する。

重複関係　092SK の遺構南東壁を切る。325SK に遺構北東壁を切られる。

規模と平面形　開口部は長径 2.03 m、短径 1.88 mの楕円形、底面は径 2.27 ～ 2.52 mの円形で、深さは 0.42 mである。



291SK
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まり強/粘性強
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、焼土粒・炭化物微量含む。
　　締まりあり/粘性あり

第 72 図　291SK 平面図・断面図

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。上部は削平されているが断面形は袋状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

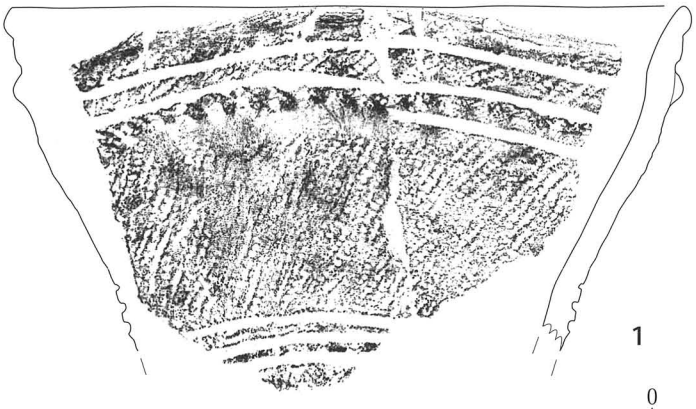
ピット　底面北東隅からピット１基を検出した。P1は、長径0.51 m、短径0.44 mの楕円形で、深さ0.43 mである。

覆土　２層に分層された。第２層は、遺構中央部で盛り上がる。第１～２層焼土粒・炭化物の含有状況から人為堆積と考えられる。遺構底面からは遺物が出土している。P1の覆土も黒褐色土を主体としている。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層上に位置する。

遺物　実測遺物は１点である。

１は、遺構底面から出土してる。口縁部には隆帯が横位に貼付けられ、下位の隆帯にはキザミが施される。隆帯の間には、上下２段の角押文が施される。胎土に金雲母を多く含む点、角押し文が施文される点から阿玉台Ⅳ式土器と判断した。

時期　縄文時代中期中葉と考えられる。



1

0　10cm　(1/3)

第 73 図　291SK 出土遺物

表 36　291SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	291SK	1BL	深鉢	〈270〉	(138)			口縁～頸部	口縁部は角押文により横位文が描かれ、隆帯が貼付けられる。隆帯にはキザミが施される。頸部は沈線による横位文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。

302SK（第 74 ～ 77 図、表 37・38）

位置　Ａ２区中央部、AF-29、AF-30、AG-29、AG-30 グリッドに位置する。

重複関係　332SK に北壁を切られる。

規模と平面形　残存する開口部は長径 2.70 m、短径 1.98 mの楕円形、底面は長径 2.70 m、短径 2.50 mの楕円形で、深さは 1.12 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット　底面南壁際からはピットを１基検出した。P1 は、径 0.32 ～ 0.36m の円形で、深さは 0.19m である。

覆土　４層に分層された。第３層は、遺構括れ部分を埋める様に堆積する。第４層は遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第２層下部、第３層、第４層下部からは遺物が多く出土した。堆積状況から人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

遺物　実測遺物は９点である。

１は、第３層下部から出土し、袋状土坑 304SK 出土遺物と接合する。地文に縄文が施文される。

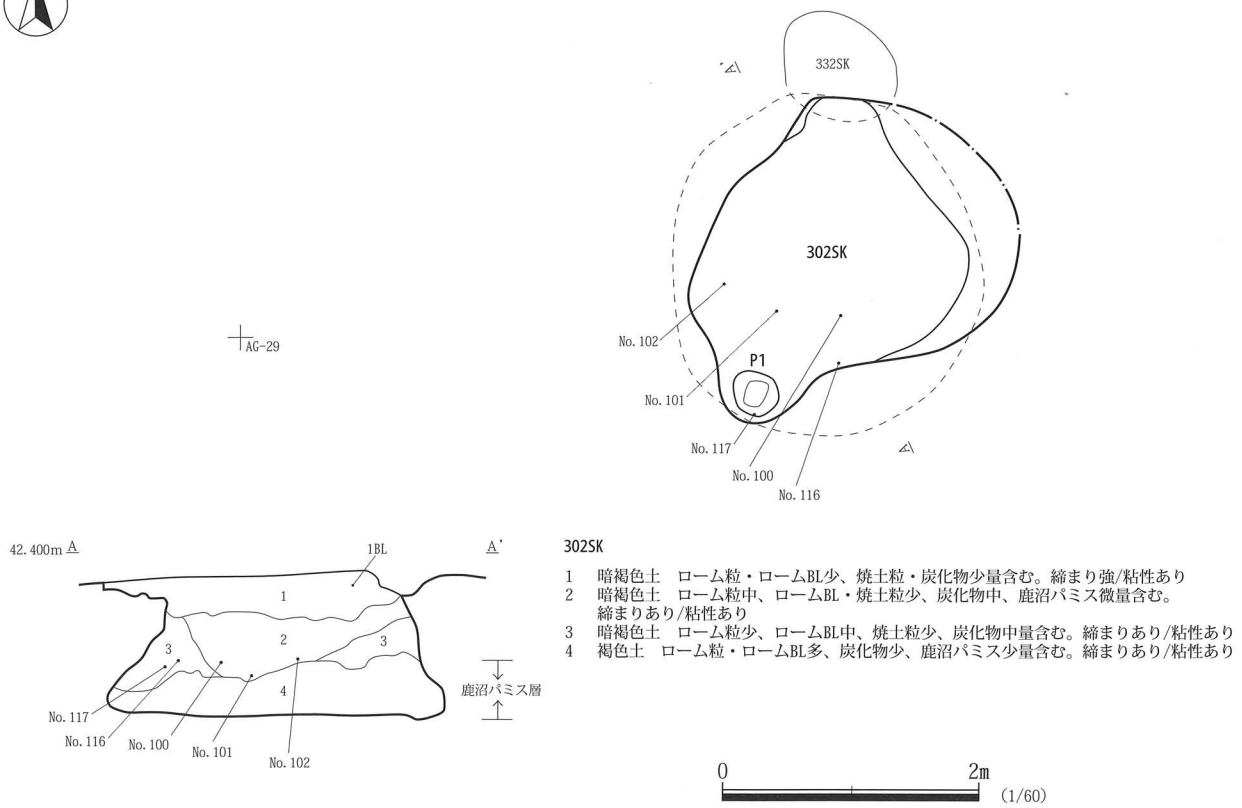
３と７は、第１層から出土している。７は、口縁部に隆帯貼付けによる波文が施される。胴部の立上がりが丸みを帯びる。胎土は、径２～３ｍｍの石英を多く含む。

４は、口縁部に把手が施される。また、口縁部には隆帯貼付けによる十字状の区画が施される。065SK 出土遺物３・９・10 などの口縁部に貼付けられる隆帯と比較すると４の隆帯は幅が細く厚さが薄い。胴部は半截竹管状工具による沈線が施される。５は、口縁部に橋状の把手が施され、胴部には櫛状工具による条線が縦位に施される。８は、無文の鉢である。橋状の把手が２箇所付けられる。把手は一方は上部・下部の２箇所に穿孔が施されるが、もう一方は、上部は穿孔されているが、下部はくぼみが存在するが穿孔はされていない。穿孔、くぼみはいずれも焼成前に行なわれている。１～８の遺物の出土状況から本遺構は、大きく２度の遺物の廃棄が行なわれたと考えられる。

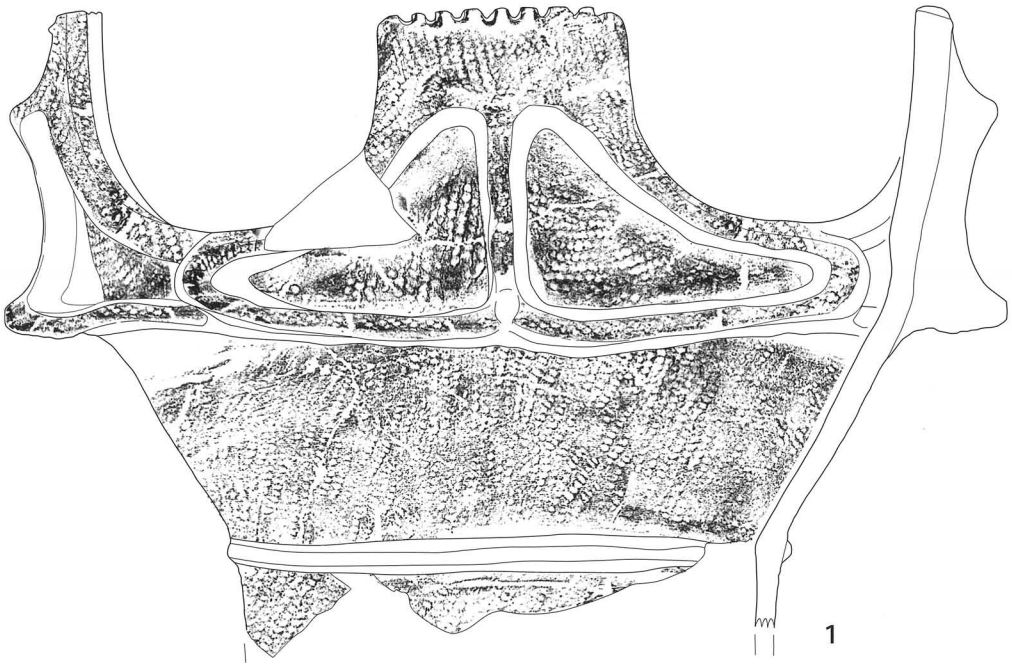
９は砂岩製の敲石である。各突端部分に敲打による器面の剥落とつぶれが認められる。被熱により赤色変化している。

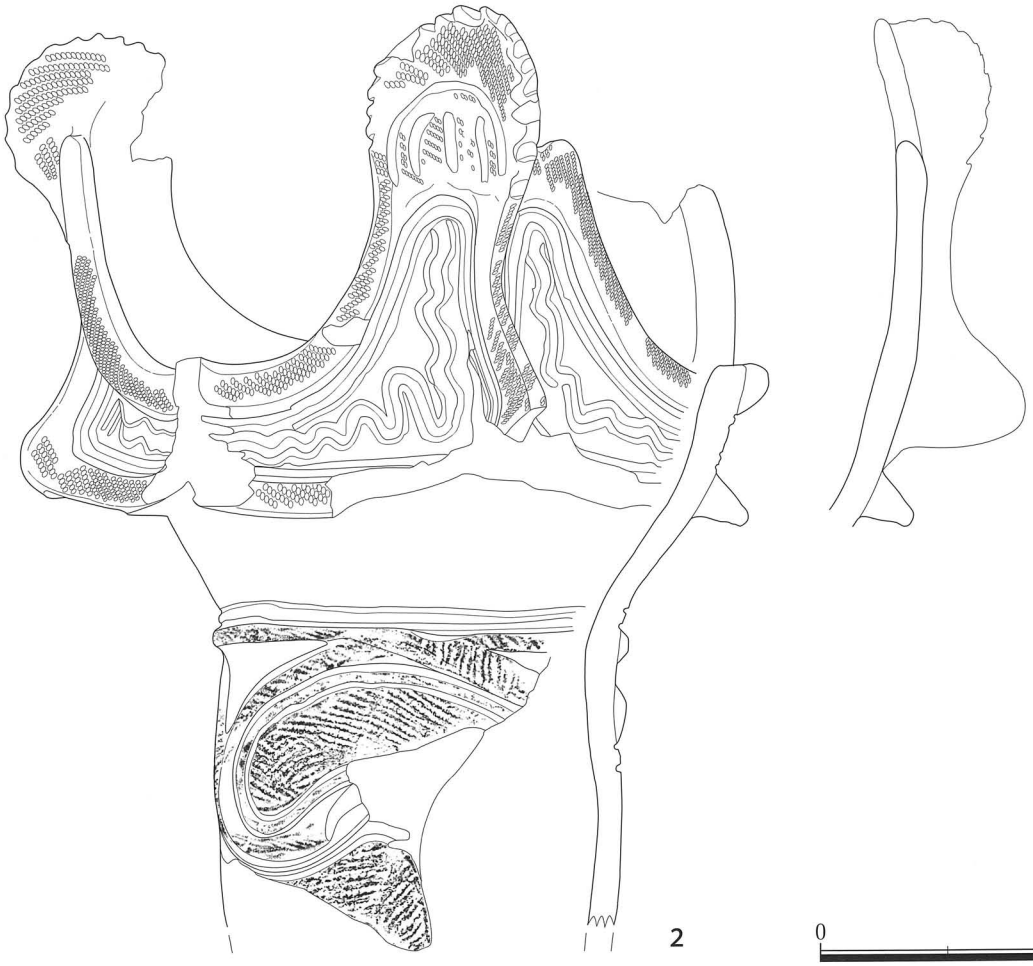
また、図示はしていないが、いわゆる中峠式土器の口縁部の破片が１点出土している。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



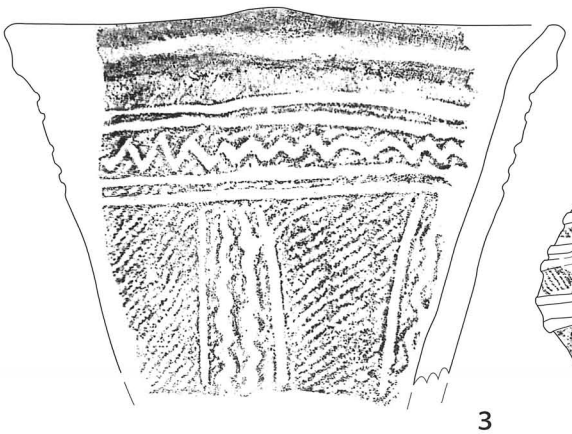
第 74 図　302SK 平面図・断面図



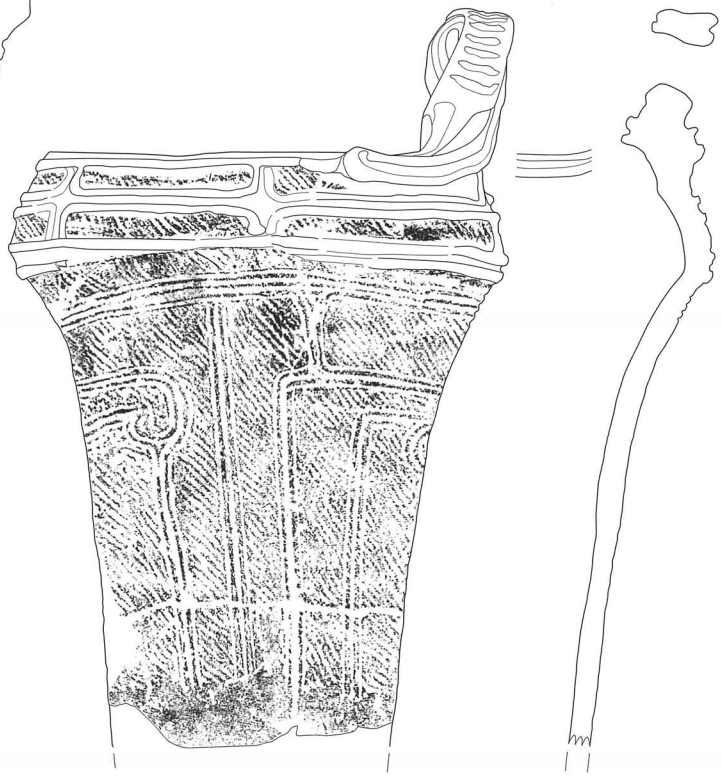


0 10cm (1/3)

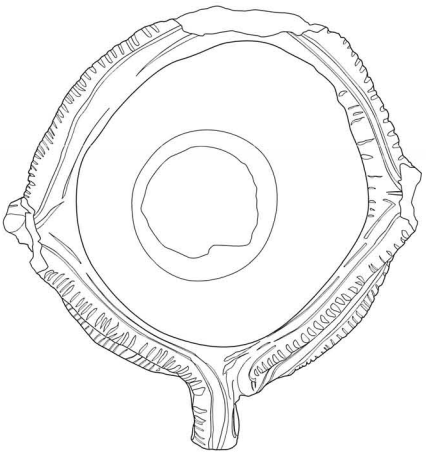
第 75 図　302SK 出土遺物 1

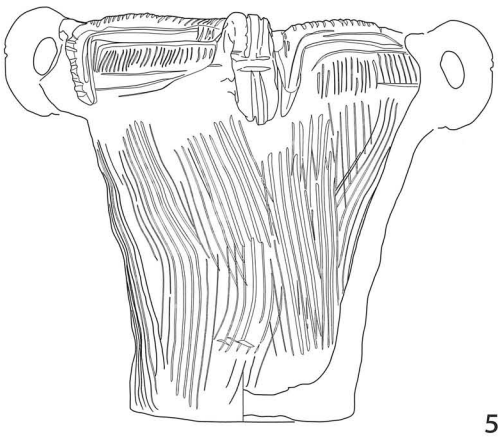


3

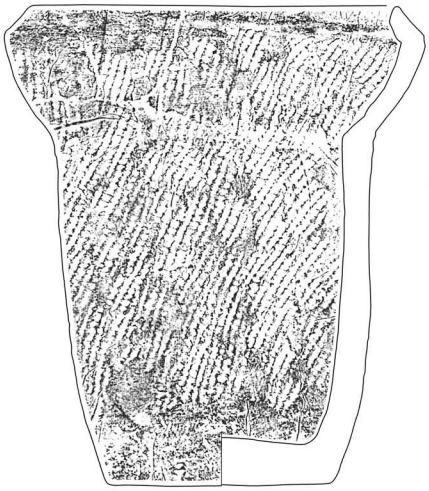


4





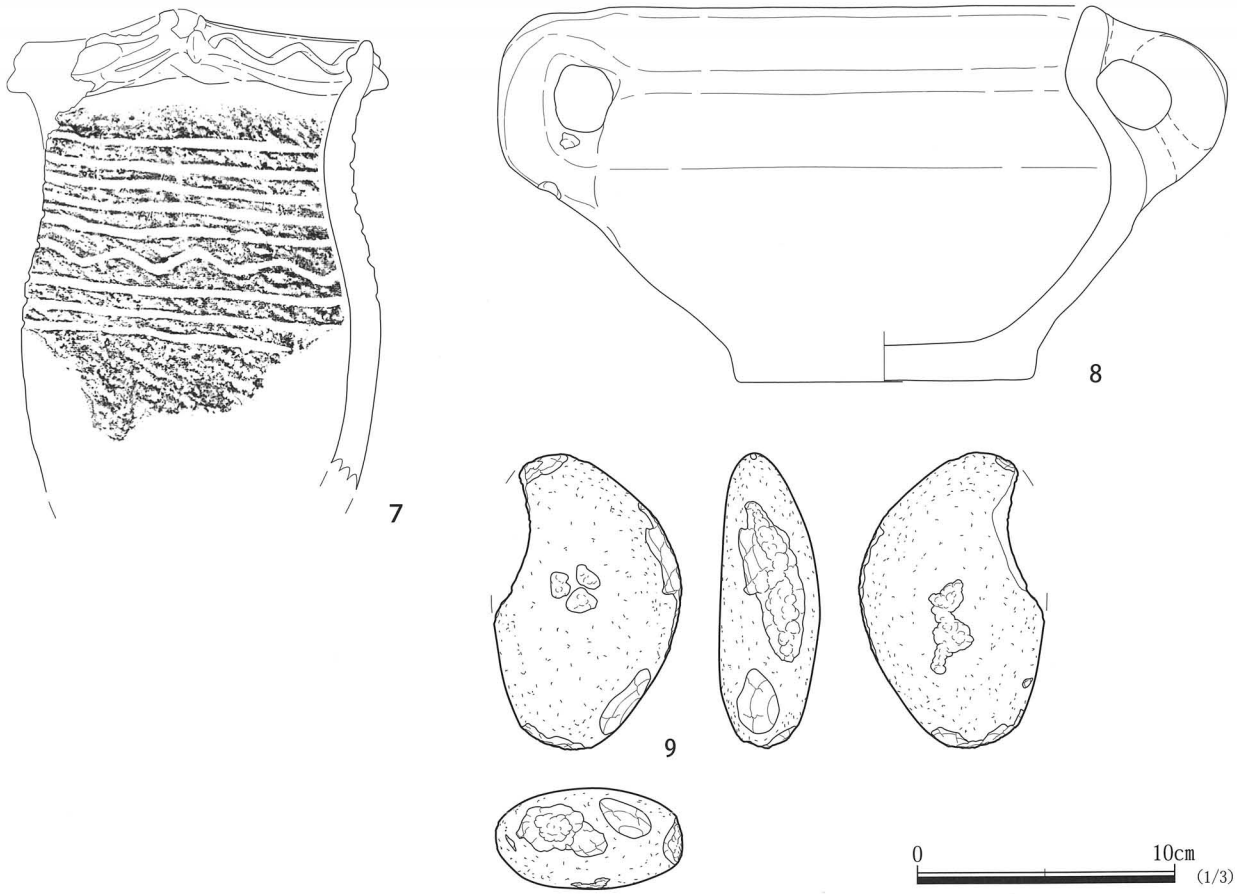
5



6

0 10cm (1/3)

第 76 図　302SK 出土遺物 2



第 77 図　302SK 出土遺物 3

表 37　302SK 出土　土器観察表

番号	遺構 NO.	層位	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器面調整	時期 (形式)	備考（接合関係）
1	302SK	No. 116	深鉢	350	(247)			口縁～胴部	波状口縁（4頂）。口縁部は隆帯による三角形区画が施される。頸部は断面が三角状の隆帯が横位に巡る。地文縄文（単節RL胴部縦位）。	阿玉台Ⅳ式	304SK出土遺物と接合 胎土：金雲母中。
2	302SK	3層一括	深鉢	270	(360)			口縁～胴部	波状口縁（3頂）。口縁部は沈線を沿わせた隆帯が施される。隆帯内は沈線により波文が施される。胴部は隆帯が貼付けられる。地文縄文（単節RL横位）。	阿玉台Ⅳ式	胎土：金雲母多。
3	302SK	1BL	深鉢	〈210〉	(143)			口縁～胴部	口縁部は沈線による横位文、波文が施される。胴部は沈線による横位文、懸垂文、波文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅠ式	
4	302SK	No. 102	深鉢	165	(293)		196	口縁～胴部	口縁部把手1箇所 。把手にはキザミが施される。口縁部は隆帯貼付。胴部は沈線により懸垂文、横位文、波文、渦巻などが描かれる。地文縄文（単節LR縦位）。	加曾利EⅠ式	
5	302SK	No. 101	深鉢	154	163	86	〈192〉	口縁～底部	口縁部橋状把手4単位。口縁上端部から口縁部には沈線やキザミ、条線が施される。胴部は条線が施される。	加曾利EⅠ式	
6	302SK	No. 117	深鉢	〈142〉	191	87	〈165〉	口縁～底部	口縁上端部無文。地文縄文（単節RL縦位）。		
7	302SK	1BL	深鉢	〈133〉	(172)		141	口縁～胴部	口縁部は隆帯貼付による波文が施される。胴部は上半に沈線による横位文、波文が施される。地文縄文（単節RL横位）。	大木8a式～8b式	
8	302SK	No. 100	鉢	200	149	116	285	口縁～底部	口縁部から頸部にかけ、橋状把手が2単位で施される。無文。		把手は焼成前に穿孔3箇所、くぼみ2箇所。

表 38　302SK 出土　石器観察表

番号	遺構No.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	302SK	1BL	砕片	20	12	7	1	石英		100%		
9	302SK	覆土	敲石	118	73	40	(433)	砂岩		80%	両面中央・片側面・上下端部に敲打痕　被熱	
	302SK	覆土	磨石・敲石	108	61	39	385	ホルンフェルス		100%	両面の一部に磨痕　上下端部に敲打痕	
	302SK	覆土	剥片？	31	22	13	6	石英		100%		

304SK（第 78・79 図、表 39・40）

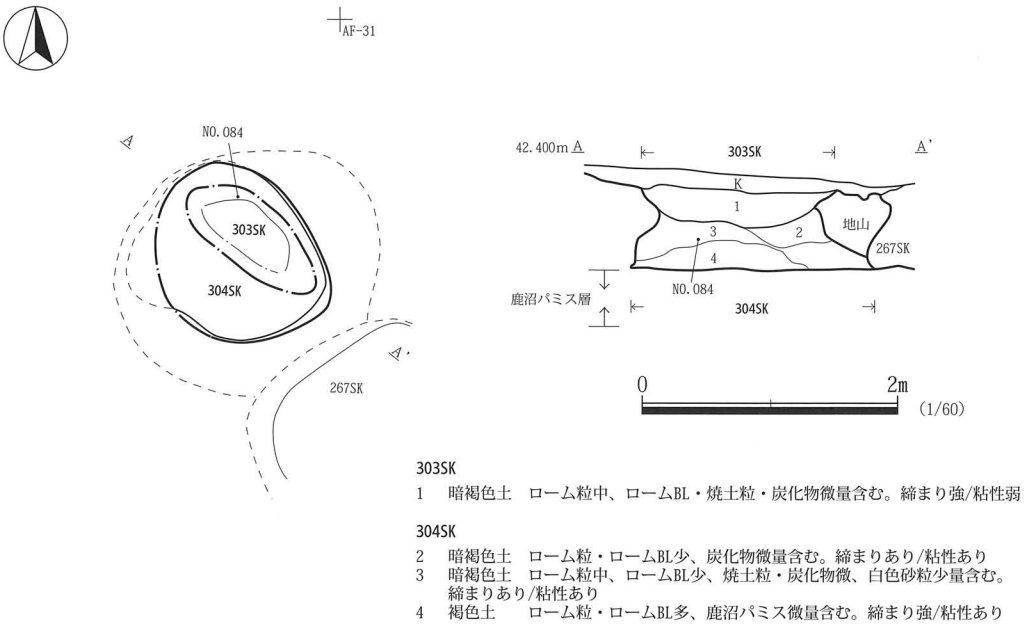
位置　A 2 区南東部北西寄り、AF-30 グリッドに位置する。

重複関係　267SK に南東壁を、303SK に上部を切られる。当初 303SK と同一遺構として捉えていたが、第 2・3 層上部が硬化する点などから別遺構とした。

規模と平面形　残存する開口部は長径 0.80 m、短径 0.44 mの楕円形、底面は径 1.92 ～ 2.14 mの円形で、深さは 0.32 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。断面形は上部を削平されているがフラスコ状を呈すると推定される。

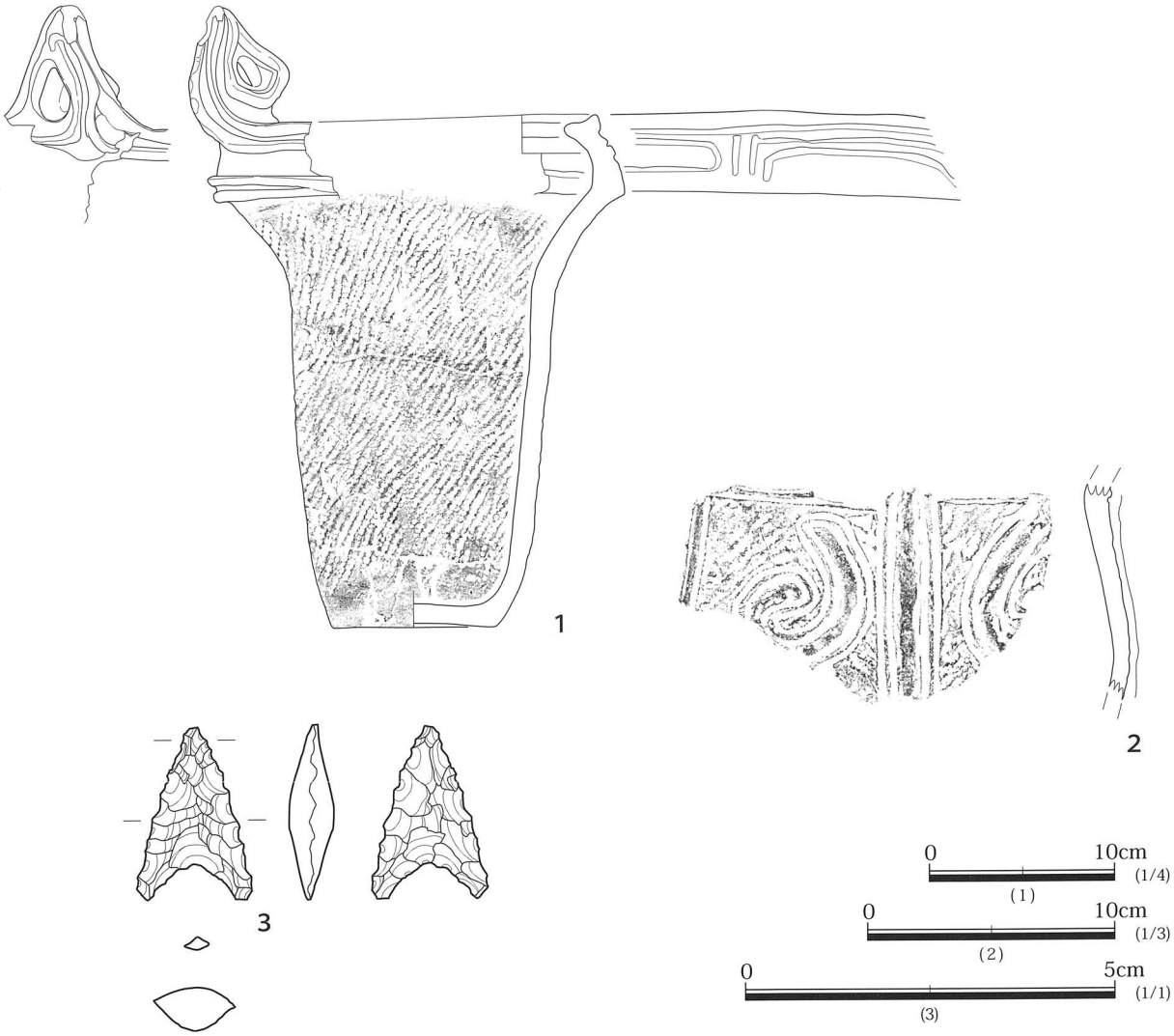
底　底面は平坦である。硬化面は確認されなかった。



303SK
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性弱

304SK
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物微、白色砂粒少量含む。締まりあり/粘性あり
4　褐色土　ローム粒・ロームBL多、鹿沼パミス微量含む。締まり強/粘性あり

第 78 図　303SK・304SK 平面図・断面図



第 79 図　304SK 出土遺物

表 39　304SK 出土　土器観察表

番号	遺構 NO.	層位	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	部位	文様・器面調整	時期 (形式)	備考（接合関係）
1	304SK	No. 084	深鉢		(342)	90	(235)	口縁～底部	口縁部把手1箇所。口縁部隆帯貼付。沈線による懸垂文、横位文が施される。地文縄文（単節RL縦位）。底部は綱代痕有り。	加曾利E Ⅰ式	
2	304SK	覆土	深鉢		(83)			胴部	胴部は沈線を沿わせた隆帯で懸垂文、渦巻が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利E Ⅰ式	

表 40　304SK 出土　石器観察表

番号	遺構 No.	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
3	304SK	6BL	石鏃	24	16	6	2	チャート		100%	凹基無茎	
	304SK	8BL	蜂の巣石	140	99	36	562	砂岩		100%	半割礫　原礫面に浅い凹み部4	
	304SK	覆土	掻器	40	59	18	41	砂岩		100%	半円形　縁辺に二次加工	

覆土　3層に分層された。第3・4層は遺構底面袋状に広がる部分に堆積しており、遺構中央部分がやや盛り上がるが、意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第3層より遺物が多く出土している。堆積状況から人為堆積と考えられる。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は3点である。

1は、口縁部に把手が施される。口縁部は、把手付近は隆帯貼付けにより、把手の向かい側は沈線により文様が施される。

出土遺物に遺構間接合が認められた。阿玉台Ⅳ式土器の口縁部が302SK出土遺物と接合した（第75図1）。

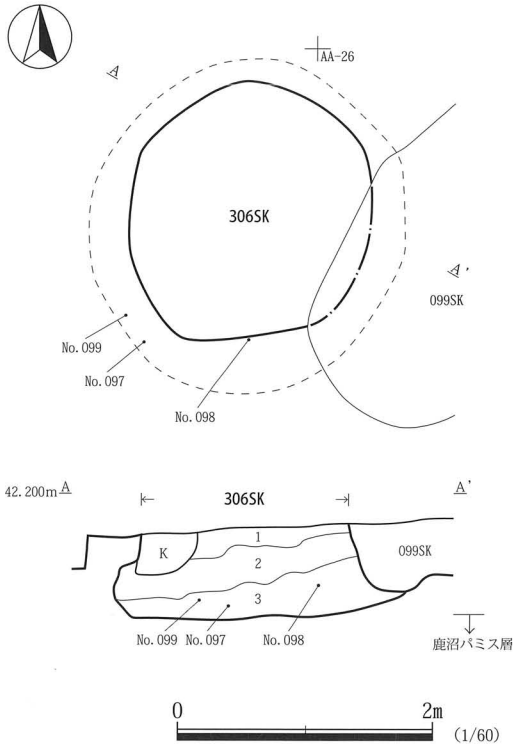
3はチャート製の石鏃である。平面形が二等辺三角形を呈し、基部に抉りを有する。石器縁辺は表裏両面からの連続的な調整剥離によって波状に起伏する。石器中央部はやや分厚である。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

306SK（第80・81図、表41）

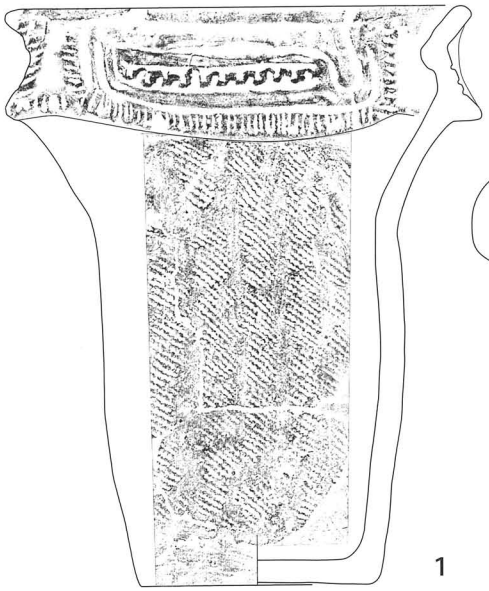
位置　A2区北西部、AA-25、AA-26グリッドに位置する。

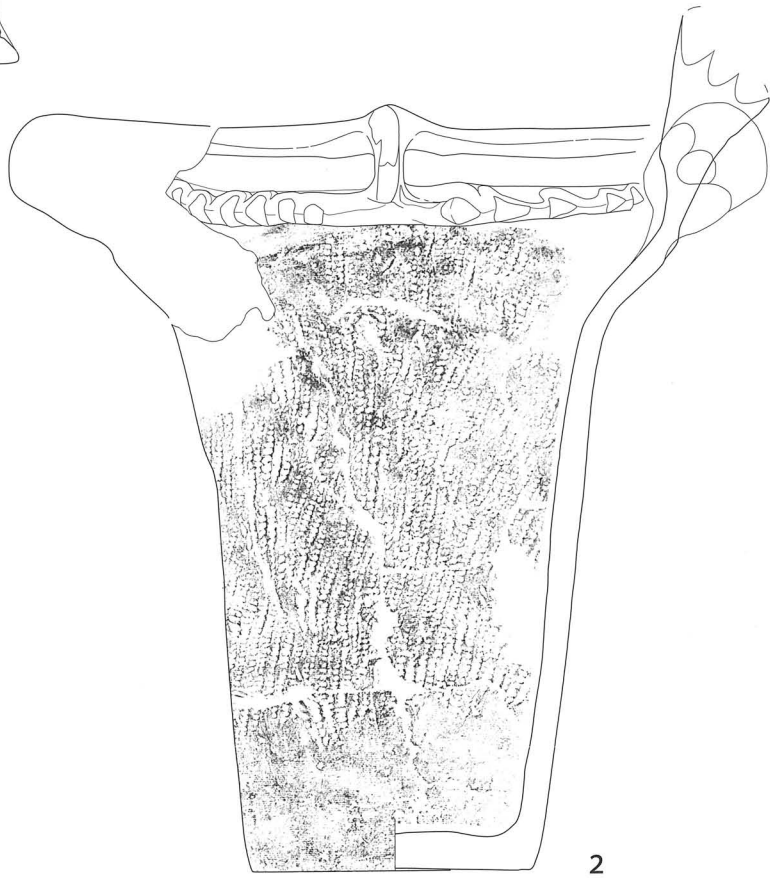
重複関係　099SKに南東壁を切られる。

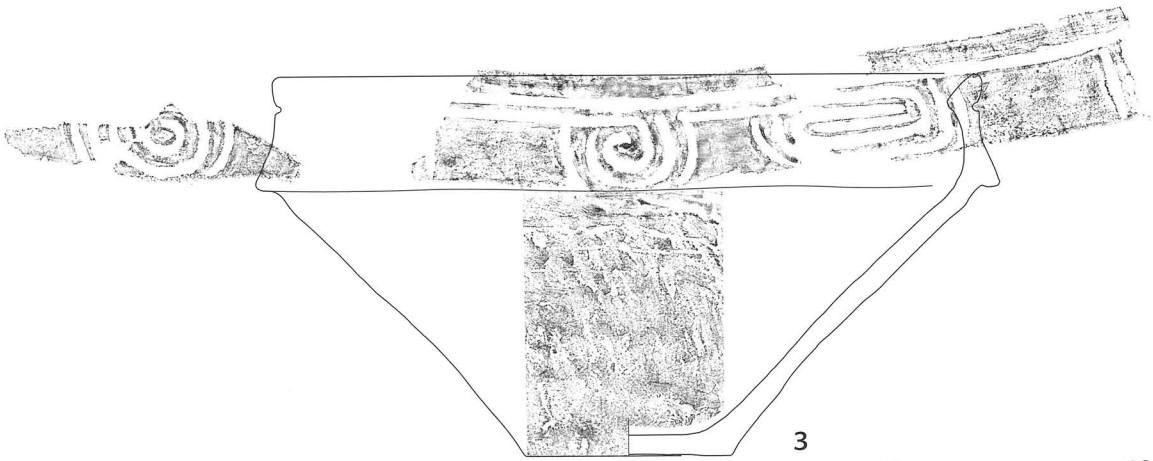


306SK
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物少、鹿沼パミス微量含む。
　　締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・炭化物少量含む。
　　締まりあり/粘性あり

第80図　306SK平面図・断面図







0 10cm (1/3)
(1・2)
0 10cm (1/4)
(3)

第 81 図　306SK 出土遺物

規模と平面形　残存する開口部は長径 2.12 m、短径 1.72 mの楕円形、底面は長径 2.61 m、短径 2.39 mの楕円形で、深さは 0.69 mである。

壁　壁面は開口部に向い傾斜する。断面形は袋状を呈する。

底　底面は西壁面に向かい低くやや傾斜する。硬化面は確認されなかった。

覆土　3 層に分層された。第 1 ～ 3 層は西側へやや傾斜するがほぼ水平に堆積する。堆積状況、ローム・炭化物の含有状況などから人為堆積と考えられる。第 3 層から多く遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。遺構底面は、鹿沼パミス層直上に位置する。

遺物　実測遺物は 3 点である。

1 は、口縁部に隆帯による区画が施され、区画内には交互刺突文が施されいわゆる中峠式土器である。

2 は、波状口縁である。残存する口縁部から 4 単位と推測される。口縁部には隆帯が巡り隆帯上には、下から押し上げるように指頭圧痕が施される。

時期　出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。

表 41　306SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	306SK	No. 097	深鉢	174	230	92		口縁～底部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で区画が施される。区画内は交互刺突文が施される。隆帯にはキザミが施される。地文縄文（単節LR縦位）。	中峠式	
2	306SK	No. 099	深鉢	(270)	304	110		口縁～底部	波状口縁（4頂か）。波頂部橋状把手。口縁部隆帯には連続指頭圧痕が施される。地文縄文（単節RL縦位）。		
3	306SK	No. 098	浅鉢	〈363〉	202	110		口縁～底部	口縁部は沈線で渦巻が施される。体部無文。底部木葉痕有り。		

323SK（第 82・83 図、表 42）

位置　A 2 区南東部南寄り、AH-30 グリッドに位置する。

重複関係　064SK に上部を切られる。064SK と当初同一遺構と捉えたが、覆土の混入物の違いや、064SK の底部の覆土が水平に堆積することなどから別遺構とした。

規模と平面形　開口部は長径 2.10 m、短径 1.62 mの楕円形、底面は径 2.34 ～ 2.46 mの円形で、深さは 0.37 mである。

壁　壁面は開口部に向い内側に傾斜する。上部は削平されているが断面形はフラスコ状を呈すると推測される。

底　平坦である。硬化面は確認されなかった。

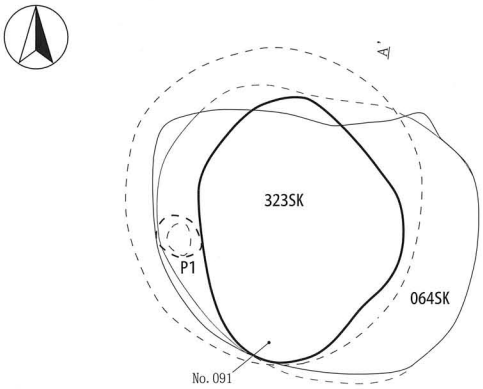
ピット　底面西側からはピットを 1 基検出した。P1 は、径 0.29 ～ 0.38m の円形で、深さは 0.56m である。

覆土　3 層に分層された。第 1 ～ 3 層は、遺構底面袋状に広がる部分に水平に堆積しており意図的に埋土を遺構壁面にまで入れたと推定される。第 3 層からは遺物が出土している。焼土・炭化物を多く含む層は確認されなかった。堆積状況などから人為堆積と考えられる。遺構底面は、鹿沼パミス層直下に位置する。

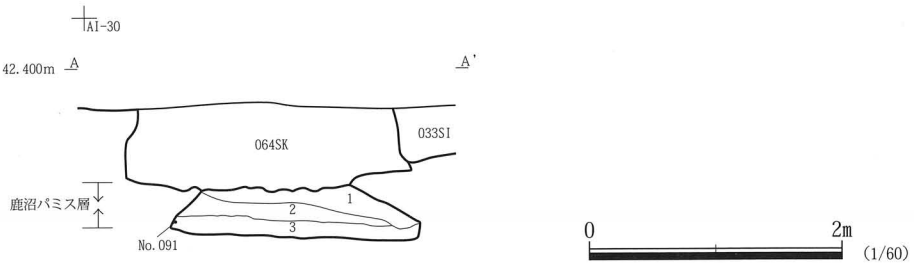
遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は、遺構底面と壁面の間から出土しており、意図的に廃棄したと推定される。口縁部が折り返されている。胴部は無文だが、縦方向のナデ調整により輪積み痕を消している。

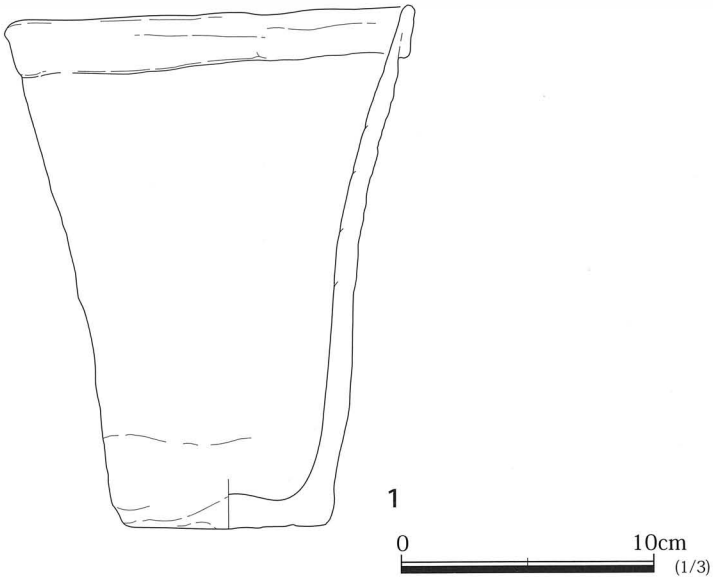
時期　遺構の切合などから縄文時代中期中葉と考えられる。



323SK
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・炭化物少、黒ボク土中量含む。締まりあり/粘性あり
2　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性強



第 82 図　323SK 平面図・断面図



第 83 図　323SK 出土遺物

表 42　323SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	323SK	No.091	深鉢	157	208	79		口縁～胴部	口縁部折り返し。胴部無文。		胴部縦方向に調整の痕が見られる。

土坑

056SK（第 84・85 図、表 43）

位置　A2 区南東部、AH-31、AI-31 グリッドに位置する。

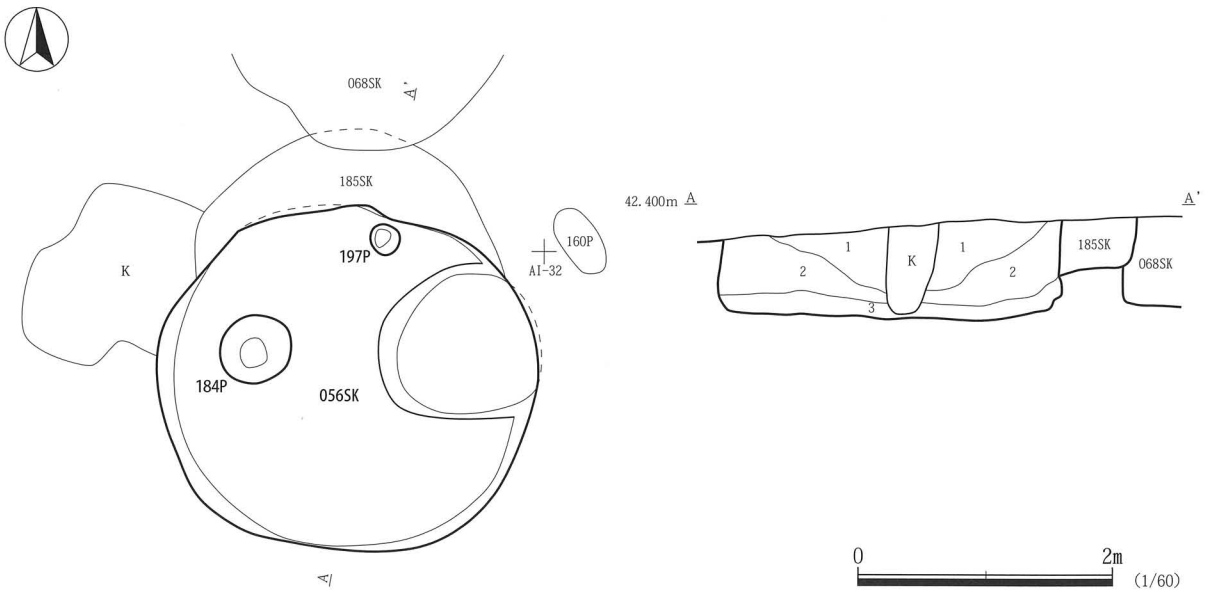
重複関係　185SK の南壁を切る。遺構中央部分は攪乱を受ける。当初 184P・197P を別遺構として捉えていたが、覆土が類似する点などから、本遺構に伴うピットとした。

規模と平面形　開口部は径 2.77 ～ 2.98 mの円形、底面は径 2.70 ～ 2.75 mの円形で、深さは 0.72 mである。

壁　南壁と東壁の一部でややオーバーハングする。

底　底面は細かい凹凸がみられるが、概ね平坦である。また、東側の底面の一部が窪むが、覆土に変化が見られなかった点などから本遺構に伴うものと判断した。

ピット　2 基検出した。184P は径 0.54 ～ 0.56 mの円形、深さは 1.01 m、197P は、径 0.23 ～ 0.24 mの円形、



056SK
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒微、炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。
　　締まりやや強/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、炭化物微、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり

第 84 図　056SK 平面図・断面図

深さは 0.42 mである。

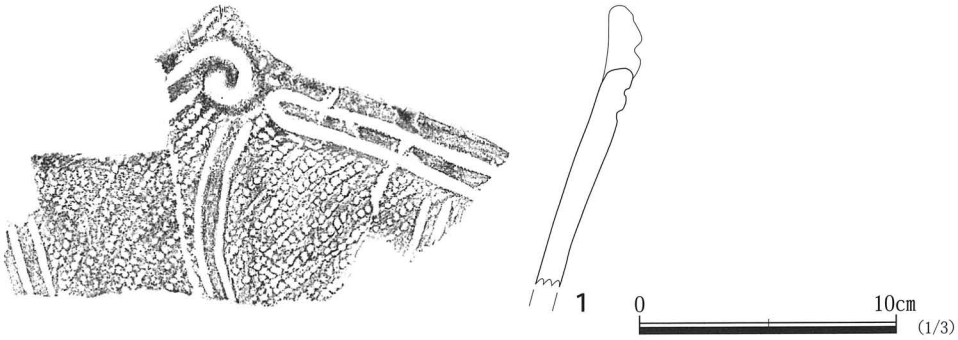
覆土　3 層に分層された。第 1 層は中央部分に向かい傾斜する。第 3 層は遺構底面にほぼ水平に堆積する。第 1 ～ 3 層は堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は、波頂部に沈線による渦巻などが施される。胴部には弧を描く 2 本一組の沈線が施される。沈線間には磨り消しが施される。

図示はしていないが、加曾利ＥⅡもしくはⅢ式土器の口縁部破片が 8 点出土している。

時期　1 や出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 85 図　056SK 出土遺物

表 43　056SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	056SK	覆土	深鉢		(117)			口縁～胴部	波状口縁。口縁部外面に渦巻、口縁部に沈線が施される。胴部は2本一組の沈線による懸垂文が施される。懸垂文間は磨り消し。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	

060SK（第 86・87 図、表 44）

位置　Ａ 2 区東部中央、AG-30、AG-31、AH-30、AH-31、グリッドに位置する。

重複関係　226SK の北西壁を切る。223SK に南壁上部を切られる。

規模と平面形　開口部は径 1.44 mの円形、底面は長径 1.14 m、短径 0.98 mの楕円形を呈すると推測される。深さは 0.31 mである。

壁　開口部に向かい緩やかに傾斜し立ち上がる。

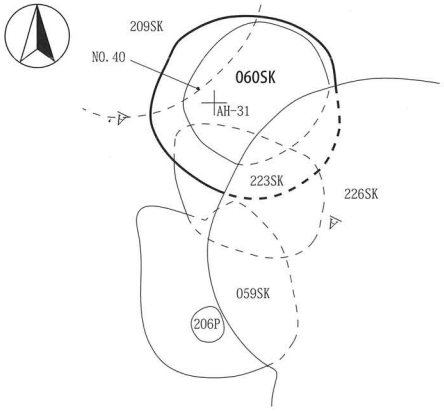
底　底面は壁面に向かい緩やかに立ち上がる。

覆土　単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

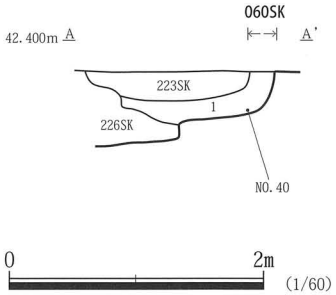
遺物　実測遺物は 2 点である。

2 は、口縁部に円形、楕円形の区画が施され、区画内は沈線が施される。胴部には、懸垂文が施されるが、懸垂文間に磨り消しは見られない。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。

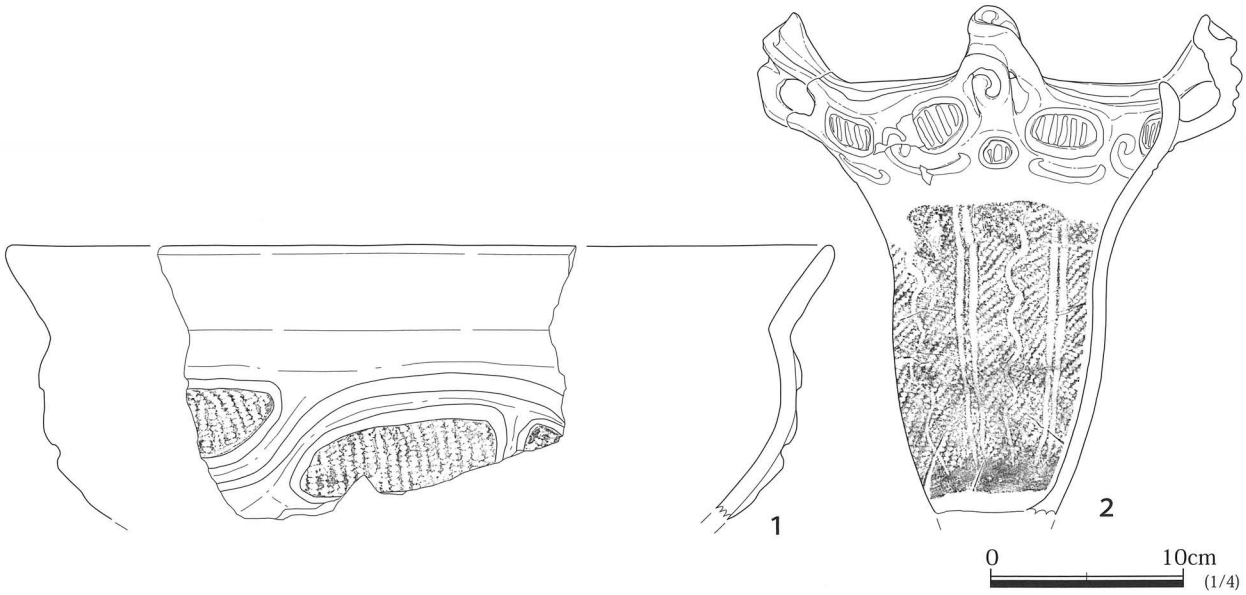


060SK
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり



AI-31

第 86 図　060SK 平面図・断面図



第 87 図　060SK 出土遺物

表 44　060SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	060SK	1BL	深鉢	〈436〉	(145)			口縁～胴部	口縁部無文帯下は沈線を沿わせた隆帯により区画が施される。区画内は縄文(単節RL横位)が施される。	加曾利EⅡ式もしくはⅢ式	
2	060SK	No.040	深鉢	〈170〉	(169)		〈253〉	口縁～胴部	波状口縁(4頂)。波頂部直下眼鏡状把手。頂部隆帯渦巻。口縁部沈線による楕円形、円形区画、渦巻、懸垂文が施される。胴部は2本一組の沈線による懸垂文。沈線による波文が施される。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅡ式	

147SK(第 88・89 図、表 45・46)

位置　A2 区北東部隅、AG-33 グリッドに位置する。

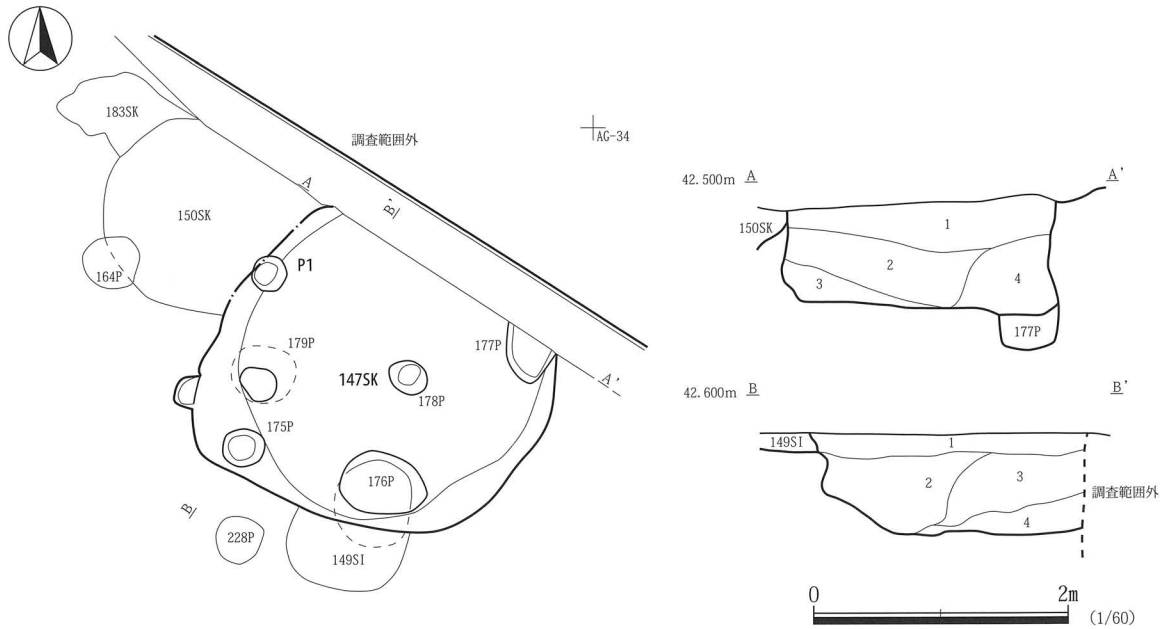
重複関係　北東壁は調査区外へ延びる。149SI の北東部、150SK の南東壁を切る。底面からは 175 ～ 179P を検出し、現地では別遺構としたが、検出状況、遺構覆土が類似する点などから同一遺構と推定される。

規模と平面形　確認された開口部は長径 2.61 m、短径 2.14 mの楕円形、底面は長径 2.31 m、短径 2.03 mの楕円形で、深さは 0.76 ～ 0.86 mである。

壁　南壁以外ほぼ垂直に立ち上がる。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

ピット　6 基を検出した。P1・175P・177P ～ 179P は、長径 0.28 ～ 0.66 m、短径 0.24 ～ 0.37 mの楕円形で、



147SK
1　黒褐色土　ローム粒少量含む。締まり強/粘性強
2　灰褐色土　ローム粒中、ロームBL少、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性強
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少量含む。締まり強/粘性強
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性強

第 88 図　147SK 平面図・断面図

深さは 0.18 ～ 0.61 mである。P176 は、長径 0. 68 m、短径 0.49 mの楕円形で、深さは 0.98 mである。

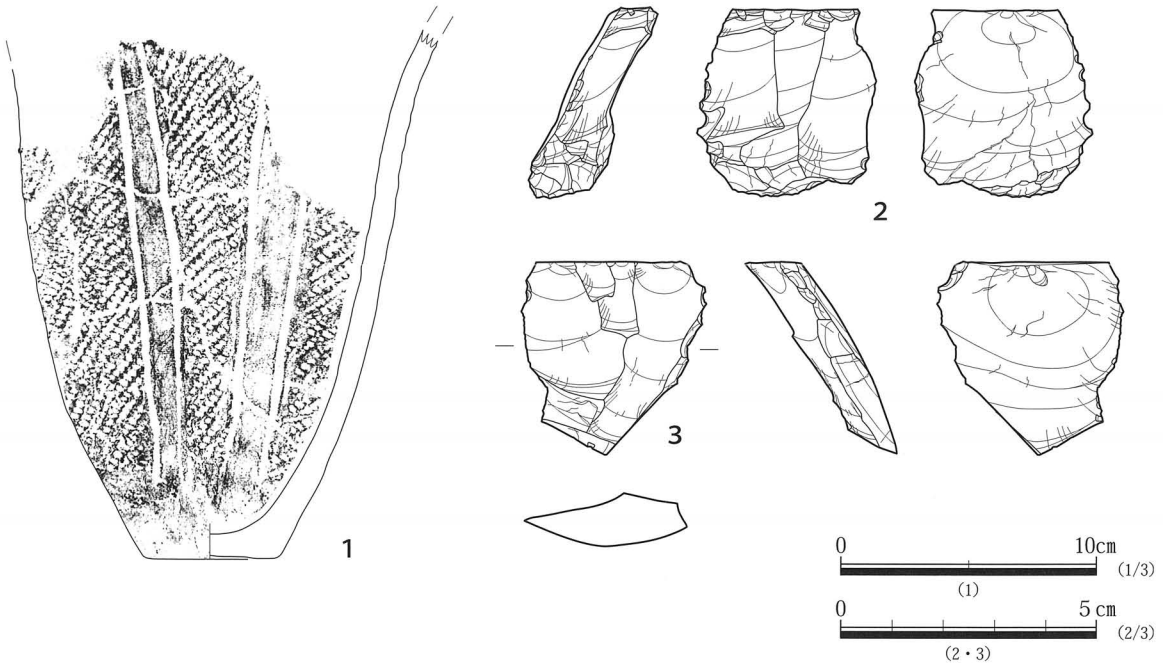
覆土　4 層に分層された。第 1 層はほぼ水平に堆積する。第 2 層は遺構西から南かけて堆積し、第 3・4 層は東から北にかけて堆積し、交互に埋土が入れられたと考えられる。堆積状況から、第 1 ～ 4 層は人為堆積層と考えられる。

遺物　実測遺物は 3 点である。

1 は、胴部に沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消しが行なわれる。

2、3 はチャート製の二次加工を有する剥片である。2 は下端部に腹面側から調整剥離が施されている。両側縁には微小剥離が認められる。3 は右側縁を折断したのち、腹面側からの急角度調整を行なっている。左側縁に微小剥離が認められる。

時期　遺構の切り合い、1 から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 89 図　147SK 出土遺物

表 45　147SK 出土　土器観察表

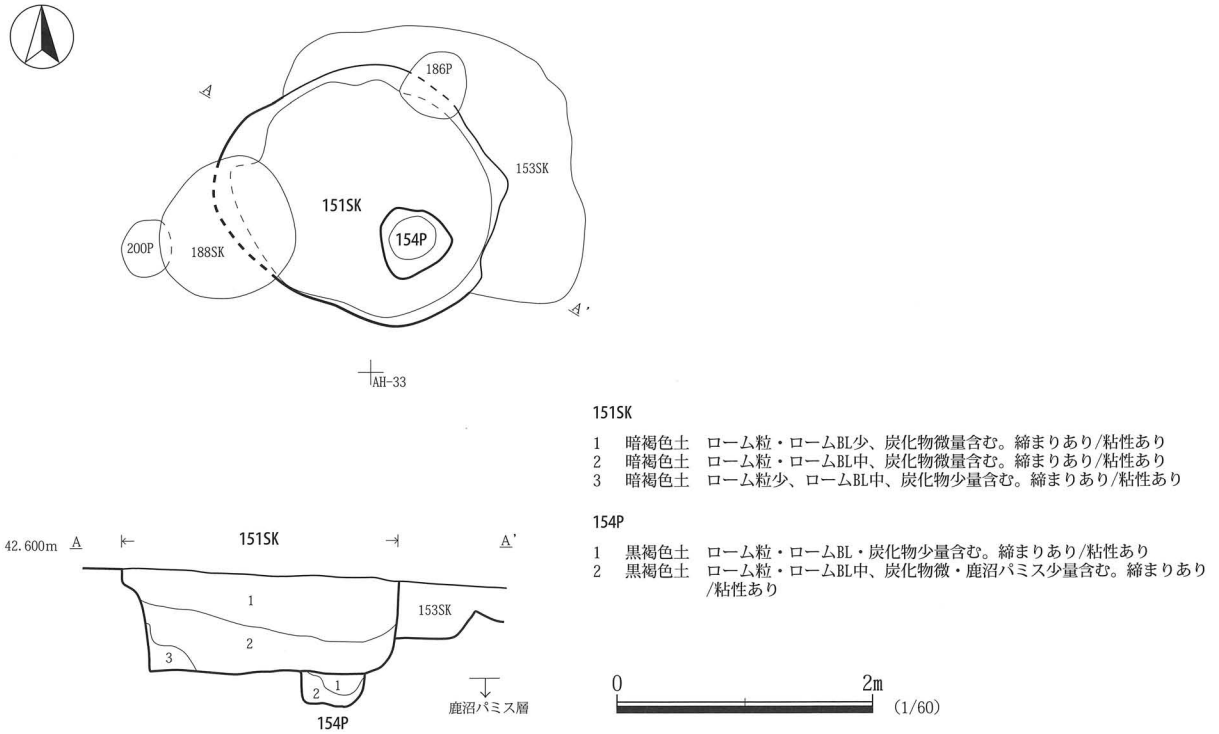
番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	147SK	覆土	深鉢		〈210〉	50		胴部～底部	胴部は2本一組の沈線による懸垂文を施され、懸垂文間を磨り消し。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅢ式	

表 46　147SK 出土　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	147SK	覆土	微小剥離を有する剥片	(33)	(28)	(7)	(4)	チャート		30%	左側縁に微小剥離	
	147SK	覆土	微小剥離を有する剥片	(39)	35	7	(12)	チャート		40%	上下端部欠損　両側縁に微小剥離	
2	147SK	覆土	二次加工を有する剥片	38	35	14	20	チャート		100%	下端部に腹面から調整剥離　両側縁に微小剥離	
	147SK	覆土	剥片	47	(42)	13	(29)	チャート		60%	右半部欠損	
	147SK	覆土	剥片	(31)	(28)	9	(9)	チャート		40%	大部分欠損	
3	147SK	覆土	二次加工を有する剥片	38	37	11	14	チャート		100%	右側縁に腹面から調整剥離　左側縁に微小剥離	

151SK（第 90・91 図、表 47）

位置　A 2 区南東部、AG-32、AG-33 グリッドに位置する。



第 90 図　151SK・154P 平面図・断面図

重複関係　153SK の南西壁、186P の上部、188SK の東壁を切る。底面からは 154P を検出し、現地では別遺構としたが、検出状況などから同一遺構と推定される。

規模と平面形　開口部は長径 2.20 m、短径：2.08 mの円形、底面は長径 1.60 m、短径 1.46 mの円形で、深さは 0.85 mである。

壁　ほぼ垂直に立上がる。

底　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

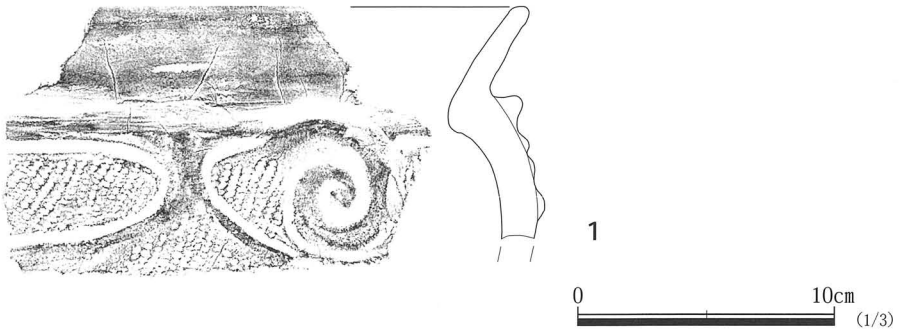
ピット　1 基を検出した。径 0.55 m、深さは 0.25 mである。

覆土　3 層に分層された。第 1 ～ 2 層はほぼ水平に堆積する。第 3 層と 154P の第 1 層は他の層に比べ炭化物を多く含む。堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は、口縁無文帯が外反して立ち上がる。012SK 出土遺物 1 と器形、文様などが類似する。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 91 図　151SK 出土遺物

表 47　151SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	151SK	覆土	深鉢		〈92〉			口縁～胴部	口縁部無文帯。口縁部無文帯下は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施される。地文縄文（単節RL縦位）。	加曾利EⅡ式	

204SK（第 92・93 図、表 48）

位置　A 2 区南東部、AG-31 グリッドに位置する。

重複関係　032SI に北東壁を切られる。201SK に南東壁を切られる。遺構底面から 210P を検出し、当初別遺構と捉えていたが、覆土が他の底面から検出されたピットの覆土と同一である点などから本遺構に伴うピットとした。

規模と平面形　開口部は径 2.35 ～ 2.37 mの円形、底面は径 2.19 mの円形で、深さは 0.36 mである。

壁　壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北側は、032SI に切られ、壁面の立ち上がりは確認できない。

底　底面はほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

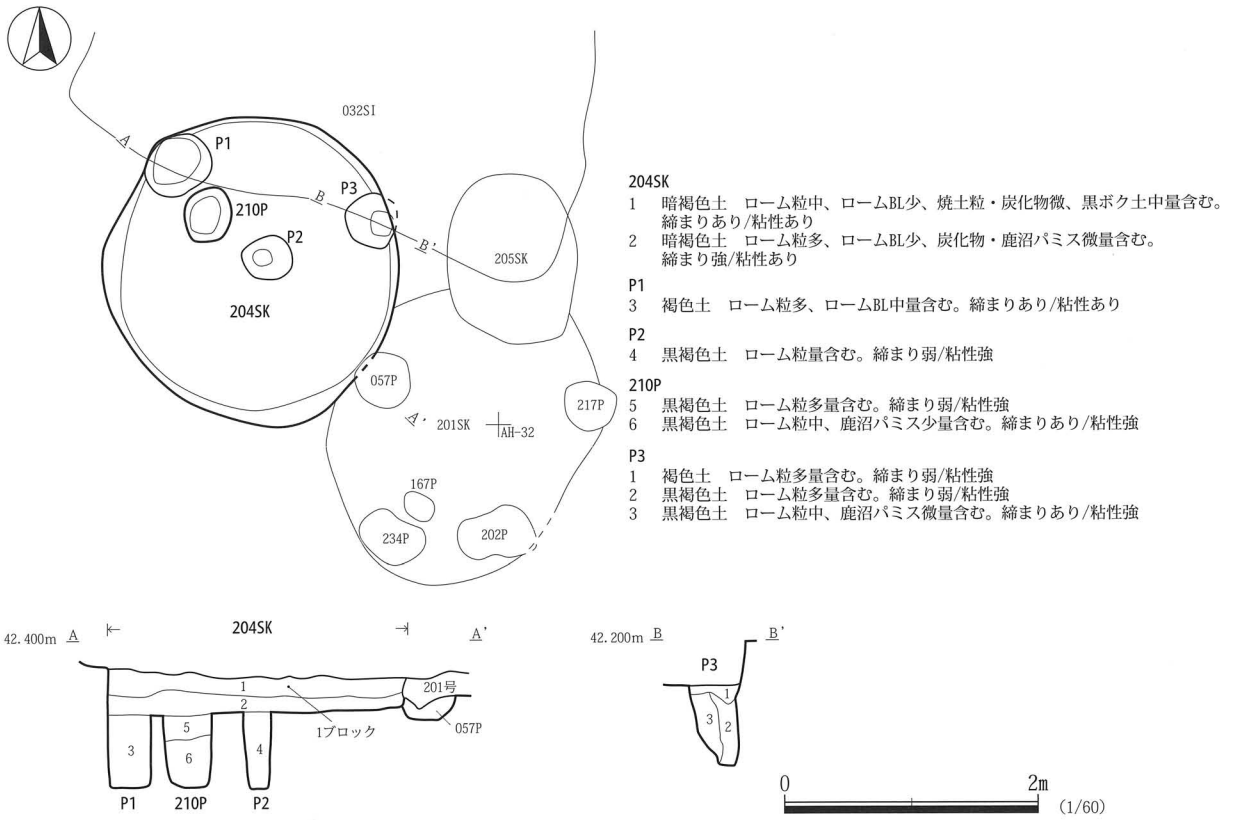
ピット　4 基を検出した。P1 ～ 3、210P は、径 0.53 ～ 0.37 mの円形で、深さは 0.57 ～ 0.61 mである。

覆土　ピットを含めて６層に分層された。第１・２層はほぼ水平に堆積する。P3 の第１層と 210P の第５層は同一である。堆積状況などから人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は１点である。

１は、口縁部に沈線を沿わせた隆帯により渦巻、楕円形区画が施される。胴部は２本一組の沈線により懸垂文が施される。懸垂文間には磨り消しは行なわれない。

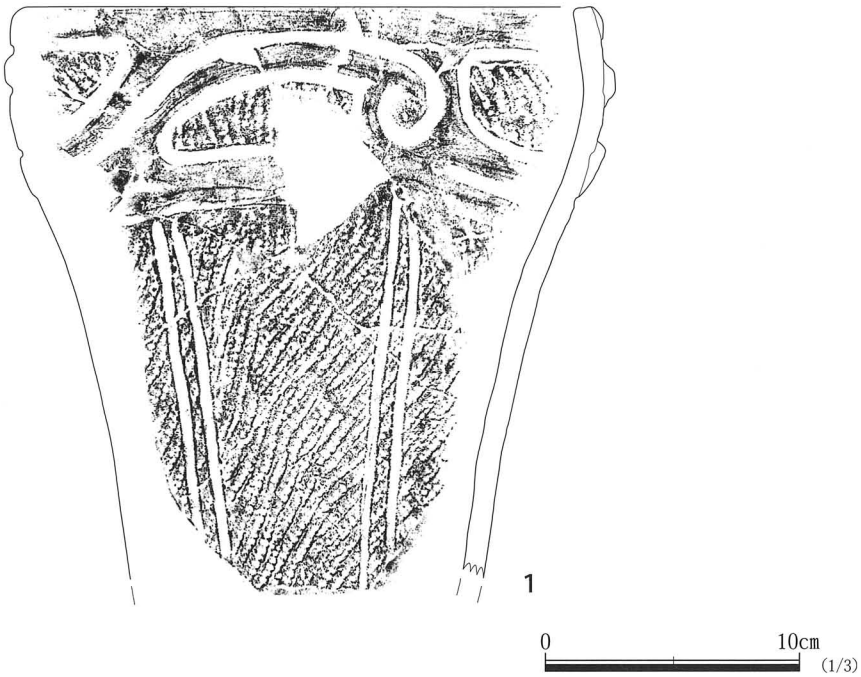
時期　１や出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第 92 図　204SK 平面図・断面図

表 48　204SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考（接合関係）
1	204SK	1BL	深鉢	230	(220)	(13)		口縁～胴部	口縁部は沈線を沿わせた隆帯で渦巻、楕円形区画が施される。胴部は2組の沈線による懸垂文が施される。	加曾利EⅡ式	



第 93 図　204SK 出土遺物

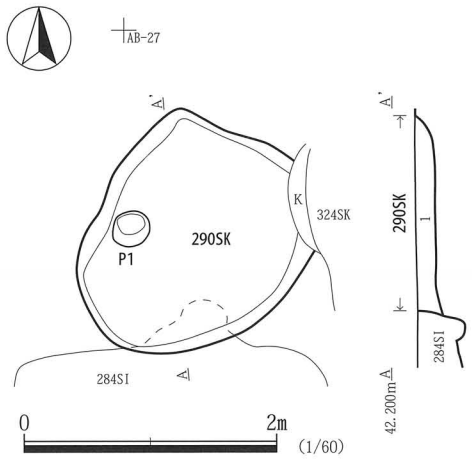
290SK（第 94・95 図、表 49）

位置　A 2 区北西部、AB-26、AB-27 グリッドに位置する。

重複関係　284SI に南東壁を切られる。北東壁に攪乱を受ける。

規模と平面形　開口部は長径 1.96 m、短径 1.63 mの楕円形、底面は長径 1.81 m、短径 1.46 mの楕円形で、深さは 0.13 mである。

壁　壁面は緩やかに立ち上がる。



290SK
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。
　　締まり強/粘性あり

第 94 図　290SK 平面図・断面図

底　底面はほぼ平坦である。

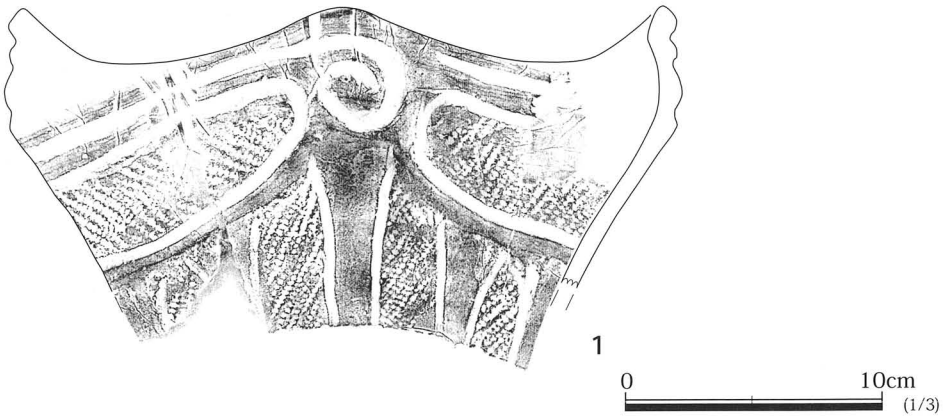
ピット　1基を検出した。P1は、径0.30～0.31 mの円形で、深さは0.84 mである。

覆土　単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

遺物　実測遺物は1点である。

1は、口縁部に隆帯による渦巻、楕円形区画が施される。区画内は縄文が施文されるが残存する3区画の内、1区画が縦位に、2区画が横位に施文されている。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



第95図　290SK出土遺物

表49　290SK出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	文様・器面調整	時期(形式)	備考(接合関係)
1	290SK	覆土	深鉢	252	113			口縁～胴部	波状口縁(4頂)。口縁部は沈線を沿わせた隆帯で、渦巻、楕円形区画が施される。胴部は2本一組の沈線による懸垂文が施され、懸垂文間は磨り消し。地文縄文(単節RL縦位)。	加曾利EⅢ式	口縁部区画内の縄文(単節RL)は横位、縦位両方ある。

325SK(第96・97図、表50)

位置　A2区北西部、AB-26グリッドに位置する。

重複関係　291SKの北東壁を切る。284SIに南東壁上部を切られる。

規模と平面形　残存する開口部は長径1.89 m、短径1.61 mの楕円形、底面は長径1.71 m、短径1.39 mの楕円径で、深さは0.45 mである。

壁　底面から緩やかに立ち上がる。

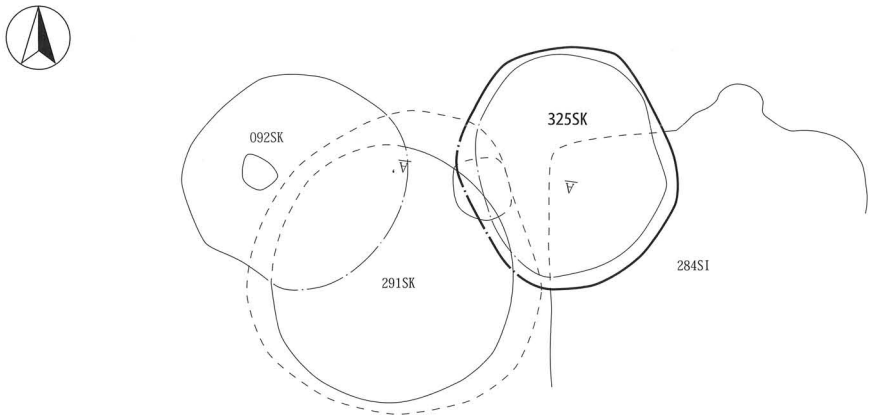
底　一部分のみしか検出しなかったため詳細は不明である。

覆土　単層である。検出した覆土が僅かなため、自然堆積か人為堆積かは不明である。

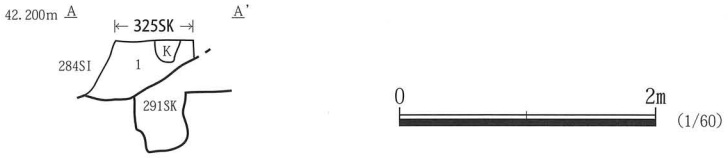
遺物　実測遺物は1点である。

1は、口縁部直下に断面三角状の隆帯が横位に貼付けられる。胴部も同様な隆帯により区画が施される。区画外には磨り消しが施される。

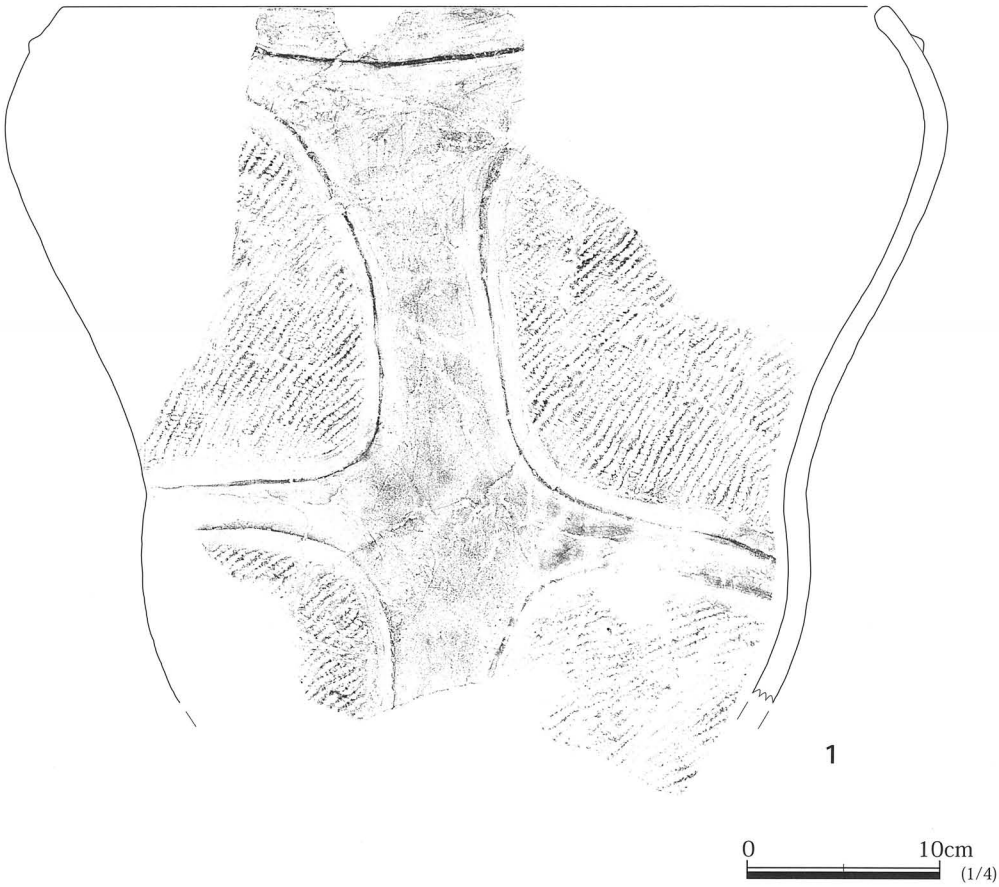
時期　遺構の切合、出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。



325SK
1　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり



第 96 図　325SK 平面図・断面図



第 97 図　325SK 出土遺物

表 50　325SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	最大径（mm）	部位	文様・器面調整	時期（形式）	備考（接合関係）
1	325SK	覆土	深鉢	〈430〉	(368)	(312)		口縁～胴部	口縁部直下に断面三角状の隆帯が貼り付けられる。体部は断面三角状の隆帯により区画され、区画内は縄文（単節RL縦位）が施され、区画外は磨り消しが施される。	加曾利EⅣ式	

332SK（第 98・99 図、表 51）

位置　A 2 区南東部北西寄り、AF-29、AF-30 グリッドに位置する。

重複関係　302SK の北壁を切る。

規模と平面形　残存する開口部は長径 0.93 m、短径 0.82 mの楕円形、底面は長径 0.31 m、短径 0.19 mの楕円形で、深さは 1.60 mである。

壁　底面から緩やかに立ち上がり、壁面中程で括れ、再び開口部に向かい立ち上がる。断面形は不定形を呈する。

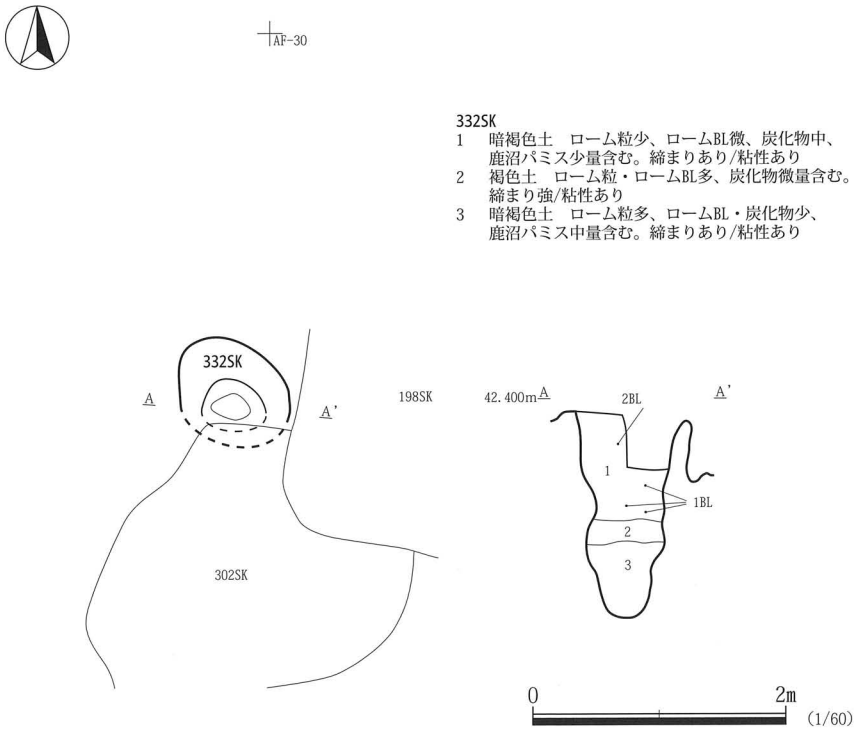
覆土　3 層に分層された。第 1 ～ 3 層はほぼ水平に堆積する。第 1 層は遺物を多く含む。堆積状況、ローム・炭化物の含有状況から人為堆積と考えられる。

遺物　実測遺物は 2 点である。

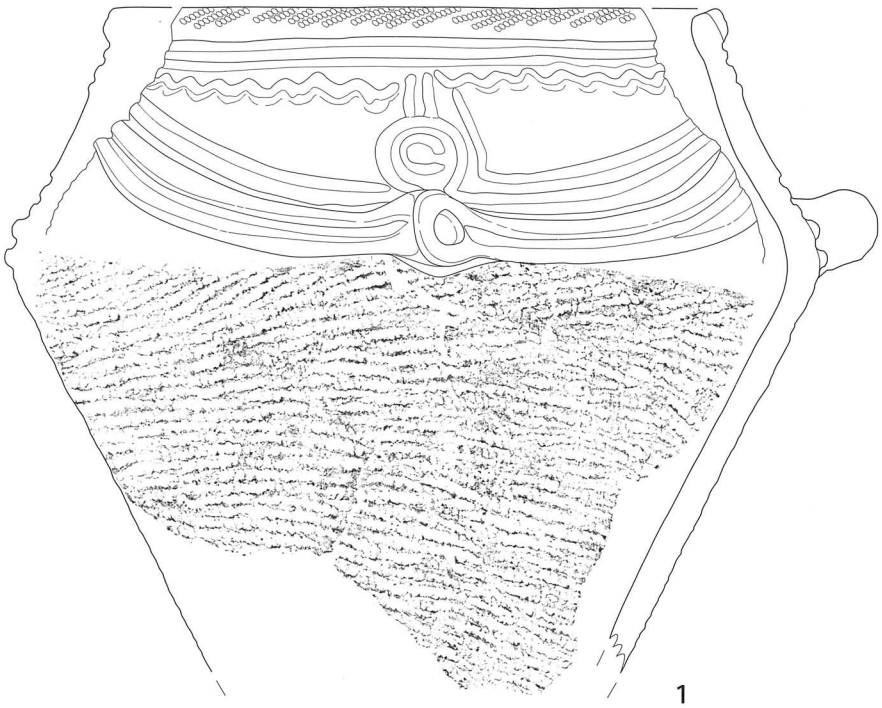
1 は、1 層中部から下部にかけて出土した。器形は、頸部が張り出し、口縁部に向かい内側に傾斜する。

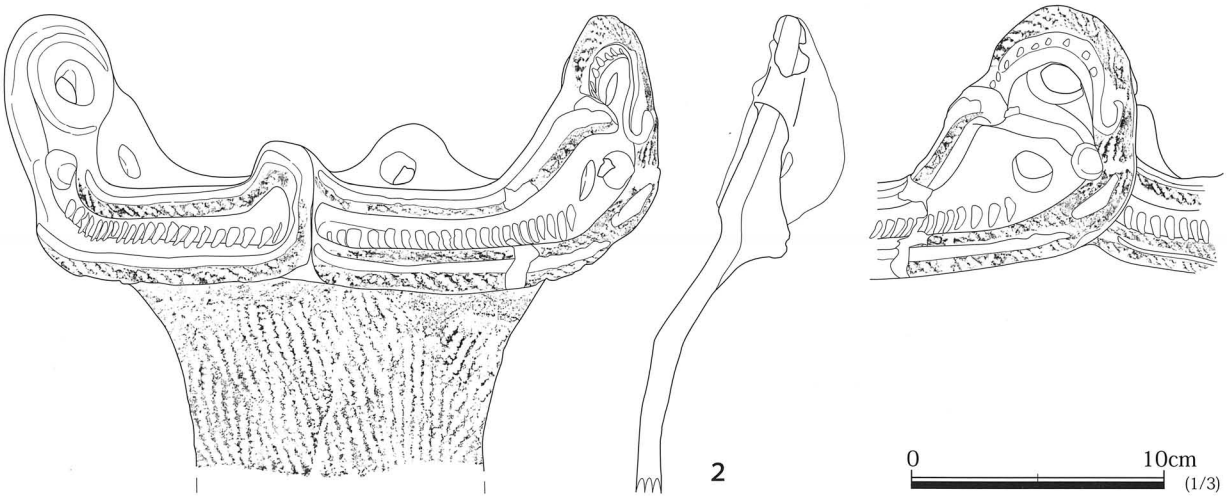
2 は、把手が 2 箇所に施され、隆帯による突起が 2 箇所施される。把手の文様構成は対称である。

時期　遺構の切合、1・2 や出土遺物から縄文時代中期中葉と考えられる。



第 98 図　332SK 平面図・断面図





第 99 図　332SK 出土遺物

表 51　332SK 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	最大径（mm）	部位	文様・器面調整	時期（形式）	備考（接合関係）
1	332SK	1BL	深鉢	〈240〉	(265)			口縁～胴部	口縁上端部は隆帯貼付け。隆帯上に縄文（単節RL縦位）が施文される。口縁部は沈線による横位文、波文等が描かれる。地文縄文。肩部は隆帯貼付による把手が施される。		
2	332SK	2BL	深鉢	200	200			口縁～胴部	口縁部は把手が2箇所に付けられる。口縁は隆帯貼付による区画が施され区画内は刺突文が押される。隆帯上には縄文が施文される（単節LR）。地文縄文（単節LR）。	加曾利EⅠ式	

第3節　その他の遺構の遺物（第100・101図、表52）

ここでは本調査によって出土した石器のうち、各器種において特徴的な遺物を掲載する。なお、観察表に示すように後世の遺構覆土内や攪乱からの出土遺物も含まれるが、13以外は縄文時代の遺物として扱う。

1はチャート製の石鏃である。平面形は木葉形を呈する。基部はわずかに突き出し、茎を有するように整形されている。

2、3はチャート製の石鏃未製品である。2は原礫面を残す素材を用いて、縁辺全周に調整が施されている。調整剥離はほぼ器面全体に及んでいる。3は両側の長辺に沿って連続的な調整剥離が認められ、二等辺三角形状に整形されている。器面に素材剥片の打瘤部を一部残している。

4はメノウ製の石錐である。小形の製品で木葉形を呈する。石器両面に微細な調整が施されている。先端部に擦痕と思われる器面の荒れが認められる。

5はチャート製の石核である。一部に原礫面を有する。剥離によって形成された平坦面を打面として最終剥離作業を行なっている。

6はホルンフェルス製の打製石斧である。平面形は撥形を呈する。両側縁は調整剥離によって整形されている。刃部は両刃で、研磨によって作出され、刃部には擦痕が認められる。また、両側縁の中央部やや基部寄りには剥離のつぶれが認められる。

7は変質ドレライト製の磨製石斧である。定角式とされる規格性が認められる製品である。表裏面と両側面の間に入念な面取り加工が施され、断面は隅丸長方形を呈する。刃部は蛤刃である。器面に不規則な擦痕、刃縁に微細な刃こぼれが認められる。

8は角閃岩製の磨製石斧である。小形で器厚は薄い。刃部は両刃で、平面形は弧状を呈する。刃部裏面には調整痕と思われる2面の磨痕が残る。刃縁に微細な刃こぼれが認められる。

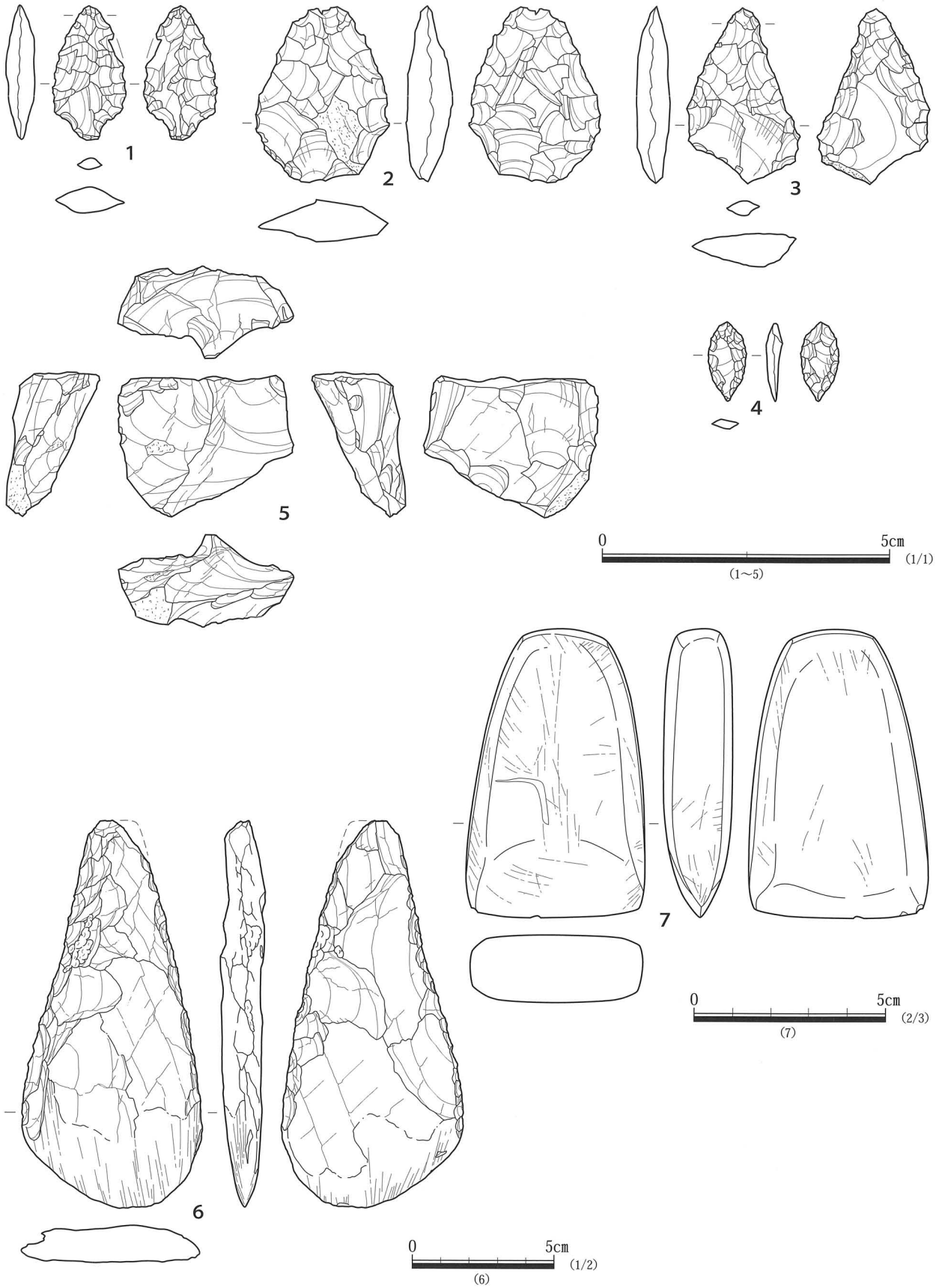
9はホルンフェルス製の磨製石斧である。平面形は楕円形を呈する。素材である扁平な楕円礫の形状を生かすような加工が施され、基部および胴部中央は未調整である。側縁には調整剥離と部分的な研磨加工、刃部には片刃を作り出すよう片面に顕著な研磨加工が施されている。刃縁は丸ノミ状に屈曲する。左側面に微細なつぶれが認められる。

10は粘板岩製の磨製石斧である。平面形は短冊形を呈する。右側面に擦り切り技法による製作の痕跡を残す。刃部は片刃で、刃縁には微細な刃こぼれが確認できる。表面には石器長軸に平行する多数の擦痕、裏面には斜行する擦痕と器面の剥落が認められる。

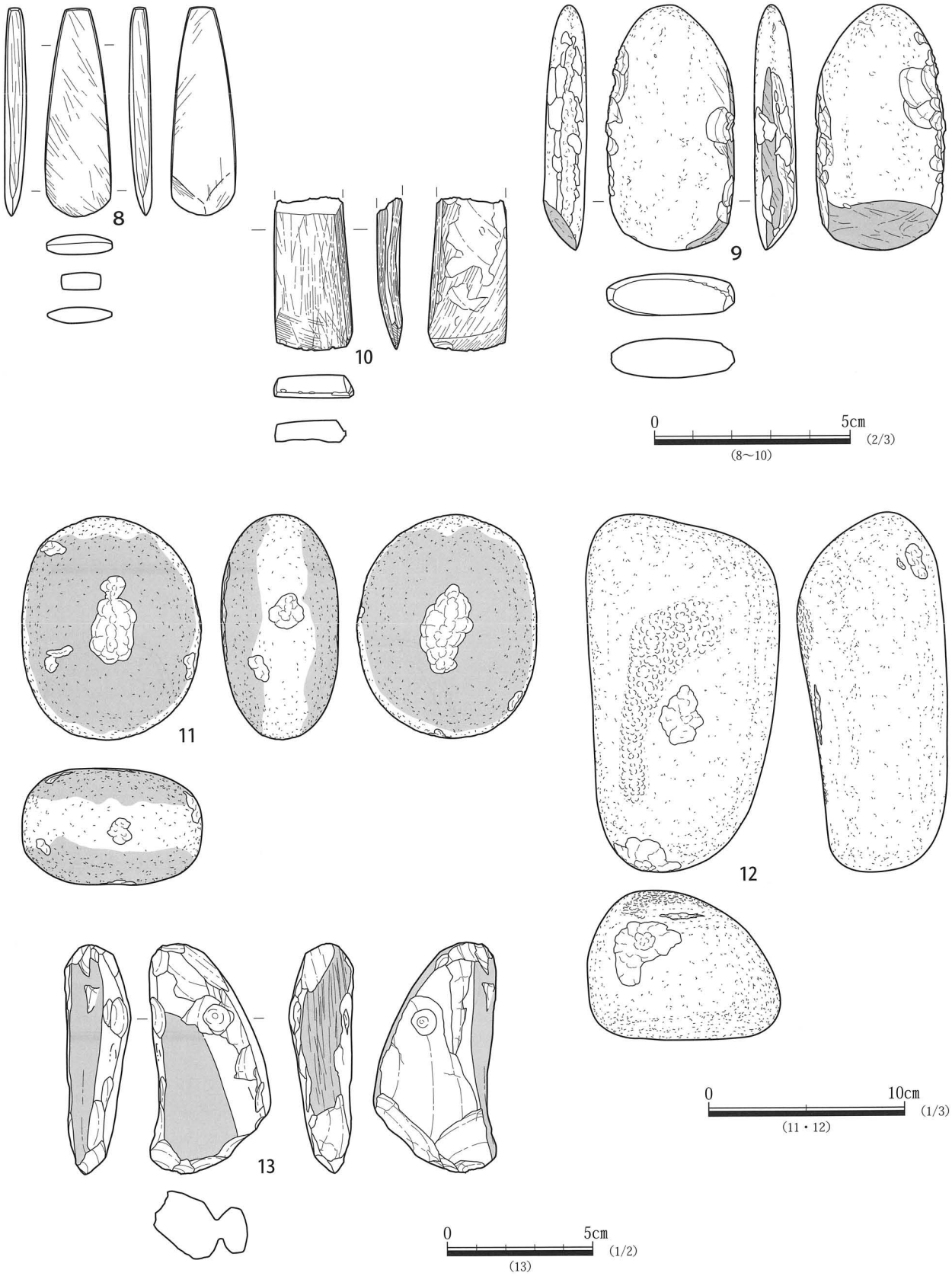
11は安山岩製の磨石・敲石である。平面形は楕円形を呈する。表裏面の大部分に磨痕が残る。敲打痕は表裏面の中央部、右側面および下端部に認められる。

12は砂岩製の敲石である。表面の中央部に敲打痕、その周辺の突端部には微細なつぶれが認められる。下端部と右側面上部には敲打痕が認められ、下端部は器面が剥落している。重量は約2000 gを測り、裏面が平坦で安定することから、台石として使用された可能性も考えられる。被熱により赤色変化している。

13は砂岩製の石製品である。器種、帰属時期は不明である。表面、左右側面に磨痕を残す。裏面は器面が剥落している。右側面には石器長軸に平行する擦痕が認められる。表裏面の各1箇所に凹み部を有し、位置関係から穿孔を意図した加工であると考えられる。



第 100 図　その他の遺構の出土遺物 1



第 101 図　その他の遺構の出土遺物 2

表 52　石器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
1	205SK	覆土	石鏃	24	13	5	1	チャート		100%	凸基有茎	
2	036SI	覆土	石鏃未製品	31	23	8	6	チャート		100%	縁辺に粗い調整	
3	167P	覆土	石鏃未製品	31	20	6	3	チャート		100%	剥片素材	
4	A1区確認面		石錐	14	7	3	<1>	メノウ		100%	木葉形	
5	攪乱		石核	26	31	17	9	チャート		100%	原礫面あり　不規則な打面転移	
6	327SK	覆土	打製石斧	137	63	15	(160)	ホルンフェルス		95%	撥形　両刃　刃部磨製	
7	018SK	覆土	磨製石斧	77	48	18	137	変質ドレライト	○	100%	定角式　蛤刃　刃縁に微小剥離	
8	208SK	覆土	磨製石斧	55	17	6	10	角閃岩	○	100%	定角式　両刃　刃縁に微小剥離	
9	235SK	覆土	磨製石斧	64	33	11	38	ホルンフェルス		100%	楕円形　刃部磨製　片刃 側面に調整剥離とつぶれ	
10	A1区		磨製石斧	(40)	20	6	(10)	粘板岩		70%	短冊形　擦り切り技法　片刃　器面に擦痕 刃縁に微小剥離　基部欠損	
11	092SK	覆土	磨石・敲石	118	92	61	942	安山岩		100%	両面磨痕　両面中央・片側面・下端部に敲打痕	
12	068SK	覆土	敲石	186	100	77	2050	砂岩		100%	片面・下端部・片側面に敲打痕　台石か　被熱	
13	A2区		不明	80	42	23	71	砂岩		100%	器面に磨痕と擦痕　凹み部2　穿孔加工か	時期不明

表 53　石器観察表（写真掲載のみ）

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
①	攪乱		石鏃	22	14	3	1	チャート		100%	凹基無茎　左右非対称	
②	198SI	覆土	石鏃	22	16	3	<1>	チャート		100%	凹基無茎	
③	036SI	覆土	石鏃未製品	29	21	8	4	チャート		100%	不整三角形　両面に調整剥離	
④	攪乱		石鏃未製品	26	22	9	4	チャート		100%	台形　表裏面に縁辺から調整剥離	
⑤	攪乱		打製石斧	114	64	28	283	ホルンフェルス	○	100%	楕円形　刃部と基部に調整剥離	
⑥	033SI	覆土	掻器	20	40	17	11	チャート		100%	半円形　縁辺に微小剥離	
⑦	攪乱		削器	57	27	14	27	チャート		100%	両側縁に調整剥離	
⑨	235SK	覆土	打製石斧	(56)	(89)	(23)	(126)	ホルンフェルス		30%	分銅形か　上半部欠損	
⑩	A2区		打製石斧	(98)	(76)	(17)	(117)	粘板岩		50%	撥形　片刃　右側縁・基部欠損	
⑪	A2区確認面		打製石斧	80	35	15	53	珪質頁岩	○	100%	楕円形　右側縁に調整剥離	
⑫	A2区		打製石斧	(134)	(82)	28	(328)	安山岩	○	80%	撥形　刃部欠損	
⑬	037SI	覆土	磨製石斧	(87)	(45)	(29)	(168)	砂岩		40%	定角式　下半部欠損	
⑭	攪乱		磨製石斧	(100)	(50)	(30)	(256)	砂岩		70%	定角式　刃部欠損　片面・片側面に微細なつぶれ	
⑮	034SI	覆土	磨製石斧	(112)	(32)	24	(151)	蛇紋岩		80%	定角式　刃部欠損　基部に微細なつぶれ	
⑯	A2区表土		磨製石斧	94	45	13	92	角閃岩	○	100%	定角式　両刃　両側面に微細なつぶれ　刃縁に微小剥離	
⑰	182SK	覆土	磨製石斧	51	16	9	12	角閃岩	○	100%	不整楕円形　両刃	
⑱	037SI	掘方	磨製石斧	69	18	7	18	角閃岩		100%	楕円形　両刃　刃縁に微小剥離　表面風化	
⑲	036SI	覆土	不明	126	61	48	450	砂岩		100%	三角柱状を呈する　三面に磨痕と凹み部6　端部に敲打	古代？

表 54　石器観察表（非掲載 1）

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	002SK	覆土	敲石	76	53	37	188	礫岩		100%	上下端部・片側面に敲打痕	
	003SI	1層	打製石斧	(94)	(62)	(21)	(152)	ホルンフェルス	○	40%	分銅形か　上部欠損	
	007SK	覆土	剥片	(55)	(38)	(12)	(18)	ホルンフェルス	○	60%	上部欠損	
	013SK	覆土	不明	79	64	28	166	ホルンフェルス		100%	下端部・片側面に磨痕	
	015SI	覆土	剥片	36	(21)	(9)	(8)	石英		50%	左半部欠損	
	015SI	覆土	剥片	(30)	(20)	3	(2)	チャート		60%	下半部欠損	
	015SI	掘方	砕片	23	17	4	1	チャート		100%		
	015SI	掘方	二次加工を有する剥片	30	53	10	12	チャート		100%	上部に腹面から調整剥離　右側縁に微小剥離	
	015SI	掘方	砕片	26	9	4	<1>	チャート		100%		
	015SI	掘方	砕片	16	9	3	<1>	黒曜石		100%		
	015SI	掘方	剥片	(20)	(25)	(5)	(2)	チャート		20%	大部分欠損	
	018SK	覆土	敲石	(106)	43	35	(205)	砂岩		70%	片面に敲打痕　磨製石斧から転用か	
	019SK	No.017	磨製石斧未製品	85	50	21	128	蛇紋岩		100%	両側縁・基部に調整剥離　刃部未調整	
	020SK	覆土	剥片	32	25	10	8	石英		100%		
	022SK	覆土	掻器	25	17	5	3	チャート		100%	上下端部に微小剥離	
	022SK	覆土	剥片？	65	33	20	37	石英	○	100%		
	022SK	覆土	二次加工を有する剥片	32	17	9	4	チャート		100%	上半部折断　折断面を打面とする調整剥離	
	023SK	覆土	剥片	25	21	8	4	チャート		100%		
	031SI	覆土	砕片	22	14	7	2	チャート		100%		
	032SI	覆土	微小剥離を有する剥片	34	19	5	3	チャート		100%	右側縁に微小剥離	
	032SI	覆土	剥片	(32)	(29)	11	(8)	チャート		50%	上部欠損	
	032SI	覆土	剥片	(26)	(20)	(7)	(3)	チャート		30%	上部欠損	
	032SI	覆土	磨製石製品	50	21	18	30	流紋岩		100%	直方体を呈する　両面と片側面に磨痕　砥石か	
	032SI	掘方	剥片	(16)	(35)	(11)	(7)	チャート		20%	大部分欠損	
	032SI P4	覆土	剥片	21	(27)	4	(2)	石英		80%	左半部欠損	
	033SI	硬化面	敲石	95	66	37	344	砂岩		100%	片面中央・下端部に敲打痕	
	033SI	覆土	砕片	11	10	2	<1>	チャート		100%		
	033SI	カマド	微小剥離を有する剥片	(16)	(25)	(6)	(1)	チャート		80%	上部欠損　縁辺に微小剥離	
	033SI	硬化面	磨石	97	62	24	226	安山岩	○	100%	両面中央に磨痕　上下端部・片側面に微細なつぶれ　被熱	
	033SI	掘方	砕片	14	9	5	<1>	チャート		100%		
	033SI	掘方	石鏃未製品	32	22	10	7	チャート		100%	不整形　両面に粗い調整	
	033SI	硬化面	剥片？	31	12	7	2	石英		100%		
	033SI	硬化面	砕片	30	23	10	6	石英	○	100%		
	033SI	硬化面	剥片	(15)	(23)	8	(3)	石英		40%	下部欠損	
	034SI	覆土	剥片	(19)	(14)	4	(1)	チャート		50%	下部・右側縁欠損	
	034SI	覆土	磨製石斧	(76)	(43)	(12)	(48)	ホルンフェルス		10%	定角式か　大部分欠損	
	035SI	覆土	磨製石製品	59	27	23	64	砂岩		不明	直方体を呈する　両側縁と上下端部に磨痕	
	035SI	掘方	石核	43	22	15	14	メノウ		100%	原礫面あり　単一打面から剥離	
	035SI	覆土	磨石	72	42	22	88	ホルンフェルス	○	100%	下端部に磨痕	
	035SI	掘方	二次加工を有する剥片	39	34	10	14	チャート		100%	下部欠損　右側縁に粗い調整剥離　石鏃未製品か	
	036SI	覆土	砕片	14	10	3	<1>	黒曜石		100%		
	036SI	覆土	砕片	20	14	6	2	黒曜石		100%		
	036SI	覆土	石核	19	29	15	7	黒曜石		100%	不規則な打面転移	
	036SI	覆土	微小剥離を有する剥片	36	25	7	6	チャート		100%	両側縁に微小剥離	
	036SI	覆土	二次加工を有する剥片	25	22	6	2	チャート		100%	右側縁に背面から調整剥離	
	036SI	覆土	石鏃	(21)	14	3	(1)	チャート		90%	凹基無茎　基部の抉りは浅い　先端部欠損	
	036SI	覆土	石鏃未製品	25	23	6	4	チャート		100%	不整円形　両面に調整剥離	
	036SI	掘方	剥片	25	18	5	2	チャート		100%		
	036SI	覆土	剥片	(24)	(22)	(7)	(6)	チャート		10%	大部分欠損	
	036SI	覆土	剥片	(18)	(15)	(6)	(1)	チャート		30%	大部分欠損	
	036SI	覆土	砕片	(19)	(17)	(15)	(5)	黒曜石		100%		

表 55　石器観察表（非掲載 2）

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	036SI	覆土	砕片	24	22	8	5	石英	○	100%		
	036SI	覆土	剥片	27	22	10	5	チャート		100%		
	036SI	覆土	剥片	(30)	(36)	(11)	(8)	チャート		40%	上下端部欠損	
	036SI	覆土	剥片	(21)	(31)	(12)	(6)	チャート		10%	大部分欠損	
	036SI	覆土	砕片	25	10	6	1	チャート		100%		
	036SI	覆土	二次加工を有する剥片	38	21	11	10	チャート		100%	右半部折断　折断面を打面とする調整剥離	
	036SI	覆土	微小剥離を有する剥片	41	(21)	8	(7)	チャート		80%	左半部欠損　右側縁に微小剥離	
	036SI	覆土	剥片	25	(23)	5	(3)	チャート		60%	右半部欠損	
	036SI	覆土	石核	21	22	15	8	石英		100%	不規則な打面転移	
	036SI	覆土	剥片	(20)	(16)	(4)	(<1>)	チャート		70%	上部欠損	
	036SI	覆土	剥片	(16)	(19)	(5)	(1)	チャート		80%	上部欠損	
	036SI	覆土	砕片	19	15	8	1	石英		100%		
	037SI	覆土	微小剥離を有する剥片	29	19	10	5	チャート		100%	上下端部に微小剥離	
	037SI	覆土	微小剥離を有する剥片	(29)	(22)	(7)	(5)	チャート		50%	上下端部欠損　左側縁に微小剥離	
	037SI	覆土	打製石斧	(109)	(82)	13	(157)	ホルンフェルス	○	60%	分銅形　刃部欠損　表面風化	
	037SI	覆土	敲石	127	85	61	858	安山岩	○	100%	片面中央・下端部に敲打痕　被熱　赤色顔料付着	
	037SI	覆土	剥片？	32	28	7	9	チャート		100%		
	037SI	覆土	剥片	18	24	5	1	チャート		100%		
	037SI	覆土	剥片	(18)	(25)	7	(2)	チャート		70%	下部欠損	
	037SI	覆土	磨製石斧	(53)	(40)	(19)	(66)	砂岩		40%	定角式　蛤刃　刃縁に微小剥離　上半部欠損　欠損部に二次加工	
	037SI	覆土	磨石・敲石	115	(59)	36	(327)	閃緑岩	○	60%	両面磨痕　上下端部・片側面に微細なつぶれ	
	037SI	覆土	剥片	21	(16)	7	(2)	チャート		90%	原礫面あり　右側縁欠損	
	037SI	覆土	剥片？	30	24	16	8	石英		100%		
	037SI	覆土	微小剥離を有する剥片	(20)	(19)	(6)	(2)	チャート		40%	下半部欠損　右側縁に微小剥離	
	037SI	掘方	微小剥離を有する剥片	(24)	19	(5)	(2)	チャート		50%	上部欠損　左側縁に微小剥離	
	038SI	覆土	剥片？	41	24	11	15	チャート		100%		
	038SI	掘方	微小剥離を有する剥片	35	20	5	3	チャート		100%	両側縁に微小剥離	
	038SI	覆土	打製石斧	97	55	18	95	粘板岩	○	100%	楕円形　右側縁に腹面側から調整剥離	
	038SI	カマド	楔形石器	29	22	9	5	チャート		100%	上下端部に微小剥離	
	039SI	覆土	剥片	26	25	4	3	チャート		100%		
	039SI	カマド	不明	62	61	15	71	砂岩		100%	台形を呈する　表面風化	古代？
	051SK	覆土	剥片	27	41	10	10	チャート		100%		
	052SK	覆土	砕片	21	11	3	<1>	チャート		100%		
	052SK	覆土	砕片	7	6	2	<1>	黒曜石		100%		
	053SK	覆土	石鏃未製品	29	22	6	4	チャート		100%	両面に粗い調整剥離	
	054SK	覆土	磨石・敲石	―	―	―	―	安山岩		―		012SK出土と接合
	059・060SK	覆土	磨石	53	46	31	99	石英		100%	上下端部に擦痕	
	059・060SK	覆土	微小剥離を有する剥片	(33)	(43)	(9)	(12)	メノウ		30%	原礫面あり　下部欠損　右側縁に微小剥離	
	059・060SK	覆土	剥片？	31	14	8	4	チャート		100%		
	062SK	覆土	剥片	(43)	(31)	(9)	(11)	メノウ		80%	上部欠損	
	062SK	覆土	磨石・敲石	(92)	93	50	(628)	砂岩	○	60%	両面磨痕　両側面に微細なつぶれ　被熱	
	068SK	覆土	剥片	89	40	10	43	ホルンフェルス		100%	表面風化	
	068SK	1BL	剥片？	75	70	16	90	ホルンフェルス	○	100%		
	071SK	覆土	剥片	47	36	14	21	チャート		100%	背面は原礫面	
	074SK	覆土	磨石・敲石	93	78	62	727	石英斑岩	○	100%	両面磨痕　下端部に敲打痕　被熱	
	076SK	覆土	微小剥離を有する剥片	31	(20)	5	(3)	珪質頁岩		80%	右側縁欠損　左側縁に微小剥離	
	077SK	覆土	剥片	(19)	32	4	(3)	チャート		80%	下部欠損	
	077SK	覆土	微小剥離を有する剥片	24	17	6	(2)	チャート		90%	下部欠損　両側縁に微小剥離	
	077SK	覆土	二次加工を有する剥片	28	26	10	5	チャート		100%	両面に粗い調整剥離　石鏃未製品か	
	091SK	覆土	微小剥離を有する剥片	65	39	10	23	粘板岩		100%	左側縁に微小剥離	
	092SK	覆土	磨製石製品	60	16	15	28	チャート		100%	直方体を呈する　上下端部と両側面に磨痕　砥石か	

表 56　石器観察表（非掲載 3）

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	092SK	覆土	石核	58	40	24	65	チャート		100%	原礫面あり　不規則な打面転移	
	093SK	覆土	砕片	19	14	6	2	チャート		100%		
	093SK	覆土	敲石	139	103	46	955	安山岩		100%	両面中央に微細なつぶれ　赤色顔料付着	
	096SK P2	覆土	磨製石斧	(93)	(50)	35	(231)	砂岩		60%	定角式　刃部欠損　片面・基部に微細なつぶれ	
	102・103SK	覆土	磨製石斧	(116)	(54)	(29)	(282)	砂岩		70%	定角式　刃部・基部欠損	
	113SI	覆土	剥片？	131	69	20	189	ホルンフェルス	○	100%		
	114SI	掘方	磨製石斧	(68)	45	(22)	(86)	砂岩		40%	定角式か　蛤刃　上半部欠損	
	130P	覆土	二次加工を有する剥片	60	57	15	59	ホルンフェルス	○	100%	両面に調整剥離　打製石斧か	
	137SK	覆土	砕片	23	17	7	3	石英		100%		
	142SK	覆土	剥片	28	19	6	3	石英		100%		
	150SK	覆土	剥片	(38)	(30)	7	(7)	チャート		30%	上部欠損	
	153SK	覆土	剥片	30	29	11	7	石英		100%		
	153SK	覆土	敲石	98	91	68	816	安山岩		100%	両面中央・片側面に敲打痕	
	153SK	覆土	剥片	(45)	(35)	(12)	(18)	チャート		20%	上下端部欠損	
	153SK	覆土	石核？	(27)	44	13	(18)	チャート		50%	原礫面あり	
	174・180SK	覆土	剥片	(38)	(20)	(10)	(5)	チャート		50%	原礫面あり	
	180SK	覆土	砕片	24	17	12	3	石英		100%		
	198SI	覆土	二次加工を有する剥片	27	25	8	5	チャート		100%	両面に粗い調整剥離　石鏃未製品か	
	198SI	覆土	剥片	(25)	(13)	(6)	(2)	チャート		50%	上部欠損	
	198SI	覆土	石鏃	(16)	14	2	(<1>)	チャート		90%	凹基無茎　先端部・脚部欠損	
	198SI P2	覆土	剥片	(8)	(17)	(4)	<1>	チャート		10%	大部分欠損	
	209SK	1BL	磨石・敲石	87	54	45	279	砂岩		100%	片側面に磨痕　両面・上下端部・片側面に敲打痕	
	209SK	覆土	剥片	48	43	7	18	粘板岩		100%		
	220SK	覆土	敲石	(75)	(65)	(32)	(251)	石英斑岩	○	25%	端部に敲打痕　被熱	
	222SK	覆土	不明	(34)	(37)	(11)	(21)	ホルンフェルス		10%	大部分欠損　器面に磨痕	
	222SK	覆土	磨石	105	113	53	917	安山岩	○	100%	片面の一部に磨痕　赤色顔料付着　被熱	
	222SK	底面	蜂の巣石	160	132	81	2370	ホルンフェルス	○	100%	凹み部（表4裏6）10　被熱	
	235SK	覆土	微小剥離を有する剥片	43	69	15	38	細粒安山岩	○	100%	両側縁に微小剥離	
	235SK	覆土	磨石・敲石	(85)	(54)	(56)	(251)	砂岩		40%	両面磨痕　片側面に敲打痕	
	261SK	覆土	磨製石斧	(118)	(49)	(20)	(160)	ホルンフェルス		70%	定角式　下半部欠損　側面・基部に微小剥離	
	281SK	覆土	石核	30	26	17	12	チャート		100%	不規則な打面転移	
	284SI	覆土	微小剥離を有する剥片	22	(17)	6	(3)	チャート		60%	右半部欠損　左側縁に微小剥離	
	303・304SK	覆土	台石	229	169	33	1679	砂岩		100%	扁平な作業面に部分的な磨痕と微細なつぶれ	
	305SK	覆土	二次加工を有する剥片	40	25	14	9	チャート		100%	原礫面あり　両面に粗い調整剥離　石鏃未製品か	
	315SK	覆土	石核？	32	29	19	14	石英		100%	原礫面あり　作業面不明瞭	
	315SK	覆土	剥片	50	65	18	66	ホルンフェルス		不明	両面に調整剥離　打製石斧か	
	327SK P2	覆土	砕片	27	15	8	3	石英		100%		
	333SK	覆土	剥片	(29)	(18)	(12)	(6)	珪質頁岩		20%	大部分欠損	
	333SK	覆土	石核	29	32	35	33	チャート		100%	原礫面あり　不規則な打面転移	
	333SK	覆土	磨石・敲石	(77)	(49)	(51)	(303)	砂岩		20%	片面磨痕　端部に敲打痕	
	333SK	覆土	磨石・敲石	(80)	(73)	(47)	(269)	多孔質安山岩	○	30%	両面磨痕　両面中央・片側面に敲打痕　被熱	
	A1区表土		剥片	(13)	(24)	5	1	チャート		30%	上部欠損	
	A1区表土		微小剥離を有する剥片	52	58	9	25	チャート		100%	両側縁に微小剥離	
	A1区確認面		剥片	28	20	7	4	チャート		100%		
	A1区確認面		剥片	(33)	(31)	(13)	(14)	珪質頁岩		60%	下部欠損	
	A1区確認面		剥片？	105	82	12	159	ホルンフェルス	○	100%		
	A2区		磨石	119	87	36	531	ホルンフェルス		100%	縁辺部の大部分に擦痕	
	A2区		剥片	(20)	(26)	(7)	(3)	チャート		10%	上部欠損	
	A2区		二次加工を有する剥片	86	41	11	46	粘板岩		100%	両面に調整剥離	
	A2区		磨石・敲石	131	85	55	892	砂岩		100%	両面磨痕　両端部に微細なつぶれ	
	A2区		二次加工を有する剥片	29	31	8	8	チャート		100%	左側縁に両面から調整剥離	

表 57　石器観察表（非掲載 4）

番号	遺構NO.	層位	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	鑑定	遺存率	特徴	備考
	A2区		打製石斧	110	47	24	150	ホルンフェルス	○	100%	撥形　両側縁と基部に調整剥離	
	A2区		敲石	(103)	(52)	(31)	(206)	砂岩		40%	片面・片側面に敲打痕	
	A2区		敲石	(121)	85	73	(1013)	アプライト	○	70%	両面中央・下端部に敲打痕　被熱	
	A2区		蜂の巣石	141	131	83	1950	花崗岩	○	100%	凹み部1　被熱	
	A2区		敲石	(66)	51	31	(145)	流紋岩	○	70%	両側面に敲打痕　被熱	
	A2区		磨石・敲石	92	47	35	252	チャート		100%	片側面に擦痕　両端部に微細なつぶれ	
	A2区表土		石核	45	26	12	13	チャート		100%	原礫面あり　作業面不明瞭	
	A2区確認面		石鏃未製品	34	22	8	5	チャート		100%	二等辺三角形　側縁に表裏面から調整剥離	
	A2区確認面		微小剥離を有する剥片	32	31	9	8	チャート		100%	縁辺に微小剥離	
	A2区確認面		剥片	(25)	(36)	(12)	(7)	チャート		20%	上部欠損	
	A2区確認面		砕片	23	15	10	4	石英		100%		
	D区表土		剥片？	50	31	11	19	ホルンフェルス	○	100%		
	調査区		剥片？	33	25	15	7	チャート		100%		
	調査区		剥片	(17)	(22)	(7)	(2)	チャート		30%	上下端部欠損	
	調査区		微小剥離を有する剥片	21	14	4	1	黒曜石		100%	右側縁に微小剥離	
	撹乱		微小剥離を有する剥片	47	38	16	20	チャート		100%	縁辺に微小剥離	
	撹乱		敲石・凹石	113	82	39	505	礫岩		100%	下端部に敲打痕　両面中央に凹み部	
	撹乱		剥片	(27)	18	(5)	(3)	チャート		40%	下半部欠損	
	撹乱		石鏃	(21)	(18)	4	(1)	黒色頁岩	○	70%	凹基無茎　先端部・脚部欠損　被熱	
	撹乱		打製石斧	(73)	(62)	(21)	(117)	砂岩	○	60%	分銅形　刃部欠損	
	撹乱		石鏃未製品	26	20	9	5	チャート		100%	不整楕円形　右側縁に粗い調整　左側縁に腹面側から急角度調整	
	撹乱		剥片	(33)	(23)	(12)	(7)	石英		30%	上下端部欠損	
	撹乱		砕片	17	15	8	3	石英		100%		
	撹乱		剥片？	36	23	15	12	石英		100%		
	撹乱		剥片？	25	24	10	6	珪質頁岩		100%		
	撹乱		不明	88	33	29	89	砂岩		不明	端部と側縁の屈曲部に磨痕	時期不明
	撹乱		二次加工を有する剥片	34	31	10	8	チャート		100%	上部折断　折断面を打面とする調整剥離　石鏃未製品か	
	撹乱		磨製石斧	(71)	(21)	(10)	(25)	蛇紋岩		60%	定角式　刃部欠損	
	撹乱		剥片	(25)	(24)	(5)	(4)	石英		70%	上下端部欠損	
	表採		微小剥離を有する剥片	30	21	7	4	チャート		100%	原礫面あり　両側縁に微小剥離	
	表採		磨石・敲石	99	93	47	594	ホルンフェルス	○	100%	両面中央に磨痕　上下端部・両側面に微細なつぶれ	
	表採		剥片	(25)	(36)	(7)	(5)	チャート		30%	大部分欠損	
	表採		剥片	(29)	(27)	(13)	(7)	チャート		40%	大部分欠損	
	表採		剥片？	75	55	9	50	粘板岩		100%		

第４節　理化学的分析

笠間市橋爪遺跡における放射性炭素年代
（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

茨城県笠間市橋爪遺跡の測定対象試料は、土坑より出土した土器内の土の中から水洗選別によって採取されたクルミ核片で、001SK 出土の No.001（IAAA-100437）、065SK 出土の No.123（IAAA-100438）の合計２点である（表 58）。

2　測定の意義

クルミ核片を検出した土坑の廃絶年代および共伴遺物の年代を推定する。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 58 に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

3MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 58）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 58 に、補正していない値を参考値として表 59 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さ

い（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 58 に、補正していない値を参考値として表 59 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 59 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

^{14}C 年代は、001SK 出土の No.001 が 4440 ｱ 30yrBP、065SK 出土の No.123 が 4450 ｱ 30yrBP と、ほぼ同じ年代を示した。暦年較正年代（1 σ、2 σ）では、2 点とも 3100 ～ 3000cal BC 頃の確率が最も高いが、3300 ～ 3200cal BC 頃の確率も低くない。縄文時代中期前葉から中葉頃に相当する年代値である。

炭素含有率はいずれも 70%前後の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 58

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-100437	No.001	遺構:001SK	クルミ核片	AAA	**-25.82 ± 0.59**	**4,440 ± 30**	**57.55 ± 0.20**
IAAA-100438	No.123	遺構:065SK　層位:4 層	クルミ核片	AAA	**-26.57 ± 0.59**	**4,450 ± 30**	**57.49 ± 0.20**

[#3658]

表 59

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1Ã暦年代範囲	2Ã暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-100437	4,450 ± 30	57.46 ± 0.19	4,437 ± 27	3309calBC - 3302calBC (1.9%) 3282calBC - 3279calBC (0.9%) 3265calBC - 3241calBC (11.8%) 3105calBC - 3019calBC (53.6%)	3328calBC - 3218calBC (27.6%) 3179calBC - 3158calBC (3.0%) 3123calBC - 3007calBC (58.2%) 2986calBC - 2932calBC (6.6%)
IAAA-100438	4,470 ± 30	57.31 ± 0.19	4,446 ± 27	3312calBC - 3295calBC (6.2%) 3286calBC - 3275calBC (4.1%) 3265calBC - 3239calBC (14.7%) 3106calBC - 3078calBC (15.0%) 3072calBC - 3024calBC (28.1%)	3332calBC - 3214calBC (37.8%) 3188calBC - 3155calBC (5.8%) 3132calBC - 3012calBC (50.5%) 2978calBC - 2965calBC (1.0%) 2948calBC - 2944calBC (0.3%)

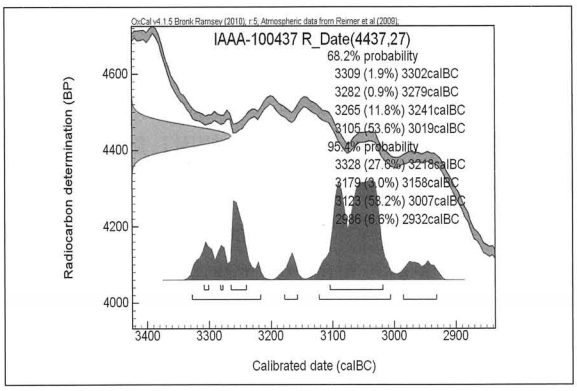
[参考値]

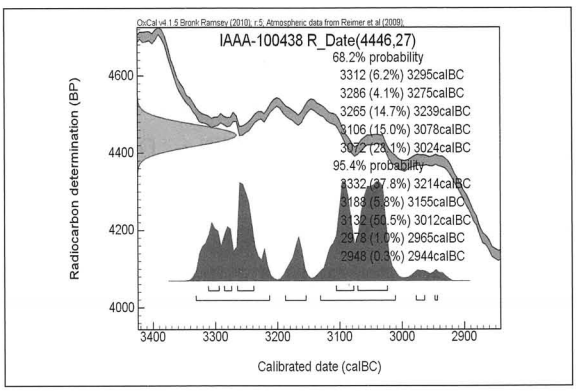
文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150





[参考] 暦年較正年代グラフ

【補註】065SK 第 4 層から出土した土器 No.123 より検出したクルミ核片中から無作為に抽出した資料 2 点を、異なる遺構から出土した資料として測定を委託した。その結果、ほぼ同様の測定結果を得たことから、測定精度については一定の信頼性を認めることができよう（岡安光彦）。

第５節　縄文時代まとめ

今回の調査では、縄文時代に該当する遺構が、A1 区から 41 基、A2 区から 191 基、D 区から３基、総計 235 基を検出した。遺構の内訳は、住居３軒、土坑 153 基、ピット 79 基である。土坑では、袋状土坑（註 1）46 基を検出した。

出土遺物は、阿玉台 Ib 式、Ⅲ式、Ⅳ式、加曾利ＥⅠ～Ⅳ式の土器などで縄文時代中期前葉から後葉の土器が中心である。その中でも加曾利ＥⅠ式土器、加曾利ＥⅡ・Ⅲ式土器が多く出土している。

袋状土坑は、阿玉台Ⅳ式や加曾利ＥⅠ式の土器を出土するものが多く、土坑の形状も袋状を呈するもの、フラスコ状（註 2）を呈するもの、ピットを伴うものなど様々であった。

1. 本調査地点における遺構時期の設定

本調査地点検出の遺構を出土遺物の検出状況などから、同時期（一括）と捉えることのできる遺物を多く含む遺構を指標とし、遺物の様相などからⅠ期～Ⅶ期に区分した。

本調査地点の土器の分類に関して以下の参考文献を参照した。本調査地点における遺物、遺構の時期を以下のように捉えた（註 3）。また、遺構の形状も時期区分の判断基準とした。

Ⅰ期（第 102 図）：指標遺構は 006SI である。阿玉台Ⅰｂ式土器がみられる。遺構は、006SI1 基しか確認されていない。住居床面から口縁部から頸部にかけ逆Ｓ字状に隆帯が伸びる深鉢が出土した。（註 4）

Ⅱ期（第 103 図）：指標遺構は 230SK・302SK である。阿玉台Ⅳ式土器、大木 8a ～ 8b 式の土器がみられる。阿玉台Ⅳ式土器の中でも、口縁部が波状口縁となるものを多く含む遺構をⅡ期とした。

Ⅲ期（第 104 図）：指標遺構は 156SK・190SK である。阿玉台Ⅳ式土器を主体とする。中峠式土器を共伴する。阿玉台Ⅳ式土器の口縁が波状ではなく隆帯貼付けによる装飾、把手などが施されるものを多く含む遺構をⅢ期とした。

Ⅳ期（第 105 図）：指標遺構は 064SK・065SK である。加曾利ＥⅠ式の土器が主体的に見られる。中峠式土器、大木 8b 式の土器を共伴する。加曾利ＥⅠ式の土器は、口縁部に隆帯による、クランク文・横位波文などが描かれるものが多く見られる。また、胴部には、単節の縄文を地文に沈線による懸垂文や渦巻などが描かれる土器が見られる。沈線は半截竹管状工具による。

Ⅴ期（第 106 図）：指標遺構は 012SK・054SK である。加曾利ＥⅡ式、加曾利ＥⅢ式の土器が見られる。加曾利ＥⅡ式の土器を伴い、加曾利ＥⅢ式の土器の胴部の沈線間の幅が狭く磨り消しがはっきりとしているものが少ないものを含む遺構をⅤ期とした。

Ⅵ期（第 106 図）：指標遺構は 134SK である。加曾利ＥⅢ式の土器の胴部の沈線間の幅が広く、加曾利ＥⅢ式土器が主体的に見られる遺構をⅥ期とした。

Ⅶ期（第 107 図）：指標遺構は 325SK である。加曾利ＥⅣ式の土器が見られる。口縁部から胴部にかけ頸部の括れが緩やかで、磨り消し文の幅が広く、胴部は断面三角状の隆帯による区画が行なわれている。調査区内で検出された遺構数は２基である。

2. 各時期の遺構の分布状況（第 102 ～ 107 図）

Ⅰ期：A1 区の南壁際より住居跡１軒（006SI）のみを検出した。しかし、138SK（袋状土坑）などからも同時期の遺物を出土しており、周囲に同時期の遺構が存在する可能性は高い。

Ⅱ期：遺物をやや多く含む袋状土坑 203SK、230SK、302SK が、A2 区中央北から南東にかけて 10 ～ 13 m の間隔（註 5）で弧を描いて並ぶ。

Ⅲ期：底面からほぼ完形の遺物を多く含み断面形はフラスコ状を呈する 156SK、159SK、190SK が A2 区東

側に 4 ～ 6 m程の間隔で北西から南東にかけて並ぶ。また A1 区の東側、156SK より 20m 程南東に 138SK が位置する。138SK も、同様にフラスコ状を呈し遺構底面よりほぼ完形の遺物が出土している。

Ⅳ期: A2 区西側から南東にかけ袋状土坑が確認された。袋状土坑の中でも 065SK からは多量の遺物が出土し、良好な一括資料を得た。住居跡は 275SI がⅢ～Ⅳ期に該当し、Ⅲ期では、大規模な袋状土坑は住居跡の南東側に位置するが、Ⅳ期では、住居跡の西側と東側に 3 ～ 12 m程の間隔で袋状土坑が位置する。

Ⅴ期:調査区内で最も多くの遺構が確認された時期である。A2 区東側から A1 区西側にかけて遺構が集中する。大型の袋状土坑は特に A2 区東側の南北方向に集中する。住居跡は 149SI が該当し、袋状土坑の東側に位置する。

Ⅵ期：Ⅴ期とほぼ同じ位置に遺構が配置されるが、壁面がオーバーハングするいわゆる袋状を呈する遺構は確認されなかった。遺構数もⅤ期より少ない。

Ⅶ期：A2 区西の北側から 2 基土坑が確認されたのみである。土坑の規模は底径 1.50 ～ 1.70 m程である。

本調査地点は、A1 区から A2 区にかけて南西方向に緩やかに傾斜し、各時期を通して住居跡は 3 軒のみしか検出されず、本調査地点は集落内において、主に土坑が構築される場所にあたると推測される。

3. 本調査地点検出の袋状土坑について（第 108 図（註 6）、表 60）

調査区内より検出した土坑の傾向としては、Ⅱ期からⅤ期にかけて、土坑のなかでもいわゆる袋状土坑（註 1）が数多く構築される傾向が看取できた。全時期を通じて検出された袋状土坑は 46 基であり、Ⅱ～Ⅳ基に該当するものが多く、Ⅱ～Ⅳ期で検出した袋状土坑は 28 基である。その中でもⅡ～Ⅳ期では、いわゆるフラスコ状「フラスコ a」、「フラスコ b」を呈するものが多く、21 基みられる。Ⅴ期では、フラスコ状を呈するものは 1 基のみである。

各時期のいわゆる袋状土坑に関して詳細を述べる。Ⅱ・Ⅲ期においては、いわゆる袋状土坑の中では、「フラスコ a」、「フラスコ b」、「袋状 b」に該当するものだけがみられる。袋状土坑の法量は、Ⅱ・Ⅲ期においては底径 1.89 ～ 3.56 m、基底部の標高は 40.95 ～ 41.81 mを測る。袋状土坑の底径の平均は 2.60 mである。遺構底面は鹿沼パミス層直上を遺構底面とするものが多い。しかし、Ⅲ期に該当する袋状土坑の中で 156SK、159SK、190SK は、形状は「フラスコ a」を呈し、底径は 3.20 ～ 3.56 m、基底部の標高は 40.95 ～ 41.33m を測り他の袋状土坑と比べ規模が大きい。

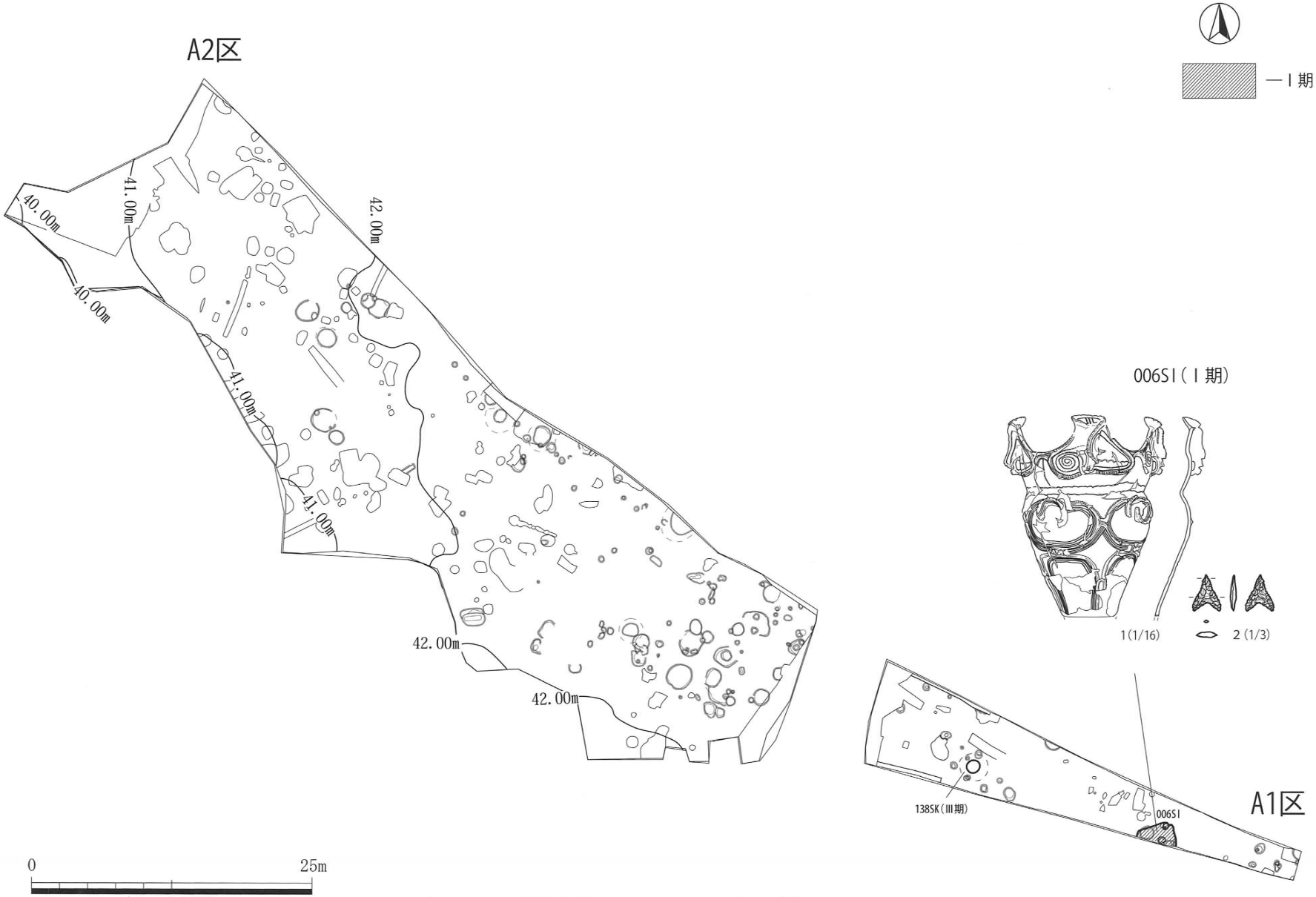
Ⅳ期においては、Ⅱ・Ⅲ期では確認されなかった袋状を呈しピットを伴わない「袋状 a」が見られる。いわゆる袋状土坑の法量は底径は 1.58 ～ 3.21 m、基底部の標高は 40.47 ～ 41.49 mを測る。袋状土坑の底径の平均は 2.29 mである。フラスコ状を呈する「フラスコ a」においてⅡ・Ⅲ期に比べやや小さい法量のものも見られる。065SK は底径 3.21 mを測り、他の袋状土坑に比べ規模が大きい。

Ⅴ期においては、いわゆる袋状土坑の中で括れ部分を持たない「袋状 c」の形状を呈するものが見られる。また、フラスコ状を呈する袋状土坑は、「フラスコ a」が 1 基見られるのみである。検出した遺構の 6 割は壁面がオーバーハングしない土坑である。袋状土坑の法量は、底径 1.32 ～ 3.44 m、基底部の標高は 40.81 ～ 41.73 mを測る。袋状土坑の底径の平均は 2.17 mである。

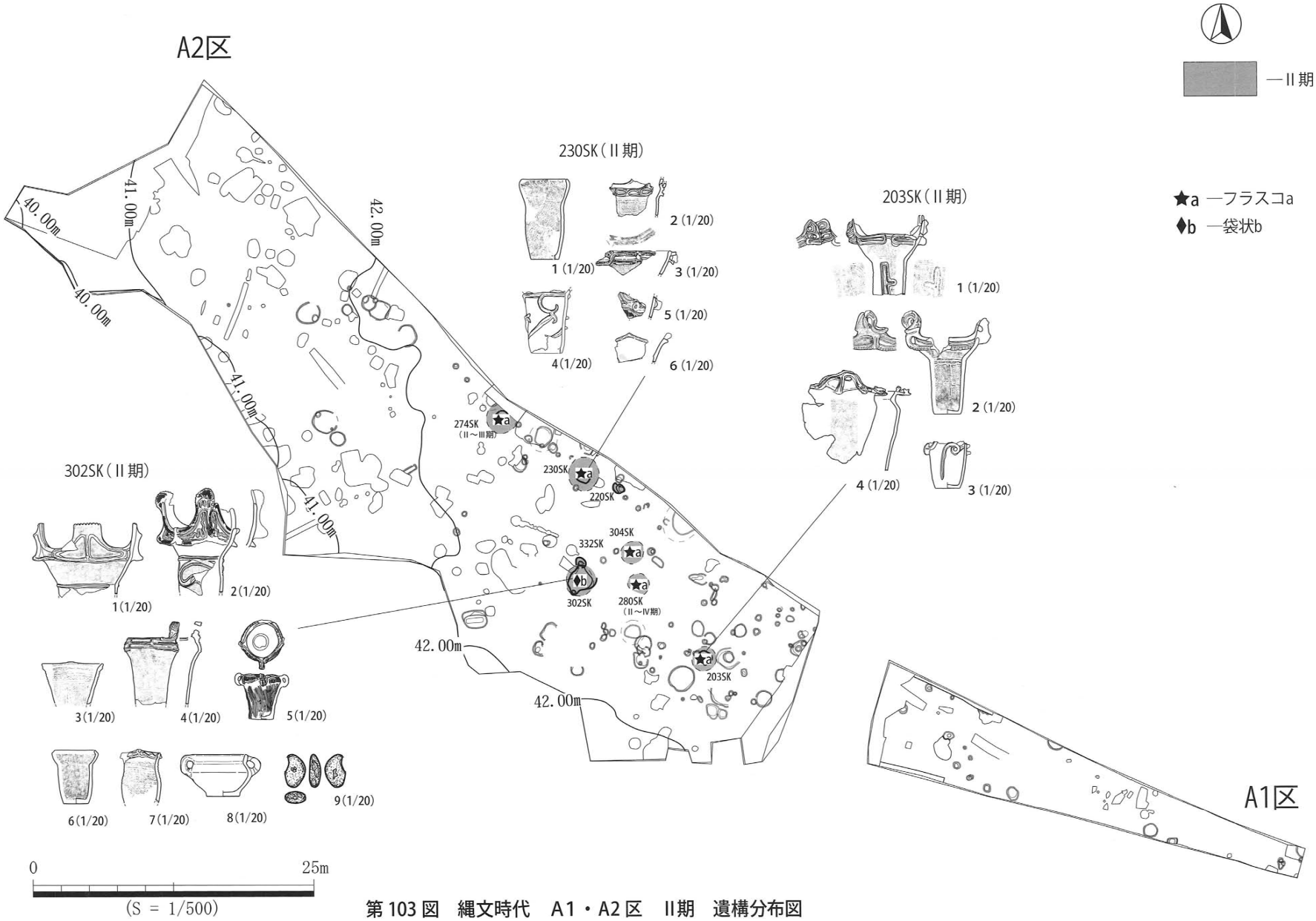
Ⅵ期においては、いわゆる袋状土坑は確認されず、壁面がオーバーハングしない、平面形が円形や楕円形を呈する土坑のみが確認された。遺構の法量の幅も広くばらつきが見られる。

本調査地点では、Ⅱ・Ⅲ期おいては、ピットを伴わないフラスコ状を呈する「フラスコ a」が主体を成し、袋状を呈する袋状土坑ではピットを伴うもの「袋状 b」が主である。Ⅳ期においては、ピットを伴わないフラスコ状を呈する「フラスコ a」が土坑の多くを占めるが、フラスコ状を呈するものでピットを伴う「フラスコ b」、袋状を呈しピットを伴わないもの「袋状 a」なども見られる。Ⅴ期以降では、Ⅳ期まで主体を成していたフラスコ状を呈する袋状土坑が減少し、壁面がオーバーハングしない土坑が主体となる。

検出したいわゆる袋状土坑は、時期、断面形、法量による差異が見られ、土坑の形状に偏りがみられることなどから、各時期において一定の制約が働き、形状などが類似する袋状土坑が本調査地点では、構築されたと推測

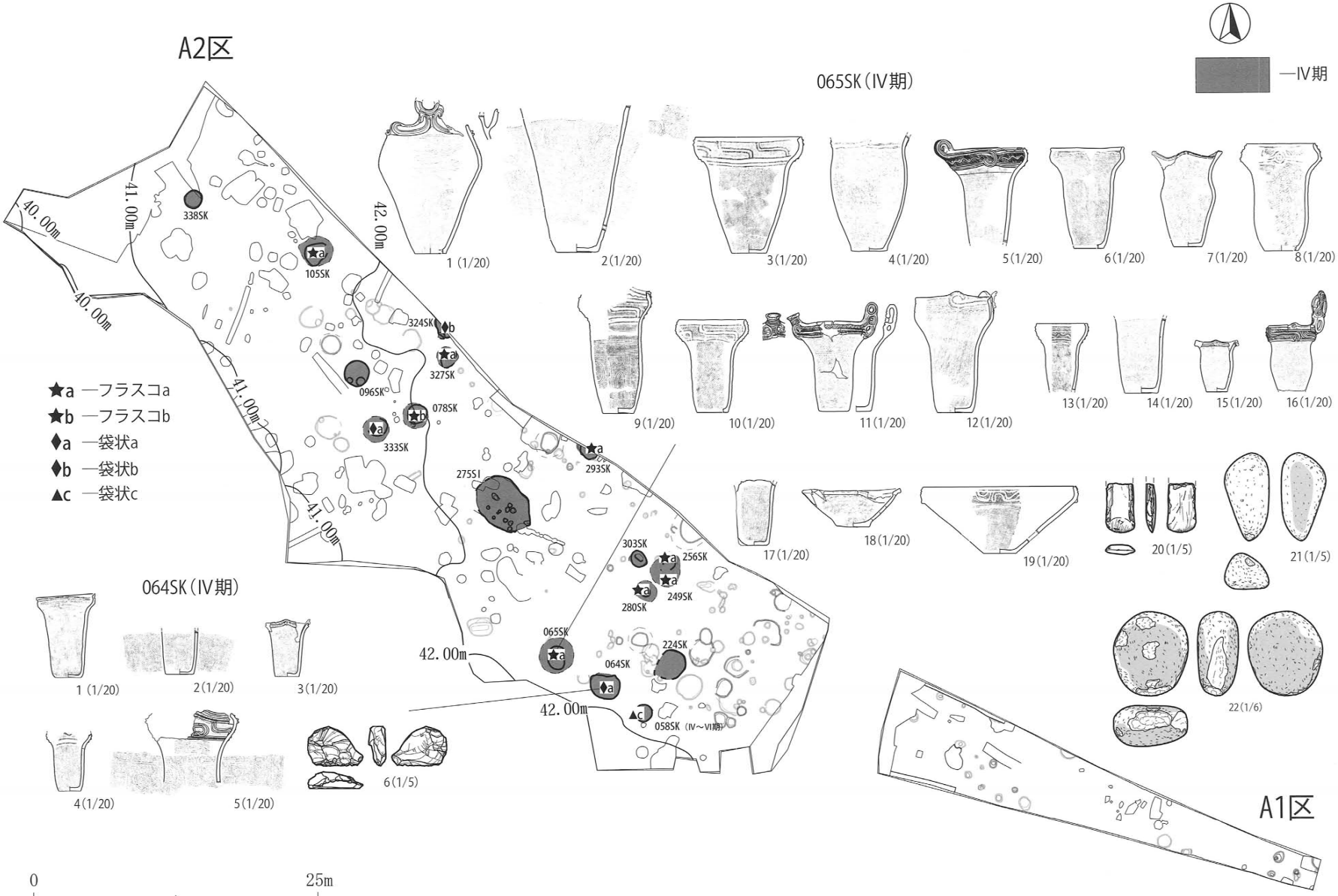


第102図　縄文時代　A1・A2区　Ⅰ期　遺構分布図



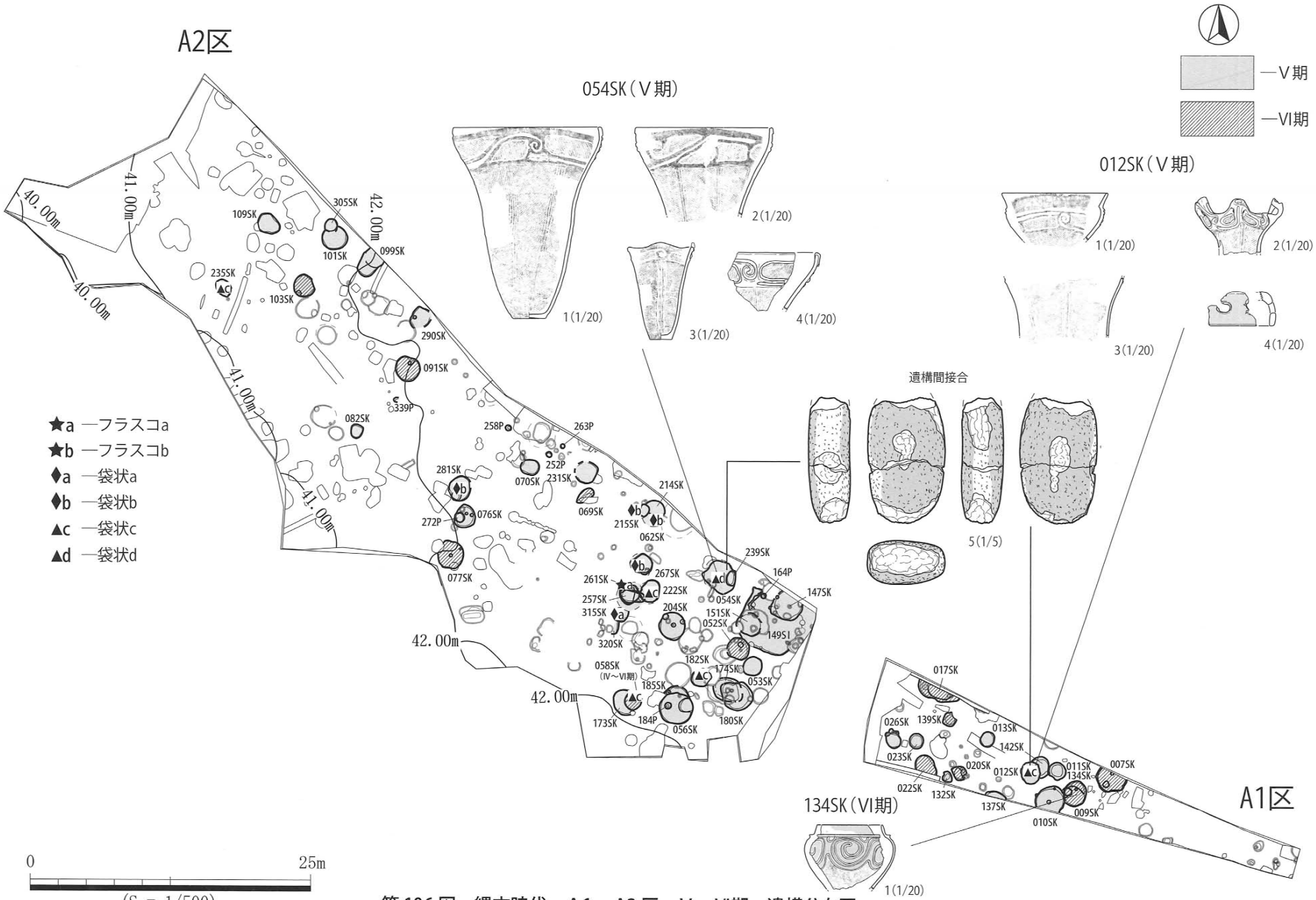
第 103 図　縄文時代　A1・A2 区　II期　遺構分布図

第104図　縄文時代　A1・A2区　III期　遺構分布図

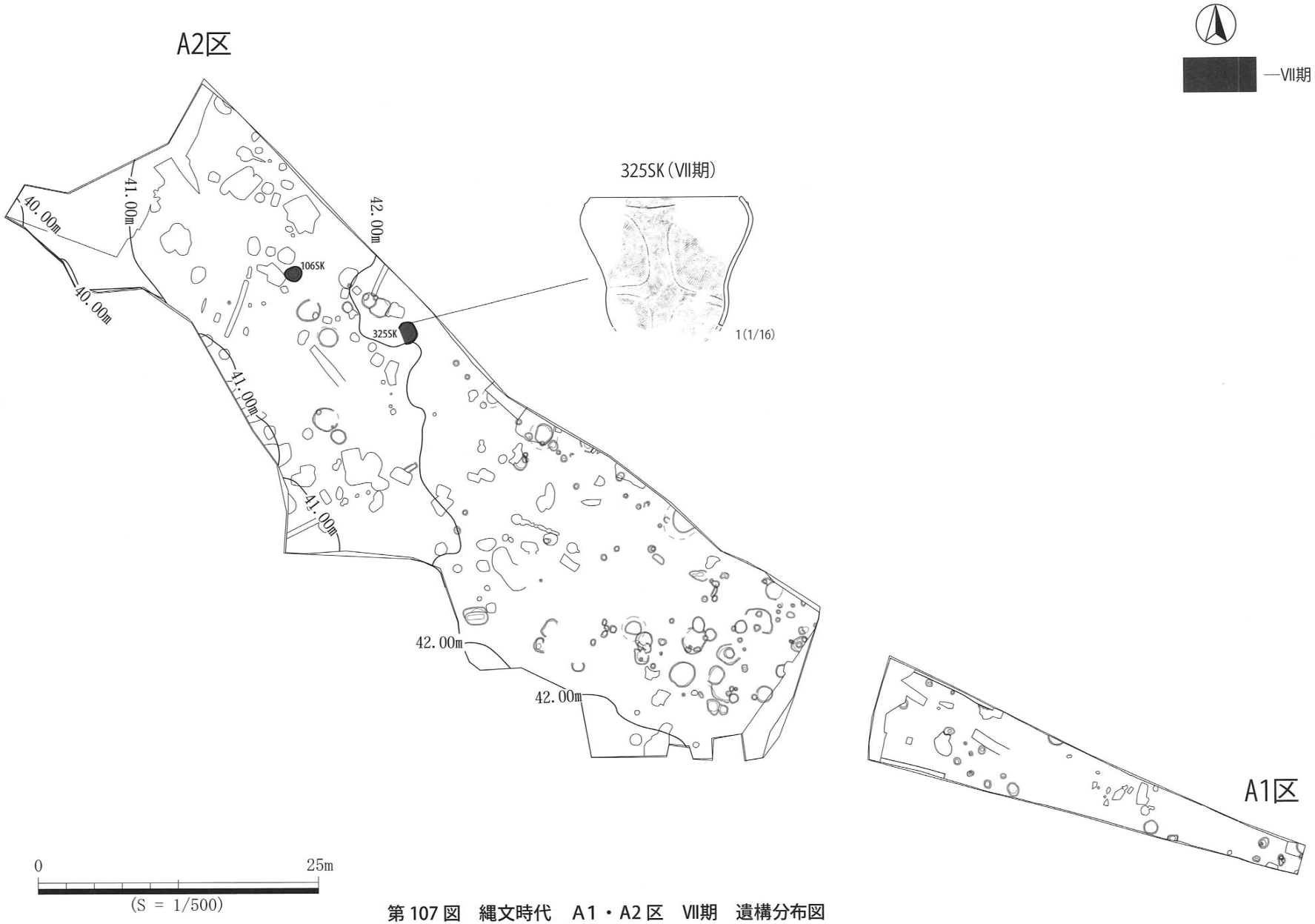


0　25m
(S = 1/500)

第 105 図　縄文時代　A1・A2 区　IV期　遺構分布図



第 106 図　縄文時代　A1・A2 区　V・VI期　遺構分布図



第107図　縄文時代　A1・A2区　VII期　遺構分布図

される。

また、本調査地点から検出した袋状土坑には、覆土、遺物の出土状況などにいくつかの特徴が見られたので以下に記述する。

A. 遺構底面に硬化面が形成される袋状土坑

遺構底面に硬化面が形成される袋状土坑は4基（065SK：Ⅳ期・156SK：Ⅲ期・230SK：Ⅱ期・274SK：Ⅱ～Ⅲ期）検出した。硬化面はいずれも開口部直下に形成され、円形や不定形を呈する。065SK、156SK、230SK、274SKは底面の規模が2.70～3.20 mでフラスコ状を呈し、底面にはピットを伴わない。230SKからは、多量の焼土・礫を検出していることなどから、出入りの際や、遺構内での作業時に硬化面が形成されたと推測される。

065SKからは、上部、下部の2枚の硬化面を検出した。上部の硬化面からは復元して器形のわかる加曾利EⅠ式を中心とした土器が18個体出土した。

B. 覆土に焼土を多く含む層を持つ袋状土坑

覆土に、焼土を多く含む層を検出した袋状土坑は8基（058SK：Ⅳ～Ⅵ期・065SK：Ⅳ期・105SK：Ⅳ期・159SK：Ⅲ期・190SK：Ⅲ期・230SK：Ⅱ期・274SK：Ⅱ～Ⅲ期・293SK：Ⅳ期）である。覆土下層に焼土層を含む袋状土坑は4基（105SK・159SK・190SK・230SK）である。230SK（Ⅱ期）は、遺構底部に焼土と径1～5cmの被熱した礫を集中して検出した。礫は磨耗した円礫が殆どであり、河原などから採取されたものと推測される。円礫の中にはチャートなど石器の材料となるものも含まれている。焼土集中箇所の下部は被熱による硬化などは確認されず、焼土及び礫は外部から持ち込まれたと推定される。

065SK（Ⅳ期）からも上部硬化面の直上から遺物を多く含んだ焼土層を検出した。

C. 遺物を多く伴う袋状土坑

袋状土坑のなかには、復元して器形のわかる遺物、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢（註7）を多く含む土坑が多く見られた。その中でも、a. 遺構底面から遺物を多く出土するもの、b. 遺構底面及び袋状土坑の括れの部分より遺物を多く出土するものが見られた。

a. 遺構底面から遺物を多く出土するものは、8基（064SK：Ⅳ期・065SK：Ⅳ期・102SK：Ⅲ期・190SK：Ⅲ期・256SK：Ⅳ期・274SK：Ⅱ～Ⅲ期・306SK：Ⅲ期・323SK：Ⅲ期）確認された。遺物は、平均すると復元して器形のわかるもの約3個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢約1個体が出土している。

b. 遺構の底面及び括れの部分より遺物を多く出土するものは、6基（138SK：Ⅲ期・156SK：Ⅲ期・203SK：Ⅱ期・230SK：Ⅱ期・302SK：Ⅱ期・304SK：Ⅱ期）確認された。遺構内の括れ部分より出土した遺物は平均すると、復元して器形のわかるもの約2個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢約1個体である。底面から出土したものは合わせて、復元して器形のわかるもの1個体、口縁部から頸部を水平に欠いた深鉢2個体であり、括れ分部の方からより多くの完形に近い土器が出土した。156SK、230SK、304SKは底面より礫を検出した。304SKは、白色粘土を遺構底面より検出した。遺構の時期はⅡ期が多い。

D. 粘土を検出した袋状土坑

遺構底面、出土遺物内から粘土を検出した遺構は2基（190SK：Ⅲ期・304SK：Ⅱ期）確認された。304SKは、遺構底面より白色粘土塊を2点合計210 g（乾燥重量）検出した。190SKは、遺構底面より出土した土器の器内の土を水洗選別した際に黄白色粘土145 g（乾燥重量）を検出した。どちらの粘土も白～黄白色を呈し砂や礫などの混入物は見られない。両者とも外部から搬入された可能性が高い。

本調査地点から検出したいわゆる袋状土坑は、時期・形態による差異が認められた。本調査地点から南西へ

1.3km 程離れた、新善光寺跡（註 8）からも縄文中期に位置づけられる袋状土坑 17 基を検出している。新善光寺跡から検出した袋状土坑の法量を分析すると（註 9）、底径は 1.60 ～ 2.70 mの範囲を示す。袋状土坑の底径の平均は 2.22 mである。新善光寺跡検出の袋状土坑の断面形はフラスコ状を呈しピットは伴わない「フラスコ a」に分類される。新善光寺跡の袋状土坑より出土している遺物は、阿玉台Ⅲ式土器が主体であり、本調査地点のⅠ期とⅡ期の間に置づけられると推定され、遺構の法量は本調査地点の「フラスコ a」やⅡ・Ⅲ期の袋状土坑と類似した範囲を示す。

本調査地点から検出した袋状土坑の底面は、鹿沼パミス層直上もしくは直下に位置するものが多く、ほぼ同様な自然堆積層を持つ新善光寺跡から検出した袋状土坑も遺構底面は鹿沼パミス層の直上に位置し、鹿沼パミス層を意識して掘削が行われたと考えられる（註 10）。その目的については、土壌の回収のため、鹿沼パミス層に含まれる水分による土坑内の調湿のため、掘削深度の一つの目安としたためなど、複数の理由が考えられるが、現時点では判断が難しい。いずれにしても鹿沼パミス層を意識して掘削が行われた可能性が高い。

また、新善光寺跡第 22 号土坑からは覆土中層より石棒が出土しており、「集落内において祭祀的な行為が行なわれていたことをうかがわせるものである。」（2006 財団法人茨城県教育財団：註 8）と指摘されている。本調査地点の袋状土坑 138SK（Ⅲ期・フラスコ a）からも石棒が覆土の中層より正位で出土しており、集落内での祭祀的な行為との関連が考えられる。

本調査地点からは、同時期と推定される袋状土坑を多く検出し、集落内での袋状土坑を構築する位置がある程度決まっていたのではないかと推測される。また、袋状土坑の断面形や法量などから、時期的な特色も看取された。さらに、袋状土坑には、覆土、遺物の出土状況などから様々な用途が想定しうる。065SK に関しては、硬化面を 2 枚検出し、硬化面直上に遺物を多く含む同様な袋状土坑は、調査区内では他に確認されず、本調査地点内でも特殊な用途を持っていた可能性が高い（石井）。

註 1：塚本師也氏は、袋状土坑・フラスコ状土坑について「平面形が円形もしくは楕円形を呈し、開口部径より底径の方が大きい土坑を広く「袋状土坑」と呼ぶことにする。袋状土坑のなかでも、頸部が円筒状もしくは漏斗状を呈してしっかりと括れ、全体の形状が「三角フラスコ」状のものを「フラスコ状土坑」と呼ぶ。（中略）「フラスコ状土坑」は「袋状土坑」の一種となる。」（塚本 2007）としており本報告書も以上の解釈に拠る。さらにここでは、壁面がオーバーハングする袋状土坑を、形状から袋状・フラスコ状の 2 つに分類し、括れ、ピットの有無からさらに分類した。

註 2:フラスコ状を呈する袋状土坑（フラスコ a、フラスコ b）は断面形で壁面の底面からの立ち上がりが 20 ～ 60 度以内で、開口部の手前で括れ、また壁面が概ね平坦であるものを、上部が掘削されている場合は前述のことが想定される遺構をフラスコ状と判断した。

註 3：D 区から検出した縄文時代の遺構は、出土遺物が小片のため遺構年代の詳細が不明のため今回の検討からは外した。

註 4：阿玉台Ⅱ式土器、が 160SK より 1 点出土しているが、出土遺構の遺存状況も悪く詳細が不明のため、Ⅰ期とⅡ期の間に時期区分としては入れなかった。

註 5：遺構間の距離は。遺構の開口部中央における距離を測る。

註 6：本調査地点から検出した袋状土坑は上部を削平されているものが多いため、底径を用いて図 108 を作成した。

註 7：胴部から底部にかけては、ほぼ残存しているが、口縁から頸部をほぼ水平に欠いているものを数えた。

註 8：財団法人　茨城県教育財団　2006 「新善光寺跡　宍戸城跡―主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書―」茨城県教育財団文化財調査報告　第 256 集

註 9：遺構の底径については、報告書の事実記載に拠った。

註 10：註 8 では袋状土坑に関して「いずれもソフトローム層を開口部、ハードローム層を括れ部、鹿沼パミス層を底面としている点で共通している。硬いロー ム層で屈曲し、もろい鹿沼パミス層で平坦面を作ることは、地山の性質を上手く利用した結果」と指摘している。

参考文献

海老原郁夫　1988 『北関東加曾利Ｅ式土器様式』「縄文土器大観３　中期Ⅱ」小林達雄　小学館

小林達雄　1988 『縄文土器大観２　中期Ⅰ』 小学館

塚本師也　2007 『茨城県における袋状土坑研究の視点』「考古学の深層―瓦吹堅先生還暦記念論文集―」

塚本師也　2007 『乾燥型貯蔵穴』「縄文時代の考古学５　なりわい―食料生産の技術―」 同成社

黒沢秀雄　1993 『茨城県の縄文時代中期のフラスコ状土坑について』「研究ノート」財団法人茨城県教育財団

石岡市教育委員会　1979 「石岡市東大橋原遺跡―第２次調査報告―」

茨城県立歴史館史料部　2006 『茨城県立歴史資料叢書９　茨城の縄文土器』茨城県立歴史館

大志白遺跡群調査団　2000 「大志白遺跡群発掘調査報告書―アンビックス緑が丘ニュータウン造成に伴う発掘調査―（縄文時代編）」河内町埋蔵文化財調査報告書　第３集　栃木県河内町教育委員会

財団法人茨城県教育財団　2002 『宮後遺跡１　上巻』茨城県教育財団文化財調査報告第 188 集

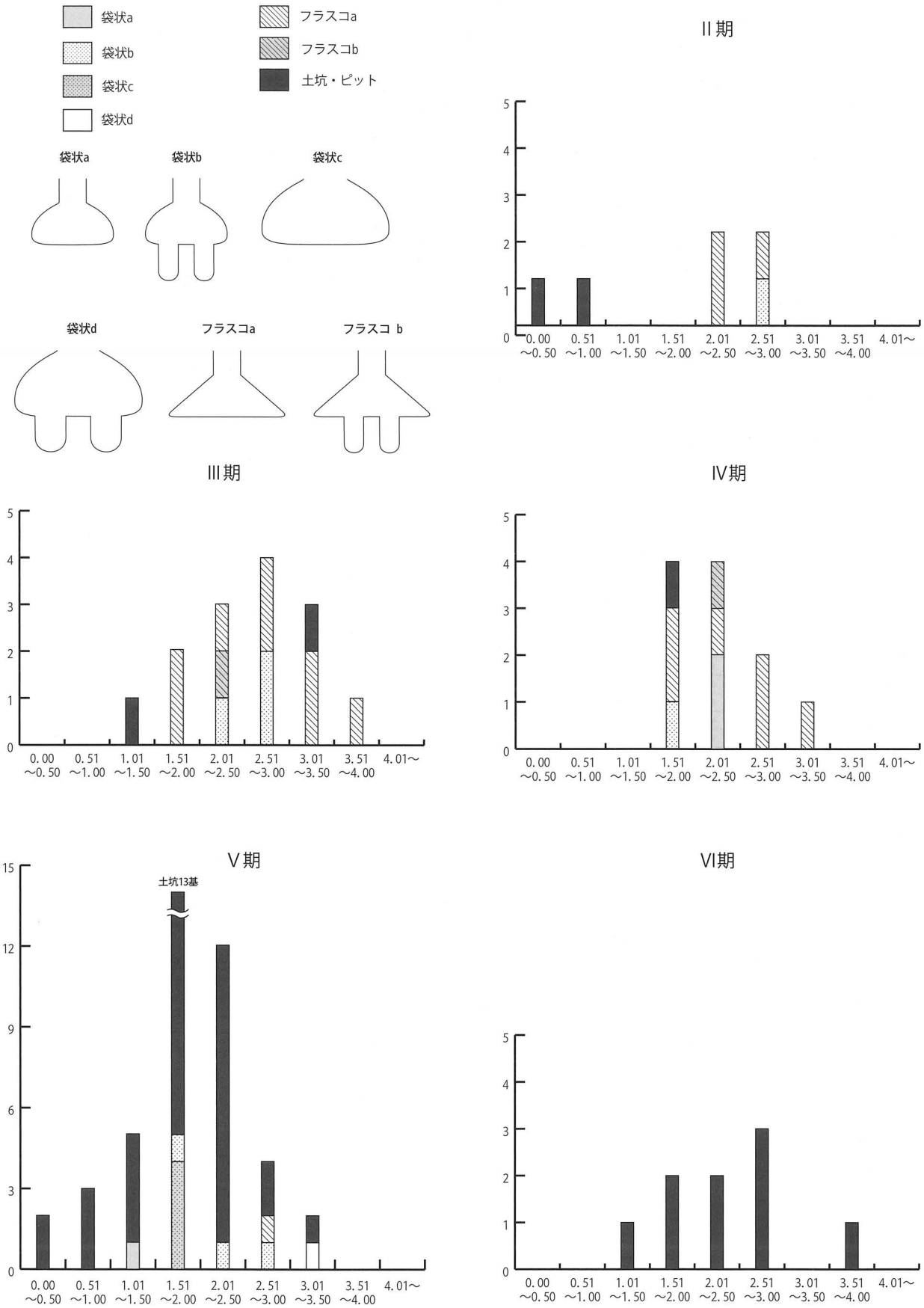
財団法人茨城県教育財団　2002 『宮後遺跡１　下巻』茨城県教育財団文化財調査報告第 188 集

財団法人茨城県教育財団　2005 『宮後遺跡２　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　上巻』茨城県教育財団文化財調査報告書第 240 集

財団法人茨城県教育財団　2005 『宮後遺跡２　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　下巻』茨城県教育財団文化財調査報告書第 240 集

諏訪遺跡発掘調査団　1980 「諏訪遺跡発掘調査報告書」日立市文化財報告第７集　日立市教育委員会

大成エンジニアリング株式会社　2004 「茨城県友部町　善九郎古墳群―「宍戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―」 宍戸国際ゴルフ倶楽部



第 108 図　縄文時代　II～VI期　遺構底面法量

表 60　袋状土坑一覧表

遺構NO	開口部		底面		底面標高	深さ	断面	焼土層有無	硬化面	底面の鹿沼パミス層における位置	出土遺物	時期区分	遺物出土位置	遺物	備考	壁面の傾斜(°)
	長	短	長	短												
012SK	1.91	1.64	1.96	1.65	41.73	0.84	袋状c		無	直上	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	底面	多きい破片	出土遺物が054SKと接合	73～93
054SK	3.77	3.34	3.44	3.04	41.16	1.30	袋状d		無	直上	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	底面	破片1		77-105
058SK	1.52	1.52	1.56	1.56	41.41	0.86	袋状c	中層焼土	無	直上	加曾利EⅢ式	Ⅳ～Ⅵ	焼土層	破片		78-94
062SK	1.82	1.82	2.73	2.66	41.36	0.94	袋状b		無	直下	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	覆土	破片		58-88
064SK	2.60	2.02	2.50	2.20	41.46	0.67	袋状a	最下層炭化物	無	直上	加曾利EⅠ式・中峠式	Ⅳ	底面	完形2・胴部以下完形2		79-96
065SK	1.98	1.72	3.21	3.06	40.47	1.52	フラスコa	上部硬化面直上焼土	有2枚	直下・下	加曾利EⅠ式・中峠式	Ⅳ	底面	完形13・胴部以下完形5	上部硬化面からほぼ完形土器13個体上部硬化面は、標高41.08m	47-(89)
078SK	1.80	1.66	2.20	2.20	41.24	0.74	フラスコb		無	直上	加曾利EⅠ式	Ⅳ	覆土	完形		41-59
092SK	2.04	0.95	2.17	2.07	41.27	1.00	フラスコa		無	中	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅲ	覆土	破片		44-45
093SK	1.90	1.26	1.76	(1.37)	41.59	0.47	袋状a		無	上	加曾利EⅠ式	-	底面	破片1		66-81
095SK	2.22	1.85	2.32	2.09	41.17	0.40	袋状b		無	直上	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅲ	底面・ピット内	胴部以下完形		65
097SK	1.67	1.67	2.00	2.00	41.36	0.49	袋状a		無	直上	加曾利E式	-	覆土	破片		50-73
102SK	1.83	1.77	2.98	2.56	41.81	0.70	フラスコa		無	中	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅲ	底面	完形1		25-31
105SK	1.92	1.60	2.77	2.61	41.21	0.77	フラスコa	下層焼土	無	直上	加曾利EⅠ式・中峠式	Ⅳ	覆土	破片		39-48
138SK	1.10	1.18	2.74	2.59	41.26	1.10	フラスコa		無	直下	阿玉台Ⅳ式	Ⅲ	①括れ ②底面	①石棒1・胴部以下完形1 ②完形1・破片		13-21
156SK	2.07	1.48	3.20	3.04	41.33	0.84	フラスコa		有	中	阿玉台Ⅳ式・中峠式	Ⅲ	①括れ ②底面	①完形1 ②礫	底面からは円礫1点が出土	30-33
159SK	1.28	1.16	3.30	3.18	41.10	1.25	フラスコa	下層焼土	無	直下	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅲ	覆土・底面	破片		25
182SK	1.52	1.14	1.80	1.56	41.39	1.00	袋状c		無	直上	加曾利EⅡ式	Ⅴ	覆土	破片		83-104
188SK	1.16	1.16	1.11	0.98	41.52	0.92	袋状a		無	中		-	覆土	破片		71
190SK	1.31	1.15	3.56	3.46	40.95	0.90	フラスコa	下層焼土	無	直下	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅲ	底面	完形1・胴部以下完形1・礫数点		35-36
203SK	1.13	1.26	2.20	2.05	41.45	0.76	フラスコa		無	直上	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅱ	①括れ ②底面	①完形1・胴部以下完形1 ②胴部以下ほぼ完形1		34-48
207SK	2.31	1.38	3.31	(2.14)	41.22	1.05	フラスコa		無	中		-	覆土	破片		36
209SK	1.40	1.12	2.20	2.14	41.51	0.62	フラスコa		無	直上		-	覆土	破片		36
222SK	1.92	1.69	2.00	1.60	41.46	0.68	袋状c		無	中	加曾利E式Ⅱ式・Ⅲ式	Ⅴ	底面	礫1点		38-69
230SK	1.14	1.19	3.00	2.75	41.01	1.36	フラスコa	下層焼土	有	直下	阿玉台Ⅳ式	Ⅱ	①括れ ②底面	①胴部以下完形1 ②礫数点	遺構底面より焼土・礫集中部分検出	45-46
235SK	1.64	1.18	1.72	1.17	40.81	0.67	袋状c		無	直下	加曾利EⅡ式	Ⅴ	覆土	破片		70-88
249SK	0.86	0.86	2.63	2.50	40.91	1.32	フラスコa		無	直下	加曾利EⅠ式・中峠式	Ⅳ	覆土	破片		31-50
256SK	1.17	1.17	1.75	1.70	41.40	0.84	フラスコa		無	直上	加曾利EⅠ式	Ⅳ	底面	完形1		55
261SK	1.77	1.75	2.58	2.34	41.06	0.71	フラスコa		無	直下	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	覆土	破片		31-33
265SK	1.62	1.36	2.58	(1.77)	41.10	0.90	袋状b		無	直下		-	覆土	破片		51-66
267SK	1.80	1.70	2.00	1.90	41.41	0.88	袋状b		無	直上	加曾利E式Ⅱ式・Ⅲ式	Ⅴ	覆土	破片		57-62
270SK	1.12	0.69	1.75	(1.25)	41.47	0.67	フラスコa		無	直上		-	覆土	破片		32-53
274SK	1.03	1.03	2.74	2.74	41.14	0.91	フラスコa	中層焼土	有	直下	阿玉台Ⅳ式・中峠式	Ⅱ～Ⅲ	底面	胴部以下完形1・破片1		27-31
280SK	0.81	0.76	1.95	1.42	41.07	1.14	フラスコa		無	中	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅱ～Ⅳ	覆土	破片		42-50
281SK	2.27	1.92	2.16	1.78	41.36	0.74	袋状b		無	直上	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	覆土	破片		75-76
291SK	2.03	1.88	2.52	2.27	41.59	0.42	袋状b		無	上	阿玉台Ⅳ式	Ⅲ	覆土	破片		59-70
293SK	1.63	0.57	2.05	(0.71)	41.45	0.90	フラスコa	中層焼土	無	直上	加曾利EⅠ式	Ⅳ	覆土	破片		37
302SK	2.70	1.98	2.70	2.50	41.10	1.12	袋状b		無	直下	阿玉台Ⅳ式・中峠式・大木8a～8b式	Ⅱ	①括れ ②底面	①完形4・胴部以下完形1 ②破片・胴部以下完形1		49-70
304SK	0.80	0.44	2.14	1.92	41.46	0.32	フラスコa		無	直上	阿玉台Ⅳ式・加曾利EⅠ式	Ⅱ	①括れ ②底面	①完形1 ②粘土2・礫1・破片4		29-34
306SK	2.12	1.72	2.61	2.39	41.18	0.69	袋状b		無	直上	阿玉台Ⅳ式・中峠式	Ⅲ	底面	完形2		48-67
315SK	1.41	1.50	1.32	(1.19)	41.47	0.57	袋状a		無	直上	加曾利EⅡ式・Ⅲ式	Ⅴ	覆土	破片		85-98
323SK	2.10	1.62	2.46	2.34	41.05	0.37	フラスコb		無	直下	阿玉台Ⅳ式	Ⅲ	底面	完形1		28-45
324SK	1.98	0.57	1.94	(0.57)	41.36	0.88	袋状b		無	直上	加曾利EⅠ式	Ⅳ	覆土	破片		86-87
326SK	1.74	1.21	1.94	(1.11)	41.50	0.19	フラスコa		無	直上	阿玉台Ⅳ式	Ⅲ	覆土	破片		不明
327SK	1.43	1.51	1.58	1.42	41.49	0.56	フラスコa		無	直上	加曾利EⅠ式	Ⅳ	覆土	破片		38-43
333SK	1.75	0.67	2.27	2.15	40.97	0.85	袋状a		無	中	加曾利EⅠ式	Ⅳ	覆土	破片		64-72
336SK	-	-	1.89	(0.73)	41.36	1.11	フラスコa		無	中	阿玉台Ⅳ式	Ⅲ	覆土	破片		40-60

橋爪遺跡出土の石器について

(1) 概要

本調査において石器は 292 点出土した。この内、縄文時代の遺構から出土したものは 150 点である。後世の遺構内や確認面などから出土したものは 142 点を数えるが、使用石材や器種などから判断すると、ほぼすべてが縄文時代に帰属する石器であると考えられる（註 1)。器種の内訳は（表 61)、石材の内訳は（表 62）に示した。（表 61）に示すように、剥片の出土数が最も多く、磨石・敲石類と磨製石斧がそれに続く。石材として数量が最も多いのはチャートで、石鏃や掻器、剥片などの剥片石器に多用されている。次いで砂岩、ホルンフェルスが多く、磨石・敲石類や磨製石斧に供されている。

表 61　石器　器種別出土表

器種	点数	器種	点数
石鏃	8	打製石斧	12
石鏃未製品	9	磨製石斧	20
石錐	1	磨製石斧未製品	1
楔形石器	1	磨製石製品	3
スクレイパー	7	磨石	10
石核	9	敲石	17
石核？	4	磨石・敲石	22
剥片	67	敲石・凹石	1
二次加工を有する剥片	16	石皿	1
微小薄利を有する剥片	27	台石	3
剥片？	15	蜂の巣石	4
砕片	23	石棒	1
		不明	10
計	187	計	105

表 62　石器　石材別出土表

器種	点数	器種	点数
アプライト	1	石英斑岩	4
安山岩	15	閃緑岩	2
花崗岩	4	多孔質安山岩	2
ガラス質黒色安山岩	1	チャート	121
珪質頁岩	5	角閃岩	4
頁岩	1	デイサイト	1
黒色頁岩	1	粘板岩	12
黒曜石	8	変質ドレライト	1
細粒安山岩	1	ホルンフェルス	29
砂岩	32	メノウ	7
蛇紋岩	6	流紋岩	3
石英	29	礫岩	2

本遺跡の縄文時代の遺構は、土器型式から阿玉台～加曾利 E 式期に位置づけられる。これを踏まえた上で、石器についての時期的位置づけを試みるため、石鏃と磨製石斧に着目したい。本調査において縄文時代の遺構から出土した石鏃は 3 点、磨製石斧は 10 点である。石鏃はこのうち 2 点が凹基の無茎鏃であり、磨製石斧は 6 点が定角式である。点数は少なく資料的制約が大きいものの、これらの遺物の特徴を積極的に解釈するなら縄文時代中期後葉の特徴として捉えられ、土器型式の時期的位置づけとの矛盾はない。

次に石器と出土遺構との関連について述べたい。本遺跡では一遺構内からの石器の出土量は多いとは言えず、遺構内への石器の埋納あるいは一括廃棄などが推察されるような資料は確認できなかった。

出土量が最も多いのは 065SK で 13 点である。主に粘板岩製の剥片や安山岩製の磨石・敲石類が出土している。一遺構内の石器組成に傾向が認められるのは 138SK、147SK である。138SK からは石棒、石皿、台石、蜂の巣石など比較的に大形で重量のある石器がまとまって出土しており、石器ではないが重量 7500 g の花崗岩の角礫も出土している。また、熱を受けた痕跡が認められる石器が多い。147SK からはチャート製の剥片が 6 点出土し、大きさ・重量にやや斉一性が看取される。ただし、それぞれがやや色調の異なるチャートを用いたものであり、接合関係はない。

(2) 器種概観

本調査において出土した石器については、資料的制約から石器群としての解釈を行なうことは不適であるため、以下では出土石器において特徴的な器種を個別にとりあげ、橋爪遺跡の石器について概観したい。なお、前述のとおり出土石器の約半数は縄文時代の遺構に伴わない資料であるが、以下便宜的に一括で扱う。

・石鏃　石鏃は総数で８点出土した。基部が内湾し、茎を持たないものが主体である。器長 24 ～ 19 mm、幅 16 ～ 13 mmに収束する。石材は攪乱から出土した黒色頁岩製を除くと、すべてチャート製である。また、石鏃未製品は９点出土しており、石材はチャート製で占められる。未製品の中には粗調整段階と考えられる資料も含まれる。それらの剥離面の観察から、石鏃の製作に剥片素材を用いたと考えられる。周縁部全体あるいは長軸辺から連続的に調整剥離を施し、素材剥片の厚みを減じつつ製品の形状に近づけていく製作工程が推察される。本遺跡においてはチャート製の石核、剥片、砕片が一定量出土しており、石鏃製作が行われていた可能性を充分に示しているが、石器製作跡などの遺構は認められないため、本遺跡内で石器製作が行なわれたのか、持ち込まれて廃棄されたのかは不明である。

・磨石・敲石類　出土点数は 50 点を数える。磨痕、敲打痕については、両者を共に有する資料が最も多く、本文中（第 44 図 22、第 101 図 11）が典型例として挙げられる。概ね扁平な楕円礫の形状を呈し、主に面積の広い面に磨痕が認められ、その面の中央部に敲打による器面のつぶれや剥落を有するものである。これらの共通した特徴は、使用法や加工対象に関係すると考えられるが、大きさや重量には斉一性がうかがえなかった。また、その他の特徴としては、磨石・敲石類の約半数において破損や被熱が認められ、使用や廃棄に関連した痕跡である可能性を指摘できる。植物質食料加工具において対の関係と考えられる石皿については、１点のみ出土している（第 18 図 5）。

・磨製石斧　本遺跡の磨製石斧は定角式磨製石斧が主体である。これらは胴部の断面形が隅丸長方形、もしくは四辺が外湾する長方形を呈し、刃部は両刃である。石材は砂岩、ホルンフェルス、蛇紋岩などが供される。総数 20 点中、石器の一部を破損するものは 14 点を数え、刃部の欠損もしくは刃縁に微小剥離が認められる資料が多い。これらは使用に伴う欠損によって著しく機能を損なったために廃棄された可能性も考えられるが、対象資料数が少なく判然としない。

特記事項として 018SK 出土の磨製石斧が挙げられる。変質ドレライト製で、基部から胴部にかけて石器側面に丁寧な面取り加工が施された製品である。本調査出土の石器においてはこの１点のみが変質ドレライト製であり、入念な加工による整形が他の製品と比較して異質であることから搬入品の可能性が考えられる。その供給地としては、新潟県北部の奥三面遺跡周辺地域が候補として挙げられる（註 2）（望月）。

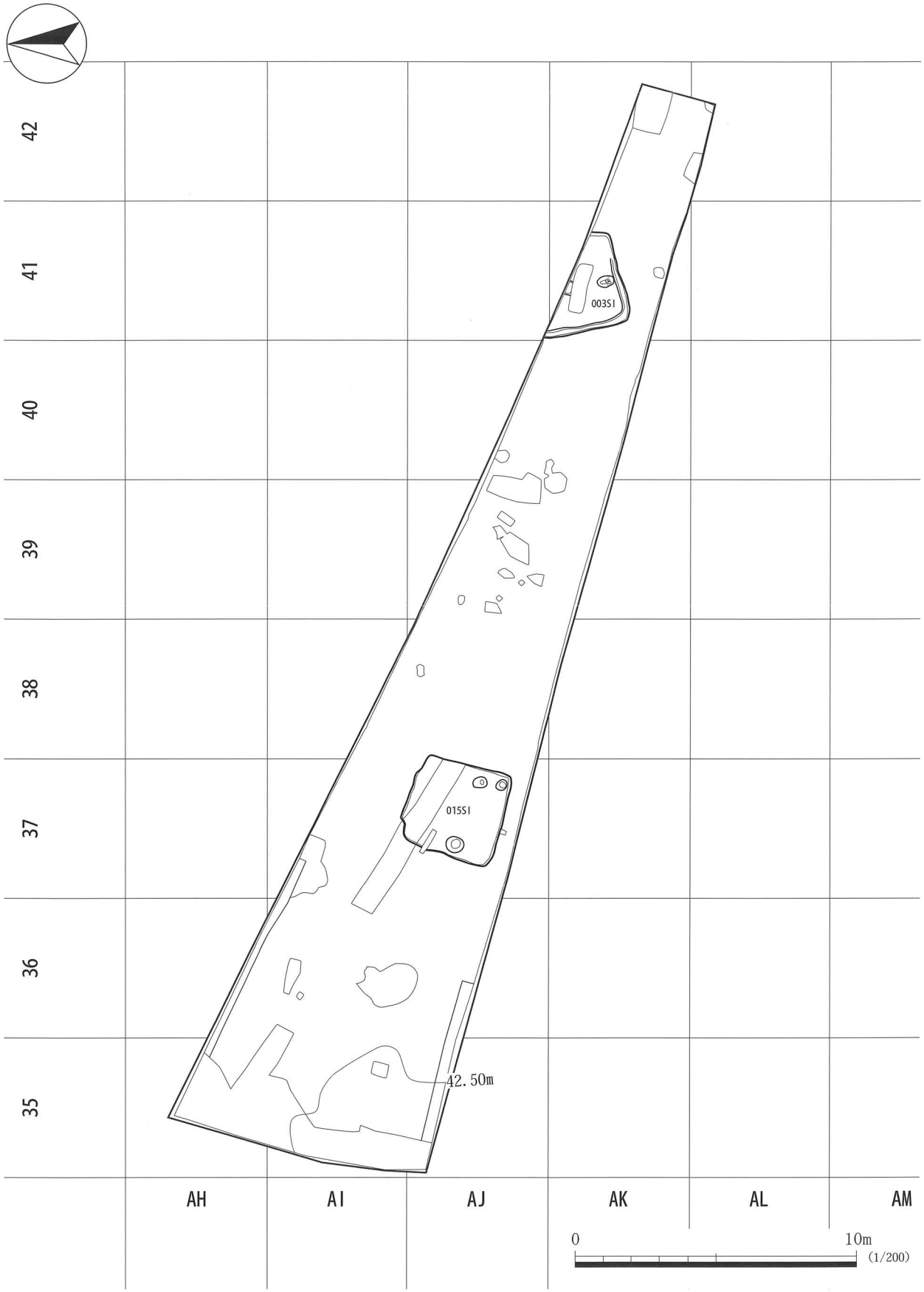
註 1：縄文時代の大形土坑などの遺構内から河原礫のような円礫や、被熱した礫が一定量出土しており、人為的に遺跡内に持ち込まれたと考えられるが、石器もしくは石製品として認められないため、本報告においては扱わない。

註 2：柴田徹氏の御教示による。変質ドレライトは従来、輝緑岩として報告されている例が多い資料である。松戸市子和清水貝塚出土資料などを対象に岩相観察と比重測定による産地推定が試みられている。茨城県域における類例の増加を期待したい。

参考文献

柴田徹 2010「岩種から見た松戸市内の磨製石斧について」『松戸市立博物館紀要』第 17 号　松戸市立博物館

西野元ほか 1996『笠間市西田遺跡の研究－縄文時代における石鏃の製作と流通に関する研究－』筑波大学歴史・人類学系

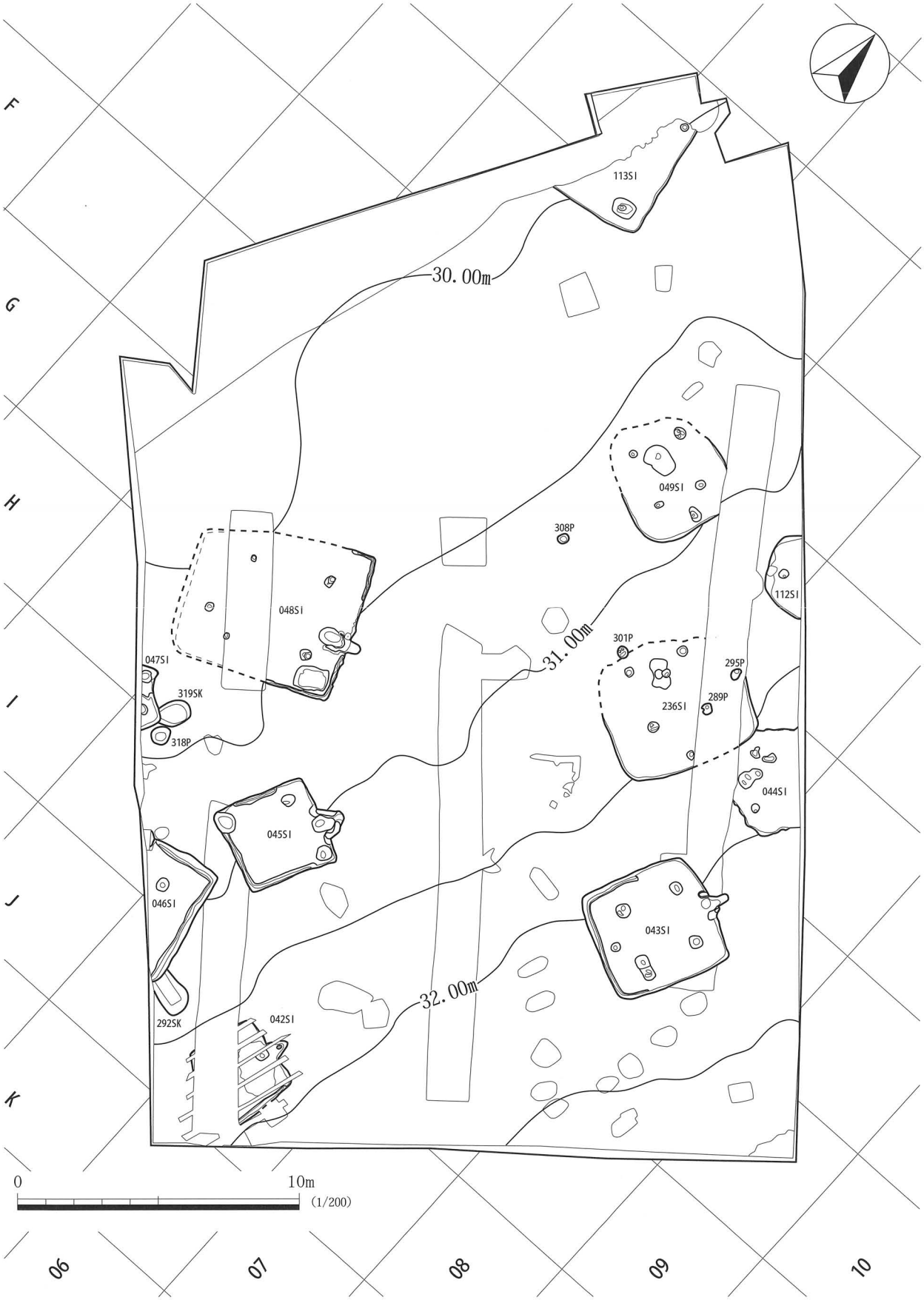


第 109 図　弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代　A1 区全体図

第 110 図　弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代　A2 区全体図 1

第 111 図　弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代　A2 区全体図 2

第 112 図　弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代　A2 区全体図 3



第 113 図　弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代　D 区全体図

第５章　弥生時代の遺構と遺物

第１節　Ｄ区

049SI（第 114・115 図、表 63）

位置　Ｄ区北部、D-5、E-5、E-6 グリッドに位置する。住居西端部は削平を受けており、住居北東隅は試掘坑によって失われている。

規模と平面形　残存部で長軸 3.70 m、短軸 3.20 m、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向　N-23°－Ｅである。

壁　残存する壁高は 0.19 mで、壁は外傾して立ち上がる。住居北西側の立ち上がりは削平を受け、不明確である。

床　平坦で、住居中央部および炉の周囲に硬化が認められる。

ピット　5 基検出された。P1 ～ P4 は、長径 0.28 ～ 0.46 m、短径 0.21 ～ 0.39 mで概ね円形を呈し、深さ 0.26 ～ 0.40 mで、それぞれの位置から主柱穴と考えられる。P5 は南東壁付近から検出し、長径 0.58 m、短径 0.37 mの楕円形、深さ 0.32 mを測る。炉と南東壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。

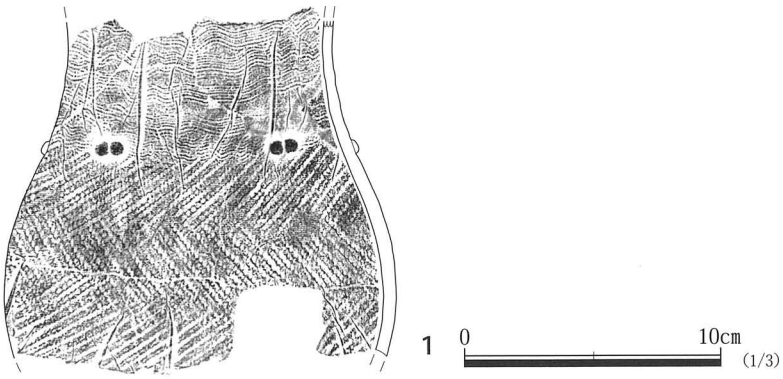
炉　中央部西寄りに位置し、長径 1.12 m、短径 0.74 mの不整楕円形を呈する。炉床は赤変・硬化が認められる。被熱角礫 1 点を炉面から検出した。

覆土　6 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 3・5 層に初期流入土が認められることから、自然堆積と推察される。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は住居覆土から出土した、弥生土器の甕である。試掘坑出土遺物と接合した。外面の胴部は附加条二種（附加 1 条）の縄文が羽状に施文されている。頸部は横走波状文がなされ、7 本の櫛状施工具で施文がなされている。また頸部と胴部の境目にボタン状の突起が 2 つを 1 セットにして 6 セット廻っている。十王台式土器に比定できる。

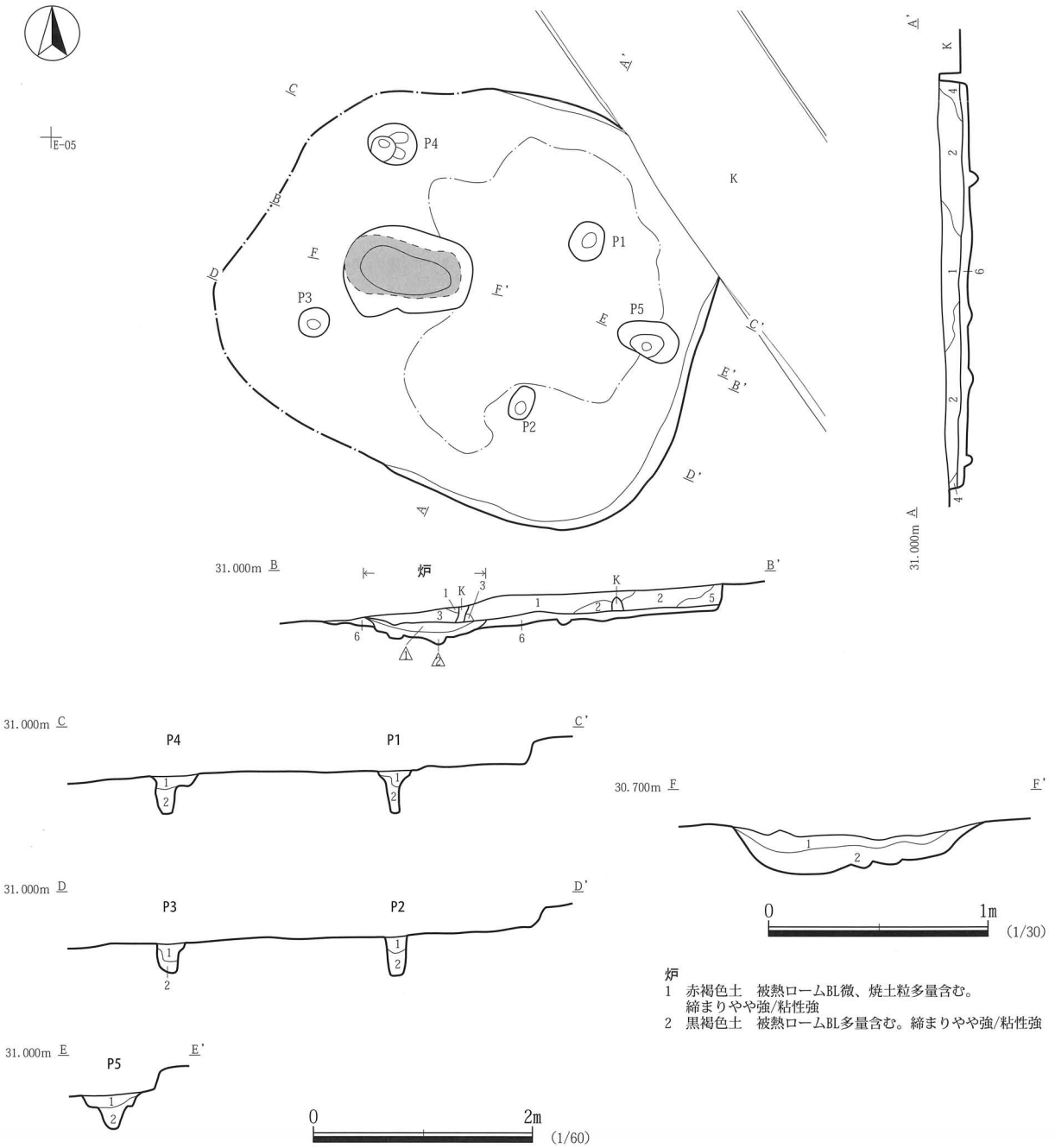
時期　出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。



第114図　049SI 出土遺物

表 63　049SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	049SI	覆土	甕	土師器		<133>			頸部～胴部	不明	外面胴部附加条二種(附加1条)、内面ヘラナデ、横走波状文(7本)、ボタン状突起(2個セットが6単位)。	雲母	褐色	普通	弥生時代終末期	十王台式。試掘坑出土遺物と接合。



049SI
1 黒褐色土　ローム粒微、ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。
　締まり弱/粘性弱
2 黒褐色土　ローム粒・ロームBL微量含む。締まり弱/粘性弱
3 黒褐色土　焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
4 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性あり
5 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まり弱/粘性あり
6 黒褐色土　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性やや強
△1 炉　1層と同じ。
△2 炉　2層と同じ。

炉
1 赤褐色土　被熱ロームBL微、焼土粒多量含む。
　締まりやや強/粘性強
2 黒褐色土　被熱ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

P1
1 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性あり
2 暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性強

P2
1 P1　1層と同じ。
2 P1　2層と同じ。

P3
1 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒微量含む。締まりあり/粘性弱
2 P1　2層と同じ。

P4
1 暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性あり
2 P1　2層と同じ。

P5
1 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性あり
2 暗褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まり弱/粘性弱

第 115 図　049SI 平面図・断面図

236SI（第 116 ～ 118 図、表 64）

位置　D 区東部、F-6、F-7、G-6、G-7 グリッドに位置する。遺構の北半部は試掘坑によって、西半部は削平によって失われている。

規模と平面形　残存部で長軸 4.96 m、短軸 4.36 mを測り、平面形は隅丸正方形を呈する。

主軸方向　N-30°-E である。

壁　残存する壁高は 0.10 ～ 0.28 mで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床　平坦で、住居中央部を中心に硬化が認められる。

ピット　6 基検出された。289P は、236SI に帰属するピットとして扱った。P1 ～ 3 は、長軸 0.30 ～ 0.39 m、短軸 0.34 ～ 0.37m で、概ね円形を呈し、深さ 0.37 ～ 0.44 mである。289P は長軸 0.38m、短軸 0.28 mで不整形である。上部を試掘坑に切られているが、残存する深さは 0.57 mである。それぞれの位置から P1 ～ 3、289P は主柱穴と考えられる。P4 は長軸 0.31 m、短軸 0.22 mで、円形を呈し、深さ 0.34 mを測る。炉と南東壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。P5 は長軸 0.28 m、短軸 0.27 mで、円形を呈し、深さ 0.37 mを測る。炉を切っており、住居覆土が P5 の上に堆積していることから、236SI に帰属すると考えた。

炉　住居中央部西寄りに位置し、長径 1.30 m、短径 0.50 mの不整楕円形を呈する。炉床は赤変・硬化が認められる。被熱角礫 1 点を炉面から検出した。

覆土　8 層からなり、第 1・2 層がレンズ状に堆積し、第 4 層に初期流入土が認められることから、自然堆積であると推察される。

遺物　実測遺物は 2 点である。

1 は住居覆土から出土した、弥生土器の甕である。外面胴部は附加条 1 種（附加 1 条）に縄文が施文され、被熱している。内面の調整は無い。底部には布目痕がある。胎土に雲母を含んでおり、色調は灰白色である。十王台式土器に比定できる。

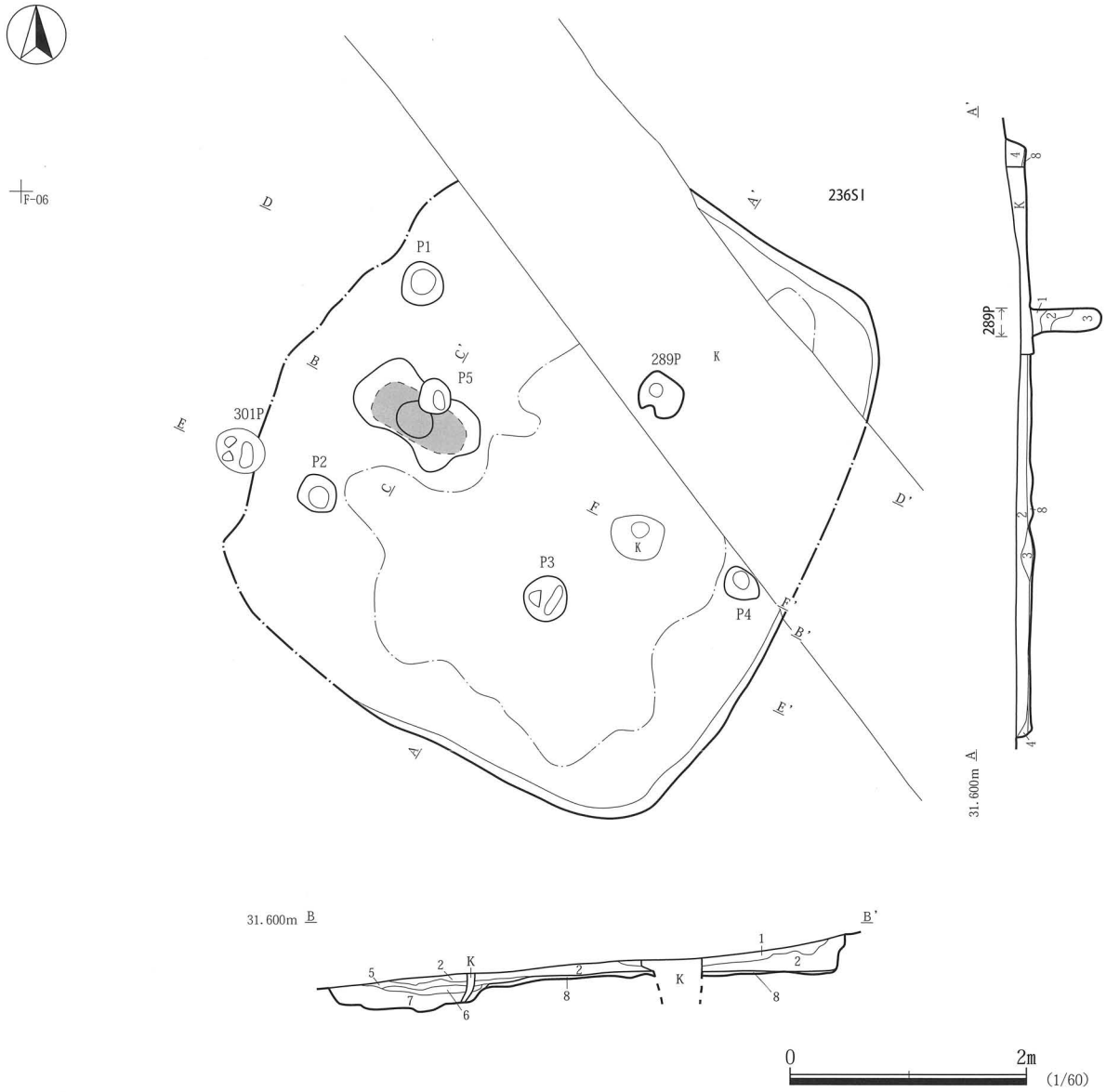
2 は炉から出土した、弥生土器の甕である。外面頚部に縦にスリット施文がなされ、横走波状文は 5 本の櫛状施工具でなされている。口唇部も施文があり、内面はナデを施す。十王台式土器に比定できる。

時期　出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。

第 116 図　236SI 出土遺物

表 64　236SI 出土　土器観察表

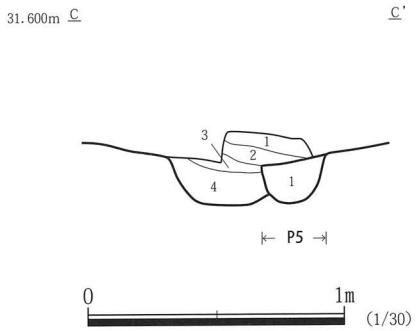
番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	236SI	覆土	甕	土師器		<77>	(68)	(122)	胴部～底部	不明	外面胴部附加条一種(附加1条)、内面調整なし、外面被熱、底部布目痕。	雲母	灰白色	やや不良	弥生時代終末期	十王台式。
2	236SI	炉一括	甕	土師器	(196)	<69>			口縁部～胴部	不明	外面、横走波状文(5本)、スリット施文、内面ヘラナデ、口唇部施文。	小石	暗褐色	普通	弥生時代終末期	十王台式。



236SI
1　黒褐色土　ローム粒微量含む。締まり弱/粘性弱
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性弱
3　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL多量含む。締まりあり/粘性あり
5　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒少量含む。締まり強/粘性あり
6　赤褐色土　被熱ロームBL微、焼土粒多、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
7　褐色土　　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強
8　にぶい横褐色土　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

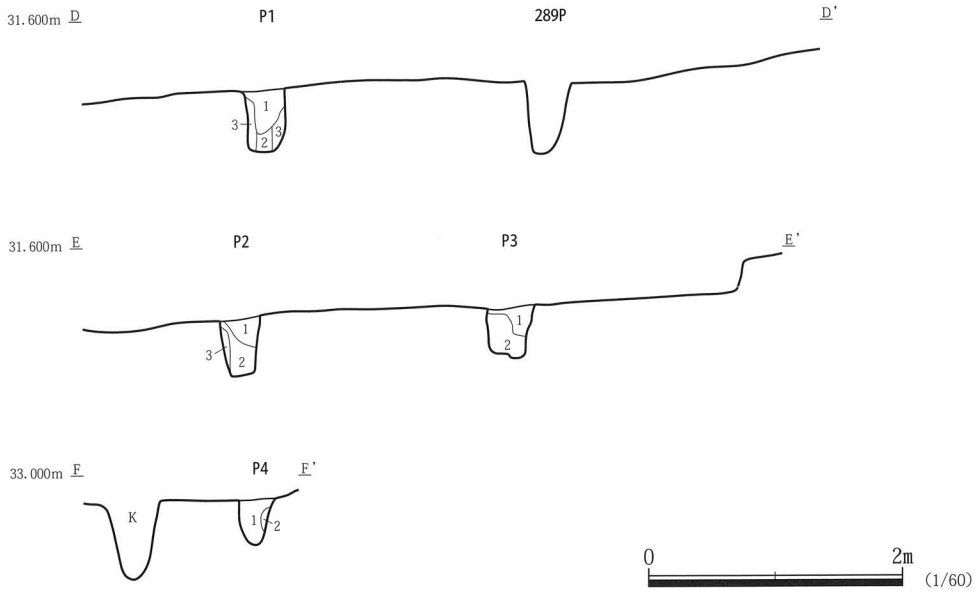
289P
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、焼土粒微量含む。締まり弱/粘性あり
3　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まり強/粘性強

第 117 図　236SI 平面図・断面図



炉
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性弱
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒少量含む。締まり強/粘性あり
3　赤褐色土　被熱ロームBL微、焼土粒多、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
4　褐色土　　ロームBL多量含む。締まりあり/粘性強

P5
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性弱



P1
1　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少量含む。締まり弱/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まりあり/粘性強

P2
1　P1　1層に同じ。
2　P1　2層に同じ。
3　P1　3層に同じ。

P3
1　暗褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性強

P4
1　暗褐色土　ローム粒微、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性あり
2　P1　3層に同じ。

第 118 図　236SI 平面図・断面図

第２節　弥生時代まとめ

台地の下部に相当するＤ区で弥生時代後期十王台式に位置付けられる住居跡を２軒検出した。住居間の距離は３ｍほどあり、それぞれ住居西側に地床炉を設け、赤色硬化面の直上から炉石が出土している。

出土遺物は、十王台式土器の甕であり、049SI 出土遺物と 236SI 出土遺物は接合することなどから、同一時期に廃絶された可能性が高い（清水）。

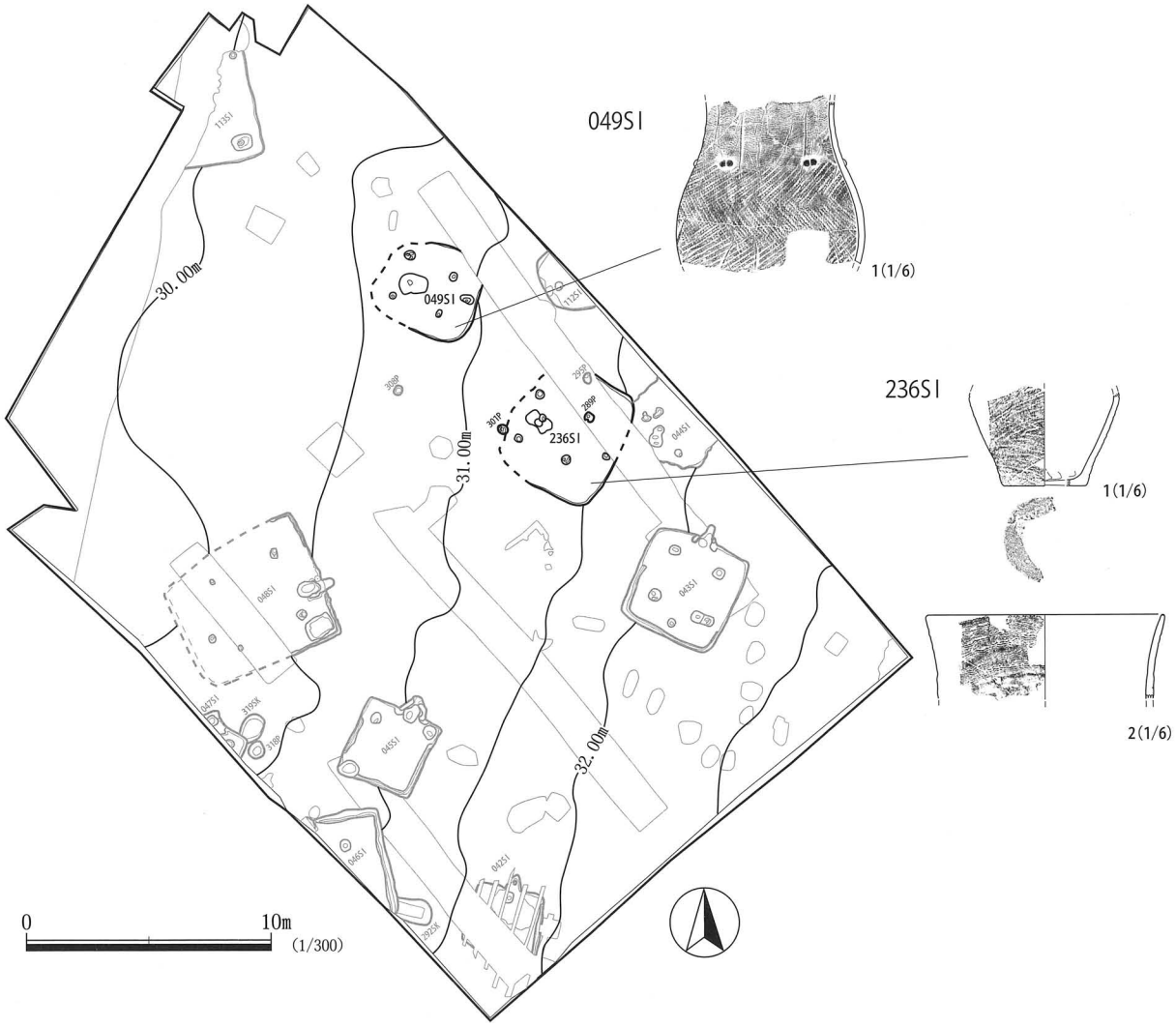
引用・参考文献

飯島一生 2003「十王台式期における異系土器文化圏との交流―涸沼前川流域における十王台式土器と樽式土器の出土例から―」『領域の研究　―阿久津久先生還暦記念論集―』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

財団法人茨城県教育財団　弥生時代研究班 1991「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅰ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート　創刊号』財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団　弥生時代研究班 1992「茨城後期弥生式土器編年の検討（ⅠⅠ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート　２号』財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団　弥生時代研究班 1993「茨城後期弥生式土器編年の検討（ⅠⅠⅠ）十王台式土器について」弥生時代研究班『研究ノート　３号』財団法人茨城県教育財団



第 119 図　弥生時代　Ｄ区　遺構分布図

第６章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　A1 区

015SI（第 120・121、表 65）

位置　A1 区中央西部、AI-37、AJ-37 グリッドに位置する。

重複関係　012SK 南西壁、016SK 北壁、135P 上部を切る。

規模と平面形　長軸 3.41 m、短軸 3.33 m、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向　N-17°-E である。

壁　残存する壁高は 0.11 mで、壁はほぼ直立している。

床　平坦で住居中央部に硬化が認められる。周溝は確認されなかった。

ピット　３基検出された。P1 ～３は長径 0.43 ～ 0.65 m、短径 0.34 ～ 0.56 mの楕円形を呈し、深さは 0.10 ～ 0.34 mである。性格は不明である。

炉　確認されなかった。

覆土　８層からなり、覆土全層にロームブロック・炭化粒子・焼土粒子が含まれ、不規則に堆積し、また、第８層が水平堆積としていることから、人為堆積と考えられる。硬化面を住居中央から西側にかけ検出した。

遺物　実測遺物は土師器７点である。

１は、住居南側の床面から出土した、土師器高坏の坏部である。脚部が粘土接合部で欠損している。外面及び口唇部の内面が赤彩されている。外面調整はヘラミガキがなされ、一部被熱している。また内面調整は横方向にヘラナデされている。3(甕) の底部の下に被さる状態で出土した。古墳時代前期に位置付けられる。

２は、住居西側の床面から出土した、土師器の器台である。内外面ともに赤彩されている。外面及び器受部の調整は横方向に丁寧なヘラミガキである。脚部内部の調整は刷毛目がなされており、円形透孔は３箇所ある。外面横方向のミガキは、一般に畿内系の精製土器にみられる特徴である。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後打ち欠いた部分を研磨している。古墳時代前期に属すと判断できる。

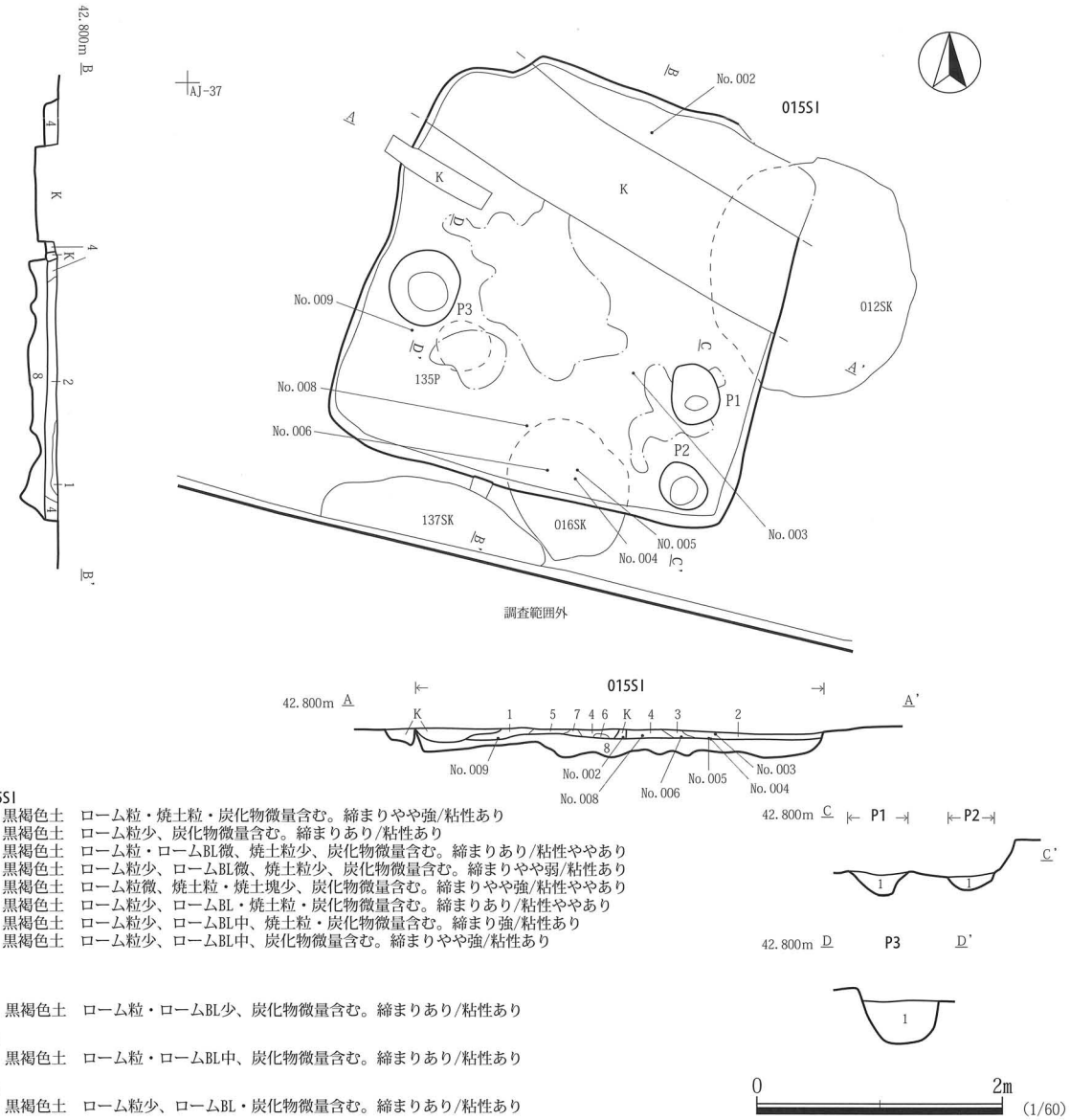
３は、住居南側の床面から出土した、土師器の甕である。口縁部を欠損している。残存部の形状は球状を呈す。外面調整は、胴部上位は刷毛目が、胴部下位は縦方向にヘラケズリがなされている。内・外面にはススが付着している。内面調整は、頚部は刷毛目、胴部は横方向にヘラナデがなされている。形状から古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。

４は、住居東側の床面から出土した、土師器の台付甕である。外面調整は、口縁部から脚台部にかけて縦方向にヘラナデを行い、ススが付着している。内面調整は、胴部に横方向にヘラナデを行い、一部ススが付着している。脚台部の内面は縦方向にヘラケズリ、底部底面はヘラケズリで調整している。古墳時代前期に位置づけられる。

５は、住居南側の床面から出土した坩である。胴部は算盤状を呈し完存している。橋爪遺跡で出土した坩のなかで最大である。外面及び残存している頚部内面まで赤彩がなされていることから、口縁部も赤彩がなされていたと考えられる。外面調整は、胴部上位はヘラミガキ、胴部下位は横方向にヘラナデがなされている。頚部がかなりすぼまっている。口縁部を丁寧に打ち欠き、部分的に摩耗が認められる。古墳時代前期に位置づけられる。

６は、住居南側の床面から出土した、小型精製器種の小型坩である。外面及び頚部内面も赤彩がなされている。外面調整は全面にヘラミガキを行っている。内面調整は、胴部上半部に横方向にヘラナデが、胴部下半部にはヘラミガキがなされ、ススが付着している。半円状の胴部で頚部が広がっていることから、口縁部はかなり大きかったと推測される。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後研磨している。古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。

７は、住居南側の覆土から出土した、小型精製器種の坩である。外面及び頚部内面は赤彩されている。外面調整は、全面にヘラミガキがなされている。胴部内面は横方向にヘラナデがなされている。口縁部を丁寧に打ち欠き、その後研磨している。古墳時代前期中葉以降に位置づけられる。



015SI
1 黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
2 黒褐色土　ローム粒少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
3 黒褐色土　ローム粒・ロームBL微、焼土粒少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性ややあり
4 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒少、炭化物微量含む。締まりやや弱/粘性あり
5 黒褐色土　ローム粒微、焼土粒・焼土塊少、炭化物微量含む。締まりやや強/粘性ややあり
6 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性ややあり
7 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
8 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり

P1
1 黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

P2
1 黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

P3
1 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

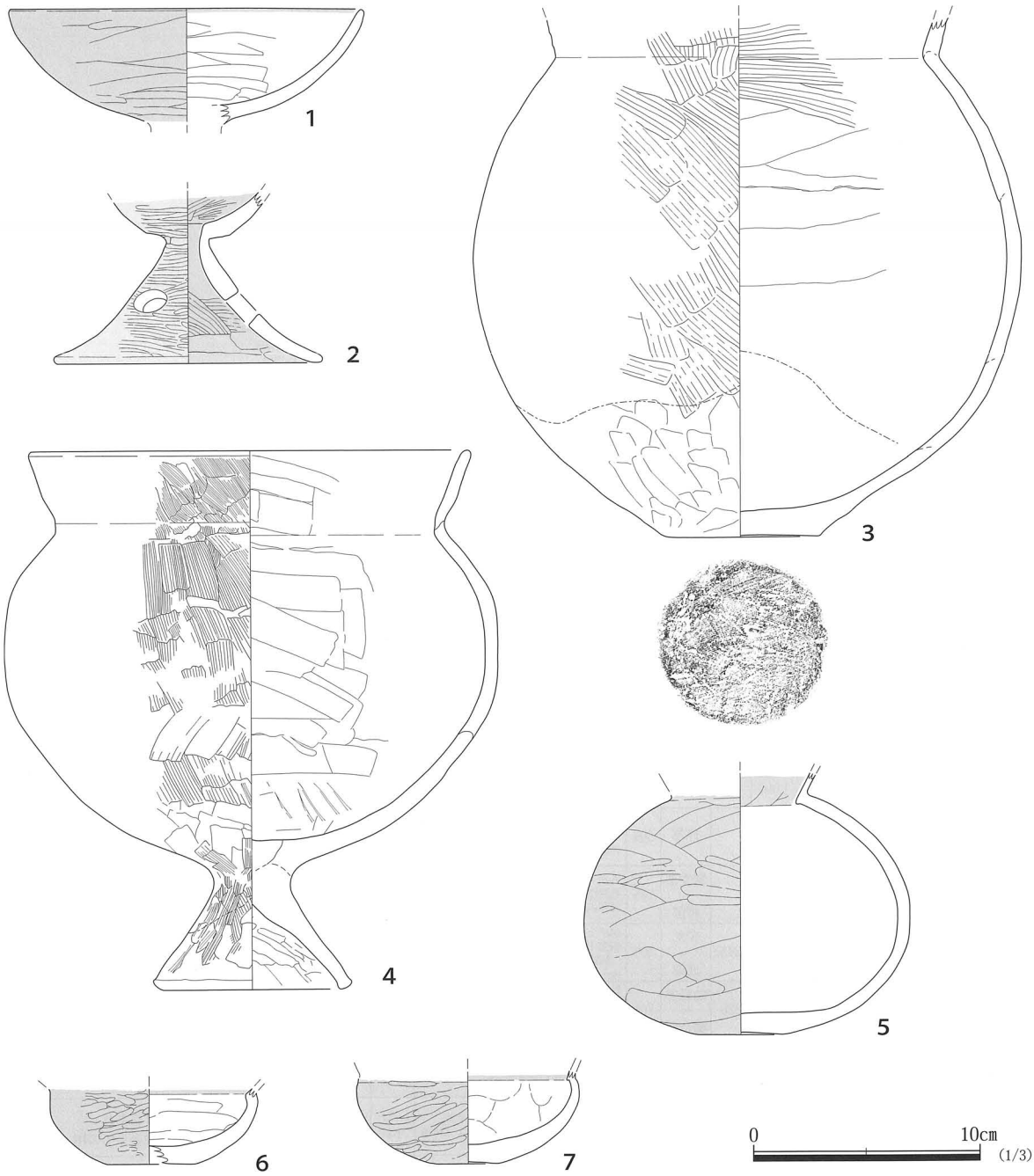
第 120 図　015SI 平面図・断面図

表 65　015SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	015SI	NO.005	高坏	土師器	158	(53)			坏部	50%	外面赤彩、口唇内部赤彩、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ(横)、外面一部被熱。	白色粒小石	褐色	普通	古墳時代前期	坏部分のみ。脚部が粘土接合部で欠損。
2	015SI	NO.009	器台	土師器		<77>	118		器受部～脚部	50%	外面・内面赤彩、外面ヘラミガキ(横)、器受部ヘラミガキ、裾部ヘラミガキ、脚部内部刷毛目。	白雲母白色粒	褐色	普通	古墳時代前期中葉	欠損部に敲打痕あり。
3	015SI	NO.004	甕	土師器		(234)	70	<245>	頚部～底部	40%	胴部上位刷毛目、胴部下位ヘラケズリ(縦)、口縁内部刷毛目、内面ヘラナデ(横)、内・外面スス付着。	白雲母白色粒小石	褐色	普通	古墳時代前期中葉以降	残存部の形状は球状を呈す。
4	015SI	NO.003	台付甕	土師器	<198>	243	80	220	口縁部～脚台部	70%	外面口辺部～脚台部ヘラナデ(縦)、内面胴部ヘラナデ(横)、脚台部内部ヘラケズリ(縦)、底部底面ヘラケズリ、外面スス付着、内面一部スス付着。	黒雲母小石	褐色	普通	古墳時代前期か	
5	015SI	NO.002	坩	土師器		(118)	36	116	頚部～底部	50%	外面赤彩、内面頚部赤彩、外面胴部上位ヘラミガキ、外面胴部下位ヘラナデ(横)。	白色粒	褐色	普通	古墳時代前期か	欠損部に敲打痕あり。胴部は算盤状を呈す。
6	015SI	NO.006	小型坩	土師器		<35>	40	93	頚部～底部	50%	外面赤彩、内面頚部赤彩、外面ヘラミガキ、内面胴部上半部ヘラナデ(横)、内面胴下半部スス付着。	白色粒小石	褐色	普通	古墳時代前期中葉	欠損部に敲打痕あり。小型精製機種としての坩。
7	015SI	NO.008	小型坩	土師器		41	26	99	頚部～底部	50%	外面赤彩、内面頚部内部赤彩、外面ヘラミガキ、内部ヘラナデ(横)。	黒雲母小石	褐色	普通	古墳時代前期中葉	欠損部に敲打痕あり。小型精製機種としての坩。

器台、坩、小型壺は、口縁部を意図的かつ丁寧に叩いて欠損させられていた。また器台は脚部を欠損していた。この行為に伴う土器片は住居内から発見されていないことから、住居の外で打ち欠き、その後住居に廃棄されたと考えられる。遺物はすべて床面直上より出土している。1、3、4、6、7 は住居南側からまとまって出土しており、2 は住居西側、4 は住居東側から出土しているが、住居上部は削平されているため、台付甕など大型の土器は部分的に欠損していた。

時期　出土遺物から、『新善光寺跡・宍戸城跡』においてのⅡ期目に相当する。古墳時代前期中葉に比定される。



第 121 図　015SI 出土遺物

第2節　A2区

040SI（第122図）

位置　A2区北西部、AB-23、AB-24、AC-24グリッドに位置する。

規模と平面形　住居上部は全体的に削平されており、残存する規模は長軸5.70m、短軸5.00mを測り、平面形は隅丸方形と推測される。

主軸方向　N-13°-Wである。

壁　残存する壁高は0.10～0.20mで、壁は床面から緩やかに立ち上がる。南西部は削平を受けているため、立ち上がりは不明瞭である。

床　ほぼ平坦で、硬化面、周溝は確認されなかった。

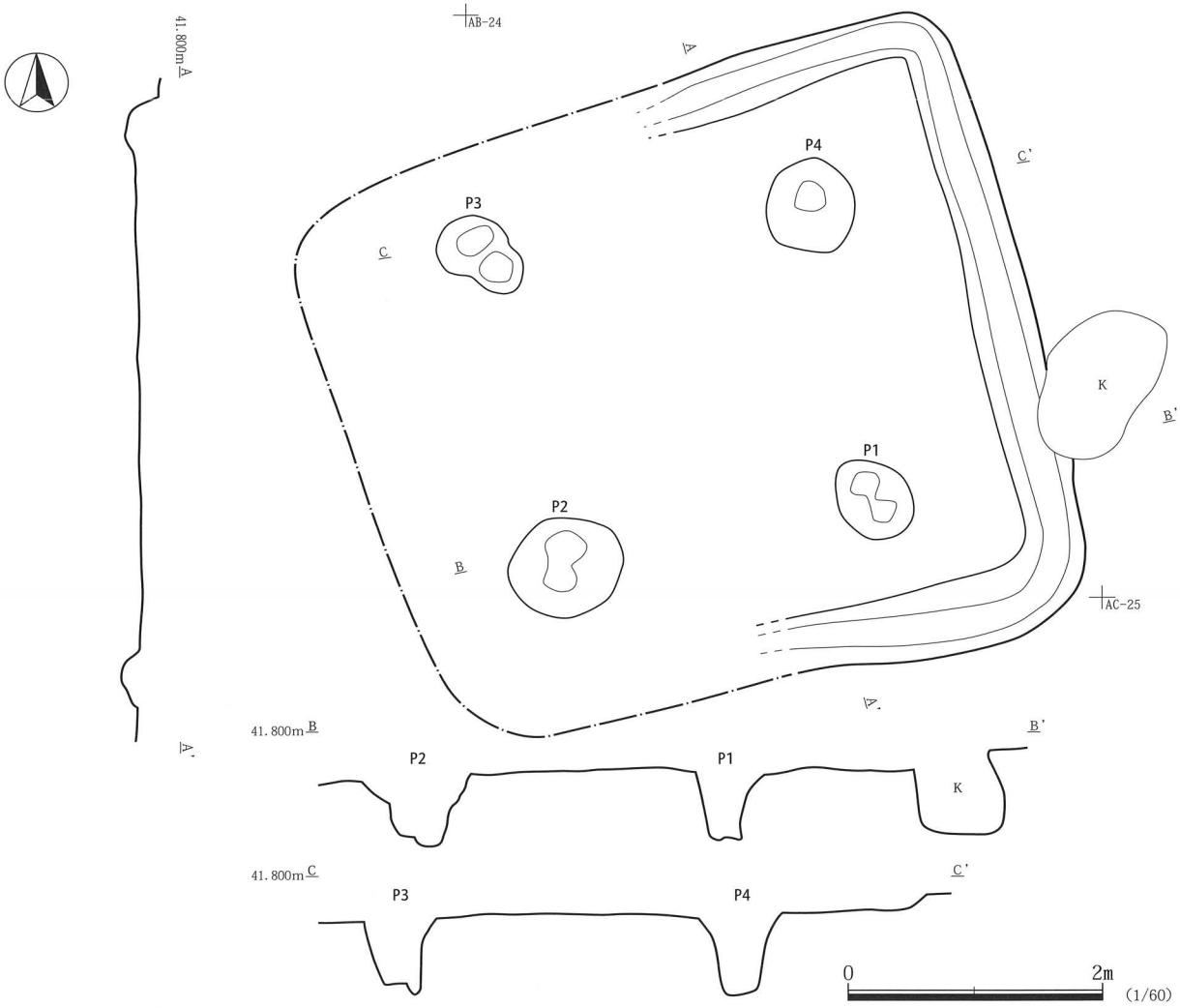
ピット　4基検出した。P1～4は径0.56～0.80 mで、平面形は円形を呈し、深さは0.52～0.66 mを測る。

カマド　確認されなかった。

覆土　明確な覆土は確認されなかった。

遺物　図示してはいないが、甕の底部付近と思われる破片が出土している。外面調整は縦方向にヘラケズリを行い、被熱している。内面は横方向にヘラナデで調整している。胎土に白色粒、極微量の雲母を含んでいる。

時期　出土遺物が少なく詳細は不明である。古墳時代以降の住居跡と考えられる。



第122図　040SI平面図・断面図

第３節　古墳時代まとめ

A1 区で住居 1 軒が検出された。床面から焼土を検出し、炉またはカマドがあったと推測されるが、攪乱を受けており、住居主軸は不明である。住居床面から検出した器台は器受部を、小型坩は口縁部を丁寧に打ち欠き、研磨されているのが特徴である。古墳時代前期中葉、『新善光寺跡・宍戸城跡』のⅡ期に相当する（註 1）（清水）。

註 1：稲田義弘氏・内山敏行氏御教示による。

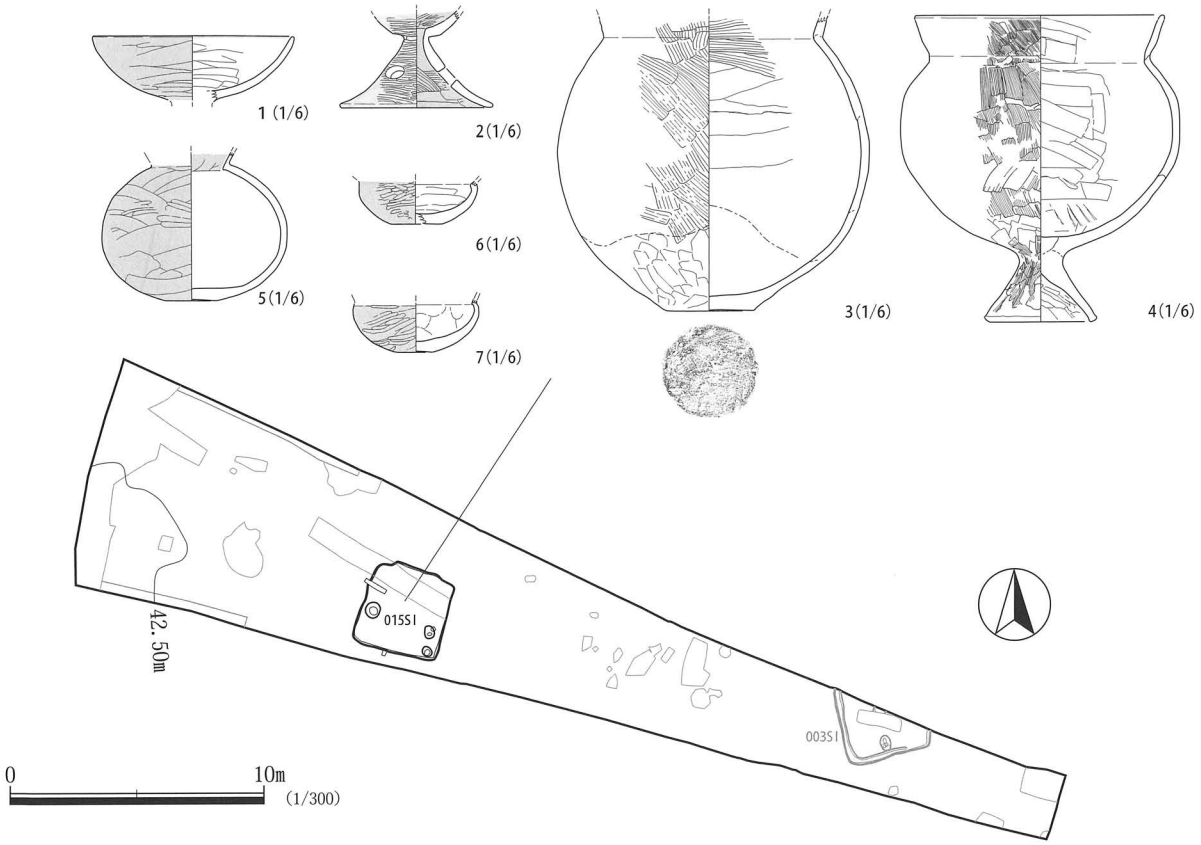
引用・参考文献

浅井哲也 2003「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究　―阿久津久先生還暦記念論集―』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

樫村宣行 1992「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート２号』財団法人茨城県教育財団

樫村宣行・土生朗治・白石真里　1995 「茨城における５世紀の動向」『東国土器研究第４号』東国土器研究会

茨城県教育財団文化財調査報告第 256 集『新善光寺跡・宍戸城跡　主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県水戸土木事務所　財団法人茨城県教育財団２006



第 123 図　古墳時代　A1区　遺構分布図

第７章　奈良・平安時代の遺構と遺物

第１節　A1 区

003SI（第 124・125 図、表 66）

位置　A1 区東部、AJ-41、AK-41 グリッドに位置する。

規模と平面形　北部は調査区外に延伸しているため、全長は不明であるが、検出した規模は長軸 1.08 m、短軸 0.81 mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。

主軸方向　N-14°　-W である。

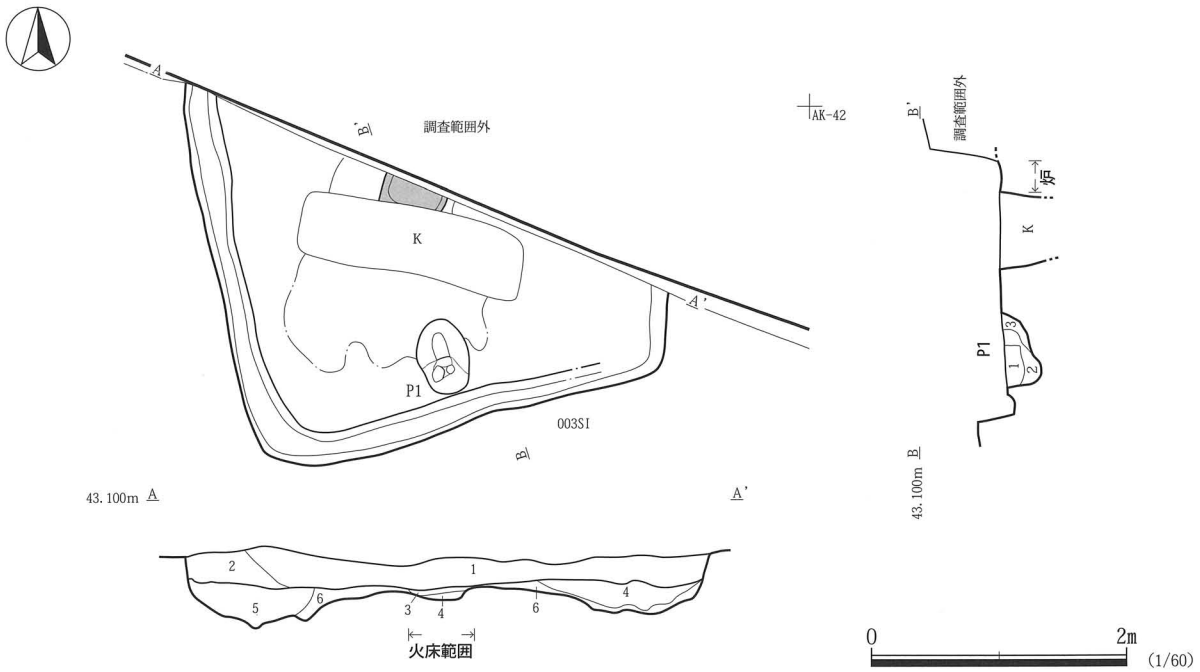
壁　残存する壁高は 0.32 ～ 0.18 mで、壁はほぼ直立している。

床　平坦で住居中央部に硬化が認められる。周溝は住居西半部壁際に沿って巡り、0.06m の深さを測る。

ピット　1 基検出した。P1 は長軸 0.58 m、短軸 0.40 mの楕円形を呈し、深さは 0.26 mである。

炉　住居中央より炉を検出した。検出した規模は、長軸 0.51 m、短軸 0.16 mである。火床面は被熱による硬化が認められる。

覆土　6 層からなり、第 1・2 層はローム土が混入する黒褐色土を主体とし人為堆積と考えられる。第 3 ～ 6 層が掘り方の埋土である。



003SI
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
3　赤褐色土　被ロームBL微、焼土粒多量含む。締まり強/粘性強
4　黄褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まり強/粘性強
5　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まり弱/粘性強
6　褐色土　ローム粒多量含む。締まり強/粘性強

P1
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物微量含む。締まりやや弱/粘性あり

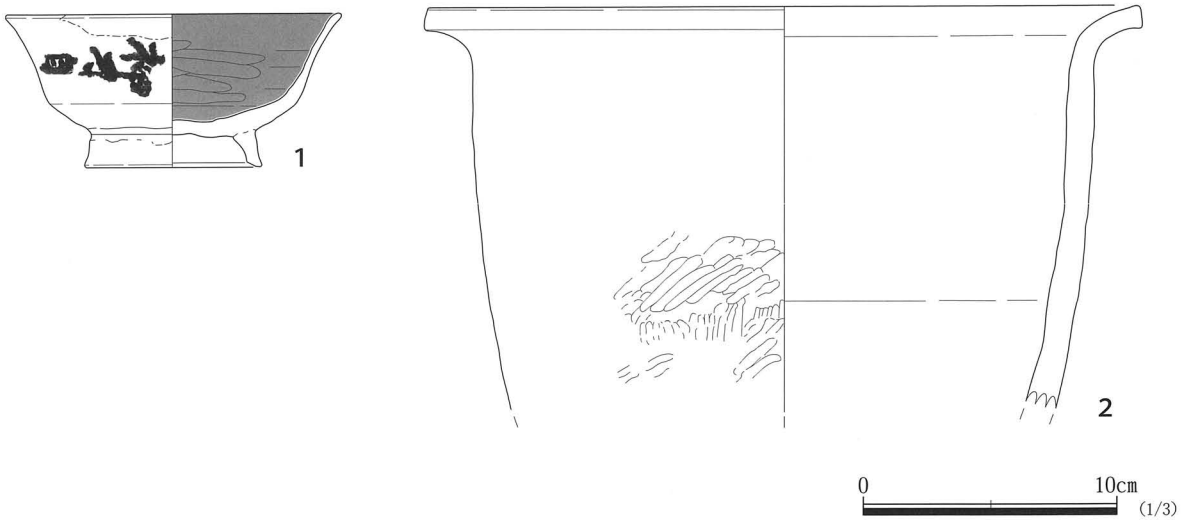
第 124 図　003SI 平面図・断面図

遺物　実測遺物は２点である。

１は、土師器の高台付坏である。外面調整は回転ヘラケズリがなされ、口縁の外面一部にススが付着している。内面調整は黒色処理がなされヘラミガキされている。体部は外反しており、薄手である。貼り付け高台であり、体部立ち上がりよりも内側に高台が付いている。外面胴部に横位で墨書され「神刀自」と読める。９世紀第３四半期に比定できる。

２は、須恵器の甑である。外面調整は平行タタキをしたのち、横に向かってナデがなされているため、胴部上半ではタタキの痕跡がほぼ消えている。９世紀前葉以降に比定できる。

時期　出土遺物から、９世紀前葉から９世紀中葉頃と考えられる。



第 125 図　003SI 出土遺物

表 66　003SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	003SI	攪乱一括	高台付坏	土師器	<129>	61	<68>		口縁部～高台	50%	外面胴部横位墨書「神刀自」、外面胴部下位回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、内面黒色処理。	白雲母	橙色	普通	9世紀第3四半期	貼り付け高台。
2	003SI	覆土	甑	須恵器	<282>	<160>			口縁部～体部	20%	外面平行タタキ、外面ナデ(横)。	白色粒小石	暗褐色	普通	9世紀第1四半期以降	

第 2 節　A2 区

031SI（第 126・127 図、表 67）

位置　A2 区南東部、AH-31、AH-32 グリッドに位置する。

規模と平面　長軸 3.31m、短軸 2.89m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-20°-E である。

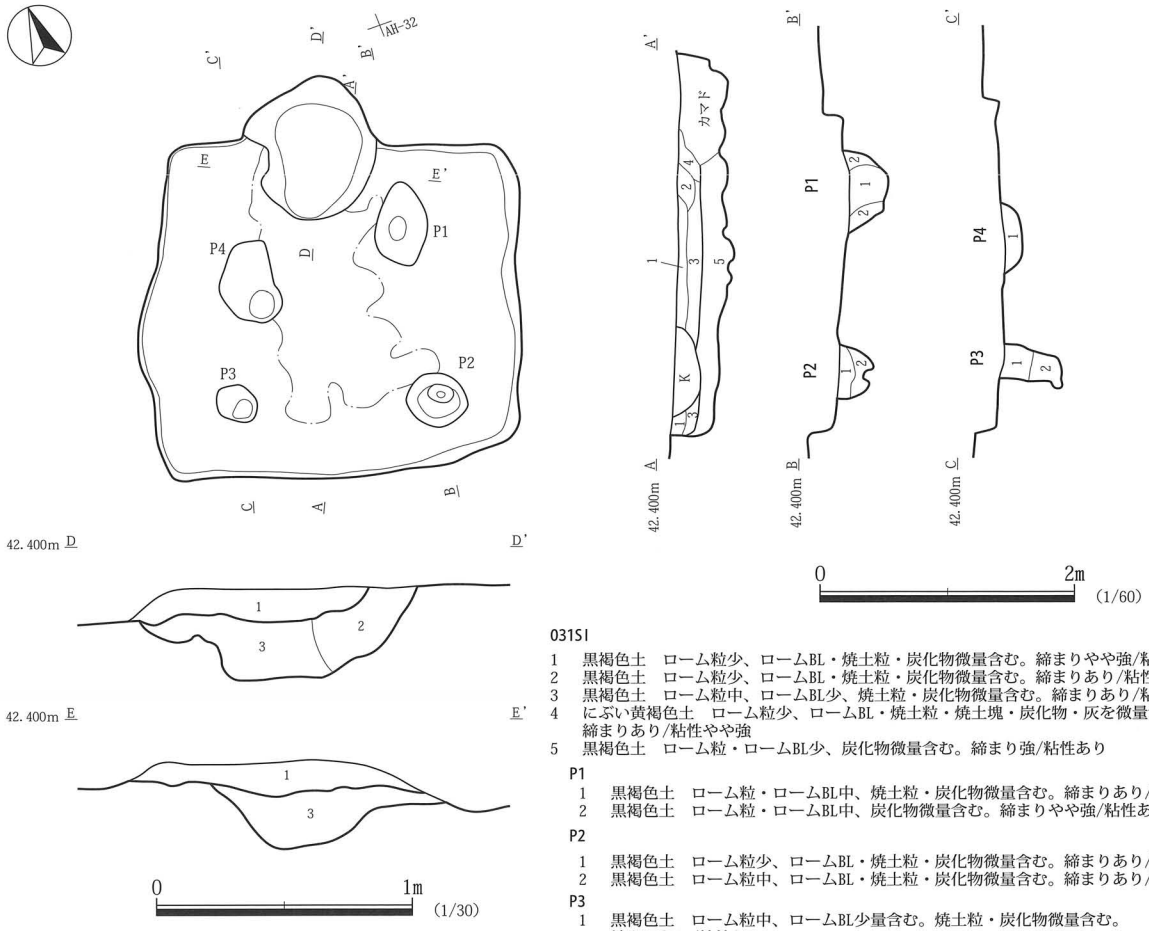
壁　残存する壁高は 0.20 ～ 0.25m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、カマド南西部から住居中央部を中心に硬化が認められる。周溝は確認されなかった。

ピット　4 基検出した。P1 ～ 2、4 は、長径 0.46 ～ 0.75 m、短径 0.42 ～ 0.40 mの楕円形を呈し、深さは 0.15 ～ 0.28 mである。P3 は長径 0.34 m、短径 0.28 mの楕円形を呈し、深さは 0.23 mである。P1 ～ P4 はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド　北壁中央部やや西側に付設されている。遺存状態は悪く、袖部と火床は確認されなかった。規模は煙道部から焚口部まで 1.11 m、壁外への掘り込みは 0.47 mである。カマド部分は住居主体部より先行して埋められている。

覆土　5 層からなり、第 1・2 層が水平堆積を呈しており、人為堆積と考えられる。第 5 層上部が硬化する。



カマド

1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊多、炭化物少、灰を全体的にしみ状に中量含む。締まりやや弱/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
3　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒少、炭化物・灰を全体的に微量含む。締まりあり/粘性やや弱

031SI

1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱
3　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
4　にぶい黄褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物・灰を微量含む。締まりあり/粘性やや強
5　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

P1

1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、炭化物微量含む。締まりやや強/粘性あり

P2

1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

P3

1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

P4

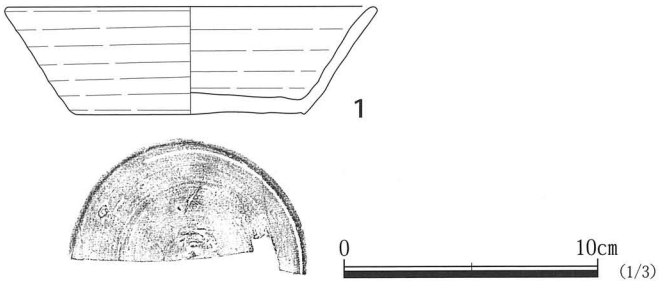
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

第 126 図　031SI 平面図・断面図

遺物　実測遺物は１点である。

１は、住居覆土から出土した、須恵器の坏である。外面調整は、胴部下位に回転ヘラケズリがなされる。底部は回転ヘラケズリがなされ、若干ススが付着している。断面は箱型を呈し、器壁は外反気味に開く。底部の大きさと比べ、口縁の大きさはそれほど大きくない。内面にススが付着している。８世紀第３～４四半期に比定できる。

時期　出土遺物から８世紀中葉から８世紀後葉と考えられる。



第 127 図　031SI 出土遺物

表 67　031SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	031SI	覆土	坏	須恵器	<146>	43	<90>		口縁部～底部	50%	外面胴部下位回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、内面・底部に若干スス付着。	白色粒	灰色	普通	8世紀第3四半期	

032SI（第 128・129 図、表 68）

位置　A2 区南東部、AF-31、AG-31、AG-32 グリッドに位置する。

規模と平面形　長軸 3.92m、短軸 3.61m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-30°-E である。

壁　残存する壁高は 0.22 ～ 0.38m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦である。南西部から北部、北東部に周溝を確認した。

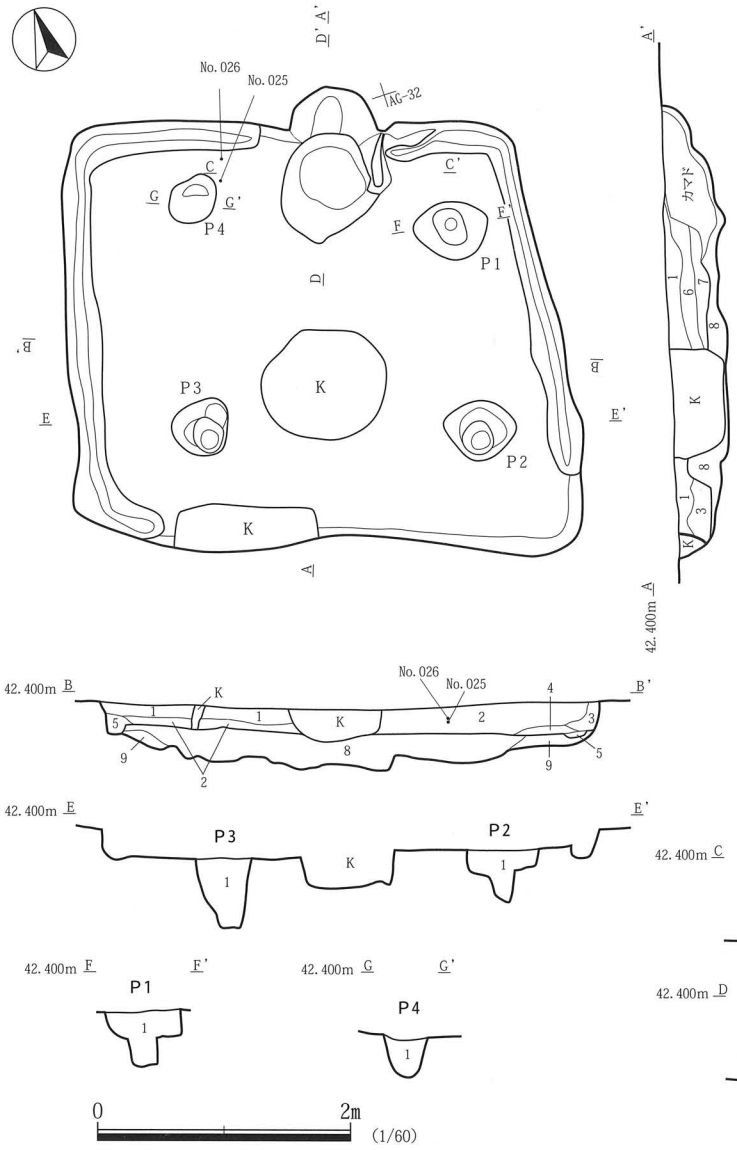
ピット　４基検出した。P1 ～ 4 は、径 0.44 ～ 0.60m で概ね円形を呈す。深さは 0.42 ～ 0.55 mである。P1 ～ 4 はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド　北壁中央部に付設されており、明確な火床は確認されなかった。規模は煙道部から焚口部まで 1.16 m、壁外への掘り込みは 0.32 mである。

覆土　９層からなり、レンズ状堆積と初期流入土の堆積状況から、自然堆積と考えられる。第８層は掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は２点である。1、2 は隣接して出土した。

１は、カマド西側の住居覆土から出土した、土師器の坏または碗と見られる。ほぼ完形に近い。３段の輪積み痕があり、外面調整はナデを行っている。胴部下端は手持ちで横方向にヘラケズリ調整されている。内面調整は、横方向に丁寧なヘラナデがされており、黒色処理がされている。底部には木葉痕があり、外面には若干ススが付着している。外面の調整具合から粗製土器とも考えられる。内面は丁寧に調整されて黒色処理されていることから、内面を重視していたようである。形状から９世紀第１四半期以降と判断した。



032SI覆土

1　黒褐色土　ローム粒微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、赤色焼土微量含む。締まりあり/粘性強
3　にぶい黄褐色土　ローム粒多、橙色焼土微量含む。締まりあり/粘性強
4　暗褐色土　ローム粒中量含む。締まりあり/粘性強
5　暗褐色土　ローム粒中量含む。締まりあり/粘性強
6　暗褐色土　ローム粒少、炭化物微、白色粘土BL中、橙色焼土・赤色焼土微量含む。締まりあり/粘性あり
7　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱
8　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
9　褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まりあり/粘性あり

P1

1　暗褐色土　ローム粒中量含む。締まりあり/粘性強

P2

1　暗褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性強

P3

1　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まりあり/粘性強

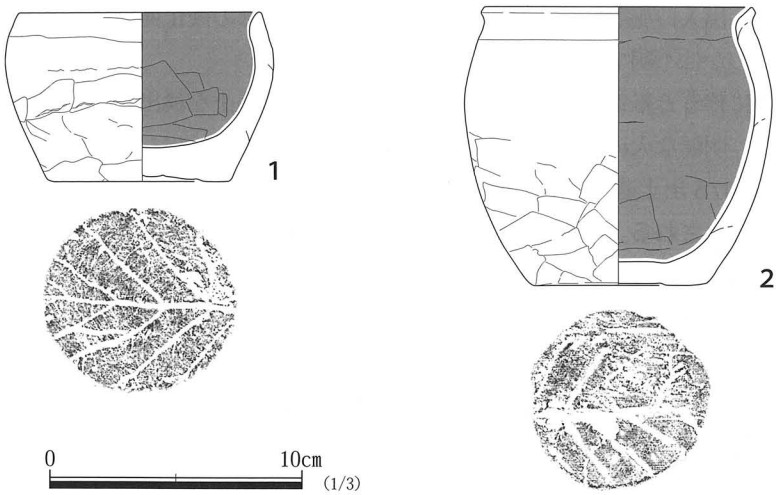
P4

1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

カマド

1　暗褐色土　粘土BL少、小礫微、橙色焼土・赤色焼土中量含む。締まりあり/粘性弱
2　にぶい黄褐色土　橙色焼土中、赤色焼土微量含む。締まりあり/粘性あり
3　明赤褐色土　小礫少量含む。締まりあり/粘性弱
4　灰褐色土　粘土粒少、赤色焼土中量含む。締まりあり/粘性弱
5　暗赤褐色土　小礫微、橙色焼土・赤色焼土中量含む。締まり弱/粘性あり
6　赤褐色土　橙色焼土少量含む。締まり弱/粘性あり
7　にぶい黄褐色土　赤色焼土微、粘土多量に含む締まりあり/粘性あり

第 128 図　032SI 平面図・断面図



第 129 図　032SI 出土遺物

表 68　032SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	032SI	NO.025	坏または碗	土師器	95	67	70	106	口縁部～底部	95%	輪積み痕、外面ナデ、外面体部下端ヘラケズリ(手持ち・横)、内面ヘラナデ(横)、底面木葉痕、内面黒色処理、外面若干スス付着。	黒雲母小石	暗褐色	普通	9世紀第1四半期以降	粗製土器 外面指ナデの可能性あり。被熱
2	032SI	NO.026	小型甕	土師器	<108>	111	<70>	<122>	口縁部～底部	40%	外面上部ナデ、外面下部ヘラケズリ(手持ち・横)、内面ヘラナデ(横)、底部木葉痕、ヘラナデ、内面黒色処理。	白雲母小石	褐色	普通	9世紀第1四半期以降	

2は、カマド西側の住居覆土から出土した、土師器の小型甕である。外面調整は、胴部上半部に横方向にナデがなされ、胴部下半部は横方向に手持ちでヘラケズリがなされている。内面調整は、横方向にヘラナデされ、黒色処理されている。底部は木葉痕があり、木葉痕の上部にヘラナデがされている。頸部と口縁部までの距離が短く、口唇部の摘み出しはない。また胴部の張りも弱い。形状から、9世紀第1四半期以降のものである。

時期　出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

033SI（第130～132図、表69・70）

位置　A2区南東部、AG-29、AG-30、AH-29、AH-30グリッドに位置する。

重複関係　114SIの南西角を切る。

規模と平面形　長軸5.40m、短軸5.15mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-5°-Wである。

壁　残存する壁高は0.10～0.20mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　硬化面を2枚検出した。第3層上部より黒褐色土を主体とする硬化面を、その下部の第5・6層上部よりロームを主体とする硬化面を検出した。床面の貼り直し等が行なわれた可能性がある。上部の硬化面はカマド西側から南壁にかけて確認されほぼ平坦である。下部の硬化面は住居内に全体的に拡がるように検出されほぼ平坦である。周溝は上部の硬化面検出時には確認されなかったが、下部の硬化面検出時に西壁から南壁にかけて確認された（第4層）。

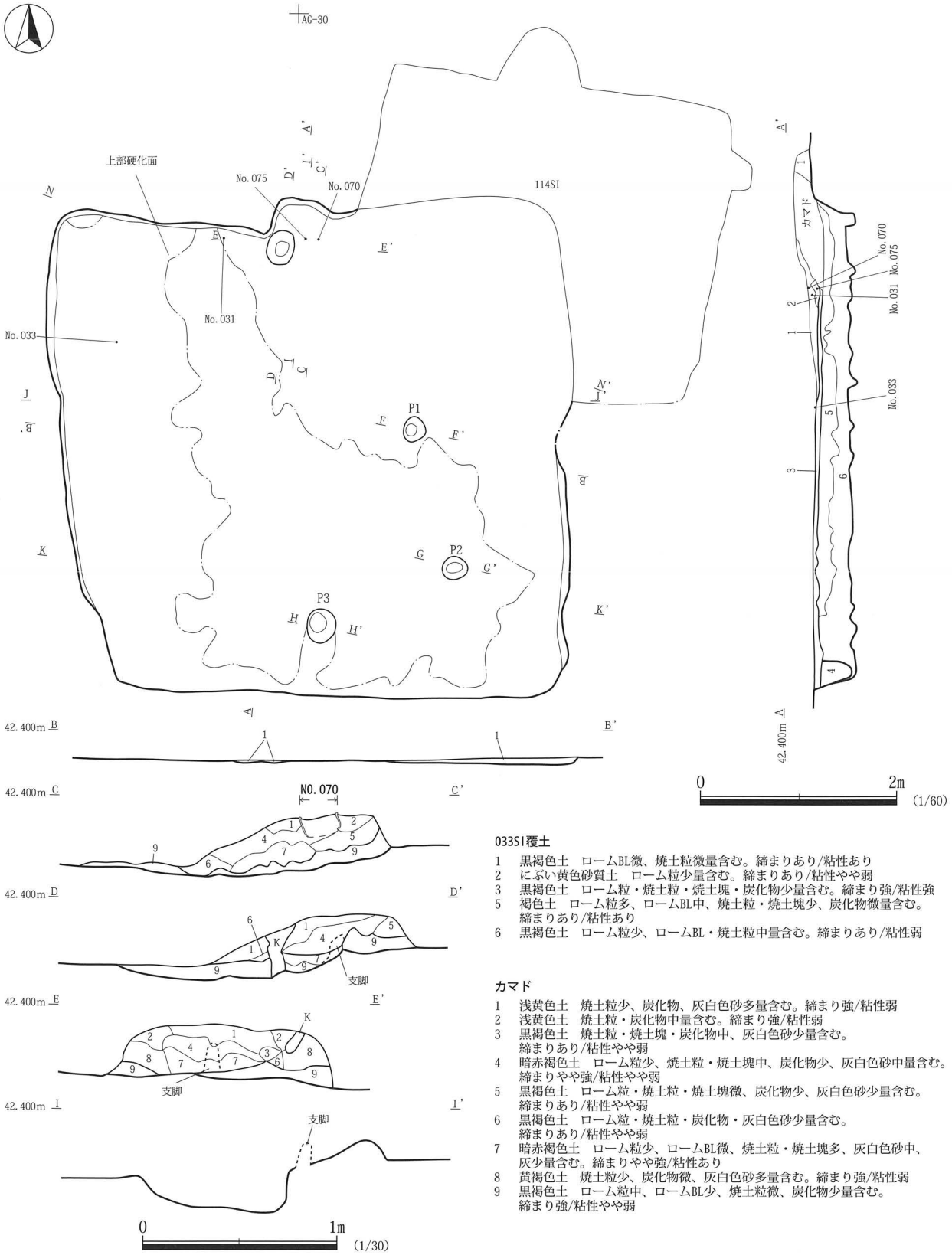
ピット　8基検出した。P1・2・4・6は径0.26～0.53mで、平面形は円形を呈し、深さは0.18～0.64mである。P3・5・7・8は長径0.25～0.43mで、短径0.16～0.36mで、楕円形を呈し、深さは0.13～0.36mである。ピットは上下の硬化面検出時に検出したが、上部の硬化面は黒色土を主体としており下部の硬化面で検出したピットが上部の硬化面に属する可能性もある。P2・4・5・8はその位置から主柱穴と考えられる。P3は、カマドと南壁との位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。上部の硬化面に伴うピットなのか、上下両方の硬化面に伴うピットなのかは不明である。

カマド　上部の硬化面に伴うと推定されるカマドを廃絶した際の埋め土を検出した。下部の硬化面に属するカマドは確認されなかった。明確な火床範囲は確認されなかったが、支脚を検出した。支脚はカマドの掘り込みのほぼ中央から出土し、No.075出土遺物として取り上げた。カマドは北壁中央部に付設されており、煙道部が調査区範囲外へ延伸すると推定される。検出した規模は、壁外への掘り込み0.33mである。

覆土　6層からなり、第3層上部、第5・6層上部に硬化面が形成される。第5・6層が掘り方の埋土である。覆土が薄く自然堆積か人為堆積かは不明である。

遺物　実測遺物は5点である。

1は、カマド東側の住居覆土から出土している、土師器の坏で、ほぼ完形に近い。全面に赤彩がなされている。外面調整は横方向にヘラミガキがなされ、丁寧に細かく磨かれている。底部は手持ちのヘラケズリで調整され、底部の器厚がかなり薄く、丸底気味である。口縁部と体部の境に稜がある。内面はナデが行なわれ、胎土に金雲母が含まれている。



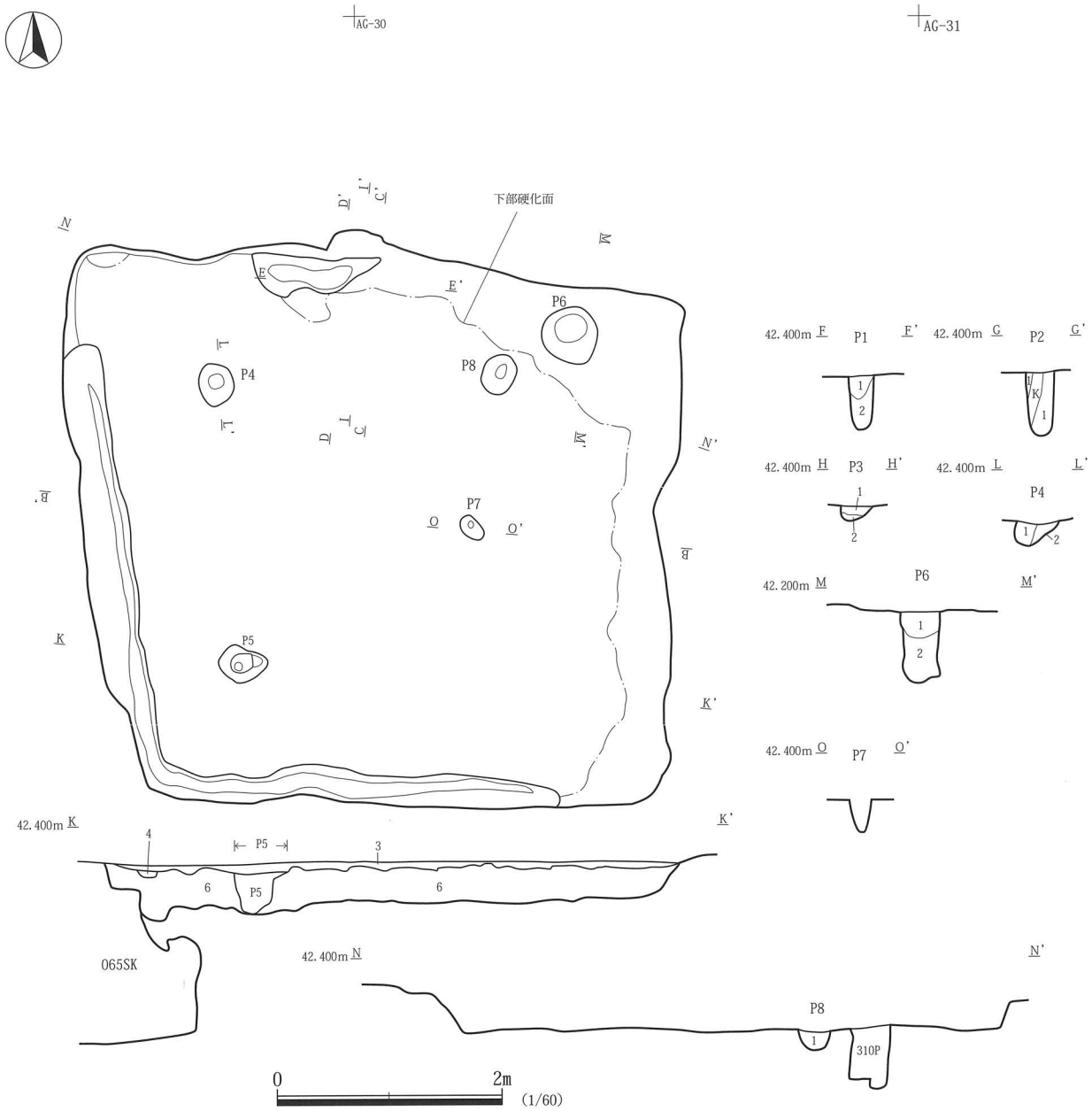
033SI覆土

1　黒褐色土　ロームBL微、焼土粒微量含む。締まりあり/粘性あり
2　にぶい黄色砂質土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性やや弱
3　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まり強/粘性強
5　褐色土　ローム粒多、ロームBL中、焼土粒・焼土塊少、炭化物微量含む。
　締まりあり/粘性あり
6　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒中量含む。締まりあり/粘性弱

カマド

1　浅黄色土　焼土粒少、炭化物、灰白色砂多量含む。締まり強/粘性弱
2　浅黄色土　焼土粒・炭化物中量含む。締まり強/粘性弱
3　黒褐色土　焼土粒・焼土塊・炭化物中、灰白色砂少量含む。
　締まりあり/粘性やや弱
4　暗赤褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊中、炭化物少、灰白色砂中量含む。
　締まりやや強/粘性やや弱
5　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊微、炭化物少、灰白色砂少量含む。
　締まりあり/粘性やや弱
6　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物・灰白色砂少量含む。
　締まりあり/粘性やや弱
7　暗赤褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊多、灰白色砂中、
　灰少量含む。締まりやや強/粘性あり
8　黄褐色土　焼土粒少、炭化物微、灰白色砂多量含む。締まり強/粘性弱
9　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒微、炭化物少量含む。
　締まり強/粘性やや弱

第 130 図　033SI 上部硬化面平面図・断面図



P1
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微、黒ボク土少量含む。締まり強/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微、黒ボク土少量含む。締まり強/粘性あり

P2
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり

P3
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微、黒ボク土少量含む。締まり強/粘性あり

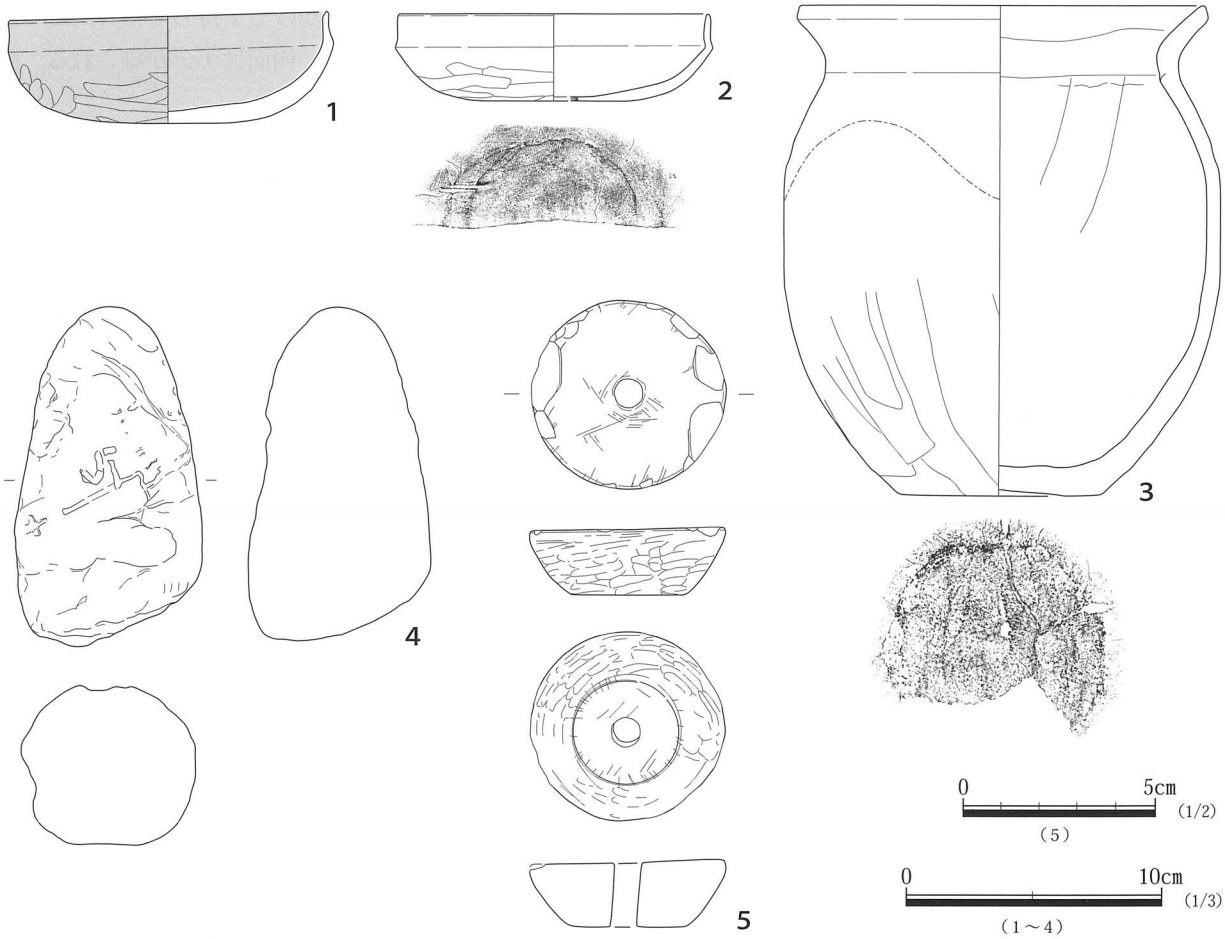
P4
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物微、黒ボク土少量含む。締まり弱/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少、焼土微量含む。締まりあり/粘性あり

P5
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まり弱/粘性あり

P6
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・焼土塊多、炭化物中、白色砂少量含む。締まりあり/粘性やや弱
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱

P8
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・焼土塊微量含む。締まりあり/粘性あり

第 131 図　033SI 下部硬化面平面図・断面図



第 132 図　033SI 出土遺物

表 69　033SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	033SI	NO.031	坏	土師器	123	45		127	口縁部～底部	95%	全面赤彩、外面ヘラミガキ(横)、内面ナデ、底部ヘラケズリ(手持ち)。	黒雲母	褐色	普通	7世紀第3～第4四半期	須恵器流通前 古くても6世紀後半。外面ヘラミガキ丁寧。
2	033SI	覆土	坏	土師器	<122>	35	<124>		口縁部～底部	50%	底部一部赤彩、外面胴部から底部ヘラケズリ、(手持ち・横)、内面ナデ、内外面若干スス付着。	小石	赤褐色	普通	7世紀第3～第4四半期	須恵器流通前 古くても6世紀後半。丸底気味。
3	033SI	NO.070	小型甕	土師器	<158>	196	82		口縁部～底部	50%	外面上半部ナデ、外面下半部ヘラケズリ(縦)、内面口縁部ヘラナデ(横)、内面胴部ヘラナデ(縦)、底部ヘラナデ、外面スス付着。	白雲母	赤褐色	普通	9世紀前後	外面ススは胴の一番張っている所の下まで付着。
4	033SI	NO.075	支脚	土製品		高さ(135)				50%	外面にくぼみなどが見られるが風化が著しく人為的なものかは不明。		橙色			カマドから出土。素地に黒雲母を含む。

表 70　033SI 出土　石製品観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	上部径(mm)	厚さ(mm)	下部径(mm)	孔径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
5	033SI	NO.033	紡錘車	石製品	51	17.5	28	7.5		100%	下位から穿孔している、細かいミガキ、下位と側面の境に溝。	泥岩				形状は厚台形。

2は、住居覆土から出土した、土師器の坏である。外面調整は、胴部から底部にかけて手持ちで横方向にヘラケズリがなされており、丸底気味である。また口縁部と体部の境に稜が残っている。内面はナデが施される。内外面に若干ススが付着している。

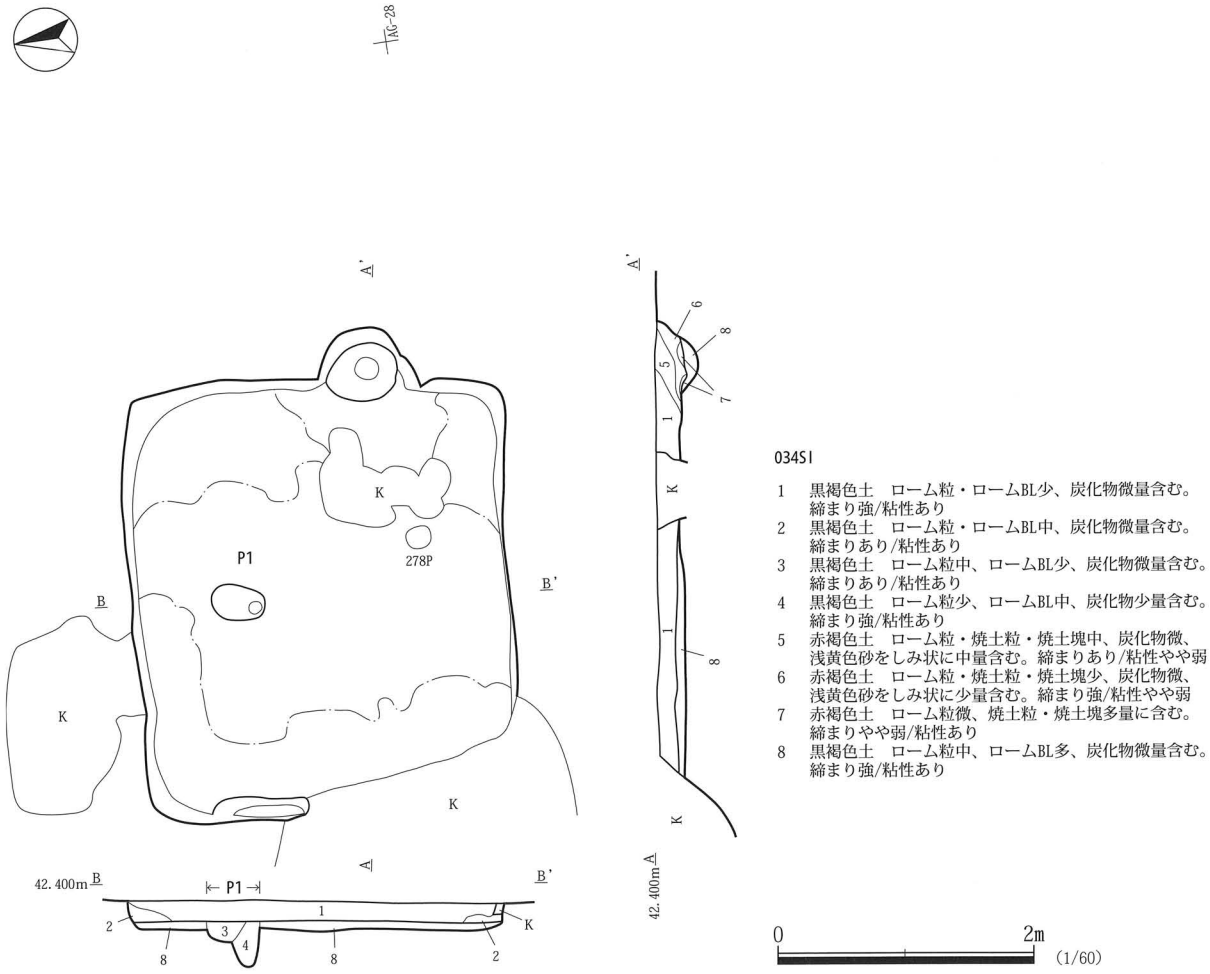
1及び2は、丸底気味であること、口縁に稜を持つことから、須恵器流通以前のものと見られ、古くても6世紀後半、6世紀第3四半期から第4四半期と考えられる。

3は、カマドの焼土上位の砂を多く含む灰白色の層から出土した、土師器の小型甕である。橋爪遺跡で出土した小型甕の中でも大型の部類になる。外面は、胴部上半部を横方向にナデ、胴部下半部を縦方向にヘラケズリをしている。調整の順番は上半部のヘラナデを行ってから、下半部のヘラケズリを行っているものとみられる。内面調整は、口縁部を横方向にヘラナデされ、内面胴部を縦にヘラナデがなされる。底部はヘラナデがなされている。外面のススは胴部の最張部分より下に付着している。口唇部の摘み出しはなく、胴部はやや張っている。胎土に白雲母を含んでいる。9世紀前後に比定される。

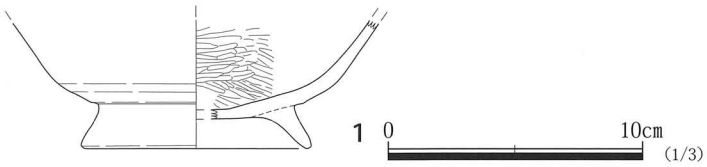
4は、カマドから出土した支脚である。外面の風化が著しく調整等は不明である。素地に黒雲母を含んでいる。

5は、住居北西角から出土した紡錘車で、泥岩製である。横位で出土した。形状は厚台形で、下面から穿孔している。側面には細かいミガキがあり、下面と側面の境に溝がある。

時期　1・2は流れ込みと見られ、年代を推定するものは小型甕しかない。また、114SIを切っていることから、8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第133図　034SI平面図・断面図



第 134 図　034SI 出土遺物

表 71　034SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	034SI	カマド	高台付坏	土師器		(50)	87		胴部～高台	20%	外面ヘラナデ(横)、内面ヘラミガキ、底部回転ヘラケズリ、高台「ハ」の字状、内面スス付着。	小石	赤褐色	普通	10世紀代か	貼り付け高台 内面ヘラミガキ細かい。

034SI（第 133・134 図、表 71）

位置　A2 区南東部やや中央寄り、AF-28、AF-29、AG-29 グリッドに位置する。

重複関係　住居西側は撹乱により切られている。

規模と平面形　長軸 3.94m、短軸 3.08m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-95°-E である。

壁　残存する壁高は 0.24m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈する。

床　ほぼ平坦で住居中央部に硬化面が認められる。住居南西部に一部周溝が認められたが、明確には確認できなかった。

ピット　1 基検出した。P1 は長径 0.38m、短径 0.26m で、概ね楕円形を呈し、深さは 0.38 mである。

カマド　東壁やや南側に付設されており、火床面を検出した。火床面は床面とほぼ同じ高さで、平坦である。火床面は被熱による硬化が認められる。規模は煙道部から焚口部まで 0.68m、壁外への掘り込みは 0.44 mである。

覆土　8 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 2・5・6 層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第 8 層が掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 はカマドから出土した土師器の高台付坏である。外面調整は横方向にヘラナデがなされ、内面調整は細かいヘラミガキがされている。底部は回転ヘラケズリがなされ、高台は「ハ」の字状に大きく開く。高台が大きいことから 9 世紀末より新しいと考えられ、10 世紀代に比定される。

時期　出土遺物から 10 世紀以降と考えられる。

035SI（第 135・136 図、表 72）

位置　A2 区中央部、AE-26、AE-27、AF-26、AF-27 グリッドに位置する。

重複関係　281SK 西壁を切る。北東壁を撹乱に切られる。

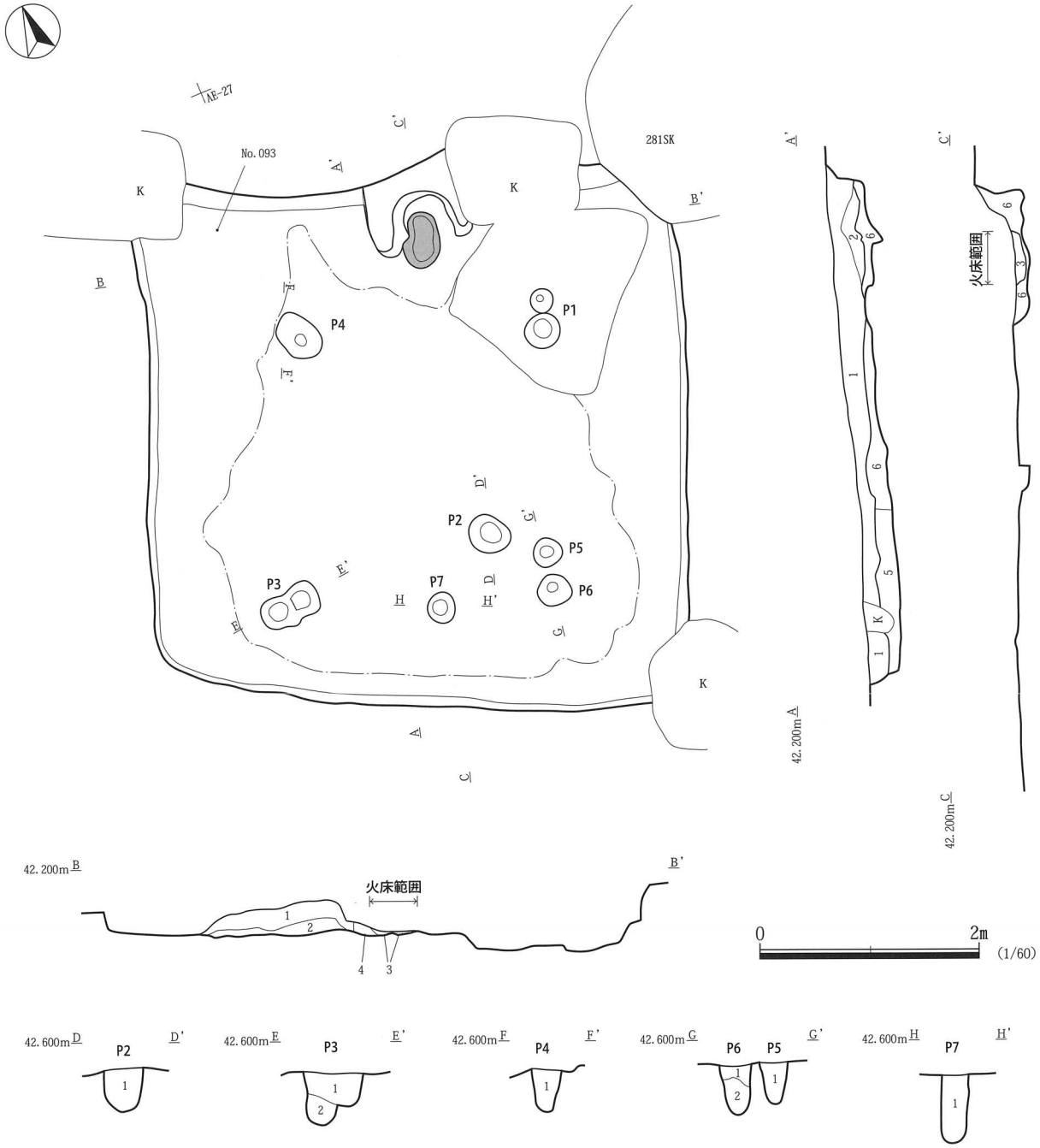
規模と平面形　長軸 6.42m、短軸 6.35m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-20°-E である。

壁　残存する壁高は 0.11 ～ 0.28m で、壁は床面からほぼ直角に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、硬化面は住居中央部に確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　7 基検出した。P1 は撹乱内から検出したが、位置などから 035SI に伴うピットと判断した。P2、5 ～ 7 は径 0.26 ～ 0.38m で、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.36 ～ 0.62 mである。P3 は長径 0.62 m、短径 0.26 m、深さ 0.5 mの楕円形で、底面は 2 段になる。P1・5・6・3・4 はその位置から主柱穴と考えられる。



035SI
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊・炭化物中、淡黄色砂少量含む。締まりあり/粘性やや弱
3　赤褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊多、炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
4　褐色土　ローム粒・ロームBL多、焼土粒・焼土塊少、炭化物微、淡黄色砂中量含む。締まり強/粘性弱
5　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
6　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

P2
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり

P3
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物少量含む。締まりあり/粘性強
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり

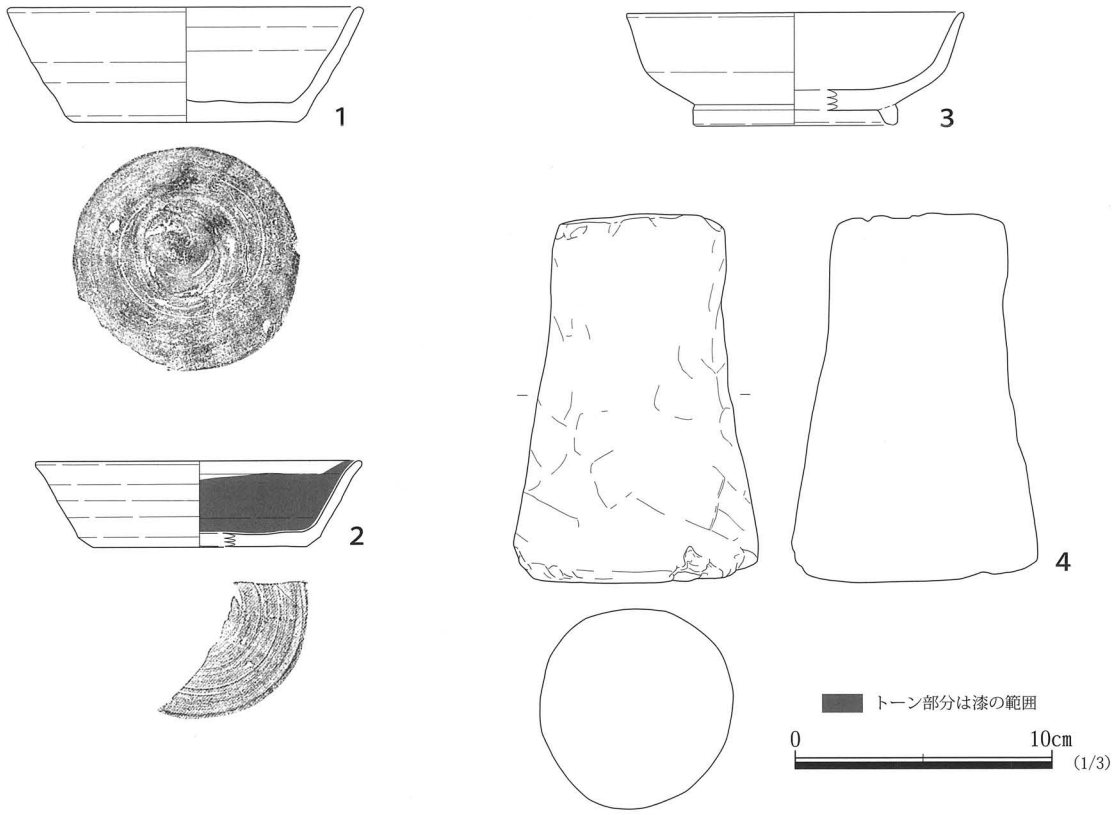
P4
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり

P5
1　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・黒ボク土少量含む。締まり強/粘性弱

P6
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中・黒ボク土少量含む。締まり強/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

P7
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性強

第 135 図　035SI 平面図・断面図



第 136 図　035SI 出土遺物

表 72　035SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	035SI	掘り方	坏	須恵器	(140)	46	95		口縁部～底部	30%	底部回転ヘラケズリ、底部扁平。	小石	青灰色	普通	8世紀第3四半期	
2	035SI	覆土	坏	須恵器	<128>	35	<84>		口縁部～底部	40%	外面体部下端回転ヘラケズリ、内面ナデ、底部回転ヘラケズリ、二次底面あり。	小石	灰黄褐色	普通	8世紀中葉	漆を内面に薄く塗っている。8世紀第2四半期の頃（佐々木氏御教示）
3	035SI	覆土	高台付坏	須恵器	<130>	45	<78>		口縁部～高台	40%	底部回転ヘラケズリ。	小石	褐灰色	普通	8世紀中葉	貼り付け高台高台低い。
4	035SI	NO.093	支脚	土製品	上部径65	高さ147	下部径96			90%	円筒状(鼓形)、底部は上面よりも径が大きい。	小石	淡黄色			

P1・3・4は、底面が複数存在し、P5・6も近接することなどから住居が複数回の建替えが行なわれたと推測される。

カマド　北壁やや東側に付設されており、上部を攪乱に切られるが、火床面を検出した。火床面は北壁ラインよりやや南に位置し、床面とほぼ同じ高さである。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。検出した規模は煙道部から焚口部まで 0.82m、壁外への掘り込みは 0.26 mである。

覆土　6層からなるが、覆土が薄く自然堆積か人為堆積かは不明である。第5層以下が掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は4点である。

1は、住居掘り方の埋土から出土した、須恵器の坏である。底部は回転ヘラケズリされ、扁平である。断面は箱型であり、器壁は外反している。器厚は薄い。底径は小さいが器高が高いことから、8世紀代3四半期に比定される。

2は、住居覆土から出土した、須恵器の坏である。外面体部下端に回転ヘラケズリを行っている。内面にナデを行っている。内面に薄く黒漆が塗ってある。底部は回転ヘラケズリである。断面は箱型を呈し、器壁は外反気味で、口縁部でさらに外反している。形状から8世紀中葉（8世紀第2四半期）に比定される。

3は、住居覆土から出土した、高台付坏である。底部は回転ヘラケズリがなされて、扁平である。高台は低く、坏部の体部立ち上がりのところについている。8世紀中葉（8世紀第2四半期から第3四半期）に比定される。

4は、住居北西壁付近の床面から出土した、支脚である。形状は円筒状だが、底部が広がるため鼓形である。底面は上面よりも径が大きい。

時期　出土遺物から8世紀中葉頃と考えられる。

036SI（第137・138図、表73・74）

位置　A2区中央部北側、AB-27、AC-27、AC-28グリッドに位置する。

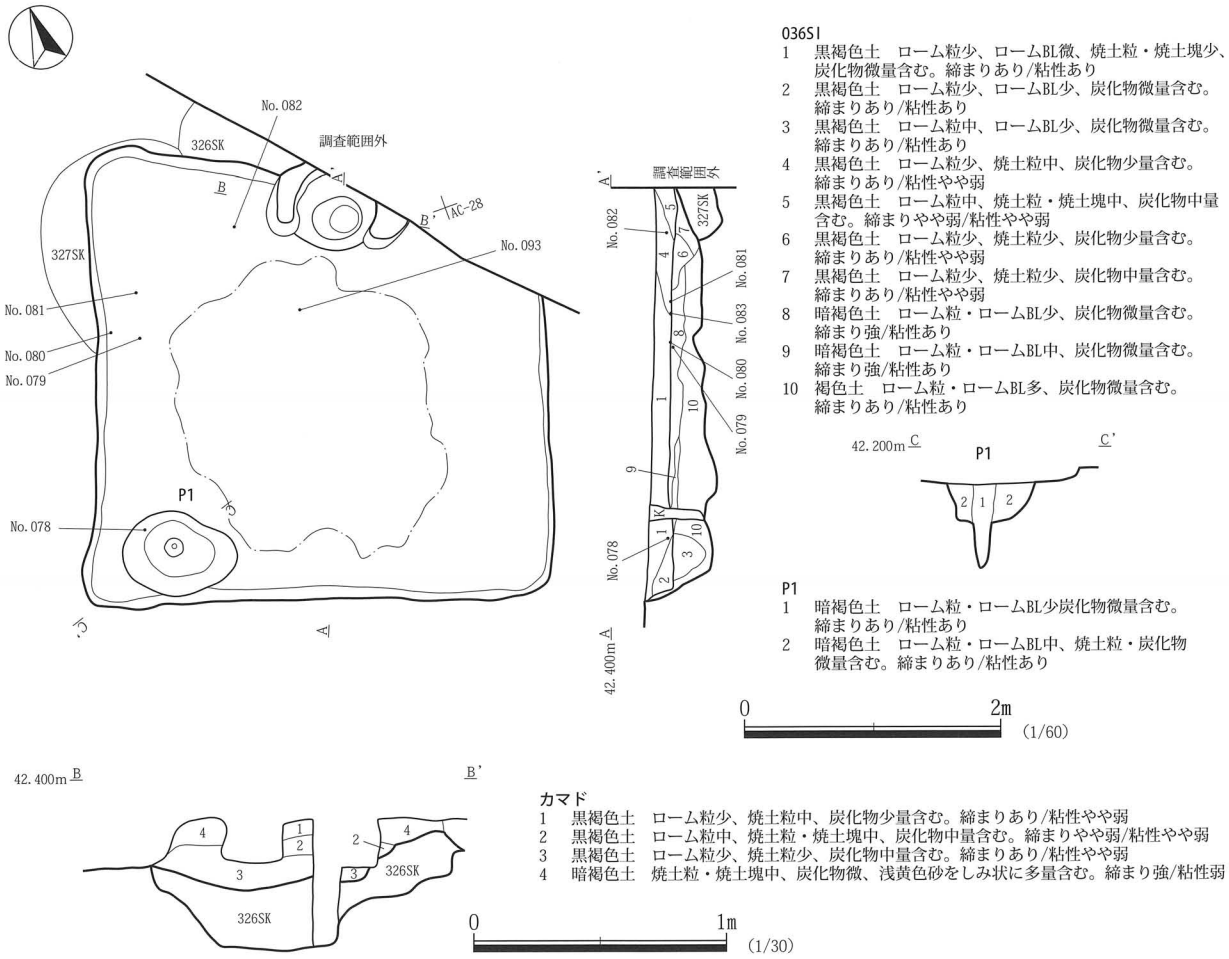
規模と平面形　残存する規模は長軸3.58m、短軸3.54mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-20°-Eである。

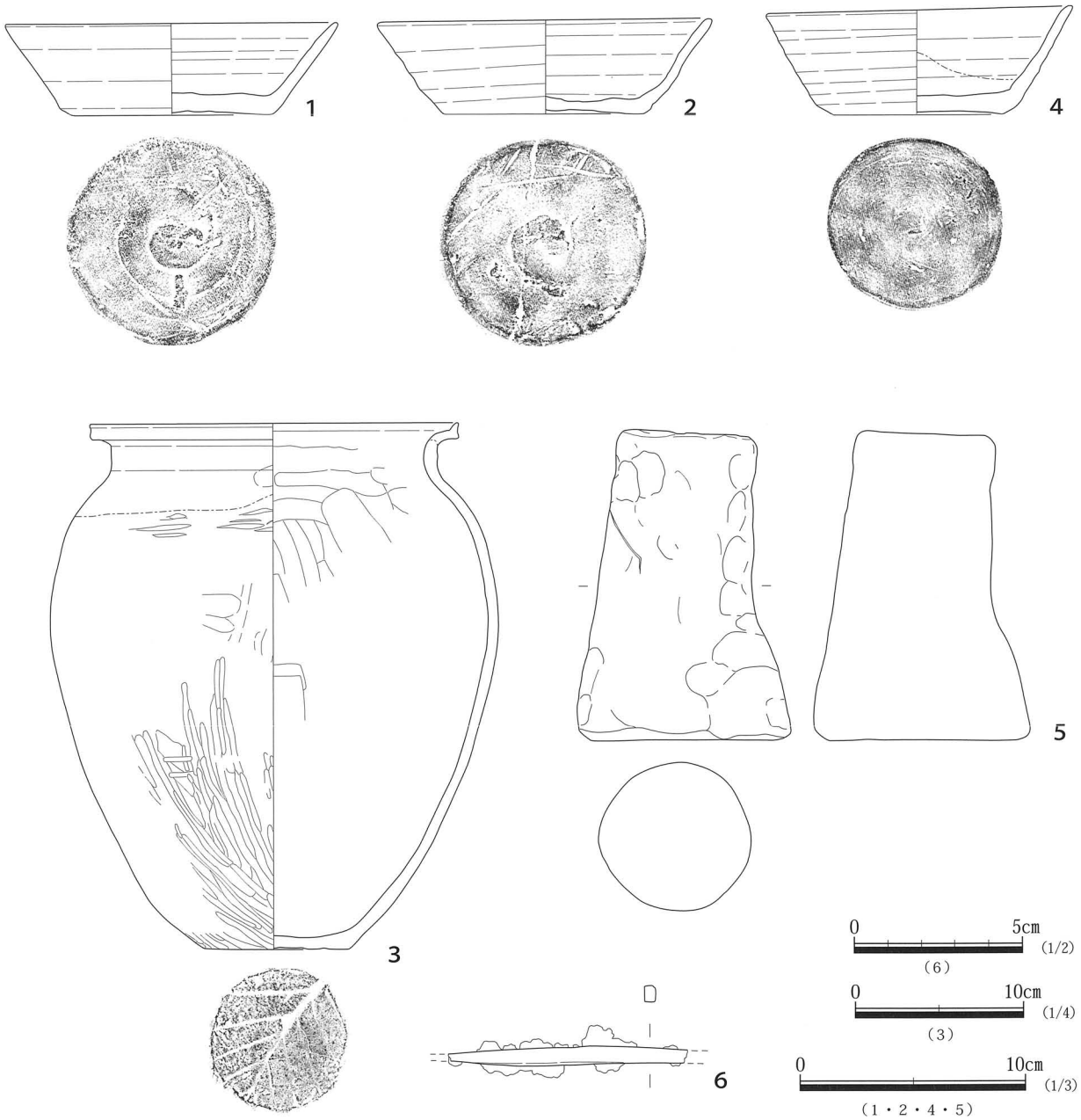
壁　残存する壁高は0.16～0.22mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、硬化面はカマド南側から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　住居南西側から1基検出した。P1は長径1.06 m、短径0.76 mで、平面形は楕円形を呈し、深さは



第137図　036SI平面図・断面図



第 138 図　036SI 出土遺物

0.66 mである。

カマド 北壁中央部に付設されており、煙道部は調査区範囲外へ延伸する。検出した規模は焚口部の 0.54 mである。カマド部 1 層は、カマド廃棄の際に堆積した層と推定されるが、平面的にみると西側へ流れて堆積しており、その中より杯が 1 つ出土した（No.082：第 138 図 2）。

覆土　10 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 2 層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第 4・5 層がカマドの廃棄に伴う堆積で、第 6・7 層がカマドの掘り方である。

遺物　実測遺物は 6 点である。

1 は、住居西側覆土から逆位で出土した、土師器の坏である。外面体部下端にヘラケズリがなされている。底

表 73　036SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	036SI	NO.079	坏	土師器	<148>	41	90		口縁部～底部	60%	外面体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	黒雲母小石	褐色	普通	9世紀代	底部回転ヘラケズリ粗い
2	036SI	NO.082	坏	土師器	150	43	90		口縁部～底部	70%	底部回転ヘラケズリ、外面被熱。	白雲母小石	明黄褐色	普通	9世紀代	底部回転ヘラケズリ粗い
3	036SI	NO.078	甕	土師器	<217>	318	86	<266>	口縁部～底部	70%	外面下半ヘラミガキ(縦)、内面ヘラナデ、底部木葉痕、底部外縁部ヘラナデ(手持ち)、外面付着物・スス付着、外面被熱。	黒雲母小石	赤褐色	やや不良	9世紀代	
4	036SI	NO.081	坏	須恵器	136	49	76		口縁部～底部	100%	外面体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、内面スス付着、口縁歪みあり。	小石	淡黄色	やや不良	8世紀第3～第4四半期	黒い焼きムラ。木葉下窯
5	036SI	NO.083	支脚	土製品	上部径58	高さ141	下部径84			100%	円筒形だが鼓形をしている、底部は上面より径が大きい。		赤褐色			

表 74　036SI 出土　鉄製品観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	厚さ(mm)	幅(mm)	長さ(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
6	036SI	NO.080	不明	鉄製品	3.5	5.0	(71.0)		不明	断面長方形。					鎹の折る前のもの、閂 。

部は回転ヘラケズリが行われているが、調整は粗い。胎土に黒雲母が混入している。形状から9世紀代と思われる。

2は、カマド西側住居覆土の、焼土・砂を周囲よりやや多く検出した場所から正位で出土した、土師器の坏である。外面が被熱しており、断面まで炭化している。底部は粗い回転ヘラケズリがなされ、底部は大きい。器壁は、底部から体部中央までは内湾し、体部中央から口縁までは外反している。そのため、口縁部がかなり開いている印象を受ける。胎土に白雲母を混入している。形状から9世紀代と見られる。

3は、住居南西隅から出土した、土師器の甕である。外面には付着物があり、被熱しススが付着しているため、表面を確認できる部分が少ない。外面下半は縦方向にヘラミガキを行っている。内面はヘラナデで調整されている。底部は木葉痕が残存している。丁寧な調整により器厚はやや薄手で、頚部クビレから口縁までの反りが強い。口唇部に摘み出しがある。焼成はやや不良で、胎土に黒雲母を含んでいる。形状から9世紀代と見られる。

4は、住居西側覆土から正位で出土した、須恵器の坏で、完形である。ロクロナデの際の調整が粗く、口縁に歪みがある。外面体部下端にヘラケズリがなされている。内面にススが付着している。底部は回転ヘラケズリで調整されている。焼成はやや悪く、黒い焼きムラがある。器壁は口縁まで直線的に立ち上がる。8世紀第3四半期から第4四半期の木葉下窯跡群の製品と比定できる。

5は、カマド南側床面から出土した、支脚である。円筒形だが、底面は上面より径が大きいため鼓形をしている。

6は、住居西側壁付近から出土している。器種は不明である。付近からは第138図1、2が出土している。断面は長方形で、中央部が一番太く、両先端になるほど細くなっている。外面には鉄錆が付着しており、木材などの付着物は見られない。鎹の折る前のもの、もしくは閂と考えられる。

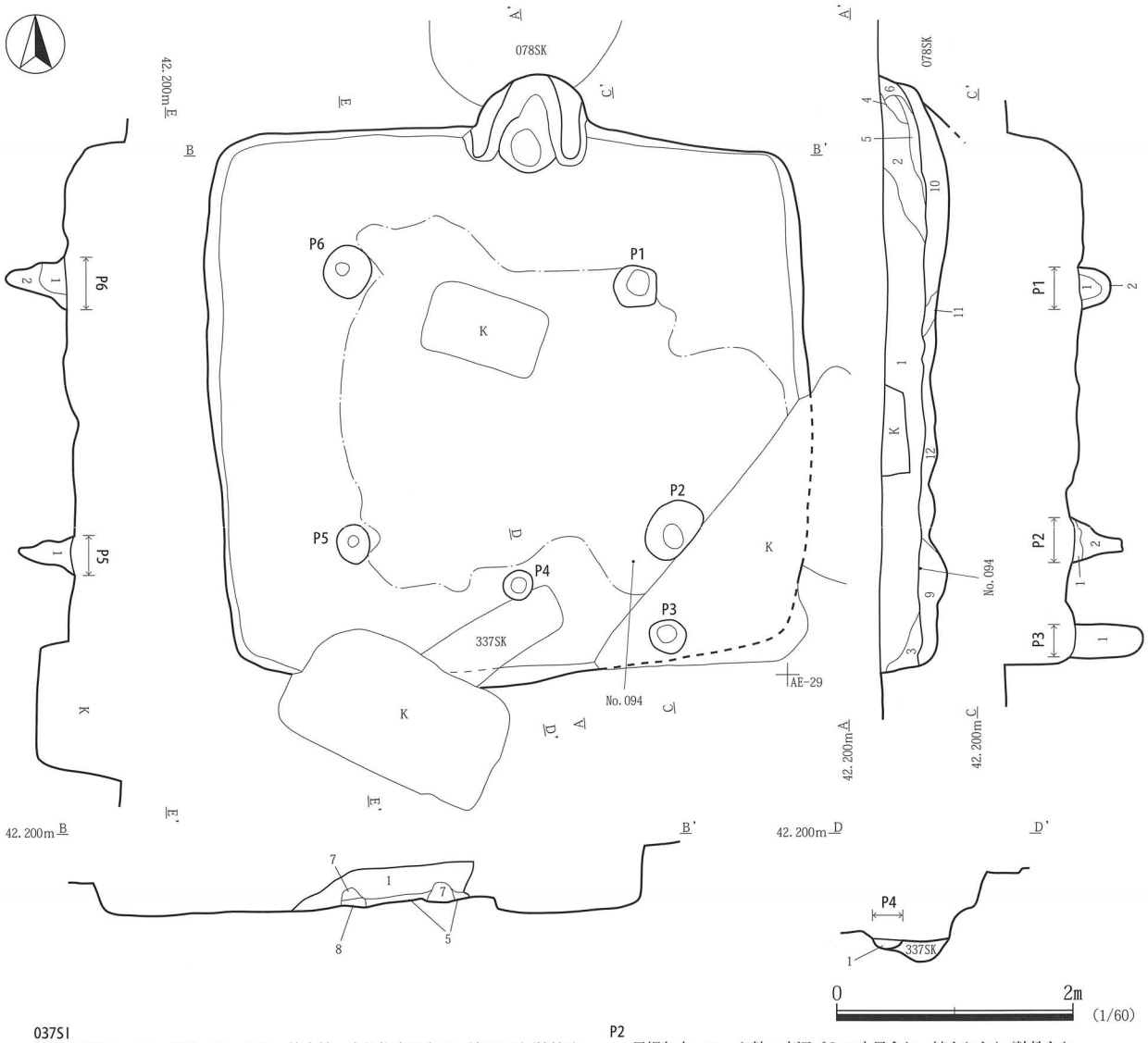
時期　出土遺物から8世紀後葉から9世紀前葉頃と考えられる。

037SI（第 139・140 図、表 75）

位置　A2 区中央部、AD-26、AD-27 グリッドに位置する。

規模と平面形　長軸 6.97m、短軸 6.47m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-1°　-W である。



037SI
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・炭化物少量含む。締まり強/粘性強
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物少量含む。締まり弱/粘性強
3　暗褐色土　ローム粒少・ロームBL微量含む。締まりあり/粘性強
4　黒褐色土　粘土粒・焼土粒・炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
5　暗褐色土　焼土粒多量含む。締まり弱/粘性中
6　黒褐色土　ローム粒微・焼土粒微量含む。締まりあり/粘性中
7　にぶい黄橙色土　ローム粒微、粘土多量に含む。締まり強/粘性強
8　暗褐色　焼土粒中、炭化物・粘土粒少量含む。締まりあり/粘性強
9　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まりあり/粘性強
10　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊中、炭化物少、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性強
11　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・焼土塊中・炭化物少、鹿沼パミス中量含む。締まりあり/粘性強
12　褐色土　ローム粒中・ロームBL多量含む。締まりあり/粘性強

P1
1　黒褐色土　ローム粒・鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性あり

P2
1　黒褐色土　ローム粒・鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物・鹿沼パミス微量含む。締まり弱/粘性あり

P3
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、鹿沼パミス微量含む。締まりあり/粘性あり

P4
1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性あり

P5
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

P6
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物微、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・炭化物・鹿沼パミス少量含む。締まり弱/粘性あり

第 139 図　037SI 平面図・断面図

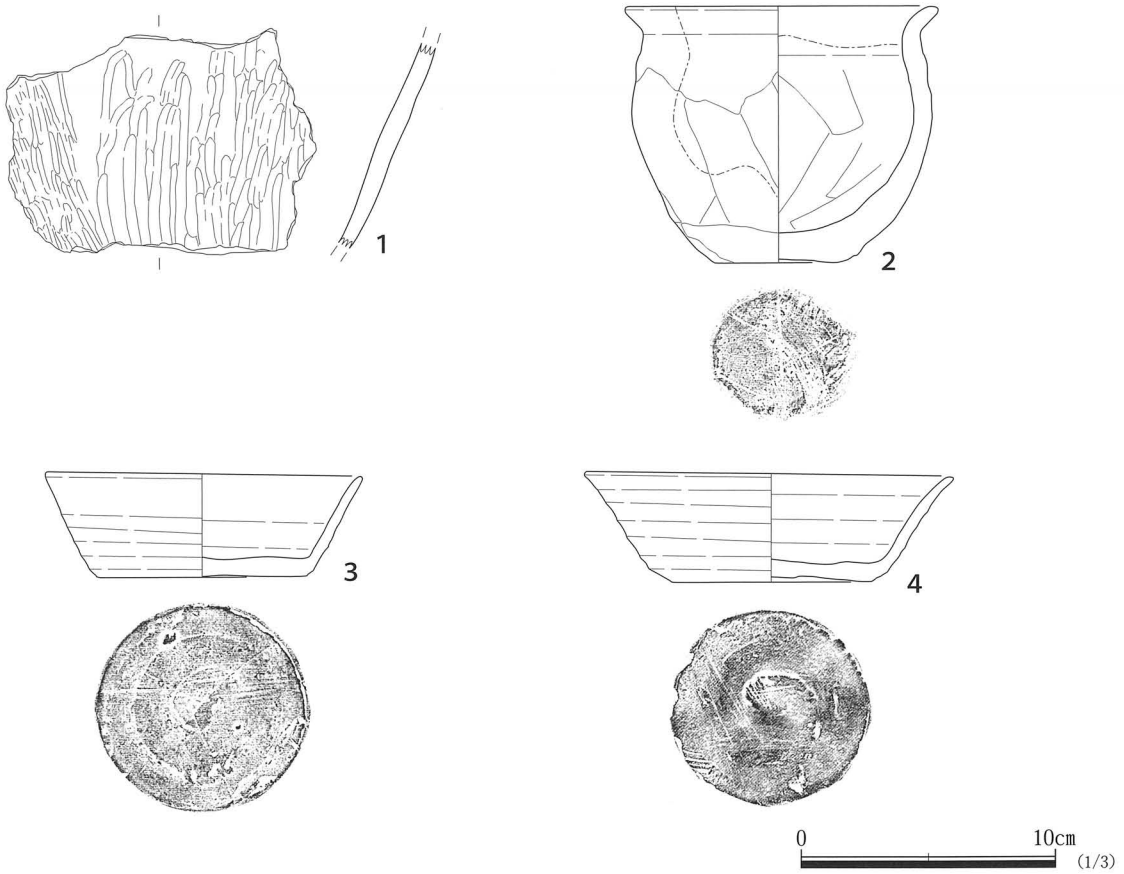
壁　残存する壁高は 0.35 ～ 0.48m で、壁は床面からほぼ直立し、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、硬化面は住居中央部から南東部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　掘方検出時に 6 基検出した。P1 ～ 6 は径 0.22 ～ 0.48 m で、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.24 ～ 0.58 m である。底面の断面形は箱形を呈す。P1・2・5・6 はその位置から主柱穴と考えられる。P4 はその位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

カマド　北壁中央部に付設されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.86m、壁外への掘り込みは 0.44 m である。

覆土　12 層からなり、第 1 層がレンズ状に堆積し、第 2 ～ 6 層が初期流入土と認められることから自然堆積と考えられる。カマド部分は、均一に焼土粒・炭化物などが混入する点などから人為堆積と考えられる。



第 140 図　037SI 出土遺物

表 75　037SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	037SI	カマド	甕	土師器		(89)			胴部	10%	外面ヘラミガキ(縦)、内面ナデ。	白雲母小石	赤褐色	普通	8世紀中葉	
2	037SI	NO.094	小型甕	土師器	<122>	102	50	(118)	口縁部～底部	95%	外面胴部上半部～中央部ヘラナデ（縦）外面胴部中央部～下半部ヘラケズリ（手持ち・横）、内面口縁付近ヘラナデ（横）、内面胴部ヘラナデ（縦）、底部木葉痕、底部外側　中心部に向かってナデ(手持ち)、外面若干スス付着内面スス付着。	白雲母小石	明赤褐色	普通	8世紀中葉	内黒意識。掘り方(口縁部から頸部の一部)と接合。内面調整丁寧(口縁付近ナデ・内部ミガキに近いナデ)。
3	037SI	覆土	坏	須恵器	124	42	82		口縁部～底部	80%	底部回転ヘラケズリ、口縁に歪みあり、底部扁平。	小石	青灰色	普通	8世紀第3四半期	
4	037SI	覆土	坏	須恵器	144	44	78		口縁部～底部	80%	外面胴部下端回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ(手持ち)。	小石	青灰色	普通	8世紀後葉	

遺物　実測遺物は４点である。

１は、カマド覆土から出土した、土師器甕の胴部破片である。外面は縦方向にヘラミガキで調整され、内面はナデ調整されている。胎土に白雲母が混入している。破片のため、時期は不明である。

２は、P2 西側より出土した、土師器の小型甕で、ほぼ完形に近い。外面調整は、胴部上半部から中央部にかけて縦方向にヘラナデが、中央部から下半部にかけては手持ちで横方向にヘラケズリがなされる。しかし中央部から下半部のヘラケズリの際に引きずられた小石の跡が、明確に残存する。外面には若干ススが付着している。内面調整は、口縁付近は横方向にヘラナデ、胴部は縦方向にヘラミガキのように丁寧なヘラナデがなされ、内部全体にススが付着している。内面の調整が丁寧なこと、内部全体にススが付着していることから、黒色処理を意識しているものと思われる。底部は木葉痕がある。外縁部から中心部に向かって手持ちヘラナデがなされている。口唇部の摘み出しは無く、器厚は厚い。胎土に白雲母を含む。

３は、住居覆土から出土した、須恵器の坏である。内外面の調整はなく、底部の調整は回転ヘラケズリで扁平である。口縁に歪みがある。器壁は外反気味で、器壁は薄い。８世紀第３四半期に比定できる。

４は、住居覆土から出土した、須恵器の坏である。外面胴部下端に回転ヘラケズリがなされている。底部は手持ちのヘラケズリで調整している。器壁は外反気味であり、器厚は薄い。８世紀後葉に比定できる。

時期　出土遺物から８世紀中葉から８世紀後葉と考えられる。

038SI（第 141・142 図、表 76）

位置　A2 区中央部、AC-25、AC-26、AD-25、AD-26 グリッドに位置する。

規模と平面形　長軸 5.46m、短軸 4.70m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-21°-W である。

壁　残存する壁高は 0.30 ～ 0.40m で、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、硬化面はカマド南部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　掘り方検出時に３基検出した。P1 ～３は径 0.28 ～ 0.56m で、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.15 ～ 0.38 mである。

カマド　北西壁中央に付設されているが、北東壁中央部からも掘り込みが検出され、粘土や焼土を集中して検出したことなどからカマドが存在したと推定される。北東壁中央部のカマドは、遺構の表土に切られており、カマドのつくり替えの前段階のものと考えられる。北西壁中央の新しいカマドは、上部を撹乱に切られており、明確な堆積は確認できなかったが、火床面と思われる範囲を検出した。規模は煙道部から焚口部まで 0.70m、壁外への掘り込みは 0.40 mである。

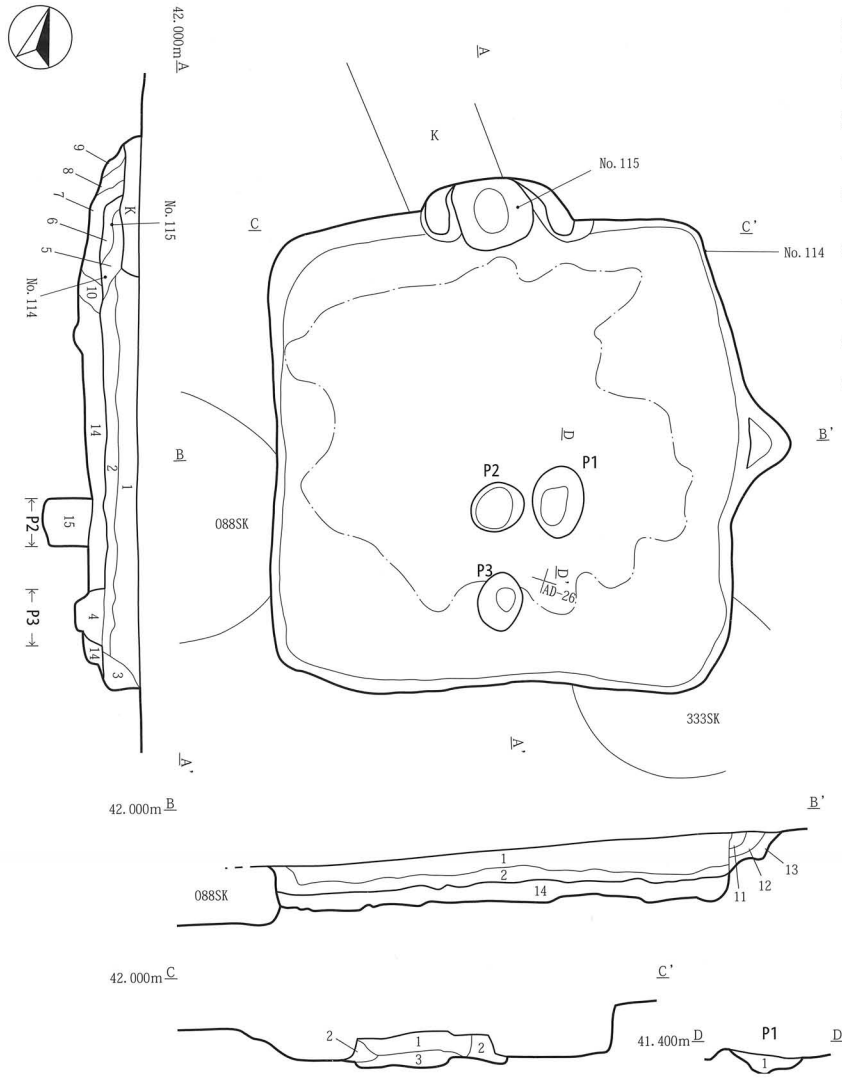
覆土　15 層からなり、第１・２層がレンズ状に堆積し、第３・５～９層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。カマド部分は、焼土粒・炭化物が均一に混入する点などから人為堆積と考えられる。第７～ 10 層、第 14 層が掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は２点である。

１は、カマドのソデの焼土が集中する部分から出土した、土師器の甕である。外面調整は、中央部は縦方向にヘラミガキがなされている。外面は若干被熱している。内面調整は横方向にヘラナデがなされている。常陸型甕

表 76　038SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径	器高	底径	最大径	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	038SI	NO.115	甕	土師器	200	(295)		248	口縁部～胴部中位	40%	外面中央部ヘラミガキ(縦)、口唇部つまみだし、内面ヘラナデ(横)、外面若干被熱。	白雲母小石	赤褐色	普通	8世紀後葉	カマドのそでの焼土が集中する部分から出土。
2	038SI	NO.114	高台付坏	須恵器	110	55	65		口縁部～高台	95%	底部回転ヘラケズリ、底部ヘラ書き「⊥」。	小石	褐灰色	普通	8世紀第4四半期～9世紀第1四半期	貼り付け高台。住居北東壁の床面付近から、高台を壁につけるようにして出土。



038SI

1 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・炭化物少量含む。締まり強/粘性あり
2 暗褐色土　ローム粒中、ロームBL微、焼土粒・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
3 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL多、焼土粒・炭化物少量含む。締まり強/粘性あり
4 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
5 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL多、焼土粒・焼土塊・炭化物中、淡黄色砂中量含む。締まりあり/粘性弱
6 黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊多、炭化物中、淡黄色砂少量含む。締まりあり/粘性弱
7 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL多、焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり
8 黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
9 暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
10 黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まり弱/粘性弱
11 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・焼土塊多、炭化物少、淡黄色砂中量含む。締まり弱/粘性弱
12 暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒少、炭化物中、淡黄色砂BL状に中量含む。締まり強/粘性弱
13 黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊多、炭化物少、淡黄色砂中量含む。締まり弱/粘性弱
14 黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、鹿沼パミス中量含む。締まり弱/粘性弱
15 暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、鹿沼パミス少量含む。締まりあり/粘性あり

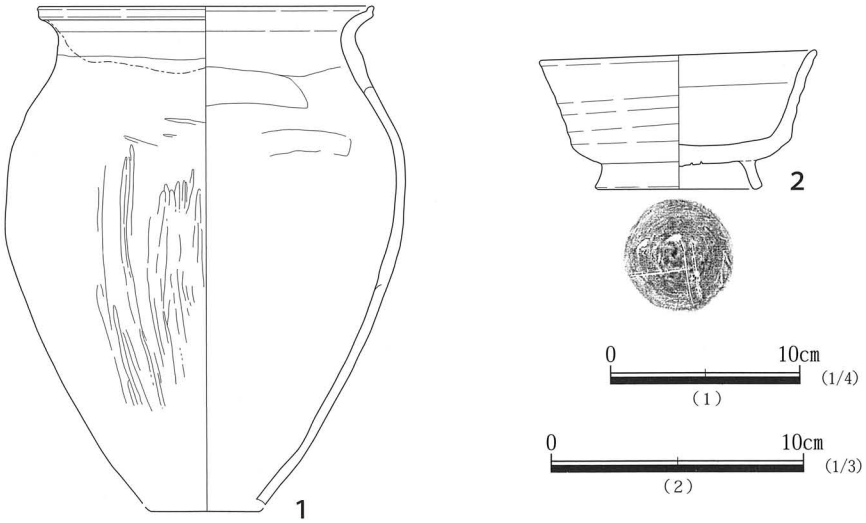
カマド

1 黒褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒・焼土塊多、炭化物中、淡黄色砂少量含む。締まりあり/粘性弱
2 黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・炭化物少、淡黄色砂多量含む。締まり強/粘性あり
3 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL多、焼土粒・焼土塊・炭化物少量含む。締まりあり/粘性あり

P1

1 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

第 141 図　038SI 平面図・断面図



第 142 図　038SI 出土遺物

の特徴である口唇部の摘み出しがある。頸部のクビレは弱めで胴部の張りは弱く、器厚は薄い。胎土に白雲母が含まれている。8 世紀後葉に比定できる。

2 は、住居北東壁の床面付近から、高台を壁につけるようにして出土した、須恵器の高台付坏である。ほぼ完形に近い。坏部は箱形に近い。底部は回転ヘラケズリで調整されている。高台は高めで体部立ち上がりよりも内側についており、「ハ」の字についている。また底部に「⊣」がヘラ書きされている。8 世紀第 4 四半期から 9 世紀第 1 四半期に比定できる。

時期　出土遺物から 8 世紀後葉から 9 世紀前葉と考えられる。

039SI（第 143・144 図、表 77）

位置　A2 区中央部やや北西寄り、AC-24、AC-25、AD-24、AD-25 グリッドに位置する。

重複関係　住居中央は攪乱に切られる。095SK の南壁を切る。

規模と平面形　長軸 4.28m、短軸 3.85m を測り、平面形は隅丸方形である。

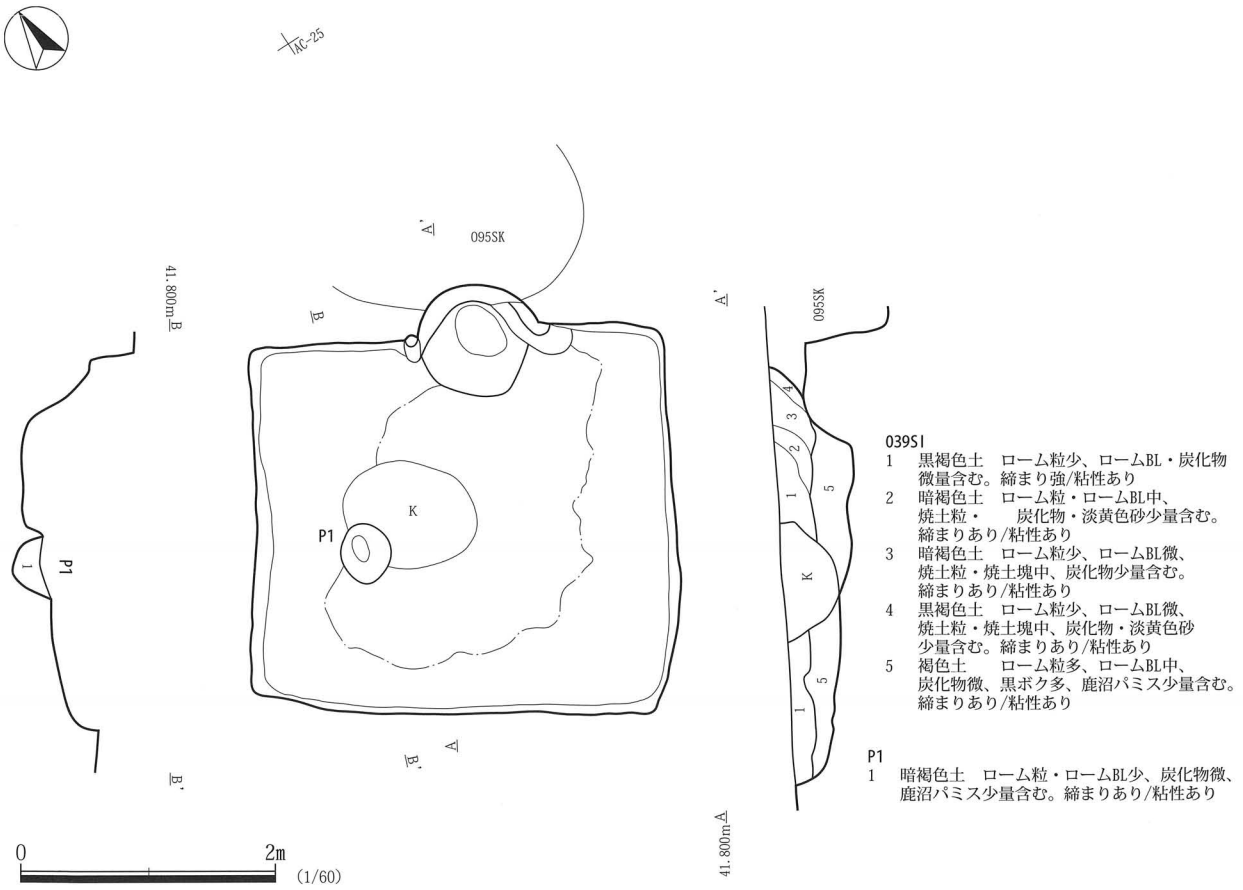
主軸方向　N-35°-E である。

壁　残存する壁高は 0.15 ～ 0.30m で、壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

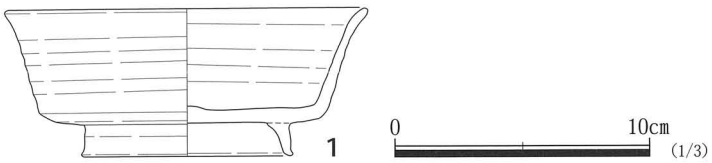
床　ほぼ平坦で、硬化面はカマド南部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　硬化面上からは検出しなかったが、掘り方から 1 基検出した。

カマド　北壁中央部やや東側に付設されている。カマド袖部が東西カマド脇に僅かに残るのみであった。カマド中央部からは甕の底部が伏せた状態で出土した。伏せた甕の内部からは 2cm ～ 3cm 程の被熱した円礫が出土し



第 143 図　039SI 平面図・断面図



第 144 図　039SI 出土遺物

表 77　039SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	039SI	カマド	高台付坏	須恵器	140	59	<82>		口縁部～高台	90%	底部回転ヘラケズリ。	小石	青灰色	普通	8世紀中葉	貼り付け高台。

た。カマドの規模は煙道部から焚口部まで 0.44m、壁外への掘り込みは 0.32 mである。

覆土　5 層からなるが、確認された覆土は薄く人為堆積層か自然堆積層かは不明である。第 5 層は掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は 1 点である。

1 は、カマドから出土した、須恵器の高台付坏である。完形に近い。底部は回転ヘラケズリで調整されている。貼り付け高台である。高台は「ハ」の字状を呈し、体部立ち上がりよりも内側に接着している。器壁は外反し、器厚は薄い。8 世紀中葉以降に比定される。

時期　出土遺物から 8 世紀中葉から 8 世紀後葉と考えられる。

114SI（第 145・146 図、表 78）

位置　A2 区東部中央、AG-30 グリッドに位置する。

重複関係　209SK 北西壁、315SK 上部、320SK 北壁を切る。南西角を 033SI に切られる。

規模と平面形　長軸 3.76m、短軸 3.70m を測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-7°-E である。

壁　残存する壁高は 0.48 ～ 0.68 mで、壁は床面からほぼ直立し、断面形は箱形を呈す。

床　ほぼ平坦で、硬化面は住居北西部から住居中央部にかけて確認された。周溝は確認されなかった。

ピット　4 基検出した。P1 ～ 4 は径 0.34 ～ 0.64 m、平面形は概ね円形を呈し、深さは 0.18 ～ 0.22 mである。断面形は U 字形を呈す。P1・4 はその位置から主柱穴と考えられる。P2・3 は性格不明である。

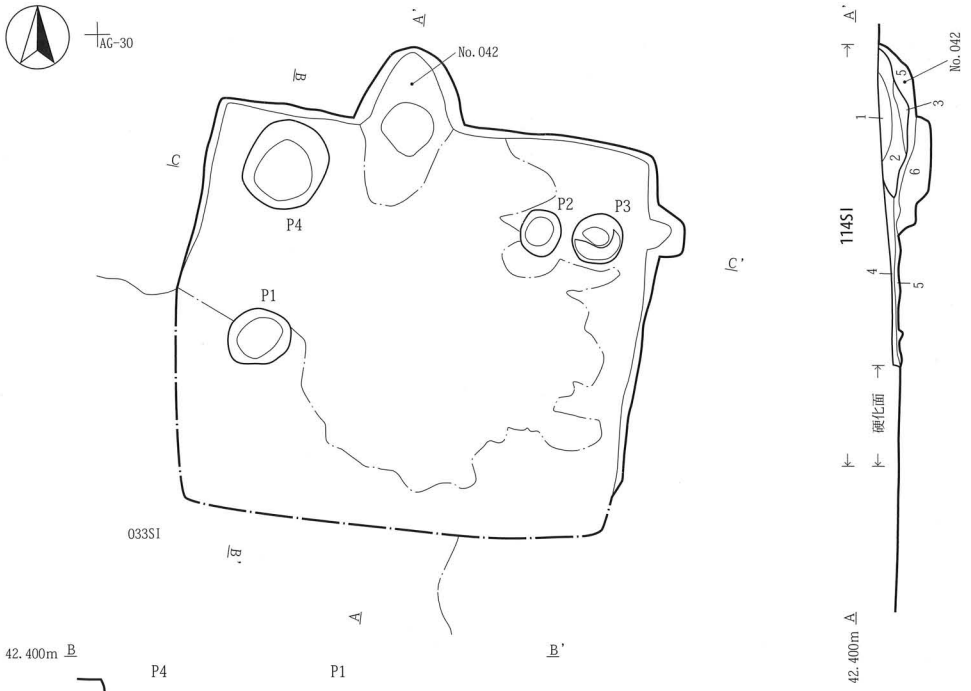
カマド　北壁中央部やや西よりに付設されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.97m、最大幅 0.87m、壁外への掘り込みは 0.59 mである。火床面は北壁ライン上に位置し、床面からやや下がる皿状である。火床面は火熱を受け硬化している。

覆土　6 層からなり、上部はほとんど削平されており、遺存状態は不良であった。第 5・6 層は掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は 2 点である。

1 は、住居覆土から出土した、土師器甕の胴部の破片である。外面調整は平行タタキを施す。内面調整はヘラナデを施している。また内面にススが付着している。焼成はやや不良である。外面正位に墨書が認められ「那賀井□」と読める。「那賀」と古代那賀郡の関係は不明である。破片のため、時期は比定できない。

2 は、カマドから逆位で出土した、土師器の小型甕である。完形に近い。外面は、口縁部から胴部中央部までの範囲を、横方向にナデが見られる。胴部下半部は、横方向に手持ちでヘラケズリ調整している。内面調整は横



114SI
1　暗褐色土　ローム粒微、焼土粒中量含む。締まり強/粘性あり
2　暗褐色土　焼土粒中、焼土BL微量含む。締まりあり/粘性あり
3　褐色土　ローム粒微、焼土粒多、粘土粒微量含む。締まりあり/粘性強
4　暗褐色土　ローム粒微量含む。締まりあり/粘性強
5　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まり強/粘性あり
6　にぶい黄褐色土　ローム粒多、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性強

P1
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性強

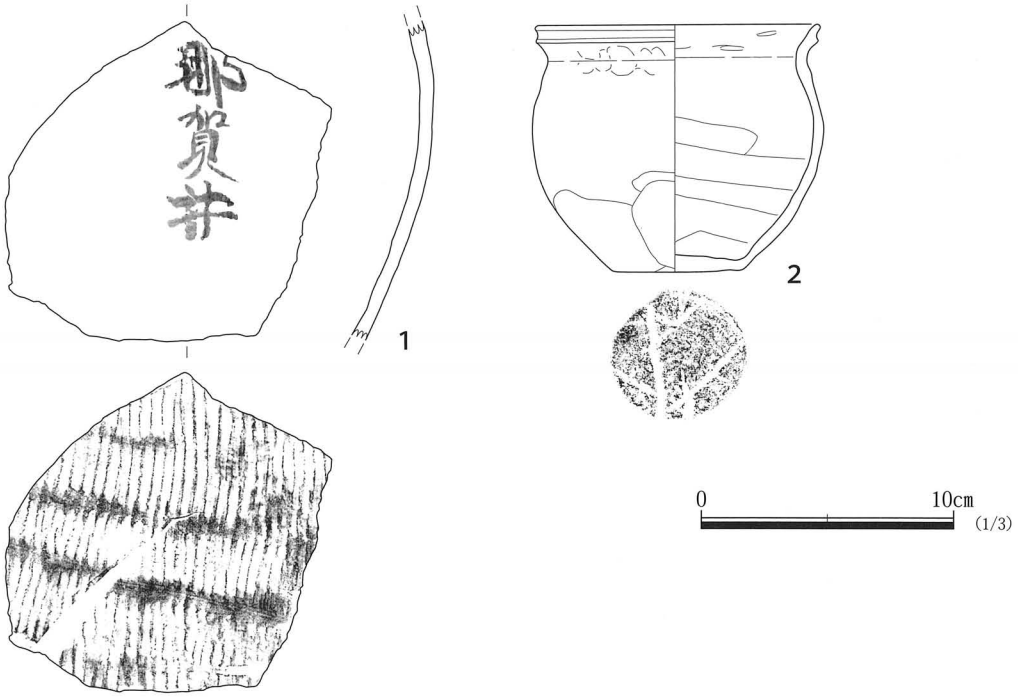
P2
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少量含む。締まりあり/粘性強

P3
1　にぶい黄褐色土　ローム粒中量含む。締まり弱/粘性強

P4
1　褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まり弱/粘性強

0　2m　(1/60)

第 145 図　114SI 平面図・断面図



第 146 図　114SI 出土遺物

表 78　114SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	114SI	覆土	甕	土師器		(127)			胴部	10%	外面胴部墨書「那賀井□」、 外面平行タタキ、 内面ヘラナデ、内面スス付着。	小石	暗褐色	やや不良		
2	114SI	NO.042	小型甕	土師器	<110>	99	51	116	口縁部～底部	90%	輪積み痕、外面口縁部～胴部中央部ナデ、胴部下半部ヘラケズリ(手持ち・横)、口唇部若干つまみ出しあり、内面ナデ、底部木葉痕、外面被熱。頸部指頭痕あり。	白雲母白色粒	暗褐色	やや悪い	8世紀第2～第3四半期	カマドから逆位で出土。 被熱の為か外面は脆い。

方向にヘラナデを行っており、所々に輪積み痕が確認できる。口唇部の摘み出しは丁寧な作りをしている。底部は木葉痕がある。胎土に白雲母を含んでいる。調整を丁寧に行っており、薄手である。また外面は被熱しているため、脆くなっている。形状から 8 世紀第 2 四半期から第 3 四半期と比定した。

時期　出土遺物から 8 世紀中葉から 8 世紀後葉と考えられる。

198SI（第 147・148 図、表 79）

位置　A2 区中央部東寄り、AF-30 グリッドに位置する。

規模と平面形　確認された規模は長軸 4.72 m、短軸 4.09 mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-10°-E である。

壁　残存する壁高は 0.72 mで、壁は床面から緩やかに立ち上がり、断面形は箱型を呈す。

床　硬化面は住居中央部に広範囲にわたって確認された。硬化面北東端は硬化範囲が盛り上がっており、その下位からは縄文時代のピットを検出した。縄文のピットにより床面が軟弱な箇所を強化したと推測される。周溝はほぼ全周するが、北壁カマドの東側は確認されなかった。

ピット　5 基検出した。P1、3 ～ 5 は径 0.30 ～ 0.40 m、平面形はおおむね楕円形を呈し、深さは 0.1 ～ 0.2 m である。P2 は径 0.68 mである。P1 ～ 4 はその位置から主柱穴と考えられる。

カマド　北壁やや東側に付設されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.92 m、最大幅 0.47 m、壁外への掘り込みは 0.74 mである。火床面は確認されなかった。

覆土　9 層からなる。第 5・6 層は P5 の覆土である。第 1 層はほぼ水平に堆積する。第 2 ～ 4 層は南側へ重なるように堆積し、北側から埋土が入れられたと考えられる。第 6・7 層は掘り方の埋土である。堆積状況から人為堆積と考えられる。

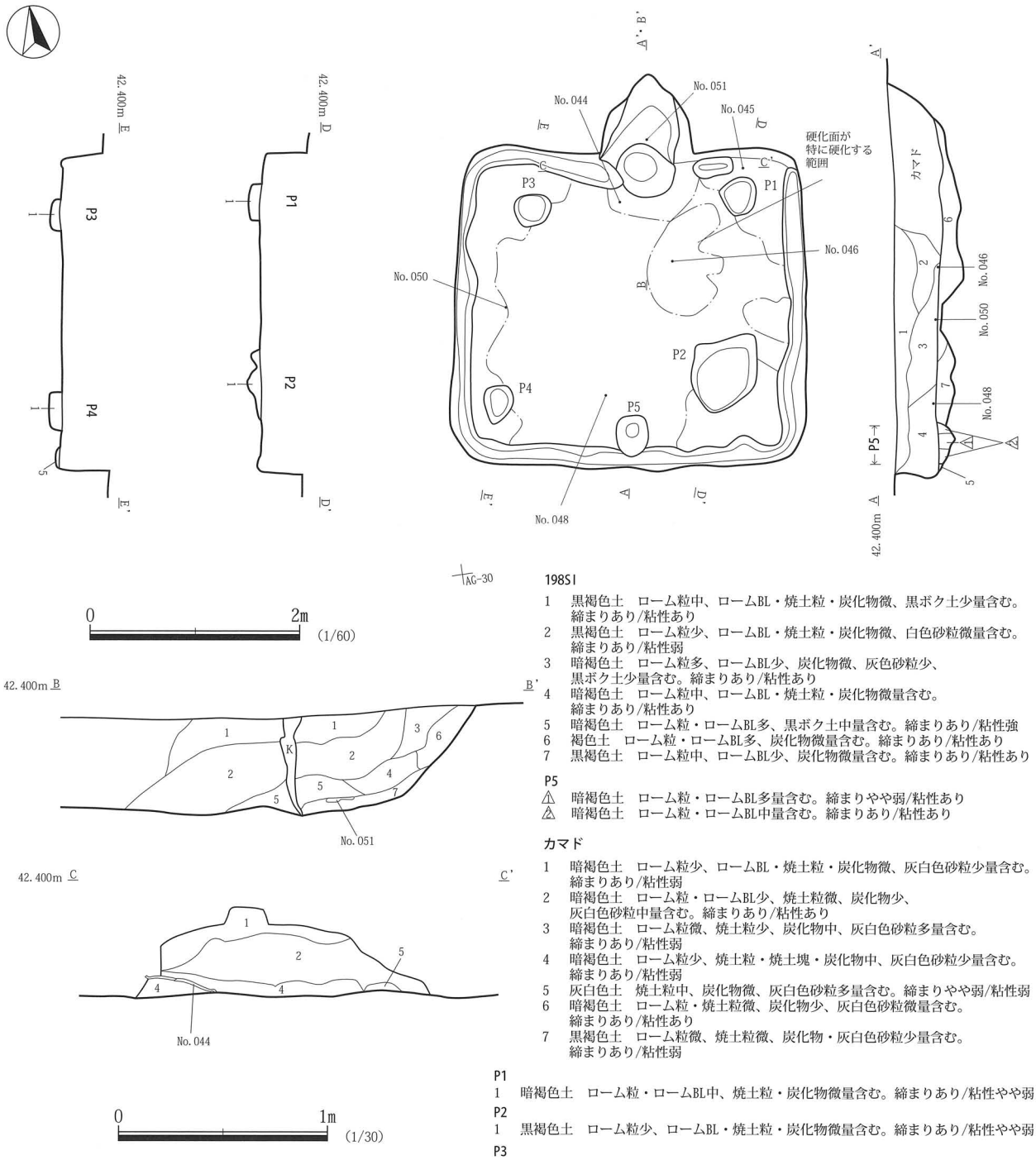
遺物　実測遺物は 7 点である。

1 は、カマド西の床面から出土した、土師器甕である。口縁部分は壁面に張り付くようにして出土した。外面調整は、胴部下部は縦方向にヘラミガキを行っている。外面にはススが付着している。内面は横方向にヘラナデを行っており、薄手である。形状は胴部の張りがやや弱く、頸部のくびれも緩やかである。また口唇部の摘み出し部分は天を向き、立ち上がっている。胎土に白雲母を含んでいる。8 世紀後半に比定できる。

2 は、カマド西の床面から出土した、土師器甕である。口縁部分は壁面に張り付くようにして出土した。外面調整は、胴部下部に縦方向にヘラミガキを行なっている。内面はナデが行なわれる。器厚は薄手である。外面、内面ともにススが付着している。口唇部の摘み出しがある。胴部の張りは弱いが、一番張っている箇所から下にススが付着していることから、カマドに設置し使用されていた可能性がある。頸部のくびれはやや弱い。8 世紀後半に比定できる。なお、1 と 2 は重なり合って出土している。

3 は、住居中央部付近の床面から出土した、土師器甕である。外面調整は、胴部下端は手持ちで縦方向にヘラケズリを行っている。被熱している。内面は横方向にヘラナデで調整している。底部は手持ちヘラナデ調整である。胎土に白雲母を含んでいる。

4は、住居北東壁面近くから逆位で出土した、須恵器の坏で、完形に近い。体部下端に回転ヘラケズリを行っている。内面全面にススが付着していることから、黒色処理が剥落した可能性がある。底部は回転ヘラナデで調整している。断面は箱型を呈し、体部が直線的に立ち上がって、器高が高い。形状から8世紀第4四半期から9世紀第1四半期のものと思われる。



198SI

1　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物微、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微、白色砂粒微量含む。締まりあり/粘性弱
3　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少、炭化物微、灰色砂粒少、黒ボク土少量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
5　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多、黒ボク土中量含む。締まりあり/粘性強
6　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
7　黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

P5

△1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まりやや弱/粘性あり
△2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり

カマド

1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微、灰白色砂粒少量含む。締まりあり/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、焼土粒微、炭化物少、灰白色砂粒中量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒微、焼土粒少、炭化物中、灰白色砂粒多量含む。締まりあり/粘性弱
4　暗褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊・炭化物中、灰白色砂粒少量含む。締まりあり/粘性弱
5　灰白色土　焼土粒中、炭化物微、灰白色砂粒多量含む。締まりやや弱/粘性弱
6　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微、炭化物少、灰白色砂粒微量含む。締まりあり/粘性あり
7　黒褐色土　ローム粒微、焼土粒微、炭化物・灰白色砂粒少量含む。締まりあり/粘性弱

P1

1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱

P2

1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱

P3

1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱

P4

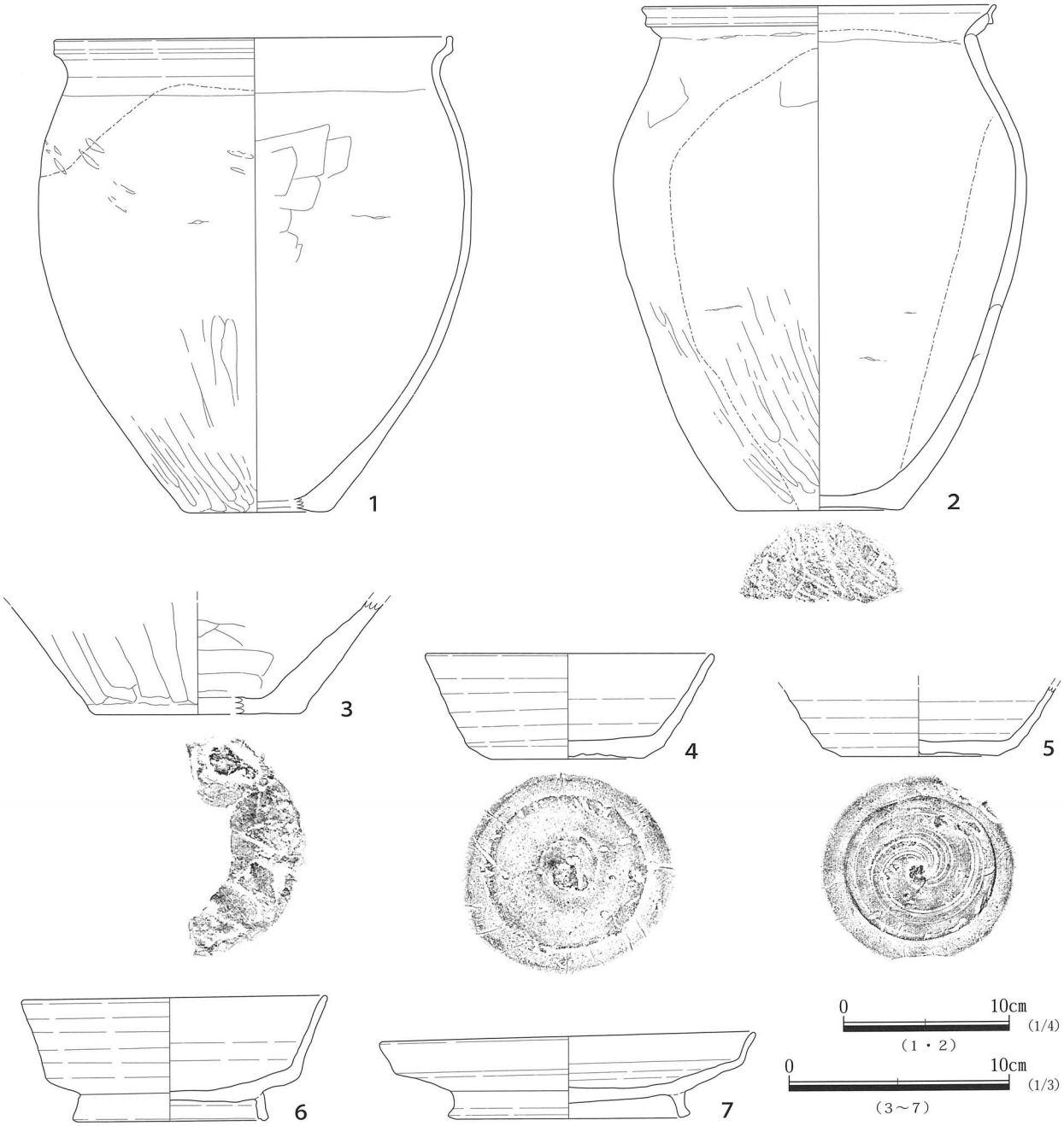
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性やや弱

第147図　198SI平面図・断面図

5は、カマド内から出土した、須恵器の坏である。外面体部下端はヘラケズリを行っている。底部の調整は回転ヘラケズリである。器壁は外反し、器厚は薄い。8世紀中葉と比定できる。

6は、住居南側の床面直上より出土した、須恵器の高台付坏である。完形に近い。外面上位の調整はなく、外面体部下端をヘラケズリで調整を行っている。内面の調整はなく、底部は回転ヘラケズリで調整し、平坦気味である。高台はやや「ハ」の字状に開き、体部立ち上がりよりも内側に高台が付く。8世紀中葉から後葉と判断した。

7は、住居西側の床面から正位で出土した、須恵器の高台付盤である。完形に近い。底部は回転ヘラナデで調整している。口縁部に自然釉がかかっている。高台は「ハ」の字状についている。形状から8世紀第3四半期以



第148図　198SI出土遺物

表 79　198SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	198SI	NO.044	甕	土師器	<244>	300	<90>	<272>	口縁部～底部	60%	外面下部ヘラミガキ(縦)、内面ヘラナデ(横)、外面スス付着。	白雲母	赤褐色	普通	8世紀後半か	カマド西の床面直上から出土。カマドの手前から拡がるように検出された。
2	198SI	NO.044	甕	土師器	<216>	319	<100>	<252>	口縁部～底部	50%	外面下部ヘラミガキ(縦)、内面ナデ、外面スス付着、内面スス付着、底部木葉痕。	白色粒	赤褐色	普通	8世紀後半か	カマド西の床面直上から出土。カマドの手前から拡がるように検出された。
3	198SI	NO.046	甕	土師器		56	95		胴部下位～底部	10%	外面胴部下端ヘラケズリ(手持ち・縦)、内面ヘラナデ(横)、底部ヘラナデ(手持ち)、底部木葉痕。	白雲母小石	暗褐色	普通	8世紀中葉	住居中央部付近の床面直上より出土。
4	198SI	NO.045	坏	須恵器	133	51	70		口縁部～底部	95%	外面体部下端回転ヘラケズリ、底部回転ヘラナデ、内面全面にスス付着。	小石	青灰色	普通	8世紀第4四半期～9世紀第1四半期	カマドに向かい東側の壁面近くより逆位で出土。
5	198SI	NO.051	坏	須恵器		<33>	70		胴部～底部	30%	外面体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	小石	青灰色	普通	8世紀中葉	
6	198SI	NO.048	高台付坏	須恵器	141	59	85		口縁部～高台	90%	外面体部下端ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	小石	青灰色	普通	8世紀中葉	貼り付け高台。住居南側の床面直上から正位で出土。
7	198SI	NO.050	高台付盤	須恵器	171	41	103		口縁部～高台	90%	底部回転ヘラナデ、口縁部自然釉？。	小石	青灰色	普通	8世紀第3四半期以降	貼り付け高台。住居西側の床面直上から正位で出土。

降と比定できる。

1・2・5はカマド付近から出土している。

時期　出土遺物から8世紀中葉から8世紀後葉と考えられる。

284SI（第149・150図、表80）

位置　A2区中央部、北側調査区壁面近くにある。AB-26、AB-27グリッドに位置する。

重複関係　290SK南壁を切る。

規模と平面形　確認された規模は、長軸3.68 m、短軸3.59 mを測り、平面形は隅丸方形である。

主軸方向　N-3°-Eである。

壁　残存する壁高は0.30 mで、壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、断面形は箱形を呈す。

床　硬化面はほぼ床面全体に確認された。周溝は東壁から南壁にかけて確認され、西壁にも確認できたが途切れがちである。

ピット　2基検出した。P1は径0.28 m、平面形は円形を呈し、深さは0.09 mである。P2は掘り方から検出したピットで、径0.22 m、平面形は円形を呈し、深さは0.20 mである。

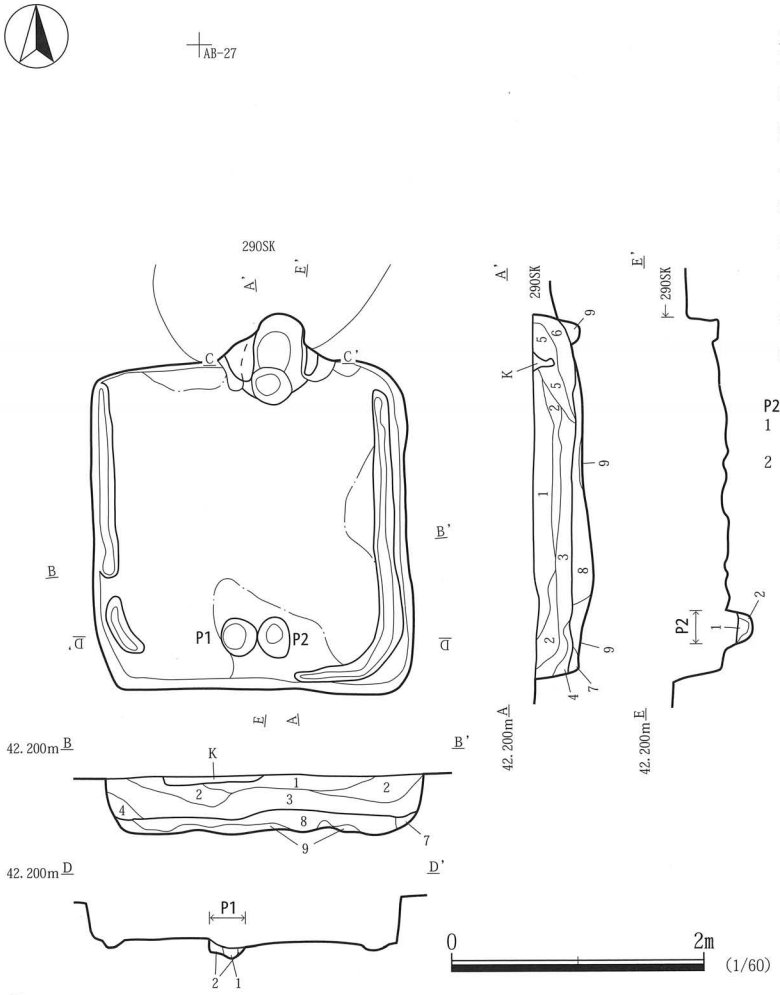
カマド　北壁やや東寄りに付設されている。規模は煙道部から焚口部まで0.55 m、最大幅0.34 m、壁外への掘り込みは0.38 mである。火床面は確認されなかった。

覆土　9層からなり、第1層がレンズ状に堆積し、第4層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。第5・6層がカマドの廃棄に伴う堆積で、第7～9層が（カマド部分の）掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は1点である。

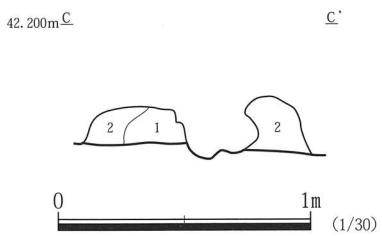
1は、カマドから出土した、須恵器の坏である。底部を手持ちのヘラケズリで調整していて、中央がやや窪んでおり、ケズリの残滓があるため、粗雑な印象を与える。底部と体部の境がはっきりせずに緩やかに立ち上がる。器壁はやや外反気味で、器厚は薄めである。9世紀前葉と思われる。

時期　出土遺物から9世紀前葉と考えられる。



284SI
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・炭化物微量含む。締まり強/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
5　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊微、炭化物少量含む。締まりあり/粘性やや弱
6　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊・炭化物・淡黄色砂をBL状に少量含む。締まり強/粘性弱
7　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
8　暗褐色土　ローム粒・ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
9　褐色土　ローム粒・ロームBL多、炭化物微量含む。締まり強/粘性あり

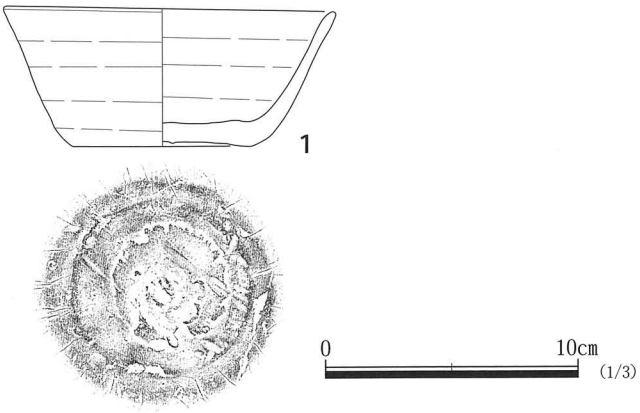
P2
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・鹿沼パミス少量含む。締まりやや弱/粘性あり
2　褐色土　ローム粒・ロームBL多、鹿沼パミス少量含む。締まり強/粘性あり



カマド
1　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊・炭化物・淡黄色砂をBL状に少量含む。締まり強/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊少、淡黄色砂をBL状に中量含む。締まりやや弱/粘性あり

P1
1　暗褐色土　ローム粒少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

第 149 図　284SI 平面図・断面図



第 150 図　284SI 出土遺物

表 80　284SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	284SI	カマド	坏	須恵器	132	56	70		口縁部～底部	80%	底部ヘラケズリ(手持ち)。	小石	青灰色	普通	9世紀前葉	底部の調整粗雑。底部と体部の境がはっきりせず緩やかに立ち上がる。

第3節　D区

042SI（第151・152図、表81）

位置　D区南部、J-6グリッドに位置する。遺構南半部は試掘坑により失われている。

規模と平面形　規模は残存部で長軸2.72m、短軸2.18mを測り、平面形は正方形を呈すると推定される。

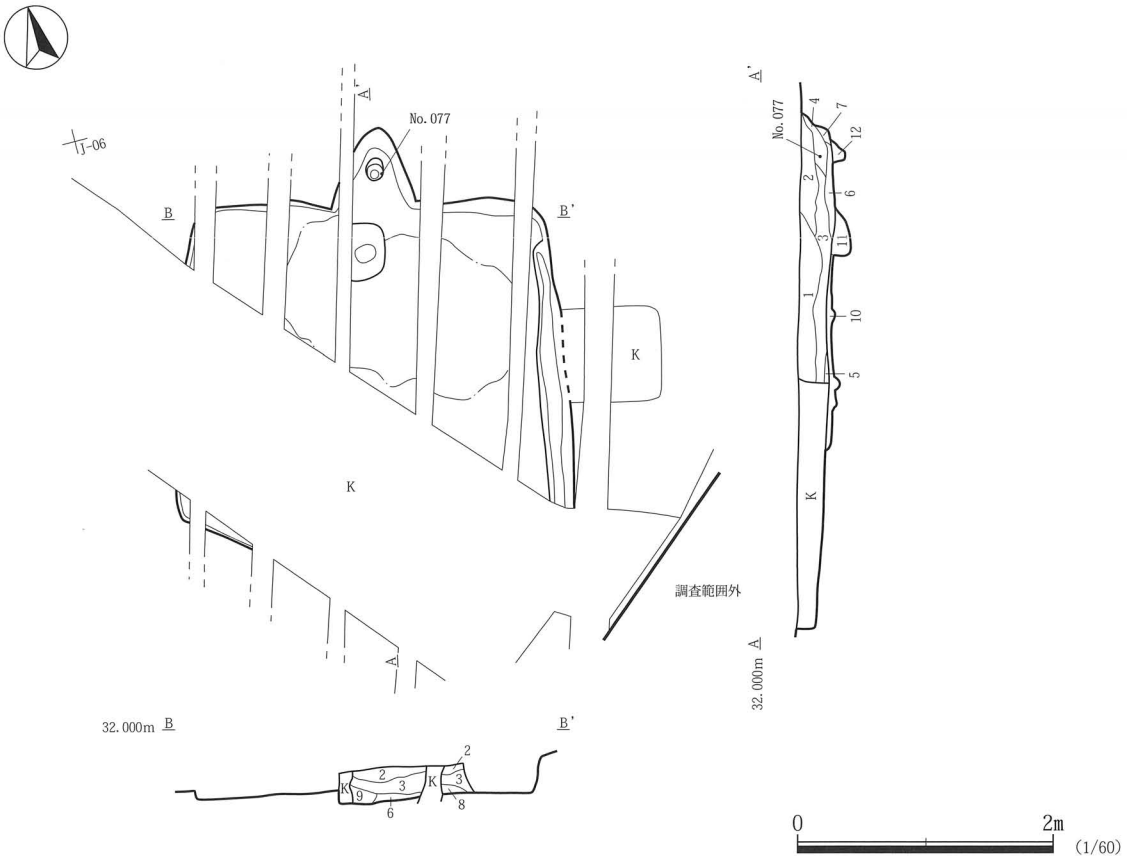
主軸方向　N-10°-Eである。

壁　残存する壁高は0.08～0.28mで、壁はほぼ直立する。

床　床面は平坦で、カマド南側を中心に硬化が認められる。周溝は住居東壁に沿って、0.09～0.03mの深さを測る。

ピット　検出しなかった。

カマド　北壁中央部に付設されており、袖部と火床は検出しなかった。煙道部の壁外への掘り込みは0.61 mである。



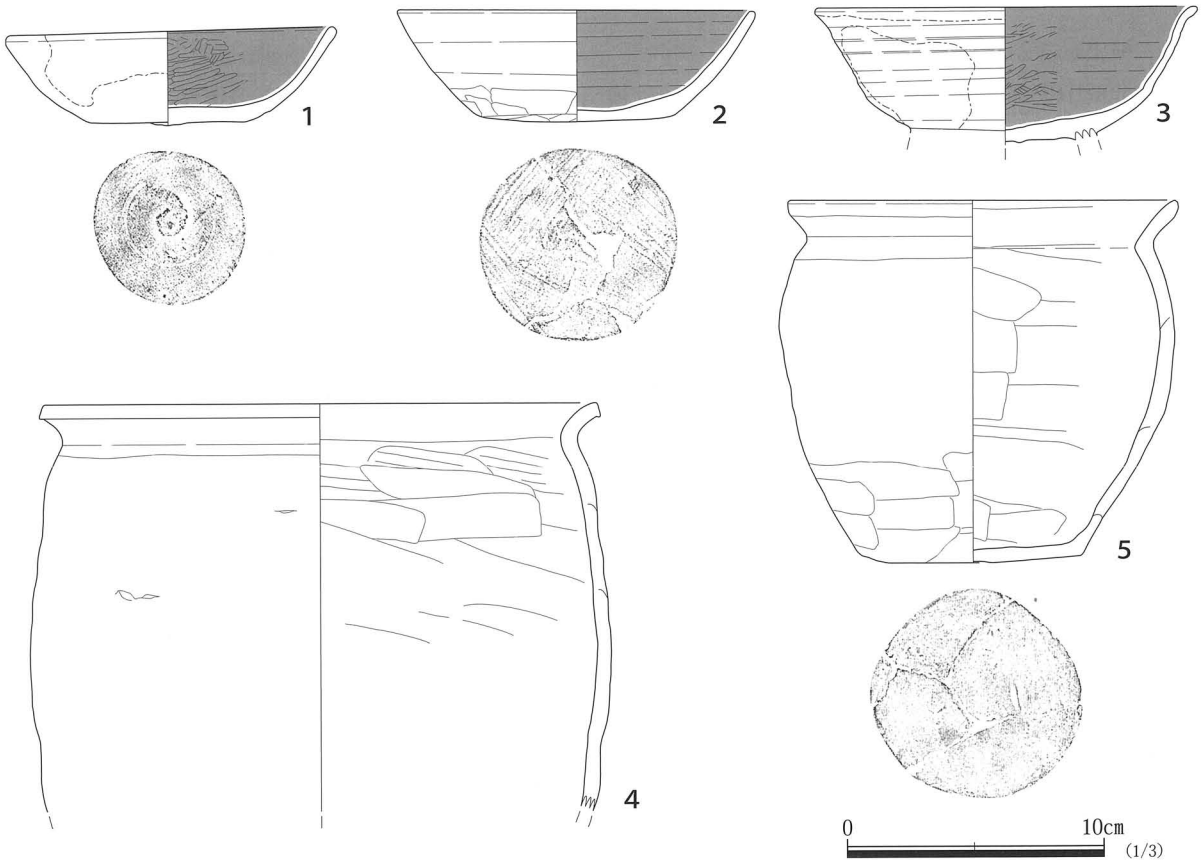
042SI
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まり弱/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒少、焼土粒微、砂少量含む。締まり弱/粘性弱
3　にぶい黄褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・炭化物・砂微量含む。締まりあり/粘性弱
4　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・炭化物・砂微量含む。締まり弱/粘性弱
5　褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まり強/粘性あり
6　にぶい黄褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性弱
7　褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まりあり/粘性あり
8　黄褐色土　ロームBL多、砂微量含む。締まりやや強/粘性強
9　灰黄褐色土　ローム粒・ロームBL微、焼土粒少量含む。締まりあり/粘性弱
10　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まりやや強/粘性強
11　灰黄褐色土　ローム粒少、ロームBL中、焼土粒微、砂しみ状に少量含む。締まりあり/粘性あり
12　灰黄褐色土　被熱ローム粒・被熱ロームBL中量含む。締まりやや強/粘性あり

第151図　042SI平面図・断面図

覆土　12 層からなり、ローム土が混入する黒・暗褐色土が主体である。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第 10・11・12 層は掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は 5 点である。

1 は、カマドから出土した、土師器の坏である。ススが付着している。また、被熱しており、断面も炭化している。器壁はやや薄手で、内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は回転ヘラケズリで調整されている。胎土に黒雲母を含んでいる。形状から 10 世紀前半と考えられる。



第 152 図　042SI 出土遺物

表 81　042SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	042SI	カマド	坏	土師器	135	39	60		口縁部～底部	70%	内面ヘラミガキ、底部回転ヘラケズリ、外面スス付着、内面黒色処理、被熱。	黒雲母	褐色	普通	9世紀末	被熱部分は断面まで炭化する。
2	042SI	カマド	坏	土師器	140	45	77		口縁部～底部	95%	外面体部下端ヘラナデ(横)、内面ヘラミガキ、底部ヘラナデ(手持ち)、内面黒色処理。	黒雲母	暗褐色	普通	9世紀末	逆位で出土。
3	042SI	カマド	高台付坏	土師器	155	<54>			口縁部～高台	70%	内面ヘラミガキ、底部回転ヘラケズリ、外面口唇部～胴部スス付着、内面黒色処理。	黒雲母	褐色	普通	9世紀後半～末期	須恵器模倣か。坏部は大型。高台は人為的に欠く。逆位で出土。
4	042SI	カマド	甕	土師器	(220)	<162>		(228)	口縁部～胴部	20%	外面調整粗雑、口唇部刷毛目、内面ヘラナデ(横)、外面スス付着、外面に砂付着。	白雲母	暗褐色	不良	9世紀代	
5	042SI	NO.077	小型甕	土師器	(152)	144	(86)	(155)	口縁部～底部	80%	被熱、外面胴部下半部ヘラケズリ(手持ち・横)、内面ヘラナデ(横)、底部ヘラケズリ(手持ち)、内部口縁スス付着。	白雲母	褐色	普通	9世紀代	底部はミガキに近いくらいナデている。カマドから逆位出土。

2は、カマドから逆位で出土した、土師器の坏である。ほぼ完形に近い。外面体部下端を横方向にヘラナデで調整している。内面はヘラミガキがなされ、器厚は薄手で、黒色処理されている。また、見込みがへこんでいる。底部は手持ちでヘラナデを行っている。器高は高めで、器壁は内湾している。胎土に黒雲母を含んでいる。形状から10世紀前半と見られる。

3は、カマドから逆位で出土した、土師器の高台付坏である。器厚は薄い。外面胴部には調整が無く、口唇部から胴部にかけてススが付着している。内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。また内面見込みはへこんでいる。底部は回転ヘラケズリで調整されて、扁平である。坏部は大型で、器壁は内湾気味である。人為的に高台部を欠損している。形状から9世紀後半から末期のものである。

4は、カマドから出土した、土師器の甕である。外面の調整は粗雑である。口唇部は刷毛目で調整されて、口唇の摘み出しはなく、また外面にススが付着している。内面は横方向にヘラナデ調整されている。胴部の張りは無く、寸胴型をしている。頸部のくびれはやや弱い。胎土に白雲母を含んでいる。形状から9世紀代と判断した。

5は、カマドから出土した、土師器の小型甕である。外面には、吹き零れの痕跡がある。全体的に被熱しており、破損している頸部の断面内部まで被熱して黒く変色している。口縁部の摘み出しは無く、胴部の張りも弱い。内面は横方向にヘラナデを行っており、内部の口縁にススが付着している。底面は手持ちでヘラケズリがなされており、ミガキに近いほどナデている。9世紀代と判断した。

1・2・3・5はカマド祭祀に使用されたものであり、すべて逆位で出土した。1は3の上から正位で出土したが、破片が狭い範囲で散在しており原位置は保っていない。2は3の下から逆位で出土しており、原位置を保っている。3は1の下から逆位で出土しており、原位置を保っている。5は一番下から逆位で出土しており、原位置を保っている。以上をまとめると、5を伏せた上に3、2があり、1がその上から出土したということになる。

時期　出土遺物から、9世紀後葉から10世紀前葉と考えられる。

043SI（第153～155図、表82）

位置　D区南東部、G-7、G-8、H-7、H-8グリッドに位置する。

規模と平面形　長軸4.80 m、短軸4.42 mを測り、平面形は正方形を呈する。

主軸方向　N-24°-Eである。

壁　残存する壁高は0.28～0.36 mで、壁はほぼ直立する。

床　平坦で、住居中央部とカマドの南側を中心に硬化が認められる。周溝は住居南半部壁際に沿って、0.07～0.03mの深さを測る。

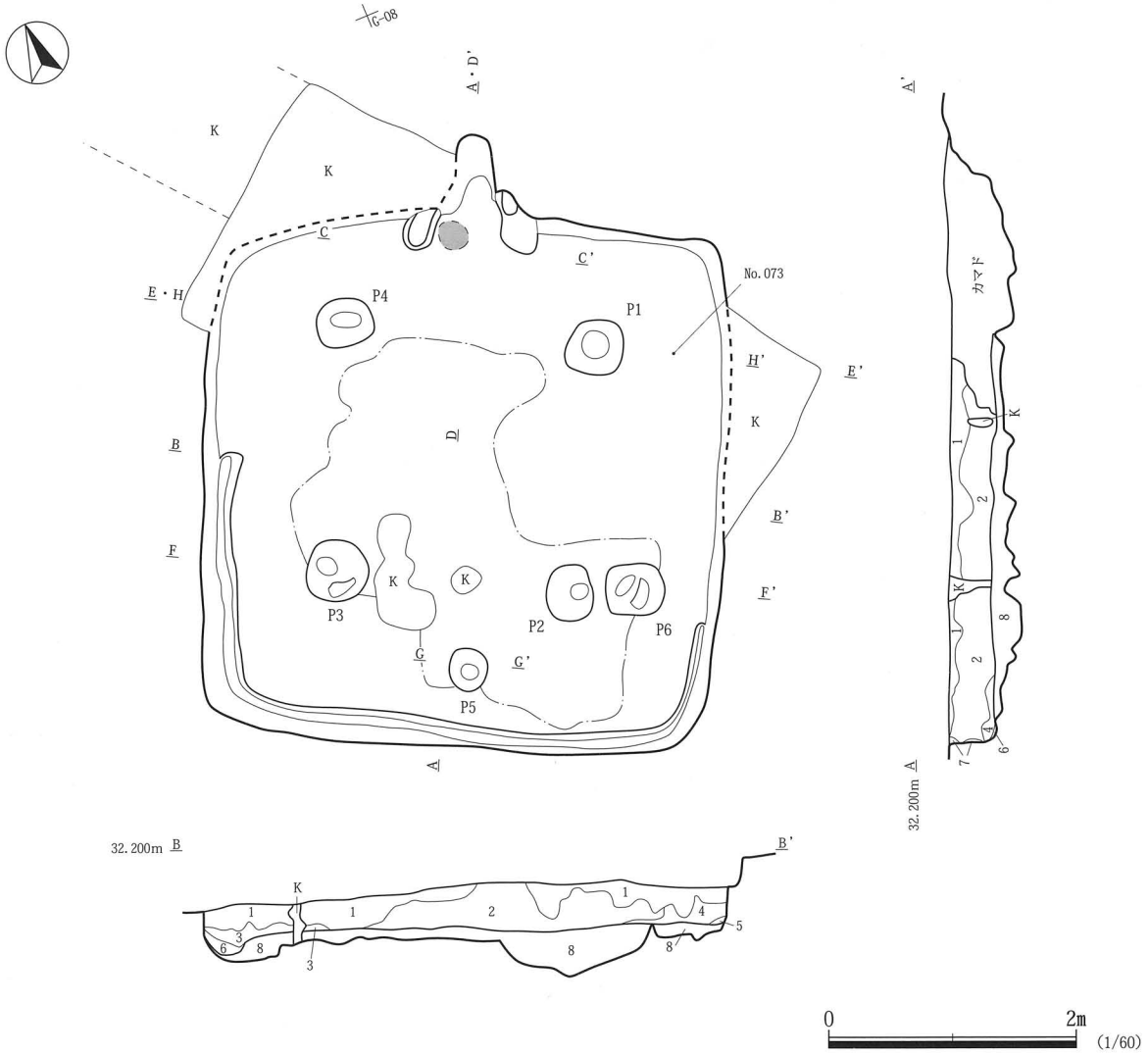
ピット　6基検出した。P1～P4、P6は、径0.50～0.40 mの円形を呈し、深さは0.38～0.58 mである。P1～P4はその位置から主柱穴と考えられ、P6はP2に付随する副柱穴の可能性がある。P5は径0.34 mの円形を呈し、深さは0.14 mである。P5は、カマドと南壁との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

カマド　北壁中央部に付設されており、東側袖部は遺存しているが、住居北西部の攪乱によって西側袖部の大部分は失われている。袖部は砂混じりの粘土で構築されている。規模は煙道部から焚口部まで0.94 m、最大幅0.64 m、壁外への掘り込みは0.60 mである。火床面は北壁ラインよりもやや南に位置し、床面とほぼ同じ高さで、皿状である。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。

覆土　8層からなり、第2層がレンズ状に堆積し、第3～5層に初期流入土が認められることから自然堆積と考えられる。6層は周溝の覆土である。カマド付近の覆土には散漫に砂や粘土が含まれることから、住居廃棄後から埋没の過程において、カマドの一部が崩壊したと推察される。第8層が掘り方の埋土である。

遺物　実測遺物は3点ある。

1は住居北東部の床面から正位で出土した土師器甕で、ほぼ完形に近い。外面の調整は、口縁部から上半部にかけて縦方向にヘラナデをし、胴部下位を横方向にヘラケズリをした後、中央部から下位にかけてヘラミガキを縦方向に行っている。表面には付着物がある。内面は横方向にヘラナデを行っている。底部は木葉痕があるが、

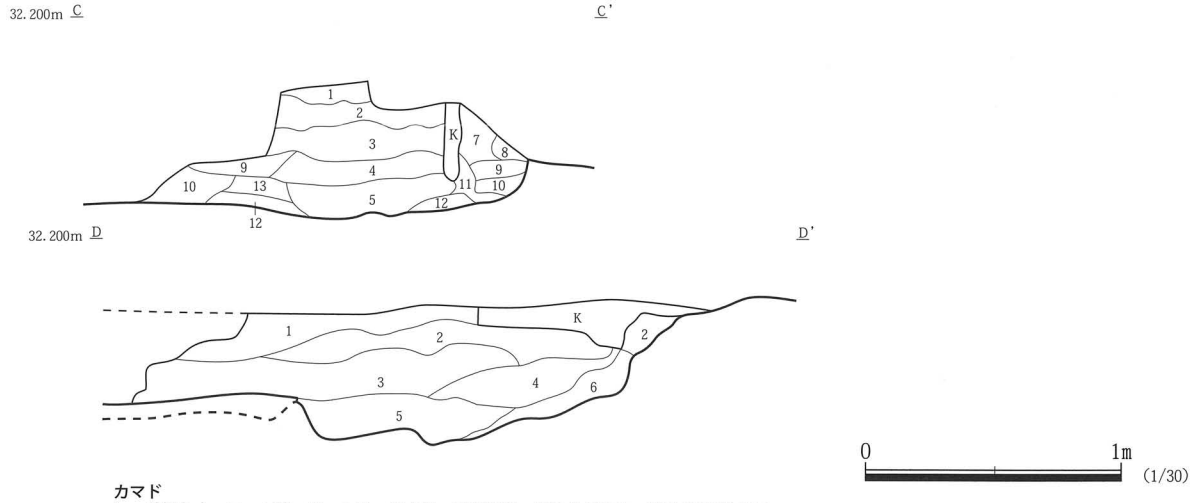


043SI
1 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒微量含む。締まり弱/粘性弱
2 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL・焼土粒微量含む。締まりあり/粘性弱
3 黒褐色土　ローム粒中、ロームBL少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
4 黒褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まり弱/粘性あり
5 褐色土　ローム粒多、ロームBL中量含む。締まりやや強/粘性あり
6 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まりやや強/粘性あり
7 褐色土　ローム粒少、ロームBL多量含む。締まり弱/粘性あり
8 暗褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

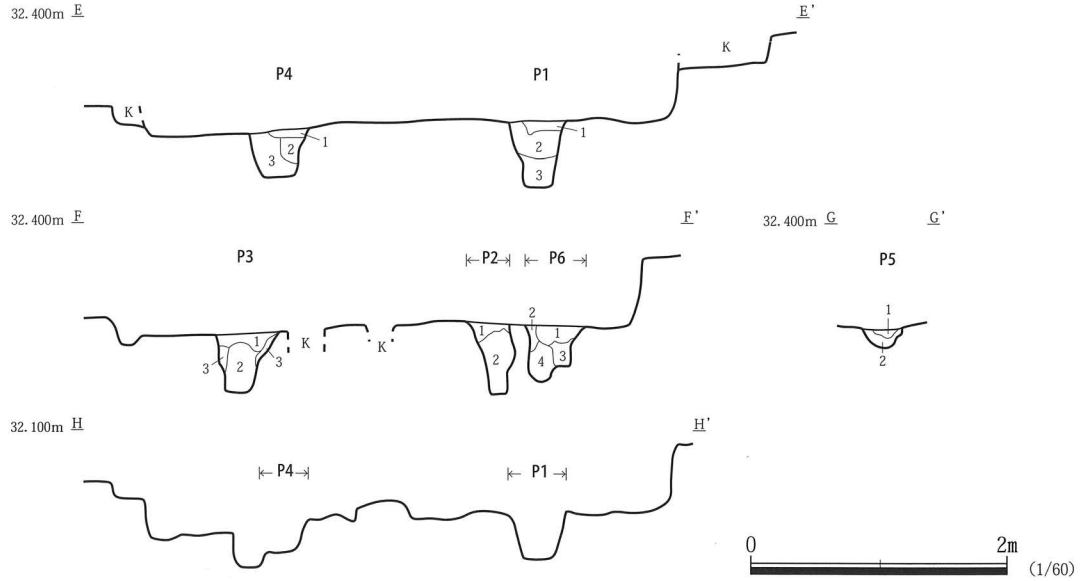
第 153 図　043SI 平面図・断面図

底部外縁部で回転ヘラナデを行っているため、中央部にのみ木葉痕が確認できる。頸部から口縁部までが強く外反し、胴部の張りは強い。口縁部の摘み出しがある。外面のススは、胴部の一番張った部分の下のみで、上半部から口縁部にはススは付着していない。このことからカマドに設置して使用されていた可能性がある。胎土に白雲母を含んでいる。8 世紀代と比定される。

2 は、住居覆土から出土した、土師器甕である。外面調整は、胴部上半部は横方向にヘラナデ、胴部中央部は



カマド
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・炭化物微、砂BL少量含む。締まり弱/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊少、炭化物・粘土微、砂BL状に多量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊・炭化物微、砂少量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗赤褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊中、炭化物・砂微量含む。締まり弱/粘性弱
5　にぶい黄褐色土　ローム粒中、ロームBL少、焼土粒・砂微量含む。締まりやや強/粘性強
6　褐色土　被熱ロームBL少量含む。締まりやや強/粘性強
7　灰黄褐色土　ローム粒少、焼土粒微、砂BL状に少量含む。締まり弱/粘性弱
8　暗褐色土　ローム粒・焼土粒微量含む。締まり弱/粘性弱
9　灰横褐色土　ローム粒微、焼土粒少、炭化物、砂微量含む。締まり強/粘性あり
10　褐灰色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・砂微量含む。締まりあり/粘性あり
11　にぶい黄褐色土　ローム粒多、ロームBL中、焼土粒微量含む。締まりあり/粘性強
12　にぶい黄褐色土　ローム粒少、ロームBL多量含む。締まり強/粘性強
13　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBL中、焼土粒・焼土塊・炭化物微量含む。締まりあり/粘性強



P1
1　黒褐色土　ローム粒微、焼土粒少、砂微量含む。締まりあり/粘性弱
2　灰横褐色土　ローム粒微、ロームBL・焼土粒・焼土塊少、粘土・炭化物微、砂BL状に少量含む。
　締まりあり/粘性弱
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL微量含む。締まりやや強/粘性あり

P2
1　暗褐色土　ローム粒・ロームBL微量含む。締まり弱/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり

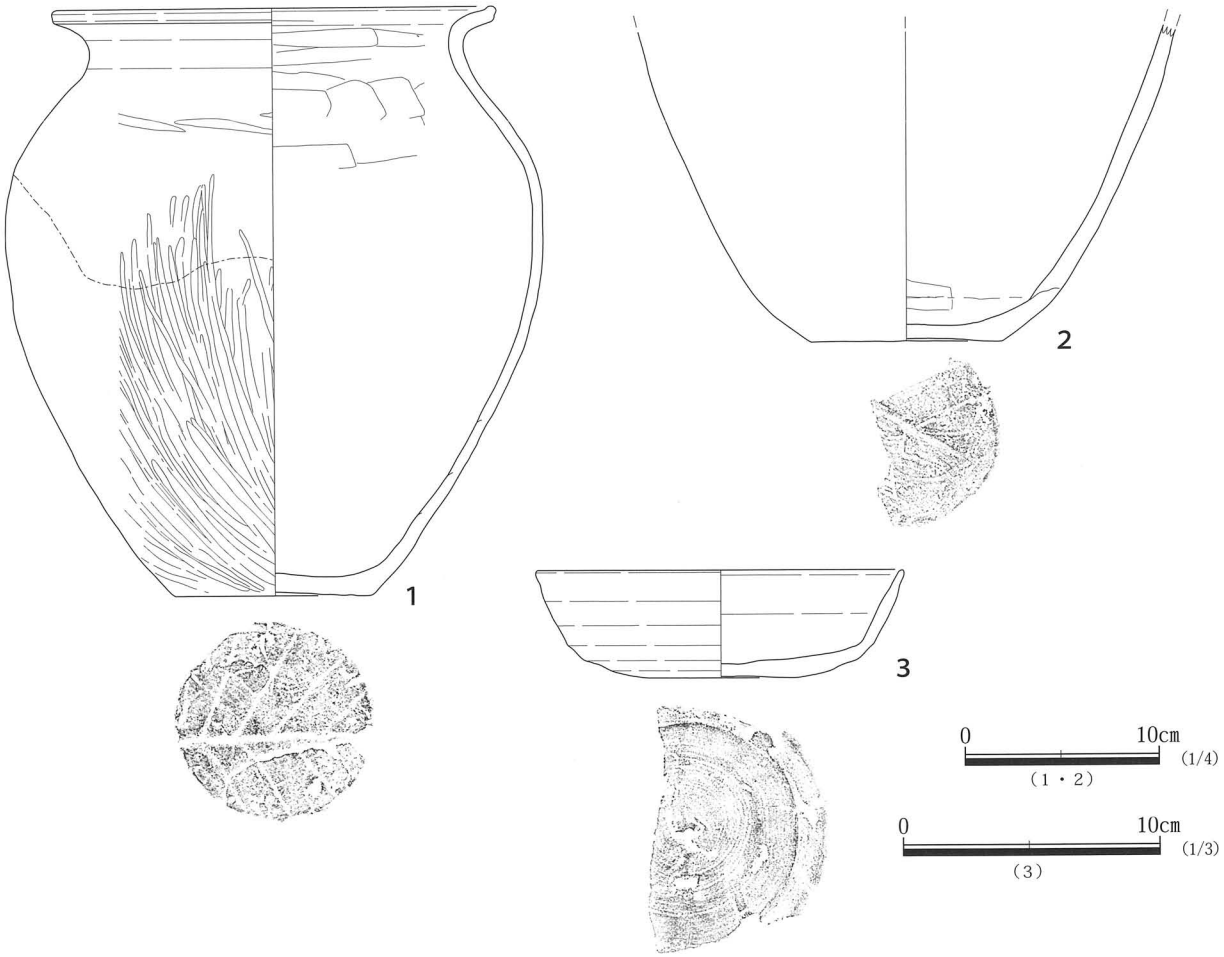
P3
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒微量含む。締まり弱/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まりあり/粘性強

P4
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・焼土粒・砂微量含む。締まり弱/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・砂微量含む。締まり弱/粘性あり

P5
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒微、ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

P6
1　暗褐色土　ローム粒微、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性あり
2　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ローム粒中、ロームBL少量含む。締まりやや強/粘性強
4　にぶい黄褐色土　ローム粒少、ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

第154図　043SI 平面図・断面図



第 155 図　043SI 出土遺物

表 82　043SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	043SI	NO.073	甕	土師器	233	277	103	312	口縁部～底部	95%	外面胴部口縁部～上半部ヘラナデ(縦)、外面胴部中央部ヘラミガキ(縦)、外面胴部下半部ヘラケズリ(横)、内面ヘラナデ(横)、底部木葉痕、底部外側回転ヘラナデ、外面表面粘土付着、外面スス付着。	白雲母白色粒	赤褐色	普通	8世紀台	住居内北東部床面直上から正位で出土。
2	043SI	覆土	甕	土師器		(164)	<100>		胴部～底部	30%	外面胴部上半部ヘラナデ(横)、外面胴部中央部ヘラミガキ、外面胴部下半部ヘラケズリ(手持ち・横)、内面胴部～底部ヘラナデ(横)、内面底部ヘラナデ、底部木葉痕、底部外縁部ヘラナデ(手持ち)、外面付着物あり(被熱)、底部スス付着。	白雲母小石	赤褐色	普通	8世紀台	
3	043SI	覆土	坏	須恵器	<144>	43	60		口縁部～底部	30%	底部回転ヘラケズリ。	小石	青灰色	普通	8世紀第1四半期	

ヘラミガキ、胴部下半部は手持ちで横方向にヘラケズリがなされている。外面は付着物があり被熱している。内面調整は、胴部から底部までを横方向にヘラナデされている。内面は、ススが付着している。底部は木葉痕があり、外縁部を手持ちヘラナデで行っているため、中央部にのみ木葉痕が確認できる。胎土に白雲母を含んでいる。

3は、住居覆土から出土した、須恵器の坏である。底部は回転ヘラケズリを行っているが、やや丸底気味である。8世紀第1四半期に比定できる。

時期　出土遺物から、8世紀前葉と考えられる。

045SI（第 156 ～ 159 図、表 83・84）

位置　D 区南部、H-5、I-5 グリッドに位置する。

規模と平面形　規模は長軸 4.10 m、短軸 3.19 m、平面形は正方形を呈する。

主軸方向　N-24°-E である。

壁　残存する壁高は 0.34 ～ 0.08 mで、壁はほぼ直立している。

床　平坦で住居中央部に硬化が認められる。周溝は住居南半部壁際に沿って、0.10 ～ 0.04m の深さを測る。

ピット　3 基検出した。P1 は径 0.57 mの円形を呈し、深さは 0.10 mである。P2 は長径 0.96 m、短軸 0.67 m の楕円形を呈し、深さは 0.44 mである。他のピットに比べ大形で住居南西隅に位置し、性格は不明である。P3 は径 0.45 mの円形を呈し、深さは 0.3 mである。

カマド　北壁中央部のやや東よりに付設されており、両袖部が遺存する。袖部は砂を含む粘土で構築されている。規模は煙道部から焚口部まで 0.70 m、最大幅 0.68 m、壁外への掘り込みは 0.72 mである。火床面は北壁ラインよりやや北に位置し、床面とほぼ同じ高さで、平坦である。袖部の内壁及び火床面は被熱による硬化が認められる。支脚（第 159 図 7）はカマド中央よりもやや西側で、西側袖部内壁に近接して出土した。中央部から出土していないことから、東側袖部にも支脚があった可能性がある。

覆土　17 層からなり、ローム土が混入する黒褐色土を主体とする。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。カマド付近の土層堆積は住居中央方向に傾斜しており、散漫に砂や粘土が含まれることから、住居廃棄後から埋没の過程において、カマドの一部が崩壊したと推察される。

遺物　実測遺物は 8 点である。

1 は、住居覆土から出土した、土師器坏である。外面口縁部に若干ススが付着する。胴部下位に墨書があるが、一部だけで判別は不能である。内面は、丁寧にヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は手持ちでヘラケズリ調整されていて、扁平である。器壁はやや内湾気味である。胎土に黒雲母を含む。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

2 は、カマドから出土した、土師器坏である。口縁部にススが付着している。また胴部に墨書があり、「□井」と読める。内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。底部は手持ちでヘラケズリ調整されていて、やや扁平気味である。器壁はやや外反している。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

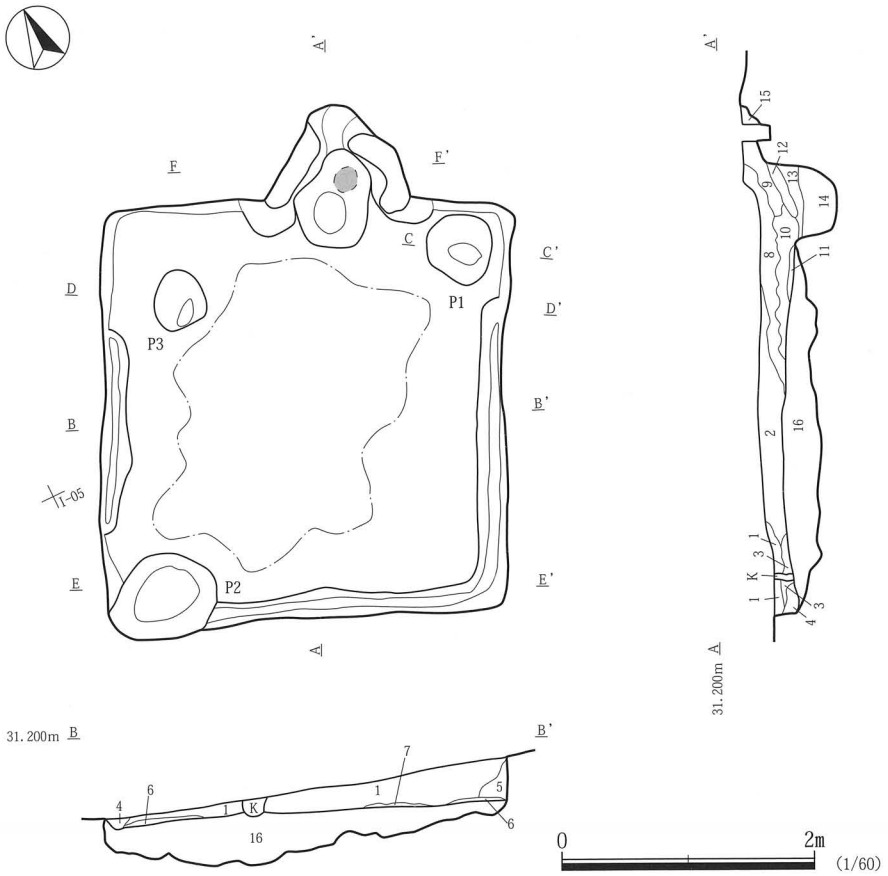
3 は、住居南東部壁付近の床面直上から出土した、土師器の坏である。体部下端にヘラケズリ調整されている。また外面はススが付着している。内面はヘラミガキがなされ、黒色処理されている。底部は回転ヘラケズリで調整され、扁平である。器壁は、体部は内湾し、口縁部は外反している。胎土は白雲母を含む。形状から 9 世紀後半から 10 世紀前半に比定できる。

4 は、カマドから出土した、須恵器坏である。内外面に調整は無い。内外面の上位は白色、内外面の下位は青灰色を呈す。底部の調整はヘラケズリである。また金雲母が多く含まれている。新治窯産の様相に近く、県南の窯と予想され、9 世紀後半に比定できる。

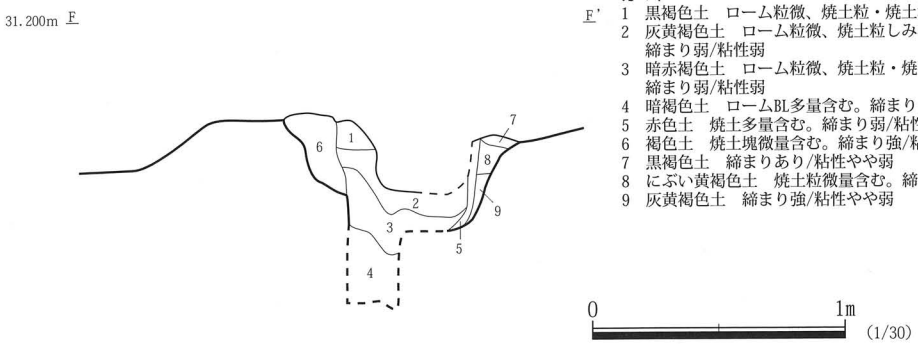
5 は、カマドのソデの補強材として使用されていた、土師器の甕の破片である。口縁部から胴部までが残存しており、保護するようにソデに密着した状態で、正位で出土した。外面の調整は、上半部はナデを行っている。外面にはススが付着しており、被熱している。内面は横方向にヘラナデがなされており、薄手である。常総型甕だが、胴部の張りは弱く、口唇部の摘み出しは天をむいている。胎土に黒雲母を含んでいる。8 世紀代に比定できる。

6 は、住居覆土から逆位で出土した、須恵器の大型甕である。頸部から胴部までのみで遺存率は不明である。頸部の径が 0.46 mであることからかなり大形であったと推測される。外面の頸部には波状文があり、棒状工具で 2 本 1 組で引かれたものと思われる。外面には自然釉がかかっている。木葉下窯産と推測される。9 世紀第 2 四半期から 9 世紀後葉と判断した。

7 は、カマド内部、北西側のソデ付近から出土した支脚で、原位置を保っている。中心部に方形の孔が穿たれ

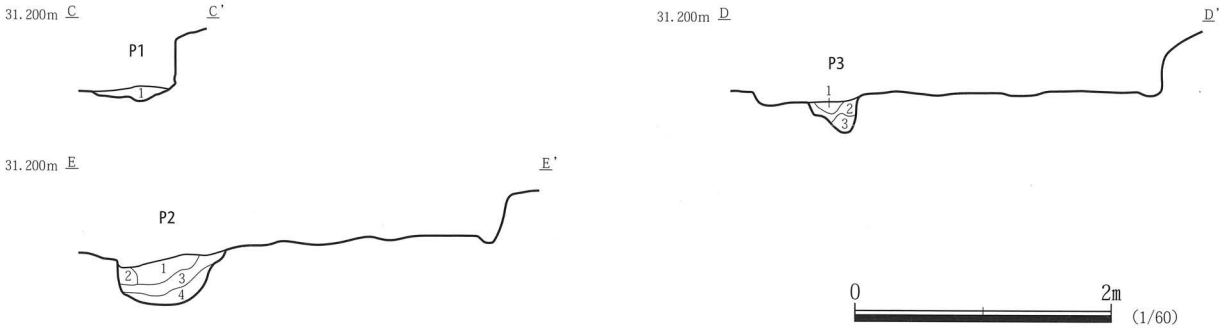


045SI
1　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微、焼土粒・焼土塊・粘土微、砂BL状に少量含む。締まりあり/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性弱
3　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒微量含む。締まりあり/粘性あり
4　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まりあり/粘性強
5　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性あり
6　暗褐色土　ローム粒・ロームBL微量含む。締まりやや強/粘性強
7　黒褐色土　ローム粒・ロームBL微量含む。締まりやや強/粘性強
8　灰横褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・焼土塊・粘土BL状に・炭化物微、砂しみ状に多量含む。締まりやや強/粘性あり
9　黒褐色土　ローム粒微、焼土塊・砂少量含む。締まりあり/粘性弱
10　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・砂しみ状微量含む。締まり弱/粘性弱
11　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・砂BL状に微量含む。締まりやや強/粘性あり
12　灰黄褐色土　ローム粒微、焼土粒しみ状に中、砂しみ状に多、炭化物微量含む。締まり弱/粘性弱
13　暗赤褐色土　ローム粒微、焼土粒・焼土塊多、砂しみ状に微量含む。締まり弱/粘性弱
14　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強
15　褐色土　ローム粒微量含む。締まり弱/粘性弱
16　黒褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まり強/粘性強



カマド
1　黒褐色土　ローム粒微、焼土粒・焼土塊・砂少量含む。締まりあり/粘性弱
2　灰黄褐色土　ローム粒微、焼土粒しみ状に中、砂しみ状に多、炭化物微量含む。締まり弱/粘性弱
3　暗赤褐色土　ローム粒微、焼土粒・焼土塊多、砂しみ状に微量含む。締まり弱/粘性弱
4　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強
5　赤色土　焼土多量含む。締まり弱/粘性弱
6　褐色土　焼土塊微量含む。締まり強/粘性やや強
7　黒褐色土　締まりあり/粘性やや弱
8　にぶい黄褐色土　焼土粒微量含む。締まりあり/粘性やや弱
9　灰黄褐色土　締まり強/粘性やや弱

第 156 図　045SI 平面図・断面図

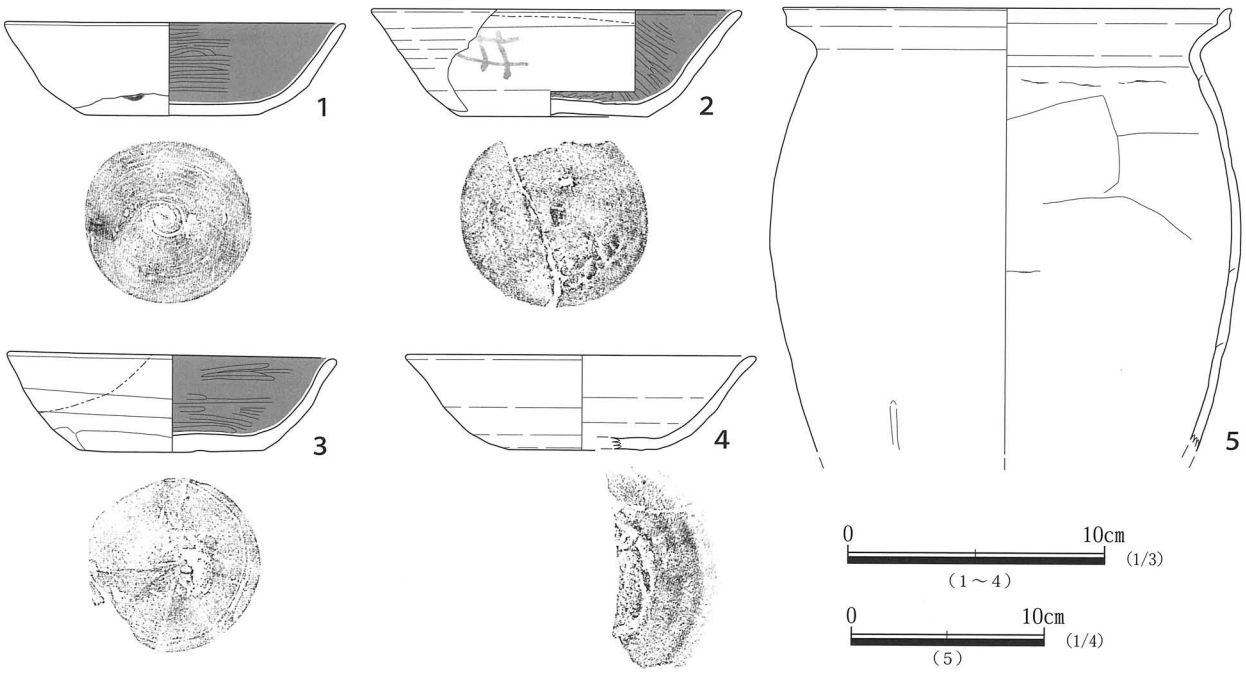


P1
1　黒褐色土　ローム粒少、ロームBL・焼土粒・炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり

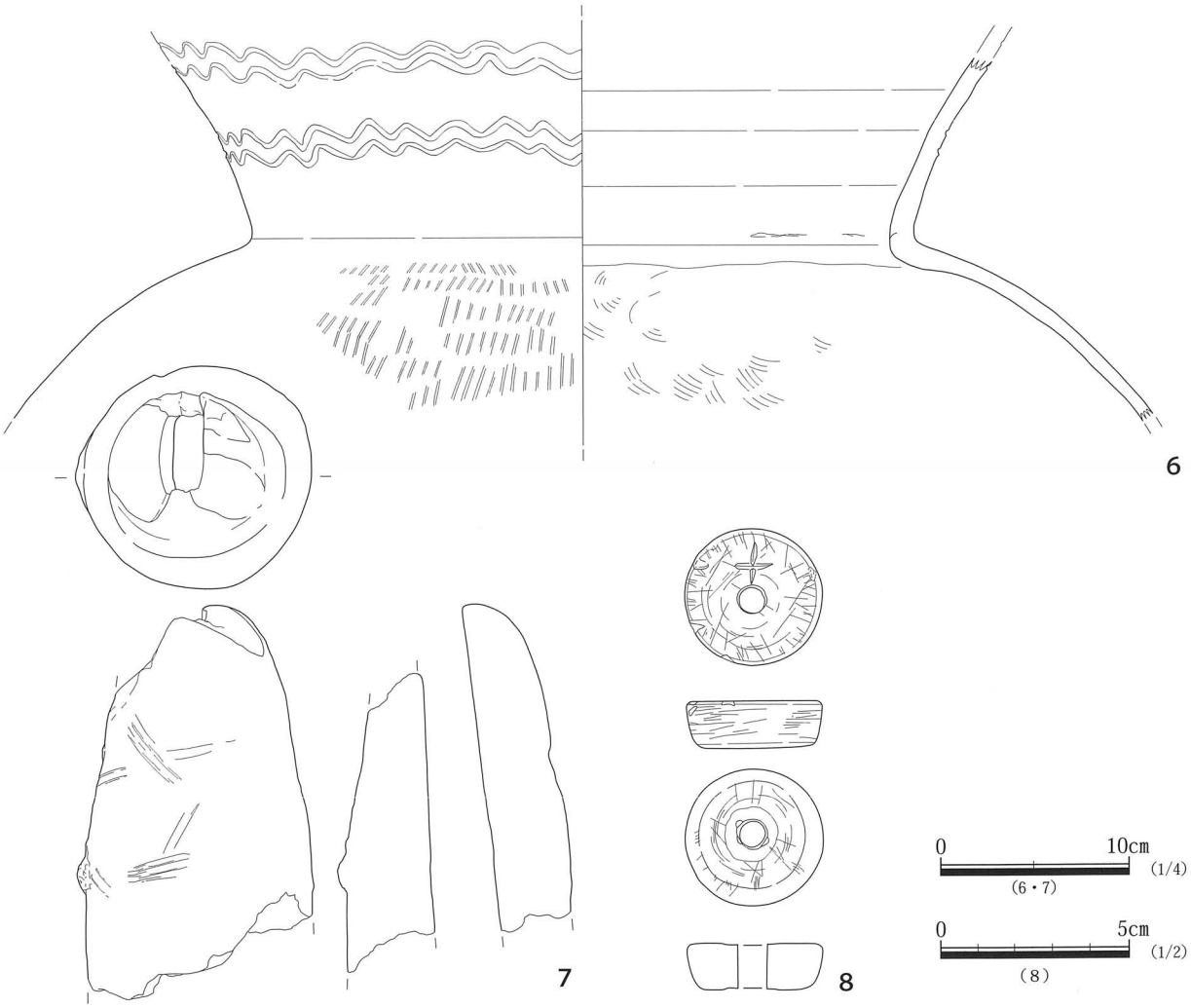
P2
1　黒褐色土　ローム粒・ロームBL・粘土微量含む。締まりあり/粘性弱
2　暗褐色土　ローム粒多、ロームBL少量含む。締まりあり/粘性あり
3　黒褐色土　ローム粒・ロームBL微、粘土少、砂微量含む。締まり弱/粘性あり
4　黒褐色土　ローム粒・ロームBL少量含む。締まりやや強/粘性あり

P3
1　黒褐色土　ローム粒中、砂少量含む。締まりやや強/粘性あり
2　黒褐色土　ローム粒・ロームBL中量含む。締まりあり/粘性あり
3　暗褐色土　ロームBL多量含む。締まりやや強/粘性強

第 157 図　045SI 平面図・断面図



第 158 図　045SI 出土遺物



第 159 図　045SI 出土遺物

表 83　045SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	045SI	覆土	坏	土師器	134	37	66		口縁部～底部	20%	外面胴部下位墨書(不明)、内面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、内面黒色処理、外面口縁若干スス付着、底部扁平。	黒雲母小石	黄褐色	普通	9世紀後半～10世紀第1四半期	
2	045SI	カマド	坏	土師器	145	43	74		口縁部～底部	50%	外面胴部墨書「□井」、内面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、内面黒色処理、外面口縁スス付着、やや底部扁平。	小石	褐色	普通	9世紀後半～10世紀第1四半期	
3	045SI	床面	坏	土師器	130	40	72		口縁部～底部	60%	外面体部下端ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、底部回転ヘラケズリ、内面黒色処理、外面スス付着、底部扁平。	白雲母	赤褐色	普通	9世紀後半～10世紀第1四半期	住居南東部壁付近の床面から逆位で出土。
4	045SI	カマド	坏	須恵器	(138)	38	(60)		口縁部～底部	30%	内外面調整なし、底部ヘラケズリ、内外面上位白色、内外面下位青灰色。	黒雲母白色粒	灰白色	やや不良	9世紀後半	県南の窯。新治窯の様相に近い。雲母多い。
5	045SI	カマド	甕	土師器	236	<235>		(247)	口縁部～胴部	40%	外面上半部ナデ、内面ヘラナデ(横)、外面スス付着、被熱か。	黒雲母小石	黄褐色	普通	8世紀代か	カマドソデを保護するようにして出土。
6	045SI	覆土	大型甕	須恵器		<192>		(610)	頸部～胴部	不明	外面頸部波状文（２本）、外面胴部タタキ、自然釉。	白色粒小石	褐灰色	普通	9世紀第2四半期～9世紀後葉	頸部の波状文は棒状工具で別々にひいた。木葉下窯産。逆位で出土。
7	045SI	支脚	支脚	土製品		高さ(214)		(127)		60%	中心部に方形の孔が穿たれる。	黒雲母				カマド内部北西側のソデ付近から出土。原位置を保っている。

表 84　045SI 出土　石製品観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	上部径(mm)	厚さ(mm)	下部径(mm)	孔径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
8	045SI	覆土	紡錘車	石製品	38	8	13			100%	上面に「+」の刻み、上面に使用痕あり、下面の中央の穴を中心に、磨り減っている。	滑石				形状は厚台形。

る。表面に工具痕がある。全体的に砂質であり、素地に黒雲母を含んでいる。

8は、精査時に出土した、紡錘車である。石材は滑石で、形状は厚台形である。上面に「+」の刻みがある。上面および下面の中央の穴を中心に磨り減った使用痕が確認できる。

時期　出土遺物から、9世紀中葉以降と考えられる。

048SI（第160～162図、表85）

位置　D区北西部、G-3、G-4、H-3、H-4グリッドに位置する。

規模と平面形　住居跡の西半分が破壊されており、正確な規模は不明であるが、長軸5.96 m、短軸5.48 mほどの方形と推定される。

主軸方向　N－67°－Eである。

壁　残存する壁高は0.07～0.40 mで、壁は床面からほぼ直角に立ち上がる。

床　東壁から約2.6 m、南壁から約5.4 mまで確認できた。北側に壁周溝を検出した。

ピット　6基検出した。P1は径0.42 m、深さは0.75 mである。P2は床面が撹乱によって存在しないため確認面からの計測に留めた、径0.25 m、深さは0.59 mである。P3についても床面が存在しないため確認面からの計測に留めた、径0.25 m、深さは0.24 mである。P4は径0.40 m、深さ0.52 mである。P1～P4はその位置やほぼ等間隔に配置されていることから柱穴と考えられる。

P5は一般的に貯蔵穴とされているもので、長軸1.14 m、短軸0.84 mで長方形を呈し、深さは0.57 mである。P6は床面が存在しないため確認面からの計測で、径0.24 mの円形を呈し、深さは0.30 mで、住居出入り施設痕と考えられる。

カマド　東壁に付設されており、上部が耕作の影響を受けて切られる。焚口部についても明確ではないが、焚口と判断した所より支脚が検出された。床が熱を受けて赤化し、硬化が認められた。

覆土　6層からなり、上部はほとんど存在していない。第5・6層は掘り方の埋土である。

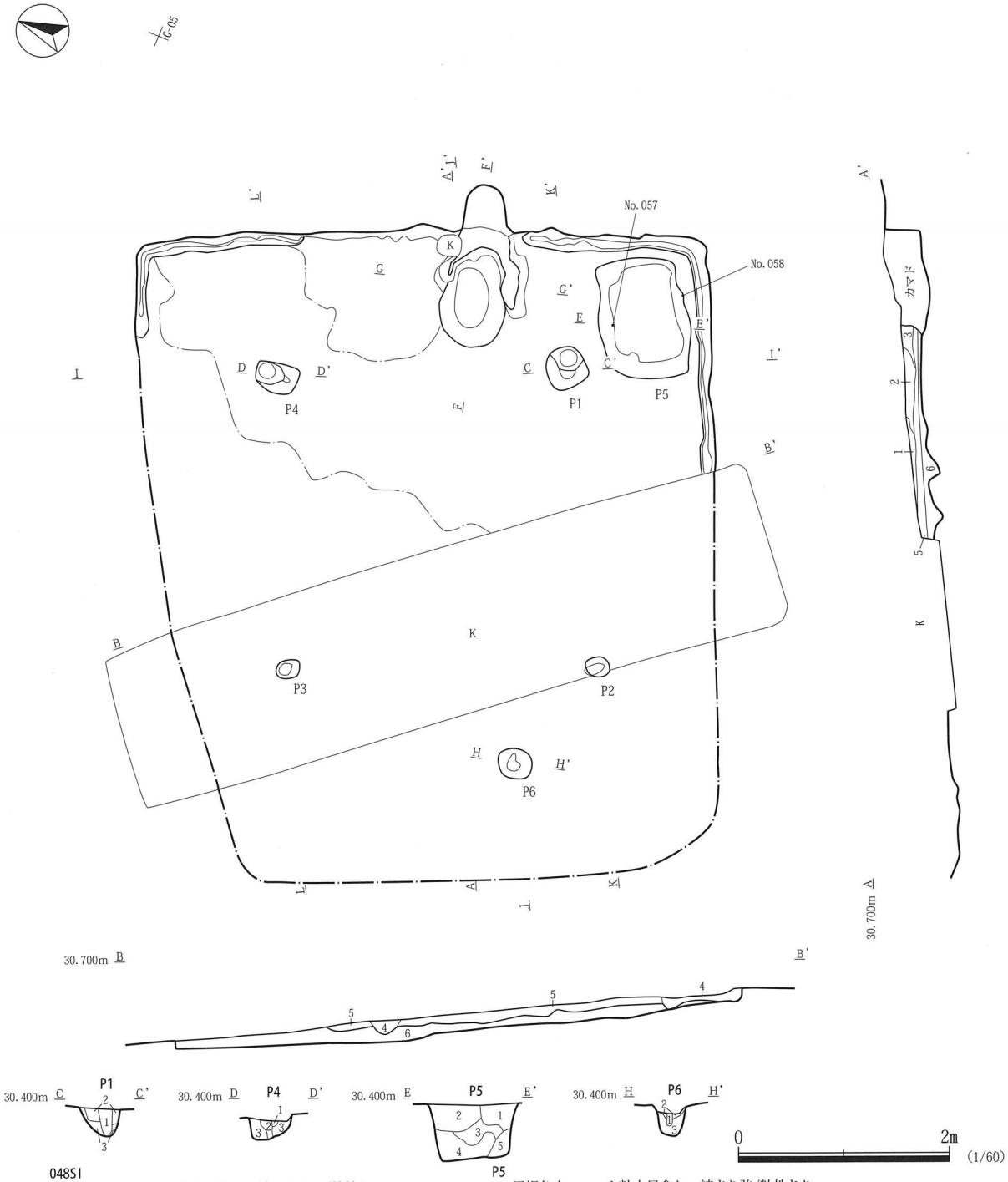
遺物　実測遺物は5点である。

1（№57）はP5（貯蔵穴）から出土した、土師器坏である。底部及び底辺部を欠く。口縁部は外反し、体部との境には稜がある。整形は外面口縁部がヘラ磨きで、光沢がある。外面体部はヘラ横なでによる。器面には内外ともベンガラの塗彩が施されて赤燈色を呈している。土器の断面は暗褐色であり、焼成はよい。内部はヘラ磨き。口縁部ではヘラ横なで、体部はタテにヘラ磨き痕が見られる。胎土は精緻であり、ほとんど異物の混入はない。

2はカマドの西側から出土した、土師器の甕形土器である。胴下半部を欠く。口縁部は外反し、くびれ部付近まで布による整形痕が残る。胴部の整形は指なでによる。色調は褐色を呈し、焼成はよい。胎土は精緻であるが砂粒子を含む。

3（№58）はP5と南壁の間から出土した、土師器の甕形土器である。口縁部を欠く。胴部の整形は指なでによる。底辺部の整形はケズリおよび指頭による。内部は整形痕が確認できないほど火熱により器肌が剥落している。底部は磨耗し、赤褐色を呈している。胎土は砂粒子を含む。

4はカマドの北側から出土した、土師器の甕形土器である。口縁部を欠く。底辺部は指圧による整形の痕跡が見られる。外側は火熱によって所々剥落している。底部の整形はヘラが用いられヘラ・カットの跡がある。胎土は細かい石片が混入している。



048SI
1 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
2 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性強
3 黒褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土塊中量含む。締まり強/粘性強
4 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まり弱/粘性強
5 褐色土　ローム粒・ロームBL多量含む。締まり強/粘性強
6 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まり強/粘性弱

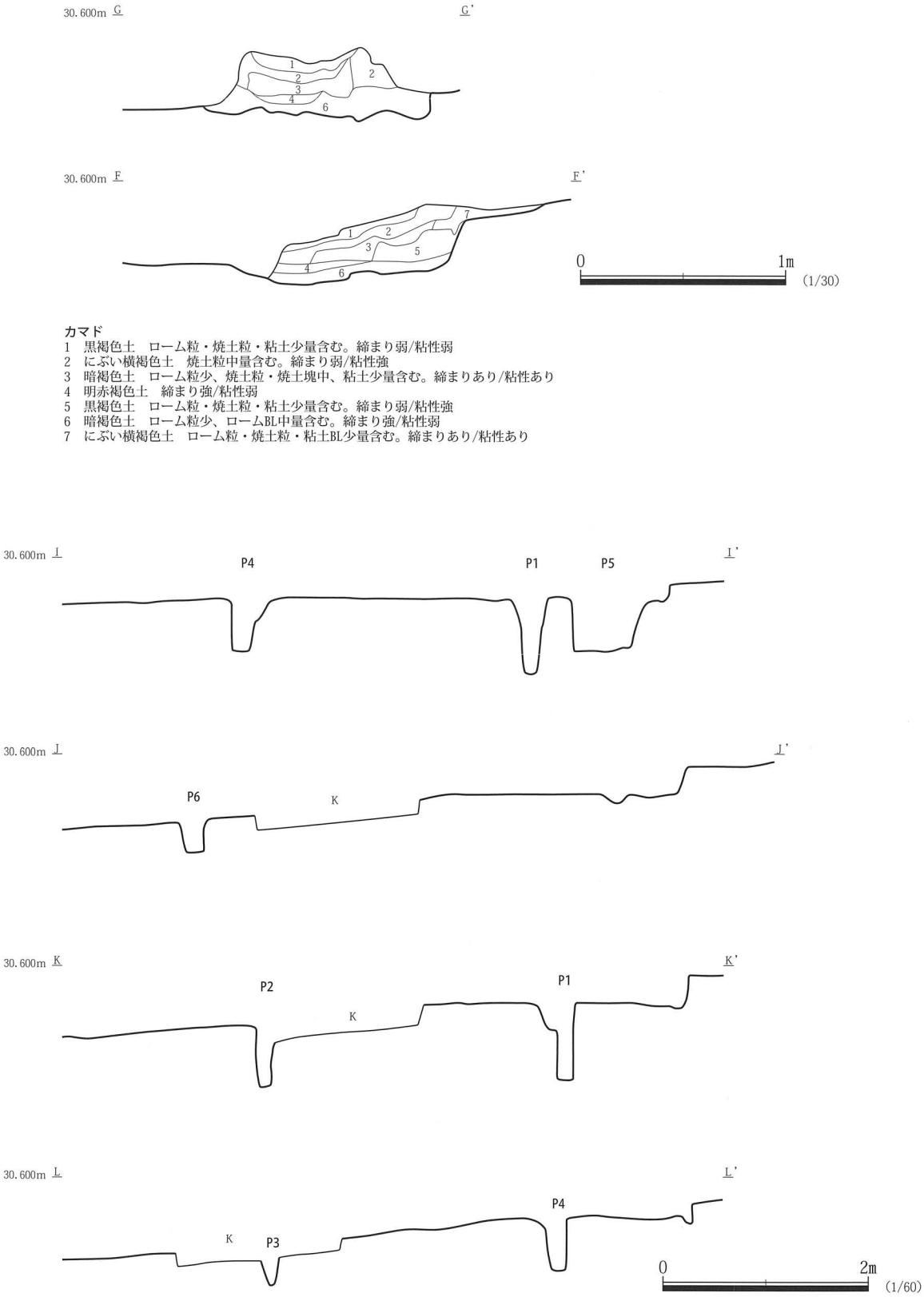
P1
1 黒色土　ローム粒・焼土塊微量含む。締まり弱/粘性強
2 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
3 黒褐色土　ローム粒中量含む。締まり弱/粘性あり

P4
1 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まり弱/粘性弱
2 黒褐色土　ローム粒少、炭化物微量含む。締まりあり/粘性あり
3 にぶい黄褐色土　ローム粒多量含む。締まり弱/粘性あり

P5
1 黒褐色土　ローム粒中量含む。締まり強/粘性あり
2 黒褐色土　ローム粒少量含む。締まりあり/粘性あり
3 黒褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まりあり/粘性あり
4 黒褐色土　ローム粒微量含む。締まり弱/粘性あり
5 暗褐色土　ローム粒少、ロームBL微量含む。締まり弱/粘性弱

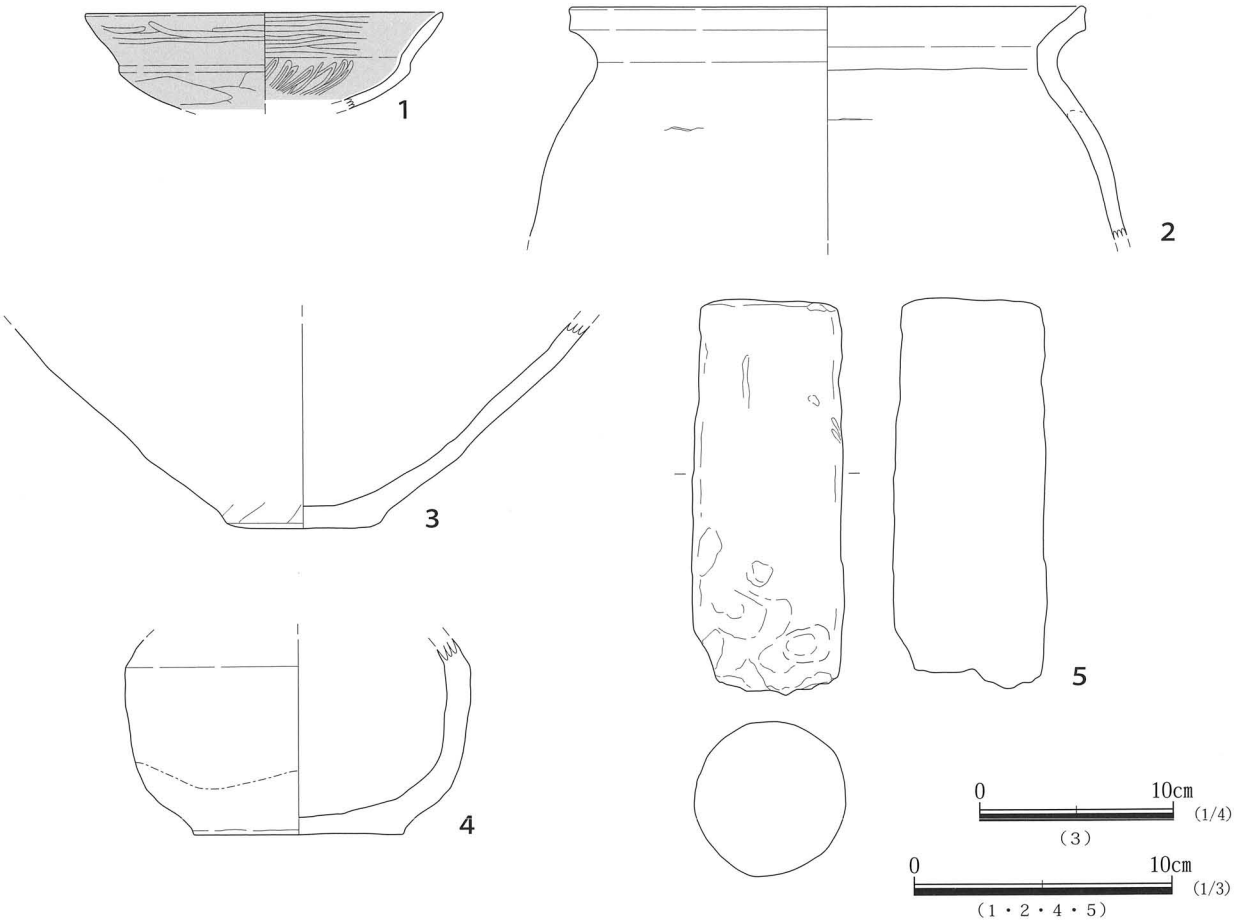
P6
1 黒褐色土　ローム粒中量含む。締まりあり/粘性あり
2 褐色土　締まり強/粘性あり
3 横褐色土　締まり強/粘性強

第 160 図　048SI 平面図・断面図



カマド
1　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土少量含む。締まり弱/粘性弱
2　にぶい横褐色土　焼土粒中量含む。締まり弱/粘性強
3　暗褐色土　ローム粒少、焼土粒・焼土塊中、粘土少量含む。締まりあり/粘性あり
4　明赤褐色土　締まり強/粘性弱
5　黒褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土少量含む。締まり弱/粘性強
6　暗褐色土　ローム粒少、ロームBL中量含む。締まり強/粘性弱
7　にぶい横褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土BL少量含む。締まりあり/粘性あり

第 161 図　048SI 平面図・断面図



第 162 図　048SI 出土遺物

表 85　048SI 出土　土器観察表

番号	遺構NO.	層位	器種	種別	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	最大径(mm)	部位	遺存率	手法・文様の特徴	胎土	色調	焼成	時期	備考
1	048SI	NO.57	坏	土師器	<140>	(39)			口縁部～体部	30%	全面赤彩、外面口縁部ヘラミガキ(横)、外面体部ヘラナデ（横）、外面口縁部と底部の境に稜、内面口縁ヘラナデ、内面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ。	白雲母	黄褐色	良		
2	048SI	カマド	甕	土師器	(220)	<93>			口縁部～体部	20%	外面上半部ナデ(横)、口唇部摘み出し、内面ナデ(横)、胴部張り弱い。	黒雲母	黄褐色	普通		
3	048SI	NO.58	甕	土師器		(108)	80		体部中央部～底部	20%	外面中央部ナデ(横)、外面体部下端ヘラケズリ(縦)。	白雲母	赤褐色	普通		内面付着物あり。住居南東壁床面。
4	048SI	カマド	小型甕	土師器		<78>	<82>	136	体部～底部	20%	外面上部ナデ(横)、内面ナデ(横)、外面下部スス付着。	白雲母小石	暗褐色	普通		小石（白色)多量に混入。
5	048SI	カマド	支脚	土製品	60	高さ157				100%	指頭圧痕あり、上端部平坦。	白雲母小石	黄褐色	普通		調整丁寧。

5はカマド支脚である。形状は円柱状を呈する。整形は全体指を押し付けるようにして整えている。上端はきちんと整形され平である。全体的に熱を受けており、レンガ状に赤化している。

時期　出土遺物から、8世紀代と考えられる。

第４節　奈良・平安時代まとめ

奈良・平安時代の竪穴式住居跡および、土坑を検出した。掘立柱建物跡、溝跡は検出されなかった。

■遺構について

奈良・平安時代 17 基、時期不明７基の、あわせて 24 基の遺構が検出された。大半が住居跡である（表 86）。

台地上部の A1、A2 区、下部の D 区において竪穴式住居 17 軒を検出した。住居主軸は多少東西に傾いているが、おおむね北壁中央部にカマドを持つ住居を中心としている。以下、住居跡を３期に分けた。

（1）Ⅰ期（8 世紀前葉～ 8 世紀中葉）

調査地点において竪穴式住居が建て始められる時期である。D 区の 043SI、A2 区の 035SI の２軒が相当し、主軸は北東になる。どちらもカマド部分に攪乱を受け、遺存状態は良くない。035SI から火床面を検出している。

（2）Ⅱ期（8 世紀中葉～ 9 世紀前葉）

台地上である A1 区・A2 区に集中して 12 軒検出されている。住居跡数、遺物出土量の増加から、何らかの画期がこの時期にあったことがわかった。住居の規模に時期差は無いようである。主軸は８軒が東に傾いている。

（3）Ⅲ期（9 世紀前葉～ 10 世紀前葉）

住居が少なくなる。D 区で２軒、A2 区で１軒検出した。主軸は D 区の住居は北東に傾いており、A2 区の 034SI は東壁にカマドをもつ。10 世紀前葉以降と考えられる（註 1）。これ以降の住居は検出していない。

表 86　奈良・平安時代遺構一覧表

時代区分	時期	住居名	地区	長軸方位
8世紀前葉	Ⅰ期	043SI	D	N-10°-E
8世紀中葉		035SI	A２	N-20°-E
8世紀中葉～後葉	Ⅱ期	037SI	A２	N-1°-W
8世紀中葉～後葉		198SI	A２	N-10°-E
8世紀中葉～後葉		031SI	A２	N-20°-E
8世紀中葉～後葉		039SI	A２	N-35°-E
8世紀中葉～後葉		114SI	A２	N-7°-E
8世紀中葉～9世紀前葉		003SI	A１	N-14°-W
8世紀後葉以降		038SI	A２	N-21°-W
8世紀代		048SI	D	N-66°-E
8世紀後葉～9世紀前葉		033SI	A２	N-0°-E
8世紀後葉～9世紀前葉		036SI	A２	N-20°-E

時代区分	時期	住居名	地区	長軸方位
9世紀前葉以降	Ⅱ期	032SI	A２	N-30°-E
9世紀前葉以降		284SI	A２	N-3°-E
9世紀中葉以降	Ⅲ期	045SI	D	N-24°-E
9世紀後葉以降		042SI	D	N-10°-E
10世紀前葉以降		034SI	A２	N-95°-E
時期不明		040SI	A２	不明
時期不明		044SI	D	不明
時期不明		046SI	D	北西
時期不明		047SI	D	不明
時期不明		112SI	D	不明
時期不明		113SI	D	不明
時期不明		030SK	A２	不明

■出土遺物について

1. 時期ごとの遺物について

上記の３期について記述する。

Ⅰ期の遺物では、043SI の覆土から須恵器坏が出土している。底部が丸底気味であり、木葉下窯産の初期と考えられる。また 035SI の覆土から内面に薄く漆を塗っている須恵器坏が出土している。

Ⅱ期の遺物では、198SI の床面から多数の遺物が出土している。カマド西側から常陸型甕が２点出土した。033SI からは、カマドから支脚が、住居覆土から側面をヘラミガキのように細かく磨いた泥岩製の紡錘車が出土した。036SI から焼きムラのため色調が淡黄色の須恵器坏が、また、用途不明の金属製品が出土した。038SI から底部に「ㅓ」のヘラ記号をもつ須恵器高台付坏が出土した。114SI から墨書須恵器甕破片が出土し「那賀井□」と読める。

本調査区では、８世紀中葉から後葉までは須恵器が主体となっている。一方、８世紀後葉から９世紀前葉にか

けては土師器が主体となり、常陸型甕も多数出土しており、小型甕・高台付盤も存在する。

Ⅲ期の遺物では、003SI から墨書土師器高台付坏が出土し「神刀自」と読める。045SI からは、「井□」と墨書された土師器坏と、墨書の一部が残存している土師器坏、上面に「+」の線刻がある滑石製紡錘車が出土した。

坏・高台付坏は土師器のみとなり、内面を黒色処理している。

2. 出土遺物の産地について

須恵器の産地は「胎土の分類」（註 2）から推測して、新治窯の特徴である白雲母が混入していないこと、木葉下窯の特徴である白色粒を胎土に含んでいること、また地理的にも木葉下窯のほうが近い（調査地点から約 10km）ことなどから、新治窯産よりも木葉下窯産の製品が占める可能性が高い（註 3）。ただし、045SI から新治窯産とみられる須恵器坏が出土しており、新治窯からの供給もあったとみられる。土師器坏、高台付坏は胎土から判別できず、産地は不明である。

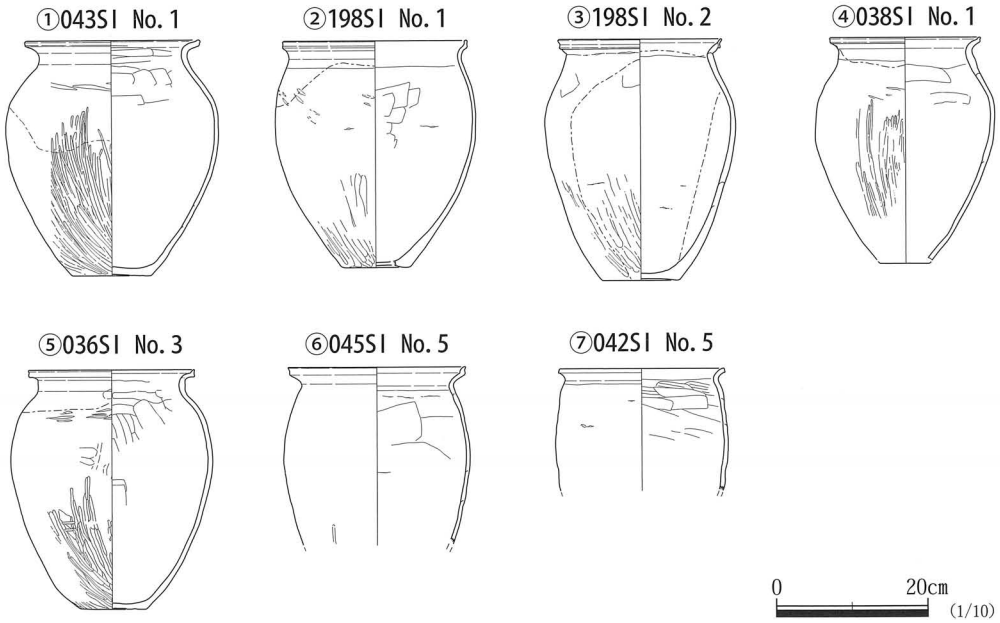
045SI 須恵器の大型甕は頸部沈線波状文から、木葉下窯産の特徴（註 4）を持つ。

(1) 常陸型甕の傾向

本調査地点から土師器甕が 18 点出土している。この中から常陸型甕で、口縁部から胴部または底部まで残存している 7 点を、時期ごとに観察した。観察方法は、「常陸型甕の形態変化の傾向」（註 5）を参考にし、胴部の張りを強いものから弱いものへと順番に並べた（図 163）。

胴部の張りについて、①～⑤の最大幅は胴部にある。⑥は口縁部と胴部はほぼ同じ幅で、⑦は完全に寸胴形であり、形の崩れが目立つ。口縁部の作り方は、摘み出しが弱いものから、丁寧に作り上げているものへ、さらに口縁部を丸く仕上げるものへ、という変化がみられた。頸部のクビレは、時期および雲母からみた産地には差異はない。口縁部の作成の精密さと頸部のクビレは、関係が薄いようである。

常陸型甕は胎土に白雲母が混入しているものが多数あり、新治窯付近で作成されたと考えられる。若干数は胎



第 163 図　橋爪遺跡出土　常陸型甕

土に黒雲母を含んでいるので、新治窯以外の在地窯産の土師器甕も供給されていたと見られる。

（2）小型甕の傾向

いわゆる常陸型甕よりも法量が小さいもの、口径 100 ～ 150 mm、器高 100 ～ 200 mm、底径 50 ～ 86 mmを測る甕を小型甕とした。住居の時期区分に基づいて配列した（図 164）。

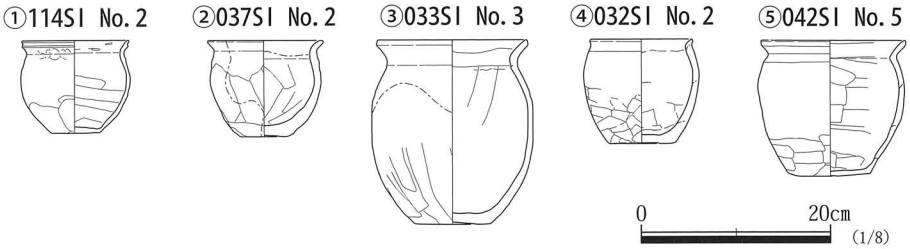
①が最小で、②からやや大きくなり、③と⑤は他の小型甕と比べても大きい。口縁部の作りは、①は丁寧に仕上げ、②と④は少し摘み上げた後に丸く仕上げ、③と⑤は頸部から直線的に伸びる。①は口縁部の作り方から常陸型甕を模倣している。②以降は作り方を省略されたのか口縁部が簡素になっている。全時期を通して口縁部の幅と胴部の張りの幅は、ほぼ同じである。頸部のクビレはいずれも緩やかである。器厚は①、③、⑤は薄く、②、④はやや厚めである。外面胴部はいずれもヘラナデ・ヘラケズリで調整されている。

すべて白雲母が混入していることから、新治窯付近で作成され、本調査地点に供給されたと考えられる。

3. 遺物のまとめ

土師器坏と須恵器坏が大半を占め、土師器甕がこれに続く。土師器または須恵器の坏蓋は出土していない。

8 世紀中葉～後葉までは須恵器坏が主流で、8 世紀後葉から 9 世紀前葉は土師器坏が大部分を占め、9 世紀中葉以降は土師器坏しか出土しないことを確認できた。これは木葉下窯、新治窯の操業が終了した為であろう。また、内面が黒色処理された土師器の坏、高台付坏が 9 世紀前葉から増える。墨書土器は 4 点あり、そのうち内面黒色処理されている土師器の坏・高台付坏は 3 点ある。



第 164 図　橋爪遺跡出土　小型甕

■小結

住居は 8 世紀前葉から増え始め、8 世紀中葉から 9 世紀前葉にかけて最盛期を向かえ、その後減少し、10 世紀中葉以後の遺構は確認できない（清水）。

註 1：10 世紀前葉と思われる 034SI だけ東カマドであるが、『研究ノート　創刊号』「茨城県内における奈良・平安時代の土器 (I)」（財団法人茨城県教育財団 1991）によると、「住居跡の内部施設における、竈の設置する位置が北壁から東壁へと移動する時期が VII 期（10 世紀前葉）に集中し、VII 期以降はほとんどが東竈になっていく（浅井哲也 1991）。」とある。このことから 034SI は 10 世紀の平均的な住居であることが住居形態からも分かった。

註 2：『婆良岐考古 31』「武田遺跡群における平安時代土師器杯・小皿編年」（小林義則 2009）による

註 3：本調査地点の付近では、須恵器生産を行っていた岩間窯と大淵窯（調査地点から 5km）がある。今回観察した結果では判別できなかったが、出土遺物の中には、岩間窯または大淵窯の遺物も含んでいる可能性がある。

註 4：「（中略）水戸市立博物館所蔵の木葉下窯跡群瓶焼土 2 号窯跡出土資料に、頸部沈線波状文甕を 2 段施すものと 3 段施す甕が存在していることを確認していることと、頸部沈線波状文の出土遺跡の多くが古代那賀郡内に所在していることを考え合わせると、頸部沈線波状文の多くは木葉下窯跡群産であると思われる。」（佐々木義則 2001）

註 5：『婆良岐考古 No.29』「常陸型甕の生産と流通　―奈良時代以前の様相―」（佐々木義則 2007）＝「ここでは大まかな形態変化の傾向のみを述べてみたい。常陸型甕

が定型化される6世紀後半ごろには、胴部が卵型を呈する形態の甕（中略）が主体となるが、7世紀前半には肩が張る形態の甕（中略）の出現を見る。ただし胴部卵形の甕も7世紀後半までは存続する。形態が大きく変化するのは8世紀第4四半期ごろであり、なで肩形態の甕（中略）も増えてくる。なお、器種構成のところで述べたように8世紀前半には寸胴形を呈する甕が一定量認められることが注意されよう。」

引用・参考文献

赤井博之・佐々木義則 2006「茨城県における須恵器の流通　―供膳具を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題―」『婆良岐考古第28号』婆良岐考古同人会

赤井博之・佐々木義則 2006「常陸国における須恵器の流通―供膳具を中心に―」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会

浅井哲也 1991「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）『研究ノート　創刊号』 財団法人茨城県教育財団

浅井哲也 1992「茨城県内における奈良・平安時代の土器（ⅠⅠ）『研究ノート　創刊号』 財団法人茨城県教育財団

青木仁昌 2007「竈に伏せ置かれた土器」『菟玖波　―川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集―』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会川井正一 1983「茨城県における八・九世紀の須恵器について―木葉下窯跡・鹿の子C遺跡―」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人　市立市川考古博物館

黒澤彰哉 1983「常陸における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』史館同人　市立市川考古博物館

佐々木義則 1992「茨城北部における供膳土器の器種構成」『婆良岐考古第14号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 1995「木葉下窯跡群産杯AIの変化について―消費地における形態と調整技法の様相―」『婆良岐考古第17号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 1996「新治窯跡群産須恵器杯AIの変化について―消費地の様相―」『婆良岐考古第18号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 1997「木葉下窯跡群の須恵器生産―奈良時代前半を中心に―」『婆良岐考古第19号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 1999「茨城県北半部における土師器椀の型式変遷」『婆良岐考古第21号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 2000「歴史的環境　―奈良・平安時代―」『武田石高遺跡　奈良・平安時代編』ひたちなか市教育委員会　財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

佐々木義則 2001「茨城県における8・9世紀の須恵器甕概観」『婆良岐考古23』

佐々木義則 2002「茨城県の須恵器窯跡」『第6回須恵器窯跡構造検討会』資料

佐々木義則 2007「茨城県における奈良・平安時代時研究の現状」『考古学の深層　―瓦吹堅先生還暦記念論文集―』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会

佐々木義則 2007「常陸型甕の生産と流通　―奈良時代以前の様相―」『婆良岐考古第29号』婆良岐考古同人会

佐々木義則 2009「武田遺跡群における平安時代土師器杯・小皿編年」『婆良岐考古第31号』婆良岐考古同人会

中村哲也 2003「"常陸型甕"以前―桜川流域における古墳時代甕形土器の型式額的検討―」『領域の研究　―阿久津久先生還暦記念論集―』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

渡辺一 1997「第4節関東地方の土器生産　―土器生産における二つの重圏構造―」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会　真陽社

渡邉大士 2010「古代の漆付着土器に関する覚え書き　―群馬県内の集落の事例を中心に―」『奈和　第47号』奈和同人会

『土師器・須恵器の知識』玉口時雄・小金井靖著　考古学シリーズ17　東京美術　1991

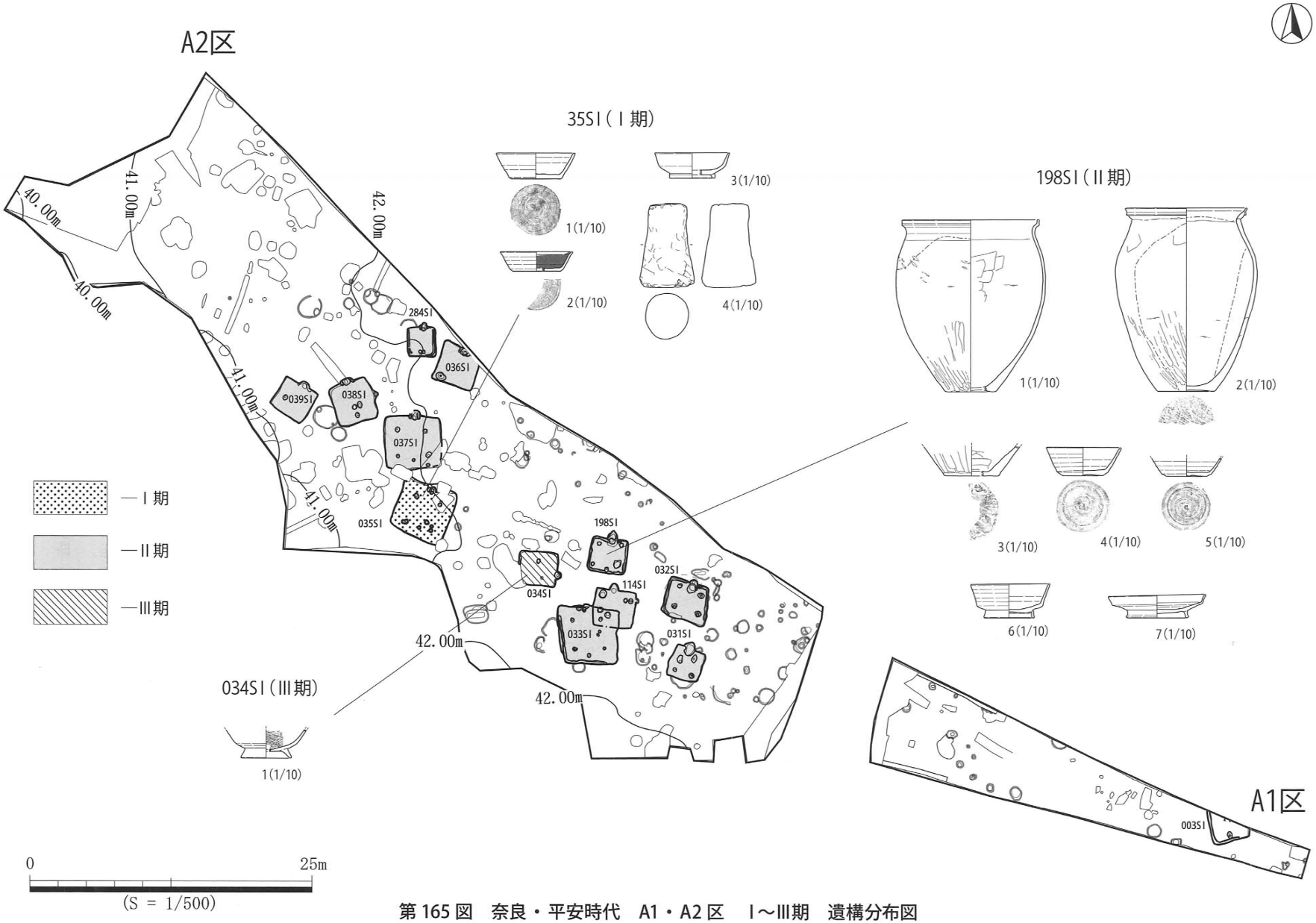
財団法人茨城県教育財団　奈良・平安時代研究班 1991「8世紀～9世紀前半の器種構成について」『研究ノート　創刊号』 財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団　奈良・平安時代研究班 1992「9世紀後半の器種構成とその割合について」『研究ノート　2号』財団法人茨城県教育財団　1992

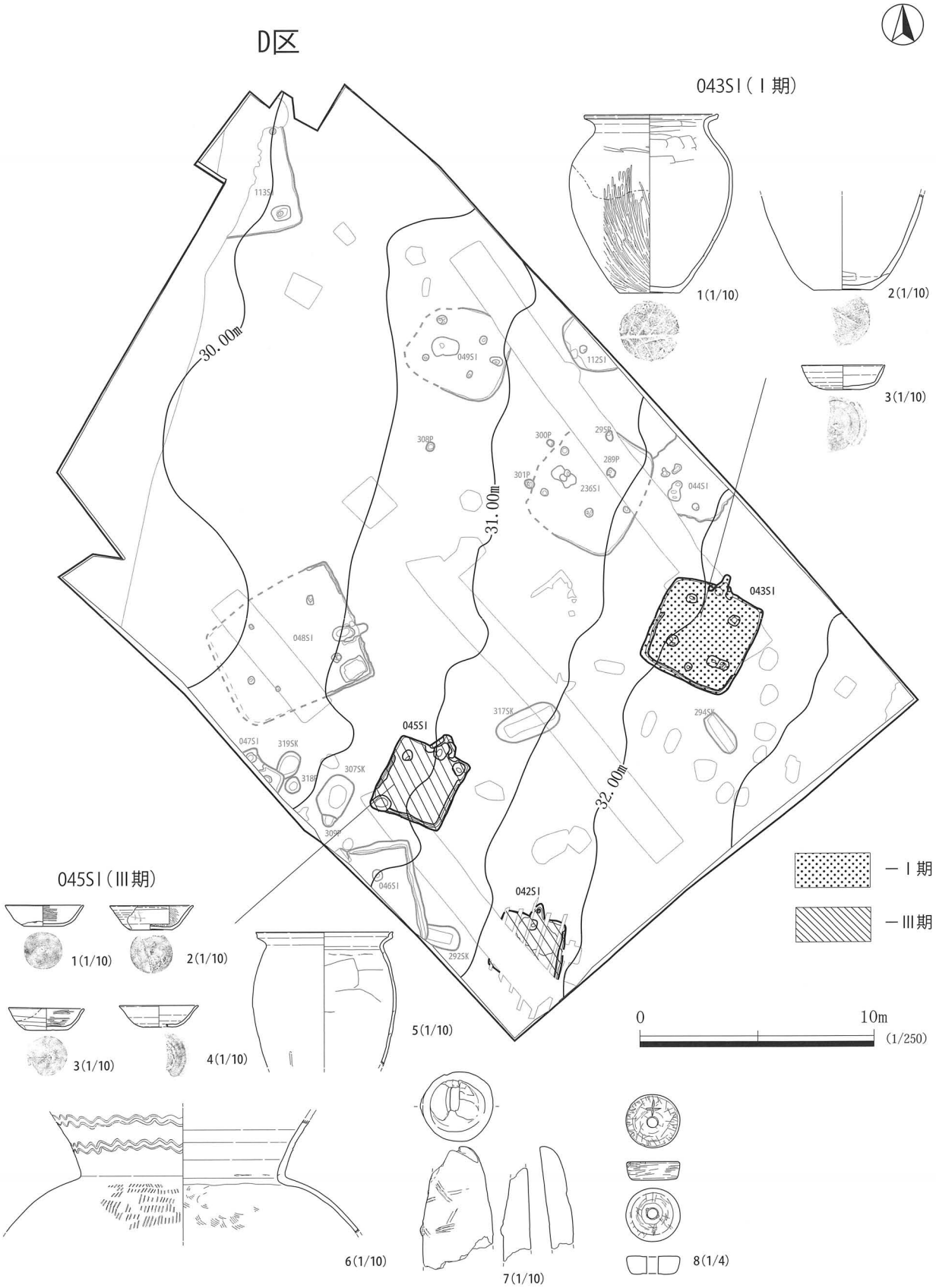
財団法人茨城県教育財団　奈良・平安時代研究班 1993「10世紀の器種構成とその割合について」『研究ノート　3号』財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第150集『北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　寺山遺跡　東平遺跡　坂ノ上塚群』日本道路公団東京第一建設局　財団法人茨城県教育財団　1999

茨城県教育財団文化財調査報告第241集『宮後遺跡3　やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　下巻』茨城県　財団法人茨城県教育財団　2005



第 165 図　奈良・平安時代　A1・A2 区　Ⅰ～Ⅲ期　遺構分布図



第166図　奈良・平安時代　D区　Ⅰ～Ⅲ期　遺構分布図

表 87　検出遺構一覧表　1

遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
001SK	A1	AK-42	円形	U字形	0.70	0.67	0.54		縄文中期	旧:005SK	
002SK	A1	AK-42	不定形	U字形	0.80	0.70	0.45	加曾利E	縄文中期		
003SI	A1	AK-41	隅丸方形	箱形	1.08	0.81	0.32		古代Ⅱ期		
004											欠番
005SK	A1	AK-42	円形	U字形	0.40	0.24	0.47		縄文時代	新:001SI	
006SI	A1	AK-40	隅丸方形	箱形	3.17	2.18	0.20	阿玉台Ⅰb	縄文Ⅰ期	旧:027SK	
007SK	A1	AJ-39	円形	箱形	2.68	1.86	0.30	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期		
008											欠番
009SK	A1	AJ-38	楕円形	箱形	2.28	2.00	0.58	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期	010SKとの切り合いは不明	
010SK	A1	AJ-38	円形	箱形	2.48	2.48	0.62	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	009SKとの切り合いは不明	
011SK	A1	AJ-38	円形	U字形	1.61	1.48	0.32	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:142SK	
012SK	A1	AJ-38	楕円形	袋状c	1.96	1.65	0.84	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:015SI・142SK	
013SK	A1	AI-37	円形	箱形	1.36	1.27	0.39	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
014SK	A1	AI-38	円形	箱形	1.46	0.54	0.52	加曾利EⅠか	縄文中期		
015SI	A1	AJ-37	隅丸方形	箱形	3.41	3.33	0.11		古墳時代前期	旧:012SK・016SK・135P	
016SK	A1	AJ-37	円形	U字形	1.04	0.95	0.44	加曾利E	縄文中期	新:015SI 旧:137SK	
017SK	A1	AH-36	楕円形	逆台形	3.89	0.91	0.79	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期	旧:018SK・130P	
018SK	A1	AH-36	円形	U字形	0.47	0.43	0.31			新:017SK	
019SK	A1	AI-36	楕円形	箱形	1.37	1.36	0.53	加曾利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:139SK	
020SK	A1	AJ-36	円形	U字形	1.38	1.22	0.79	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期	旧:145P	屋外炉か
021											欠番
022SK	A1	AJ-36	楕円形	箱形	1.56	1.80	0.56	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期		
023SK	A1	AI-35	円形	U字形	1.29	1.24	0.28	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
024SK	A1	AI-35	円形	U字形	0.79	0.51	0.50		縄文時代		
025											欠番
026SK	A1	AI-35	楕円形	箱形	1.71	1.23	0.46	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
027SK	A1	AI-39	円形	箱形	1.26	1.15	0.60		縄文時代	新:006SI	
028SK	A1	AK-40	円形	箱形	0.73	0.44	0.10	阿玉台		006SIと同一遺構	
029	A2										欠番
030SK	A2	AI-31	隅丸方形	箱形	2.13	1.66	0.23		古墳時代以降？		
031SI	A2	AH-31	隅丸方形	箱形	3.31	2.89	0.25		古代Ⅱ期	旧:182SK・203SK・201SK・202P	
032SI	A2	AG-31	隅丸方形	箱形	3.92	3.61	0.38		古代Ⅱ期	旧:190SK	
033SI	A2	AG-29	隅丸方形	箱形	5.40	5.15	0.20		古代Ⅱ期	旧:065SK・114SI・329SK・331SK	
034SI	A2	AF-29	隅丸方形	箱形	3.94	3.08	0.24		古代Ⅲ期		
035SI	A2	AE-27	隅丸方形	箱形	6.42	6.35	0.28		古代Ⅰ期	旧:281SK	
036SI	A2	AB-27	隅丸方形	箱形	3.58	3.54	0.22		古代Ⅱ期	旧:326SK・327SK	
037SI	A2	AD-26	隅丸方形	箱形	6.97	6.47	0.48		古代Ⅱ期	旧:078SK・337SK	
038SI	A2	AC-25	隅丸方形	箱形	5.46	4.70	0.40		古代Ⅱ期	旧:085SK・333SK	
039SI	A2	AC-24	隅丸方形	箱形	4.28	3.85	0.30		古代Ⅱ期	旧:095SK	
040SI	A2	AB-24	隅丸方形	箱形	5.70	5.00	0.20		古墳時代以降		
041											欠番
042SI	D	J-6	正方形	箱形	2.72	2.18	0.28		古代Ⅲ期		
043SI	D	G-7	正方形	箱形	4.80	4.42	0.36		古代Ⅰ期		
044SI	D	I-7	不明	不明	3.60	(2.00)	0.40				
045SI	D	I-5	正方形	箱形	4.10	3.19	0.34		古代Ⅲ期		
046SI	D	I-5	方形	箱形	(4.28)	(2.03)	0.54				
047SI	D	H-4	不明	不明	(2.32)	(0.41)	0.59				
048SI	D	G-4	正方形	箱形	5.96	5.48	0.40		古代Ⅱ期		
049SI	D	E-5	隅丸方形	箱形	3.70	3.20	0.19	十王台	弥生時代終末期		
050											欠番
051SK	A2	AH-33	円形	箱形	1.48	0.94	0.38		縄文時代	旧:155P・169P 新:170P	
052SK	A2	AH-32	円形	箱形	2.58	2.44	0.50	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期	旧:162P・163P	
053SK	A2	AH-33	円形	箱形	1.77	1.64	0.42	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	192Pとの切り合いは不明	
054SK	A2	AF-32	円形	袋状d	3.44	3.04	1.30	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:159SK 旧:248SK	
055											欠番
056SK	A2	AI-31	円形	箱形	2.75	2.70	0.72	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:185SK	184P・197Pを付帯する
057											欠番
058SK	A2	AI-30	円形	袋状c	1.56	1.56	0.86	加曾利EⅢ	縄文Ⅳ～Ⅵ期	旧:173SK	
059SK	A2	AH-31	楕円形	U字形	1.58	(1.22)	0.65		縄文時代	223SKとの切り合いは不明	
060SK	A2	AH-31	楕円形	U字形	1.14	0.98	0.31			旧:209SK・226SK 新:223SK	
061											欠番
062SK	A2	AE-31	円形	袋状b	2.73	2.66	0.94	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:208SK 新:214SK	215SKを付帯するのか
063											欠番
064SK	A2	AH-30	円形	袋状a	2.50	2.20	0.67	加曾利EⅠ・中峠	縄文Ⅳ期	旧:323SK	
065SK	A2	AG-29	円形	フラスコa	3.21	3.06	1.52	加曾利EⅠ・中峠	縄文Ⅳ期	新:033SI 旧:328SK・331SK	
066											欠番
067											欠番
068SK	A2	AH-31	円形	U字形	2.20	2.07	0.72		縄文時代	新:185SK	
069SK	A2	AE-30	楕円形	U字形	1.75	0.75	0.50	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期		
070SK	A2	AD-29	楕円形	箱形	2.06	1.36	0.22	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期	旧:071SK	
071SK	A2	AD-28	楕円形	U字形	1.33	1.14	0.40		縄文時代	新:070SK	
072											欠番
073											欠番
074SK	A2	AG-28	隅丸長方形	逆台形	2.47	1.93	0.88		縄文時代		陥し穴か
075											欠番
076SK	A2	AE-27	円形	箱形	1.97	1.51	0.46	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		272P・277Pを付帯する
077SK	A2	AF-27	円形	箱形	2.51	2.22	0.47	加曾利EⅢ	縄文Ⅵ期		
078SK	A2	AC-26	円形	フラスコb	2.20	2.20	0.74	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	新:031SI・339P	
079											欠番
080											欠番
081											欠番
082SK	A2	AD-25	楕円形	箱形	1.17	1.01	0.49	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期		
083											欠番

表 88　検出遺構一覧表　2

遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
084											欠番
085SK	A2	AD-25	円形	箱形	1.35	1.07	0.43		縄文時代		
086											欠番
087											欠番
088SK	A2	AD-25	円形	箱形	2.68	2.40	0.50		縄文時代	新:038SI	
089											欠番
090											欠番
091SK	A2	AC-26	円形	箱形	2.27	1.92	0.28	加曽利EⅢ	縄文Ⅵ期		
092SK	A2	AB-26	円形	フラスコa	2.17	2.07	1.00	阿玉台Ⅳ・加曽利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:291SK	
093SK	A2	AB-26	円形	袋状a	1.76	(1.37)	0.47	加曽利EⅠ		新:285SK	
094											欠番
095SK	A2	AC-25	円形	袋状b	2.32	2.09	0.40	阿玉台Ⅳ～加曽利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:039SI	
096SK	A2	AC-25	円形	箱形	2.22	2.12	0.38	加曽利EⅠ	縄文Ⅲ・Ⅳ期		
097SK	A2	AB-25	円形	袋状a	2.00	2.00	0.49	加曽利E			
098SK	A2	AB-25	円形	箱形	(0.91)	0.82	0.52		縄文時代		
099SK	A2	AA-26	楕円形	不定形	(2.30)	1.75	0.45	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:306SK	
100											欠番
101SK	A2	Z-25	円形	箱形	2.22	(1.75)	0.23	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:105SK 新:305SK	
102SK	A2	AA-25	楕円形	フラスコa	2.98	2.56	0.70	阿玉台Ⅳ～加曽利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:103SK	
103SK	A2	AA-24	円形	U字形	1.97	(1.62)	0.33	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ・Ⅵ期	旧:102SK	
104SK	A2	AB-25	円形	U字形	2.12	1.82	0.22	加曽利EⅡ			
105SK	A2	Z-25	不定形	フラスコa	2.77	2.61	0.77	加曽利EⅠ・中峠	縄文Ⅳ期	新:101SK	
106SK	A2	AA-24	円形	U字形	1.51	1.22	0.61	加曽利EⅣ	縄文Ⅶ期		
107											欠番
108											欠番
109SK	A2	Z-24	円形	U字形	2.07	1.55	0.38	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
110											欠番
111											欠番
112SI	D	E-6	不明	不明	(2.97)	(1.17)	0.46				
113SI	D	C-4	方形	箱形	(4.46)	(1.55)	0.36				
114SI	A2	AG-30	隅丸方形	箱形	3.76	3.70	0.68		古代Ⅱ期	旧:209SK・275SK・315SK・320SK 新:033SI	
115											欠番
116											欠番
117P	A1	AK-41	不定形	U字形	0.58	0.45	0.68	加曽利E	縄文中期		
118											欠番
119P	A1	AK-42	円形	U字形	0.45	0.36	0.40		縄文中期	新:120P	
120P	A1	AK-42	不定形	U字形	0.78	0.64	0.14		縄文時代	旧:119P	
121											欠番
122											欠番
123											欠番
124											欠番
125											欠番
126											欠番
127											欠番
128											欠番
129											欠番
130P	A1	AH-36	楕円形	U字形	0.27	0.25	0.09		縄文時代	新:017SK	
131SK	A1	AJ-36	楕円形	U字形	0.67	0.56	0.26		縄文時代		屋外炉か
132SK	A1	AJ-36	円形	U字形	1.01	0.84	0.31	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		屋外炉か
133SK	A1	AI-36	楕円形	U字形	0.95	0.62	0.47		縄文時代		
134SK	A1	AJ-38	楕円形	袋状	0.89	0.75	0.84	加曽利EⅢ	縄文Ⅵ期		009SKの付帯施設
135P	A1	AJ-37	円形	U字形	0.45	0.34	1.14	加曽利E		新:015SI	
136SK	A1	AI-38	円形	U字形	0.66	0.58	0.67	加曽利E			
137SK	A1	AJ-37	楕円形か	U字形	1.88	0.43	0.46	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:016SK	
138SK	A1	AJ-36	円形	フラスコa	2.74	2.59	1.10	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:165P	
139SK	A1	AI-36	隅丸方形	U字形	1.24	1.11	0.31	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ・Ⅵ期	旧:019SK	
140											欠番
141SK	A1	AJ-37	円形	U字形	0.72	0.59	0.21		縄文時代		屋外炉か
142SK	A1	AJ-38	円形	U字形	2.32	(1.12)	0.46	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:011SK・012SK	
143SK	A1	AI-37	不定形	不定形	0.63	0.14	0.39		縄文時代	新:144P	
144P	A1	AI-37	円形	U字形	0.28	0.62	0.33		縄文時代	旧:143SK	
145P	A1	AJ-36	楕円形	U字形	0.62	0.37	0.85		縄文時代	新:020SK	
146											欠番
147SK	A2	AG-33	楕円形	箱形	2.31	2.03	0.86	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:149SI・150SK	175P～179Pを付帯する
148P	A1	AI-36	円形	U字形	0.24	0.21	0.10		縄文時代		
149SI	A2	AG-33	隅丸方形	箱形	5.37	5.06	0.28	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:156SK 新:147SK・150SK・151SK・153SK・228P	
150SK	A2	AG-33	楕円形	逆台形	1.62	1.49	0.74	加曽利E		旧:149SI 新:147SK	
151SK	A2	AG-32	円形	箱形	1.60	1.46	0.85	加曽利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:149SI・153SK・186P・188SK	154Pを付帯する
152SK	A2	AG-33	不定形	U字形	2.46	0.89	0.60		縄文時代		
153SK	A2	AG-33	不明	箱形	2.46	0.88	0.45	加曽利E		旧:149SI 新:151SK	
154P	A2	AG-33	楕円形	U字形	0.52	0.49	0.27		縄文時代		151SKの付帯施設
155P	A2	AH-33	円形	U字形	0.44	0.40	0.98		縄文時代	新:051SK	
156SK	A2	AH-33	円形	フラスコa	3.20	3.04	0.84	阿玉台Ⅳ・中峠	縄文Ⅲ期	新:149SI	
157											欠番
158											欠番 054SKと同一遺構

表 89　検出遺構一覧表　3

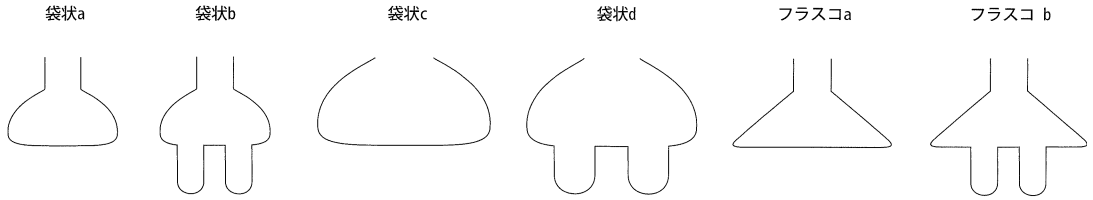
遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
159SK	A2	AG-32	円形	フラスコa	3.30	3.18	1.25	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:054SK	
160P	A2	AH-32	円形	U字形	0.56	0.23	1.02	阿玉台Ⅱ			
161											欠番
162P	A2	AH-32	円形	U字形	0.40	0.37	0.50	加曾利E		新:052SK	
163P	A2	AH-32	円形	U字形	0.25	0.23	0.24		縄文時代	新:052SK	
164P	A2	AH-33	円形	U字形	0.45	0.44	0.80	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ・Ⅵ期		
165P	A1	AJ-36	円形	U字形	0.41	0.40	0.92		縄文時代	旧:138SK	
166											欠番
167P	A2	AH-31	円形	U字形	0.32	0.21	0.32		縄文時代		
168SK	A2		楕円形	U字形	1.60	1.38	0.34	加曾利E		旧:174SK・182SK	
169P	A2	AH-33	円形	U字形	0.52	0.52	0.52		縄文時代	新:051SK	
170P	A2	AH-33	円形	U字形	0.27	0.25	0.72		縄文時代	旧:051SK	
171SK	A2	AI-32	楕円形	U字形	0.85	0.82	0.32		縄文中期		
172SK	A2	AI-32	楕円形	U字形	1.36	1.32	0.38		縄文中期		
173SK	A2	AI-30	楕円形	箱形	2.22	1.63	0.60	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期	新:058SK	
174SK	A2	AH-32	楕円形	逆台形	(2.62)	(2.00)	0.60	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:168SK 旧180SK	221SKとの切り合いは不明
175P	A2	AG-33	円形	U字形	0.34	0.32	0.20		縄文時代		147SKの付帯施設
176SK	A2	AG-33	円形	U字形	0.69	0.48	0.00		縄文時代		〃
177P	A2	AG-33	円形	U字形	0.40	0.20	0.24		縄文時代		〃
178P	A2	AG-33	円形	U字形	0.32	0.24	0.54		縄文時代		〃
179P	A2	AG-33	円形	袋状	0.49	0.45	0.24		縄文時代		〃
180SK	A2	AH-32	楕円形	逆台形	3.01	2.55	0.80	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:174SK	195Pを付帯する
181SK	A2	AH-33	隅丸長方形	箱形	1.15	0.87	0.76		縄文時代		
182SK	A2	AH-32	楕円形	袋状c	1.80	1.56	1.00	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期	新:031SI・168SK	
183SK	A2	AF-33	不定形	U字形	0.66	0.63	0.45		縄文中期		
184P	A2	AI-31	円形	U字形	0.54	0.53	1.02	加曾利EⅡ・EⅢ			056SKに付帯する
185SK	A2	AH-31	楕円形	箱形	2.36	0.81	0.46	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:068SK 新:056SK	
186P	A2	AG-33	円形	U字形	0.54	0.48	1.13		縄文時代	新:151SK	
187SK	A2	AH-32	楕円形	箱形	1.87	1.48	0.44		縄文中期		
188SK	A2	AG-32	楕円形	袋状a	1.11	0.98	0.92		縄文時代	新:151SK・200P	
189P	A2	AG-32	円形	U字形	0.48	0.47	1.18		縄文時代		
190SK	A2	AG-31	円形	フラスコa	3.56	3.46	0.90	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅲ期	新:032SI	
191P	A2	AH-32	円形	U字形	0.92	0.90	0.75		縄文時代		
192P	A2	AH-32	楕円形	U字形	0.63	0.57	1.52		縄文時代	053SKとの切り合いは不明	
193SK	A2	AI-32	円形	箱形	0.80	0.74	0.27	加曾利E			
194											欠番
195P	A2	AI-33	円形	U字形	0.48	0.42	0.32		縄文時代		180SKの付帯施設
196P	A2	AH-32	円形	U字形	0.46	0.41	0.66		縄文時代		
197P	A2	AH-31	円形	U字形	0.25	0.21	0.42		縄文時代		056SKに付帯する
198SI	A2	AF-30	隅丸方形	箱形	4.72	4.09	0.72		古代Ⅱ期	旧:246P・247P・302SK・303SK	
199P	A2	AG-34	円形	U字形	0.30	0.15	0.30		縄文時代		
200P	A2	AG-32	U字形	円形	0.46	0.38	0.60		縄文時代	旧:188SK	
201SK	A2	AG-31	円形	箱形	(2.44)	(1.84)	0.28	加曾利E		旧:204SK 新:205SK・202P・031SI	
202P	A2	AH-31	円形	U字形	0.59	0.32	0.69		縄文時代	新:031SI 旧:201SK・203SK	
203SK	A2	AH-32	楕円形	フラスコa	2.20	2.05	0.76	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅱ期	新:202P・031SK	
204SK	A2	AG-31	円形	箱形	2.19	2.19	0.36	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:201SK	210Pを付帯する
205SK	A2	AG-32	円形	箱形	1.21	1.06	0.40		縄文中期	旧:201SK	
206P	A2	AH-30	不定形	U字形	0.28	0.24	0.30		縄文時代		
207SK	A2	AF-31	円形	フラスコa	3.31	(2.14)	1.05		縄文中期	旧:208SK 新:336SK	
208SK	A2	AE-31	不明	不明	(0.54)	(0.46)	0.80		縄文中期	新:062SK・207SK・214SK	
209SK	A2	AG-30	楕円形	フラスコa	2.20	2.14	0.62		縄文中期	新:114SI・060SK 旧:315SK	
210P	A2	AG-31	円形	U字形	0.40	0.37	0.00		縄文時代		204SKの付帯施設
211P	A2	AH-32	円形	U字形	0.28	0.25	0.54		縄文時代		
212P	A2	AH-32	円形	U字形	0.42	0.36	0.42		縄文時代		
213P	A2	AE-31	円形	U字形	0.29	0.26	0.52		縄文時代		
214SK	A2	AE-31	円形	U字形	1.85	(1.31)	0.71	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:062SK・208SK	
215SK	A2	AE-31	円形	袋状	1.24	0.96	1.23	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		062SKの付帯施設
216SK	A2	AG-32	楕円形	箱形	1.06	(0.92)	0.36		縄文時代		
217P	A2	AG-32	円形	U字形	0.42	0.38	0.71		縄文時代		
218SK	A2	AH-33	楕円形	箱形	1.49	1.36	0.45		縄文時代		
219P	A2	AE-30	円形	U字形	0.40	0.32	1.22		縄文時代		
220SK	A2	AE-30	円形	U字形	0.75	0.75	1.62	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅱ期		
221SK	A2	AH-32	不明	不明	(1.32)	(0.54)			縄文時代		174SKとの切り合いは不明
222SK	A2	AG-31	楕円形	袋状c	2.00	1.60	0.68	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:257SK・261SK	059SKとの切り合いは不明
223SK	A2	AH-31	不明	U字形	(1.34)	(0.91)	0.29		縄文時代	旧:060SK	
224SK	A2	AH-31	円形	箱形	(2.68)	(2.28)	0.40	加曾利EⅠ	縄文Ⅲ・Ⅳ期	旧:226SK	
225P	A2	AH-31	円形	U字形	0.26	0.17	0.71		縄文時代	旧:226SK	
226SK	A2	AH-31	円形	箱形	3.17	2.71	0.7	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:060SK・224SK・225P・227P	
227P	A2	AH-31	円形	U字形	0.60	0.55	0.47		縄文時代	旧:226SK	
228P	A2	AG-33	円形	U字形	0.38	0.37	0.42		縄文時代	旧:149SI	
229P	A2	AG-32	円形	U字形	0.54	0.40	0.85		縄文時代		
230SK	A2	AE-30	円形	フラスコa	3.00	2.75	1.36	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅱ期	旧:231SK	
231SK	A2	AE-30	不定形	U字形	2.09	1.12	1.36	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:230SK	
232											欠番 054SKと同一遺構
233P	A2	AE-29	円形	U字形	0.49	0.41	0.48		縄文時代		
234P	A2	AH-31	円形	U字形	0.54	0.41	1.34		縄文時代		

表 90　検出遺構一覧表　4

遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
235SK	A2	AA-23	円形	袋状c	1.72	1.17	0.67	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期		
236SI	D	F-6	隅丸正方形	箱形	4.96	4.36	0.28	十王台	弥生時代終末期		289Pを付帯する
237P	A2	AG-32	楕円形	U字形	1.02	0.15	0.17		縄文時代	旧:240P	
238SK	A2	AF-32	不定形	不定形	1.25	0.75	0.68		縄文時代		
239SK											欠番054SKと同一
240SK	A2	AG-32	円形	箱形	0.61	0.38	0.74		縄文時代	新:237P 旧:242P	
241											欠番
242P	A2	AF-32	円形	U字形	0.28	0.15	0.27		縄文時代	新:240SK	
243											欠番
244											欠番
245P	A2	AH-31	円形	U字形	0.44	0.39	0.59		縄文時代		
246P	A2	AF-30	円形	U字形	0.49	0.38	0.62		縄文時代	新:198SI	
247P	A2	AF-30	円形	U字形	0.55	0.48	0.98		縄文中期	新:198SI	
248SK	A2	AF-32	隅丸長方形	逆台形	1.39	0.94	1.12		縄文時代	新:054SK	
249SK	A2	AF-31	円形	フラスコa	2.63	2.50	1.32	加曾利EⅠ・中峠	縄文Ⅳ期	新:256SK・267SK・269P	
250											欠番
251SK	A2	AF-31	円形	U字形	0.63	0.56	0.26	加曾利EⅠ	縄文中期		
252P	A2	AD-29	円形	U字形	0.53	0.46	0.67	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
253P	A2	AD-29	円形	U字形	0.54	0.50	1.44	加曾利E	縄文時代		
254P	A2	AD-29	円形	U字形	0.33	0.30	0.30		縄文時代		
255SK	A2	AD-29	円形	U字形	0.89	0.75	0.83		縄文時代		
256SK	A2	AF-31	円形	フラスコa	1.75	1.70	0.84	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	旧:249SK 新:269P	
257SK	A2	AG-30	円形	U字形	1.82	1.74	0.59	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:114SI 旧:222SK・261SK	
258P	A2	AD-28	円形	U字形	0.52	0.47	0.14	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
259											欠番
260P	A2	AD-29	円形	U字形	0.65	0.47	0.82		縄文時代	旧:265SK	
261SK	A2	AG-30	円形	フラスコa	2.58	2.34	0.71	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:222SK・280SK 新:257SK	
262P	A2	AD-28	円形	U字形	0.45	0.32	0.68		縄文時代		
263P	A2	AD-29	円形	U字形	0.38	0.37	0.63	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
264P	A2	AD-28	円形	U字形	0.47	0.42	0.68		縄文時代		
265SK	A2	AD-29	円形	袋状b	2.58	(1.77)	0.90		縄文中期	新:260P	
266P	A2	AD-28	円形	U字形	0.42	0.31	0.53		縄文時代		
267SK	A2	AF-31	円形	袋状b	2.00	1.90	0.88	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:249SK・280SK・304SK	
268											303SK・304SKとしたため　欠番
269P	A2	AF-31	円形	U字形	1.12	0.51	0.92		縄文時代	旧:249SK・256SK	
270SK	A2	AC-28	円形	フラスコa	1.75	(1.25)	0.67		縄文中期	新:274SK	
271											欠番
272P	A2	AE-27	円形	U字形	0.97	0.75	0.82	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期		
273SK	A2	AF-29	円形	U字形	0.59	0.40	1.41		縄文時代		
274SK	A2	AD-28	円形	フラスコa	2.74	2.74	0.91	阿玉台Ⅳ・中峠	縄文Ⅱ・Ⅲ期	新:287P 旧:270SK	
275SI	A2	AE-28	楕円形	箱形	5.40	3.51	0.24	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅲ・Ⅳ期	新:281SK	
276											欠番
277P	A2	AE-27	円形	U字形	0.45	0.37	1.32		縄文時代		076SKの付帯施設
278P	A2	AF-29	円形		0.22	0.17	0.38		縄文時代		
279P	A2	AE-30	円形	U字形	0.72	0.49	1.04		縄文時代		
280SK	A2	AF-30	円形	フラスコa	1.95	(1.42)	1.14	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期	新:261SK・267SK	
281SK	A2	AE-27	円形	袋状b	2.16	1.78	0.74	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:275SI 新:035SI	
282											欠番　260Pと同一
283P	A2	AD-29	円形	U字形	0.35	(0.20)	0.80		縄文時代		
284SI	A2	AC-27	隅丸方形	箱形	3.68	3.59	0.30		古代Ⅱ期	旧:290SK・325SK	
285SK	A2	AA-26	円形	U字形	1.32	1.31	0.51		縄文時代	旧:093SK	
286P	A2	AE-31	円形	U字形	(0.44)	0.37	0.41		縄文時代		
287P	A2	AC-28	楕円形	U字形	0.00	0.00	0.13		縄文時代	旧:274SK	
288P	A2	AF-27	円形	U字形	0.65	0.47	1.57		縄文時代		
289P	D	F-7	不定形	U字形	0.38	0.27	0.58	十王台	弥生時代終末期		236SIの付帯施設
290SK	A2	AB-27	楕円形	U字形	1.81	1.46	0.13	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:284SI	
291SK	A2	AB-26	円形	袋状b	2.52	2.27	0.42	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:325SK 旧:092SK	
292SK	D	J-5	楕円形	U字形	(1.42)	(0.84)	0.76		縄文時代	新:046SI	
293SK	A2	AD-29	楕円形	フラスコa	2.05	(0.71)	0.90	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	新:297I	
294SK	D	H-8	楕円形	U字形					縄文時代		
295P	D	F-7	円形	U字形	0.43	0.29	0.46		時期不明		
296											欠番
297SK	A2	AD-30	円形	U字形	1.24	(0.58)	0.71		縄文時代	旧:293SK	
298SK	A2	AE-30	円形	U字形	0.77	0.51	1.15		縄文時代		
299P	A2	AA-26	円形	袋状	0.42	0.37	0.24		縄文時代		
300P	D	F-6	円形	U字形	0.29	0.22	0.38		時期不明		
301P	D	F-6	円形	U字形	0.48	0.35	0.42		時期不明		
302SK	A2	AF-29	楕円形	袋状b	2.70	2.50	1.12	阿玉台Ⅳ・中峠・大木8a～8b	縄文Ⅱ期	新:198SI・332SK	
303SK	A2	AF-30	円形	U字形	1.52	1.21	0.36	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	旧:304SK・新198SI	
304SK	A2	AF-30	円形	フラスコa	2.14	1.92	0.32	阿玉台Ⅳ・加曾利EⅠ	縄文Ⅱ期	新:267SK・303SK	
305SK	A2	Z-25	円形	箱形	1.17	0.84	0.23	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	旧:101SK	
306SK	A2	AA-25	円形	袋状b	2.61	2.39	0.69	阿玉台Ⅳ・中峠	縄文Ⅲ期	新:099SK	
307SK	D	I-4	楕円形	U字形	1.80	0.12	0.46		時期不明	旧:309SK	
308P	D	F-5	円形	U字形	0.40	0.30	0.30		時期不明		
309P	D	I-4		U字形	0.48	0.47	0.16		時期不明	新:307SK	
310P	A2	AG-30	円形	U字形	0.54	0.36	0.51		縄文時代		
311P	A2	AG-30	不定形	U字形	0.48	0.44	0.41		縄文時代		

表 91　検出遺構一覧表　5

遺構番号	調査区	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	出土遺物	時期	切り合い	備考
312P	A2	AG-30	円形	U字形	0.62	0.51	0.45		縄文中期		
313P	A2	AG-30	円形	U字形	0.62	0.42	1.55	加曾利E	縄文時代		
314P	A2	AH-30	円形	U字形	0.56	0.39	1.53		縄文時代		
315SK	A2	AG-30	円形	袋状a	1.32	(1.19)	0.57	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:114SI・209SK・320SK	
316											欠番
317SK	D	H-6	楕円形	U字形	2.80	1.24	1.10		縄文時代		
318P	D	I-4			0.70	0.62	0.27		時期不明		
319SK	D	H-4	楕円形	U字形	1.22	0.86	0.28		時期不明	旧:047SI	
320SK	A2	AG-30	不明	箱形	1.82	(0.42)	0.25	加曾利EⅡ・EⅢ	縄文Ⅴ期	新:114SI・旧315SK	
321P	A2	AC-27	円形	U字形	0.45	0.44	0.71		縄文時代		
322P	A2	AC-27	円形	U字形	0.38	0.37	0.42		縄文時代		
323SK	A2	AH-30	円形	フラスコb	2.46	2.34	0.37	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:064SK	
324SK	A2	AB-27	円形	袋状b	1.94	(0.57)	0.88	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期		
325SK	A2	AB-26	楕円形	U字形	1.71	1.39	0.45	加曾利EⅣ	縄文Ⅶ期	旧:291SK 新:284SI	
326SK	A2	AB-27	円形	フラスコa	1.94	(1.11)	0.19	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	新:036SI・327SK	
327SK	A2	AB-27	円形	フラスコa	1.58	1.42	0.56	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	旧:326SK 新:036SI	
328SK	A2	AH-29	楕円形	U字形	1.22	(0.76)	0.31	阿玉台Ⅲか	縄文中期	新:065SK	屋外炉か
329SK	A2	AH-29	円形	U字形	1.08	(0.74)	0.32		縄文時代	新:033SK	屋外炉か
330P	A2				0.37	0.33	0.31				
331SK	A2	AG-29	不定形	U字形	1.67	(1.37)	0.35	阿玉台Ⅲ	縄文中期	新:033SK・065SI	屋外炉か
332SK	A2	AF-29	楕円形	不定形	0.31	0.19	1.60		縄文Ⅱ期	旧:302SK	
333SK	A2	AD-26	円形	袋状a	2.27	2.15	0.85	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期	新:038SI	
334											欠番
335P	A2	AA-23	円形	U字形	0.25	0.23	0.45		縄文時代		
336SK	A2	AF-32	不明	フラスコa	1.89	(0.73)	1.11	阿玉台Ⅳ	縄文Ⅲ期	旧:207SI	
337SK	A2	AD-26	長方形	箱形	(1.15)	0.47	0.32		縄文時代	新:037SI	
338SK	A2	Z-23	円形	箱形	1.55	1.45	0.35	加曾利EⅠ	縄文Ⅳ期		
339P	A2	AC-26	円形	U字形	0.37	(0.37)	0.51	加曾利EⅡ	縄文Ⅴ期	旧:078SK	



遺構凡例図

報告書抄録

ふりがな	はしづめいせき
書名	橋爪遺跡
副書名	道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	石井たま子　清水真澄　望月大輔　加藤　忠　伊藤千洋　森本　崇　岡安光彦
編集機関	テイケイトレード株式会社
住所地	〒160-0021　東京都新宿区歌舞伎町１－１－16　テイケイトレード新宿ビル８Ｆ TEL　03-5155-0391
発行年月日	2010年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしづめいせき 橋爪遺跡	いばらきけんかさまし 茨城県笠間市 はしづめ　795ばん 2　ほか 橋爪　795番 2 ほか	08321	046	36°20′11″	140°17′41″	2009.11.16 ～ 2010.02.27	2,454㎡	道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	主な遺物	特記事項
橋爪遺跡	散布地 （包蔵地）	縄文時代	住居　3軒 土坑　153基 ピット　79基	縄文土器・石器	縄文中期の袋状土坑を多数検出し、とくに065SKからは、加曾利EⅠ式土器が大量に出土した。
		弥生時代	住居　2軒	弥生土器	
		古墳時代	住居　1軒	土師器	
		奈良・平安時代	住居　24軒	土師器・須恵器・石製品ほか	
		時期不明	25基（総計287基）		

要約	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡、土坑等を検出した。縄文時代は阿玉台式土器、加曾利E式土器など中期の遺物が主に出土し、特に阿玉台Ⅳ式土器、加曾利EⅠ式土器を伴う袋状土坑が多く出土した。袋状土坑065SKからは硬化面を2枚検出し、上部の硬化面直上よりほぼ完形の土器が17個体出土した。弥生時代では後期後半に位置づけられる十王台式土器を伴う住居2軒を検出した。古墳時代では、古墳時代前期中葉に位置づけられる住居跡を1軒検出した。器台、甕、坩などが床面より出土した。奈良・平安時代では、主に8世紀前葉から10世紀前葉にかけての住居跡を12軒検出した。住居跡からは、土師器坏、須恵器坏、常陸形甕などが出土している。

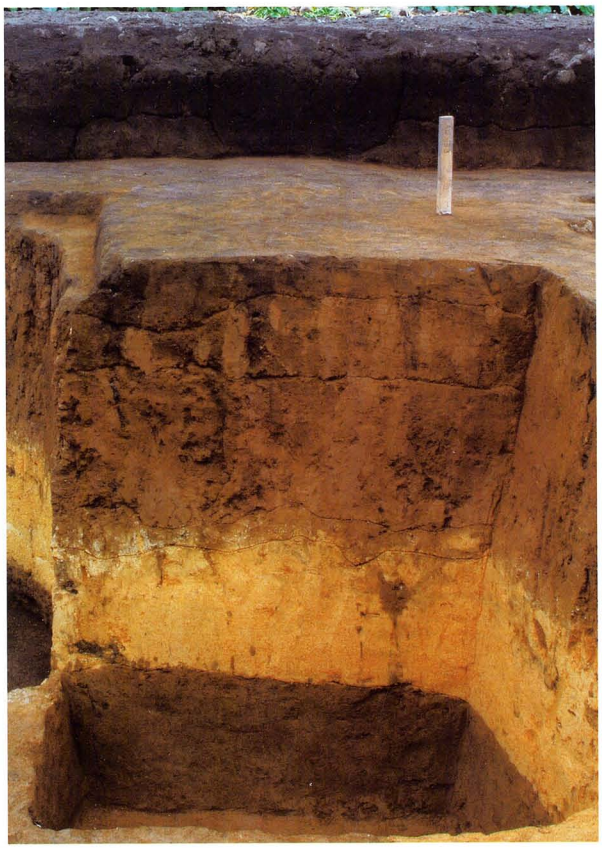
現場調査チーム

遺跡体験教室
佐城小学校六年生

フラスコ状土坑の調査
(065SK)

写真図版2

A1 区調査区全景 （東から）



A2 区基本層序 （南から）

A2 区調査区全景 （東から）

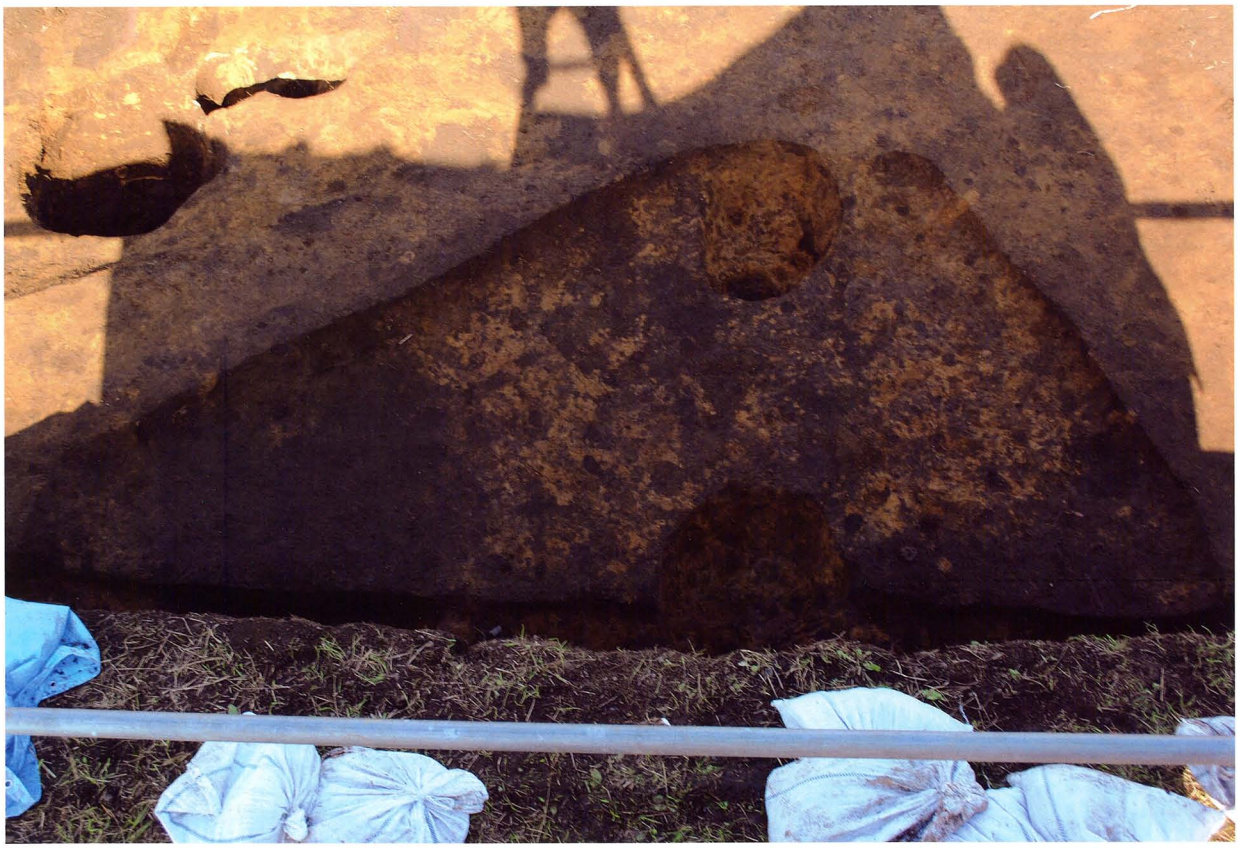
D 区 049SI・236SI （西から）

D 区基本層序（南から）

D 区調査区全景 （西から）

写真図版4

006SI 遺物 No. 001 出土状況 （東から）



006SI 床面検出 （南から）

010SK 床面検出 （北から）

054SK 遺物出土状況 （北東から）

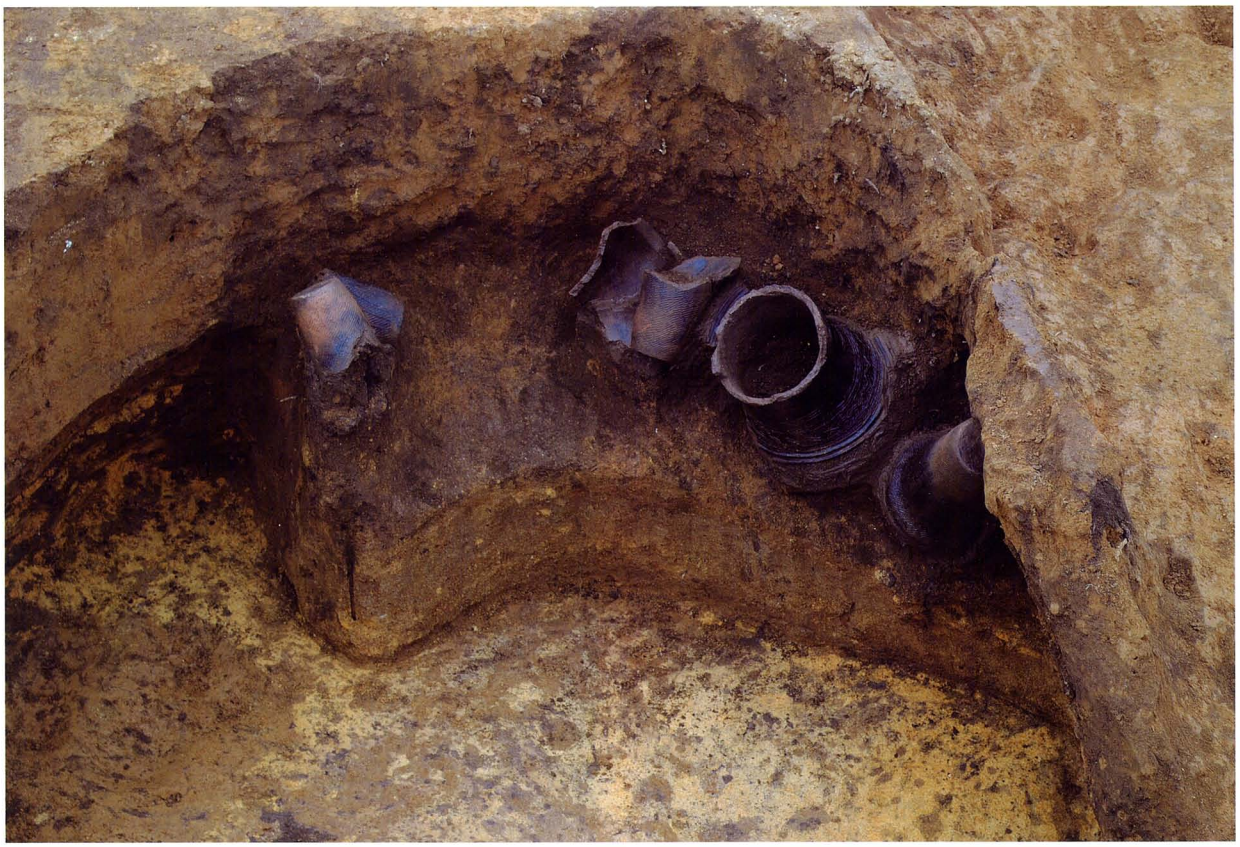
056SK 断面 （東から）

058SK 焼土層上部遺物出土状況 （南から）

012SK 遺物出土状況 （南から）

060SK 遺物 No.040 出土状況 （北から）

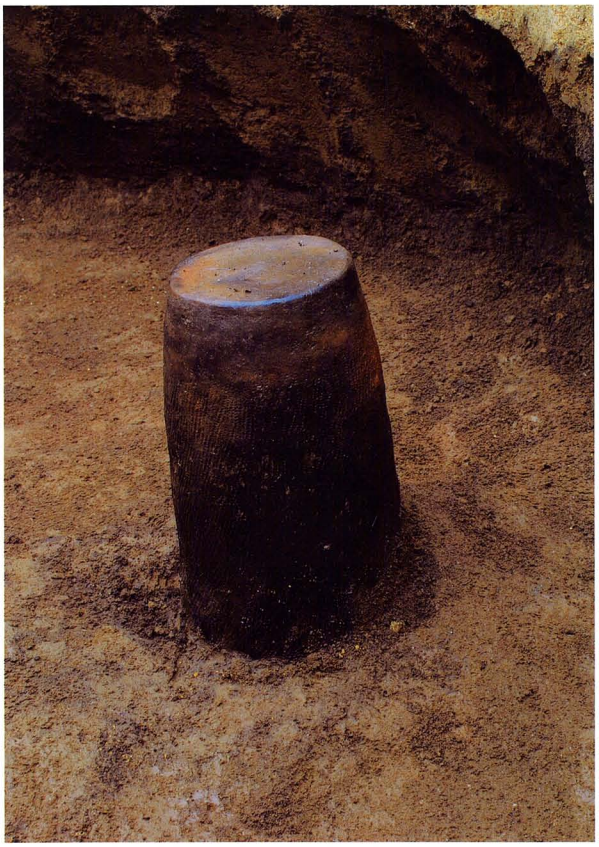
写真図版6



064SK 遺物出土状況 （南東から）

065SK 上部硬化面検出状況 （北東から）

065SK 断面 （南から）



065SK 遺物 No.133 出土状況 （南から）

065SK 硬化面遺物出土状況 1 （南西から）

065SK 出土遺物 （出土位置復元）

065SK 硬化面遺物出土状況 2 （東から）

078SK 完掘 （南東から）

095SK 遺物出土状況 （東から）

102SK 遺物出土状況 （北西から）

105SK 完掘 （南から）

134SK 遺物 No.019 出土状況 （東から）

138SK 断面 （南西から）

138SK 遺物 No.018 出土状況 （西から）

138SK 石棒出土状況 （南から）

138SK 遺物 No.022 出土状況 （西から）

149SI 床面検出 （南東から）

151SK 完掘 （北西から）

156SK 完掘 （南西から）

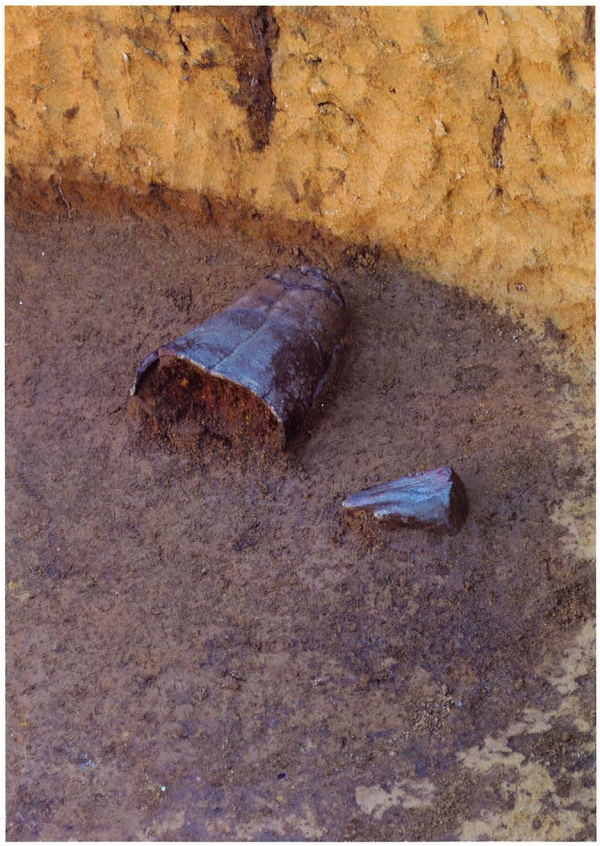
156SK 断面 （南西から）

156SK 遺物 No.029 出土状況 （西から）

159SK 断面 （南東から）

190SK 断面 （北から）

190SK 遺物 No.041 出土状況 （北から）



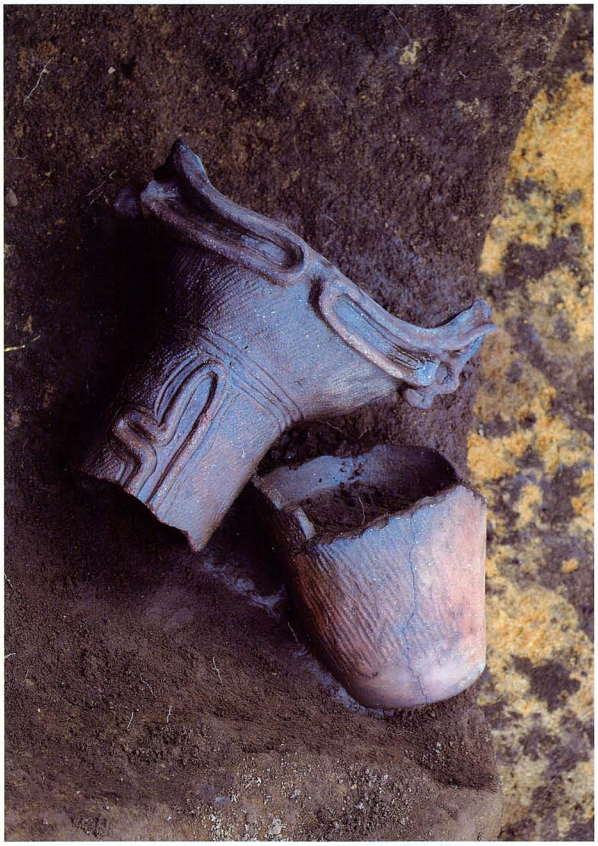
190SK 遺物 No.039 出土状況 （北西から）

203SK 遺物 No.038 出土状況 （南東から）

203SK 遺物 No.060 出土状況 （南西から）

204SK 完掘 （西から）

203SK 遺物 No.054 出土状況 （南から）



203SK 遺物 No.060 出土状況 （北西から）

230SK 焼土・礫集中部断面 （南東から）

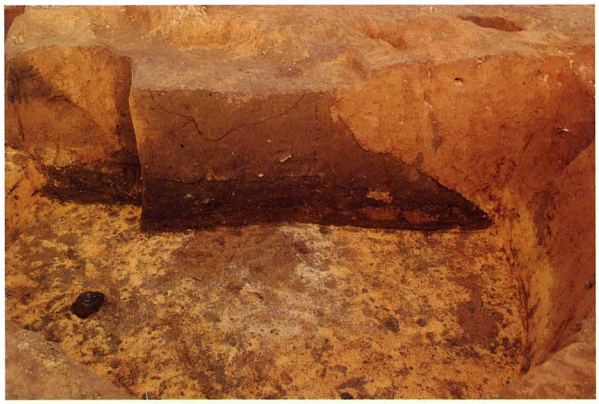
230SK 焼土・礫集中部検出状況 （南から）

230SK 遺構底面礫出土状況 （南から）

230SK 焼土・礫集中部 礫

230SK 焼土・礫集中部 焼土

249SK 断面 （南西から）



274SK 断面 （南から）

275SI 遺物床面 （北東から）

256SK 遺物 No.068 出土状況 （南東から）

275SI 遺物 No.074 出土状況 （西から）

275SI 炉検出状況 （北から）

291SK 遺物 1BL 出土状況 （南西から）

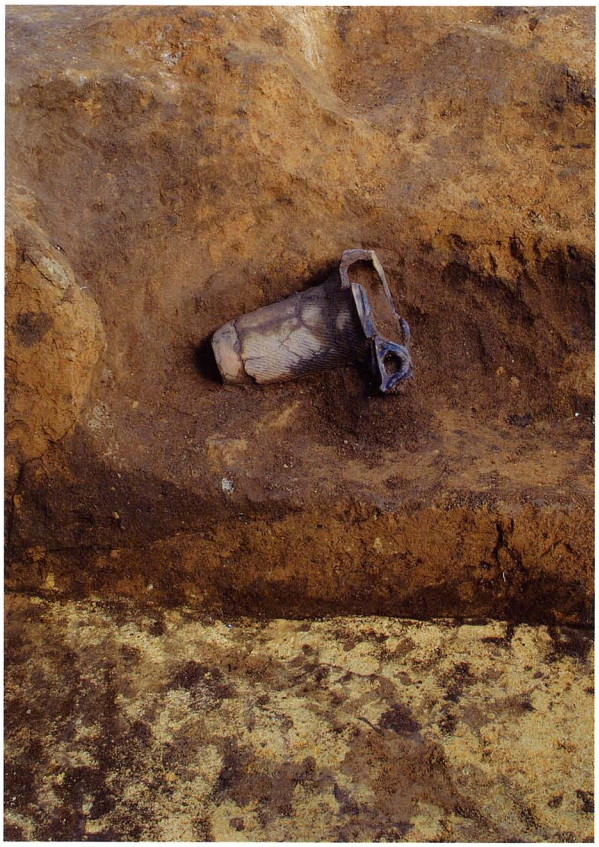
302SK 断面 （北東から）

302SK 遺物 No.101 出土状況 （東から）

302SK 遺物 No.102 出土状況 （東から）

302SK 2・3 層下部遺物出土状況（北東から）

304SK 白色粘土出土状況（南から）

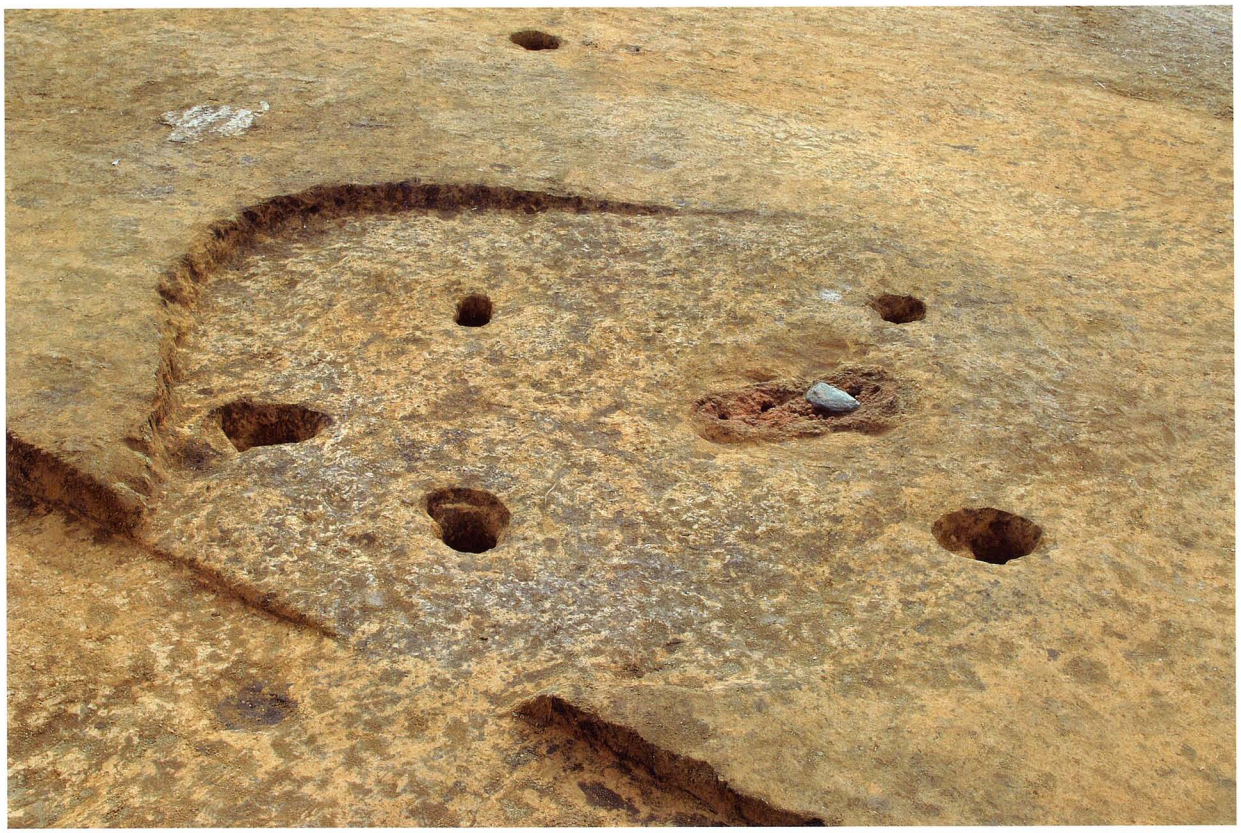


304SK 遺物 No.084 出土状況 （南から）

306SK 遺物 No.097 (左) ・ No.099 (右) 出土状況 (北から)

323SK 遺物 No.091 出土状況 （東から）

064SK ・ 323SK 遺物出土状況 （南東から）



049SI 完掘 （北から）

236SI 完掘 （北から）

015SI 遺物出土状況 （南から）

015SI 遺物 No.002 出土状況 （南から）

015SI 遺物 No.003 出土状況 （南から）

015SI 遺物 No.009 出土状況 （北から）

003SI 床面検出 （北東から）

031SI 床面検出 （南西から）

032SI 床面検出 （南西から）

033SI 上部硬化面検出状況 （南東から）

033SI 下部硬化面検出状況 （南から）

033SI 支脚出土状況 （東から）

034SI 床面検出 （南から）

035SI 床面検出 （南東から）

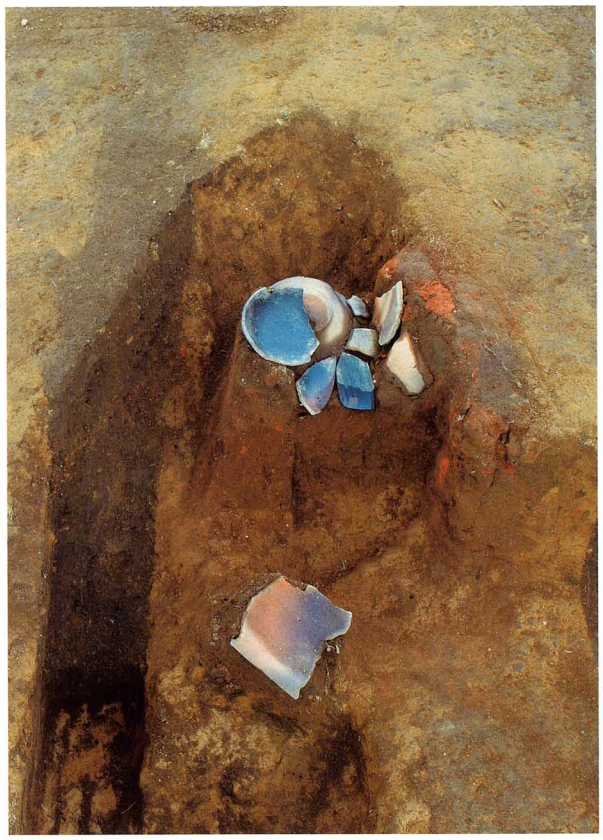
036SI 床面検出 （南西から）

037SI 床面検出 （東から）

038SI 床面検出 （南から）

039SI 床面検出 （南西から）

042SI 床面検出 （東から）

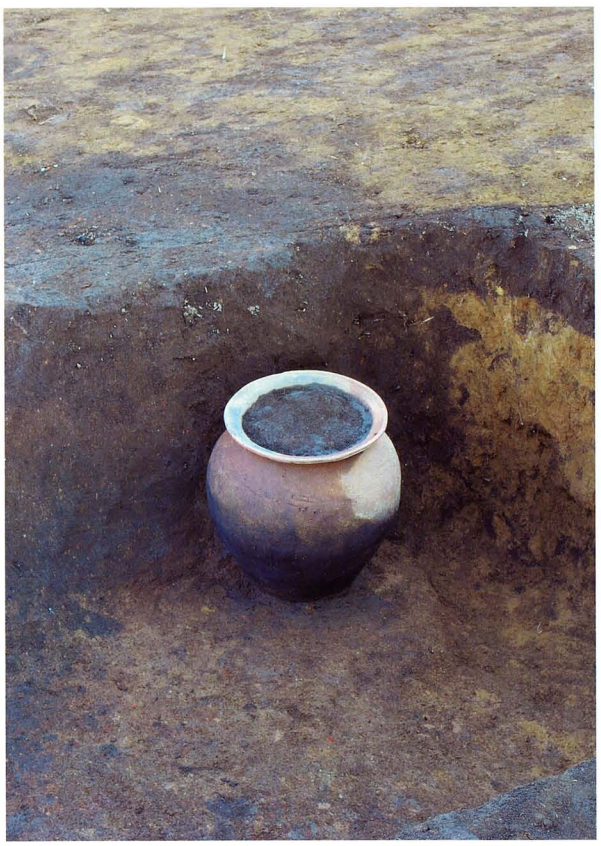


042SI カマド遺物出土状況 2 （南西から）

042SI カマド遺物出土状況 1 （南西から）

043SI 床面検出 （南西から）

043SI カマド完掘 （南から）



043SI 遺物 No.073 出土状況 （東から）

045SI 床面検出 （南西から）

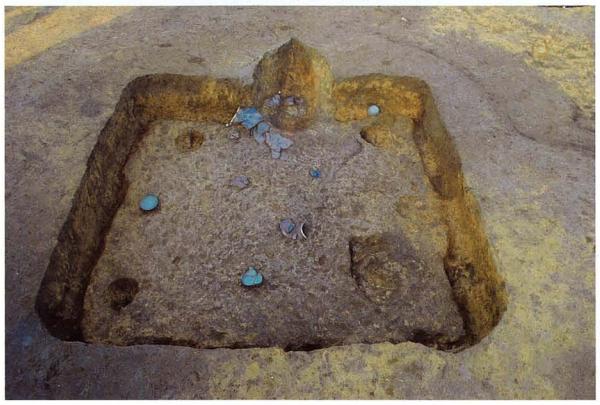
045SI カマド周囲出土状況 （南西から）

048SI 床面検出 （西から）

048SI カマド完掘 （南西から）

114SI 床面検出 （南から）

198SI 床面検出 （南から）



198SI 遺物出土状況 （南から）

198SI カマド周囲遺物出土状況 （南から）

284SI 遺物出土状況 （南から）

006SI－1

012SK－2

060SK－2

054SK－3

064SK－1

064SK 集合写真

064SK－2

064SK－3

064SK－5

065SK－1

065SK－2

065SK－4

065SK 集合写真

065SK－5

065SK－6

065SK－7

065SK－8

065SK－9

065SK－10

065SK－11

065SK－12

065SK－13

065SK－14

065SK－15

065SK－16

065SK－18

065SK－17

078SK－4

102SK－2

134SK－1

138SK－1

156SK－1

190SK－4

190SK－1

190SK－6

190SK 集合写真

203SK－1

203SK－2

256SK－1

267SK－1

302SK－1

302SK－2

302SK－4

302SK－5

302SK 集合写真

302SK－6

302SK－7

302SK－8

304SK－1

306SK－1

306SK－2

323SK－1

325SK－1

332SK－1

332SK－2

石鏃・石鏃未成品

石錐

楔形石器

掻器・削器

2 次加工を有する剥片

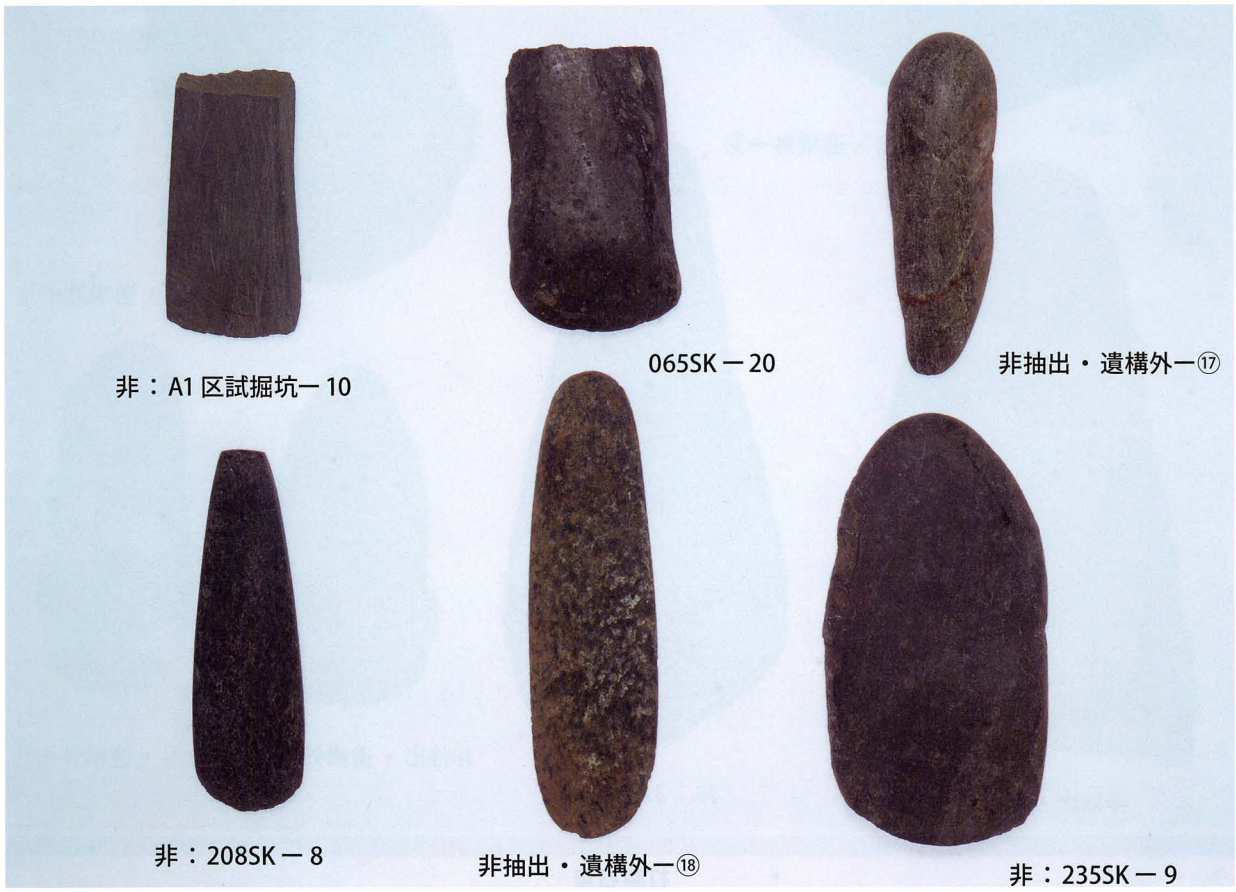
石核

打製石斧

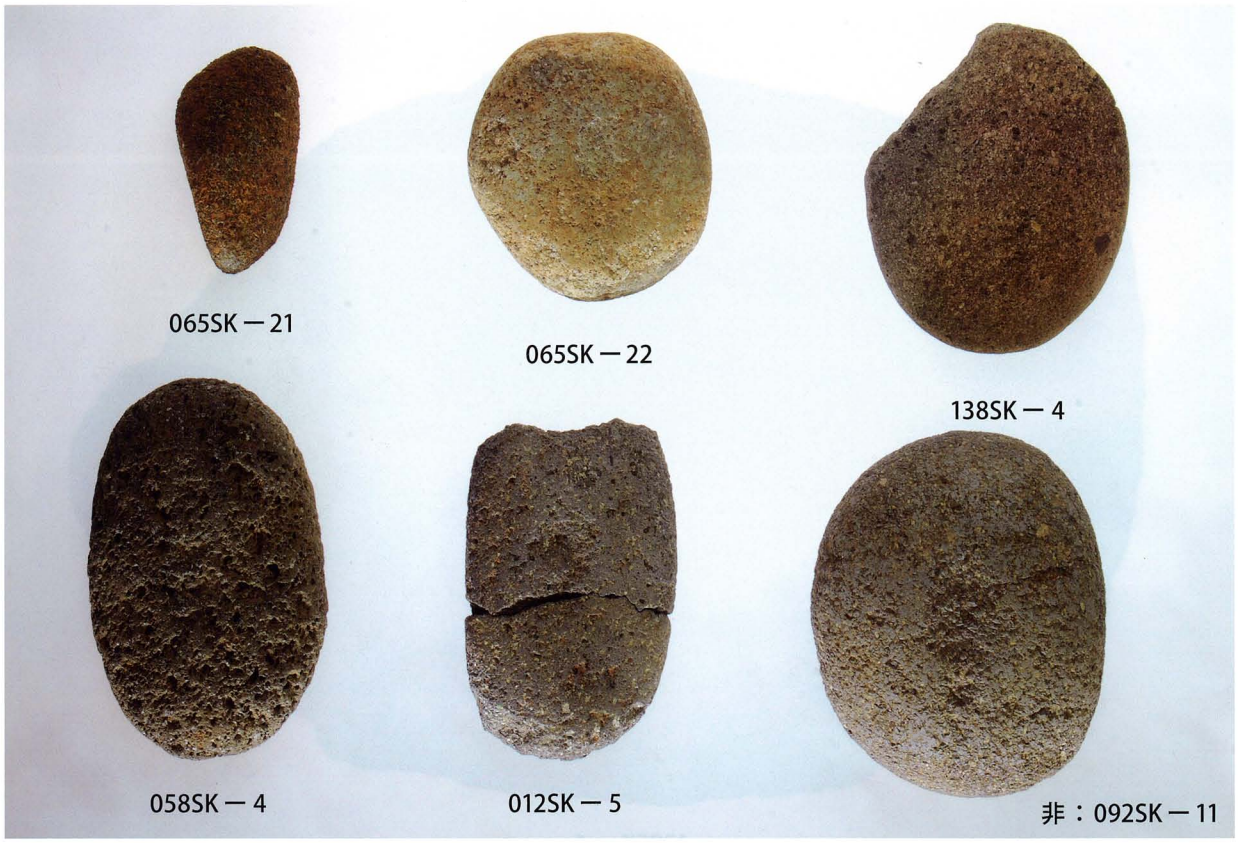
非：018SK－7

磨製石斧（変質ドレライト製）

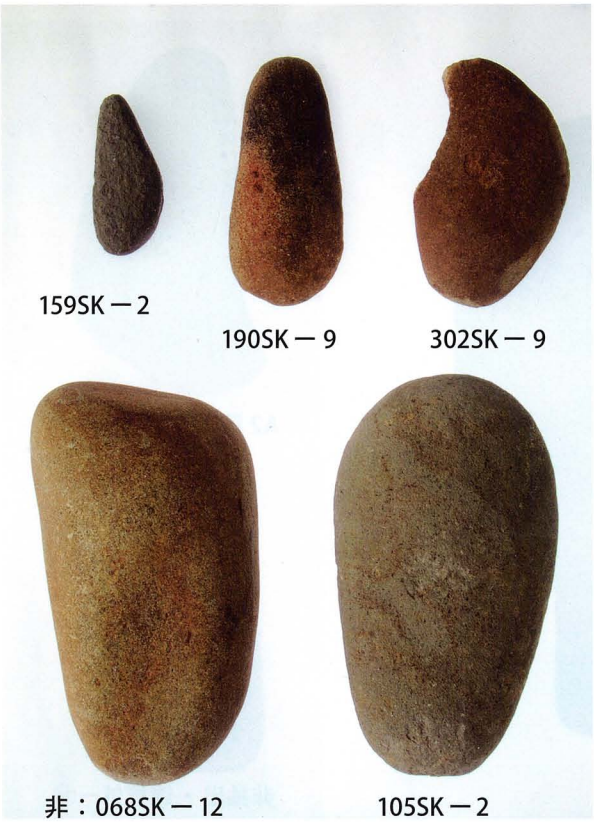
磨製石斧（1）



磨製石斧（2）



磨石・敲石類（1）



磨石・敲石類（2）

石皿

138SK－6

蜂の巣石

138SK－7

石棒

A2 区調査区一括－13

非抽出・遺構外－⑲

不明

049SI －1

236SI －1

236SI －2

015SI －1

015SI －2

015SI －4

015SI －3

015SI－5

015SI－6

015SI－7

003SI－1

003SI－2

031SI－1

032SI－1

032SI－2

033SI －1

033SI －2

033SI －3

033SI －5

034SI －1

035SI －1

035SI －2

035SI －3

035SI －4

036SI －1

036SI －3

036SI －4

036SI －5

036SI －6

037SI －2

037SI －3

038SI －2

037SI －4

038SI －2
底面

039SI －1

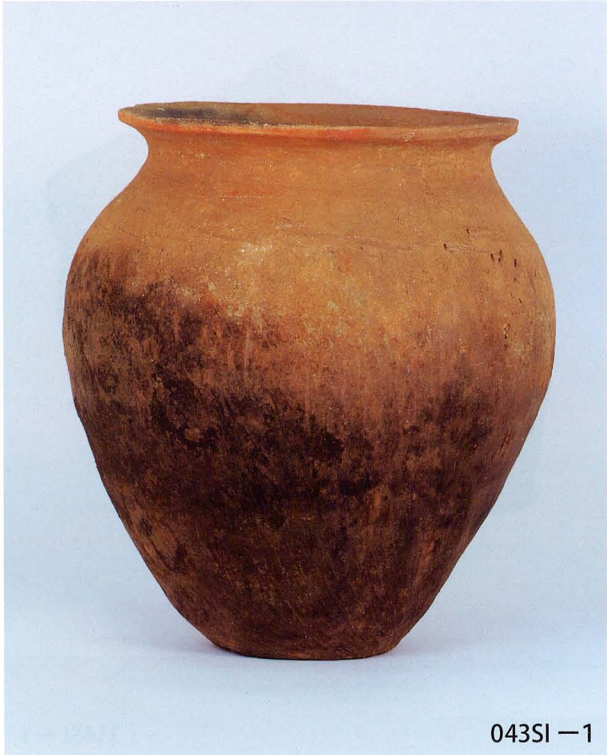
042SI －1

042SI －2

042SI －3

042SI －5

043SI －3


043SI －1

045SI －1

045SI －2

045SI －3

045SI －4

045SI －5

045SI －6

045SI －8

045SI －8
側面

047SI －1

114SI －1

114SI －2

198SI －1

198SI －2

198SI －6

198SI －7

198SI －4

284SI －1

茨城県笠間市

橋爪遺跡

—道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査報告書—

2010年9月30日

編集　テイケイトレード株式会社
東京都新宿区歌舞伎町１－１－16
テイケイトレード新宿ビル８F
TEL　03－5155－0391

発行　笠間市教育委員会
茨城県笠間市石井717番地
TEL　0296－77－1101

印刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町７－10
TEL　076－233－2550

Hashizume site
- Excavation Report -

2010

Board of Education, Kasama City

Teikeitrade Co.,Ltd.